文壇人物評論

正宗白鳥著

中央公論社版

PL
723
M3

Masamune, Hakuchō
Bundan jimbutsu hyōron

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

正宗白鳥著

文壇人物評論

中央公論社版

PL
703
M2

文壇人物評論　目次

明治文壇總評　1
夏目漱石論　47
蘇峰と蘆花　89
尾崎紅葉論　107
岩野泡鳴論　129
森鷗外論　169
正岡子規論　185
一葉と樗牛　191
田山花袋論　207

二葉亭四迷論 227
河竹默阿彌論 241
芥川龍之介論 253
小山內薰論 269
德田秋聲論 291
幸田露伴論 313
志賀直哉と葛西善藏 327
島崎藤村論 349
谷崎潤一郎と佐藤春夫 393
菊池寬論 415
永井·荷風論 433

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/bundanjimbutsuhy00masa

遙遊

鷗外

牛楊

蓼花

抱月

荷風

漱石

上田敏

明治文壇總評

一

久振りに島村抱月氏の「囚はれたる文藝」を讀直した。氏が數年間の歐洲留學から歸朝して、非常な抱負をもつて「早稻田文學」を復興した時、その第一號の卷頭に掲げた感想文で、當時の青年讀者に愛讀されたものであつた。私は、森川町の下宿屋で、大晦日の夜、胸を轟かせてこれを通讀して、譯も分らずに感激したのだが、今日これを讀直すと、その中に書かれてゐることがよく分るのである。概括的西洋文藝史で、當時上田敏氏が「所說は當を得てゐるが、なぜ、說明に狂言綺語を弄するのであらう」と、「藝文」といふ雜誌で批評してゐたことを、私は薄々記憶してゐる。今日となつては、私も上田氏の評に同感であつて、こんな初步の西洋文學概說に、ダンテの幻影を呼起すなんかは大袈裟でいやみであると思はれるが、しかし、さういふ狂言綺語が、青年には喜ばれたのである。ヴェルサイユの宮殿を描いた「ルイ王家の夢の跡」にしろ、「沙翁の墓に詣づる記」にしろ、氏は、明治二十年代の日本の文壇に流行してゐた「美文」調から脫却してゐなかつた。さういふ風だつたから、歸朝後の氏によつて、我々が期待したやうに、文壇に新生命が注がれることはなかつた。むしろ、氏は、田山花袋氏などの海外新思潮の研究や自己內省によつて起された自然主義の氣運によつて刺戟され啓發されて、氏の學殖識見が新たな光を放つやう

になつたのであつた。

私は、新日本の文學者が、直接に歐洲先進國の文化風物藝術に接して、どういふ感銘を得たのであらうかといふことにある興味を寄せて、抱月氏の「滯歐文壇」や、永井荷風氏の「佛蘭西物語」や、島崎藤村氏の「エトランゼエ」や、德富蘆花氏の「日本から日本へ」などを熟讀した。いづれも、明治の新敎育を受けた天分の豐かな、粒撰りの文學者であるだけに、それ〴〵の叙事にも觀察にも、筆者の風格が偲ばれて面白かつた。最近、夏目漱石全集中の「日記及び斷片」を見ると、そのなかに、海外滯在中の日記や感想錄がまじつてゐた。如上諸作家の見聞錄とは異つて、簡單な覺え書に過ぎないので、無論世に公けにされようとは、作者の夢にも思はなかつたものにちがひないが、そのために、これ等の日記には、却つて作者の風格が自由に現はれてゐて面白かつた。

「我々はボット出の田舍者のアンポンタンの山家猿のチンチクリンの土氣色の不可思議な人間であるから、西洋人から馬鹿にされるは尤もだ」と云つてゐる。西洋人のお茶の會に招かれたのを得意がらないで、「こちらへと云ふから這入ると驚いた。狹い客室にずらり列んだりな半ダースの貴女が御出でだ。己むを得ないから腰を据ゑた。左を見ても右を見ても知らない女だ。家の妻君も知らない女だ。外國人のしかも日本人を一度も逢つたこともないのに、at home に呼ぶなん

て、野暮な奴だと思つたが仕方がない。向うも義理で呼んだらう、此方も義理で行つたのだ。茶が出る。極りきつた事を二三言話す。其内に亭主が出て來た。白髪頭の坊主だ。餘り善い人ではないやうだ。妻君は好い顏をして居る。善い英語を使ふ。早々に還つた。全く時間潰しだ。西洋の社會は愚かな物だ。こんな窮屈な社會を一體だれが作つたのだ。何が面白い」と、實感を記錄してゐる。抱月氏が、滯在中、英人の一團に加はつて、ウォーズォースなどで有名な北方の湖畔に避暑に出掛け、車中、「東洋の紳士」と呼掛けられて、盛んに婦人論や文學論を鬪はした紀行文に比較すると、面白い。

漱石氏はまた、巴里を一瞥して、「巴里の繁華と墮落は驚くべきものなり」と簡單に斷定してゐるが、荷風氏は、「現實に見たフランスは、見ざる時のフランスより更に美しく更に優しかつた」と云ひ、「われ多年の宿望を遂げ得て、はじめて巴里を見し時は、明くる日を待たで死すとも更に怨むところなしと思ひき」と云つてゐる。漱石抱月荷風の三氏は、略々同じ時代に歐洲へ渡つたのであつて、共に囊中は豐かでなかつたのだが、三人三樣の觀察をしてゐるところに、各作家の素質、趣味好尙、對人生の態度が現はれてゐて興味が深いのである。

「アメリカ物語」「フランス物語」「西遊日記鈔」など、青年の夢を描いた物語として、私は愛誦してゐる。氏に取つてはフランスは地上の樂園である。自然の風物にしても、日常生活にしても、

美術でも音樂でも、言語でも、婦人の姿態でも、完全無上のものとして、氏の心に映つてゐる。漱石氏には、驚くべき墮落と感ぜられるものが、荷風氏の胸には、啻ならぬ轟ろきを覺えさせるのである。青春時代にかういふ氣持で西洋漫遊を試みたなら、さぞ面白いだらうと、私は思つてゐる。明治初年以來、日本はあらゆる點で西洋摸倣を企てゝ來たので、西洋憧憬の念は、盛んに文學に現はれてゐるのだが、荷風氏の作品には、最も情味豐かにそれが現はされてゐる。「凡ては皆生きた詩である。極點に達した幾世紀の文明に、人も自然も惱みつかれた此の巴里ならでは見られぬ生きた悲しい詩ではないか。ボードレールも自分と同じやうに、モウパッサンも亦自分と同じやうに、此の午過ぎの木蔭を見て盡きぬ思ひに耽つたのかと思へば、自分はたとひ故國の文壇に名を知られずとも、藝術家としての幸福光榮は、最早これで十分だと云はねばなるまい」と云つてゐる如く、この世の樂園たるフランスに陶醉してゐる作者の心意氣は隨所に散見してゐる。エキゾチックの情味は脈々と波打つてゐて、私の心にも觸れるところがあるが、氏は、その佛國滯在が短日月であつたため、世相人事の洞察力の乏しきため、全體が薄手で底が淺くつて、氏自身が魅せられてゐる樂園の夢に讀者を誘ひ入れて恍惚とさせるほどの強い力は有つてゐない。

明治の文壇で、私などに、エキゾチックの清新な情味を滿喫させたものは、森鷗外氏譯の「即興詩人」であつた。氏は、學者で理論家で、歐洲文壇の新知識の輸入者として、初期の明治文學

史に光彩を放つてゐるが、その頃の私は、まだ幼かつたゝめ、坪内逍遙氏の汲理想論に對する論戰など、何の事やら理解されなかつた。青春期に讀んだ「即興詩人」によつて、私は、空前の特異の文藝に接した感じがした。これは、飜譯とは云へ、和漢の文字を自在に驅使した新代の創作と云つていゝ。「舞姫」「文づかひ」「うたかたの記」など、海外情話の片影を描いた鷗外も、アンダルセンを日本に移すことによつて、青年の豐かな夢を思ふ存分に描き得たのだ。高山樗牛の「瀧口入道」「わが袖の記」、樋口一葉の「たけくらべ」、德富蘆花の「思ひ出の記」、泉鏡花の「照葉狂言」田山花袋の「野の花」「ふる郷」、島崎藤村の「若菜集」など、明治三十年前後に、文學好きの青年を魅惑した新しい詩であり文章であつたが、私に取つては、これ等明治の秀才の作品も、「即興詩人」とは比べものにならない氣がした。

「偶然に生を享けたる國土の如きは、我故郷とするに足らず」と傲語した内村鑑三氏でも、幕末の日本に生れ明治初期の雰圍氣に育つたために、武士道と基督教をチャンポンにしたやうな愛國心を有して、故郷とするに足らぬ故郷から心を脫却させることが出來なかつたやうに、私も、明治の日本の風潮に、一から十まで支配されながら微々たる生を營み脆弱な心魂を養つて來たことが、まざ〳〵と回顧される。政治や實業や軍事のやうな俗界の事業に興味が乏しくて、文學藝術に惑溺した私は、自から明治文壇の感化を受けて人となつたので、よかれ惡しかれ、明治文學を

輕視する譯には行かないのである。私は近年明治文學の復習をしながら、自己の影を隨所に見つけては、感慨に耽ることが多い。私の生れる前から、當時の理想を示した「文明開化」の語が流布して、文明開化すなはち西洋摸倣が、各方面に目ざましく企てられてゐたので、田舍から新興の都會へ續々と修業に出て來た學生は、坪內逍遙氏の「當世書生氣質」に細寫されてゐるやうに、日常の會話にも片言の英語を濫發し、西洋の人名や事蹟を口にするを喜んでゐたが、當時の著述は大抵は西洋の輸入であつた。さういふ時代に人間の言語と文字を覺え、人間の知識を獲得した私が、知らず〳〵西洋憧憬の情緒を心の一部に養つて來たのは當然であつた。明治二十年代の代表的雜誌は、德富蘇峯氏主宰の「國民之友」で、私は單純な少年期にその感化を受けたのであつたが、今あの雜誌の綴込みを見ると、政治論にしろ文學論にしろ、外國の偉人傑物名家名著の名前が限りなく竝べ立てられてゐる。あの時代に若い論客が、よくもこんなに外國の歷史に通じ、また外國の文學を讀破し得られたものだと、驚歎するよりも、私は滑稽に感ずるのだが、そこに時世相が伺はれるのである。あの頃としては聰明であつた批判家、德富蘇峯氏にしても、內田不知庵氏にしても、高山樗牛氏にしても、自國の文學を輕視し侮蔑して、ユーゴーとか、ゲーテとか、「クオ・ヴァディス」を書いたシエーンキウィッチだとかを讃美して、自國の文學者をして、彼等に模範を求めさせようとした。ラファエルの聖母や、ヴィンチの「モナ・リザ」や、あるひ

は、ダンテ、ゲーテの空想した永遠の女性などが、早くも輸入されて、漱石謂ふ所の「チンチクリンの土氣色した」東洋青年の一部の敏感な人々の頭に憧憬されだしたのであつた。明治二十五六年頃、藤村、禿木、天知などによつて創刊された「文學界」といふ新興藝術派雜誌を見ると、あの頃の多恨多情の青年藝術家の心境が分るのだ。「文學界」の同人は、今日の新興藝術派のやうなスレッカラシでなくつて、無邪氣で涙脆くつて、幼稚な純眞を持してゐたところに、時代の相違を看取していゝのだ。樋口一葉の日記を見ると、禿木、秋骨、孤蝶などの「文學界」同人の二三氏が、女史に親しんで頻りに女史の家を訪づれてゐたらしいが、その談話や態度は子供つぽくて、今日の新興藝術派連はとてもこんなではなささうに思はれる。

さういふ時代の空氣を、絶えず肺臟に呼吸して、少年期青年期を經過した私である。次第に八犬傳に飽足らず、近松に飽足らず、「三人妻」にも飽足らず、外國を舞臺にしながら、エキゾチックの風趣の極めて乏しい「佳人之奇遇」にも飽足りなくなつて、鷗外飜譯の「埋木」や「卽興詩人」に隨喜の涙を濺ぐやうになつたのは當然であつた。私は、文學史中の一作家として、森鷗外は偉大なりと思ふ。二葉亭や紅葉が新代の文章を創出するために生命を削る思ひをしたことは、尊敬に價ひするので、それに比べると、鷗外は氣樂に筆を執つてゐたらしく、ことに、飜譯なんか何でもないだらうと思はれたが、しかし、苦心したつて拙いものは拙いし、氣樂に書流しても

いゝものはいゝ。バルザックやドストエフスキーのやうに矢鱈に書なぐつた人もあるし、フローベルやツルゲネーフのやうに文章に骨を折つた人もある。

田山花袋氏は、「近代の小說」と題して、氏の明治文學觀を一卷の書物として殘してゐるが、そのなかに、「あんな飜譯（二葉亭などの）よりも、今の人のやつたものゝ方が、どんなにうまく、またどんなに自由でもあるか知れない。それに、本當の意味から云つても、原書に近いか知れない。どうしてあんな無駄な努力をやつたのだらうな」と云つたある若い人達の言葉に同意して、「つまり飜譯者が骨折つて、體がわるくなるくらゐ骨折つて、日本の文章に、氣分に、近寄せようとしたことが、今ではまるで無駄な努力になつてしまつてゐるといふのである。」と斷定してゐる。ここに一面の眞理は存在してゐるが、近時の飜譯の仕方が、二葉亭などのよりも進んでゐようとは、私には思はれない。一夜漬な無雜な飜譯の頻出するのに私はこの頃驚いてゐる。それは兎に角、「卽興詩人」は、たゞの飜譯ではなくつて、創作であると云つていゝ。歐洲諸國の文藝史を見ると、どの國でも、古代の文學に刺戟され、あるひは、他の先進國の傑作によつて啓發されて、新しい自國の文學が起つたので、英國最初の大詩人チョーサーは、伊太利文藝復興の感化を受けたことが、自己の才能を發揮する緣となり、ロシアのプーシュキンやレルモントフはバイロンに傾倒して、ロシア近代文學の始祖と仰がれるに足る大傑作を產出したのであつたが、明治の日本は

あれほど歐洲を尊崇しながら、その感化の下に、自國の清新な情緒や意志を具體化した傑れた藝術を産出し得なかつた。諸家の作品がそれ〴〵に時代を現はしてゐるとは云へ、どれも薄弱である。敏感なる當時の青年を陶醉の境地に誘ふだけの藝術的魅力を有してゐたものとしても、一の飜譯的創作「卽興詩人」に及ぶものはなかつた。この一卷は、私に取つては、明治文學史上に最も燦爛たる光を放つてゐるやうに思はれるのである。明治文學史家は、この一篇にもつと重きを置いていゝので、飜譯たるがために輕視し、創作たるがために、淺薄皮相な作品を重要視するのは形に捉はれて、眞相を逸する譯なのだ。二葉亭の文學にしても、「浮雲」や「其面影」よりも、「あひびき」や「浮草」に一層多くの創作的價値があるのだ。「浮雲」の主人公に、時代の惱みが出てゐるとは云へ、さう云へば、「浮草」の方に、それが一層よく現はされてゐる。歐洲の田舍であつたロシアでは、西歐を尊崇して、チッケンスやバイロンに心醉して、それ等の作品をお手本にしたり、日常の會話にも自國語よりも佛蘭西語を用ひることを自慢にしたりする點、明治以來の日本に似通つてゐたが、しかし、「オネーギン」にしても、「現代のヒーロー」にしても、ゴーゴリや、ガンチャロフの作品にしても、西歐の諸傑作に比して讓るところのない、ロシア特有の藝術としての誇りを見せてゐる。明治の日本では、頻りに西洋の文學藝術を嚙りながら、異國の傑作を壓するに足る力強いものは産出し得なかつた。巨匠鷗外にしても、自身獨り立ちの作品は、

その得意な飜譯的創作よりも遙かに劣つてゐる。尾崎紅葉がモリエールやボッカチォの作品から材を取つて、飜案したものも、エキゾチックな香氣の失せた鵺のやうなものになつてゐると私は思ふ。「卽興詩人」は、貧家に生れて天分の豐かな卽興詩人アントニオと、薄倖な歌女アヌンチャタとの戀物語で、一歩あやまれば通俗小說に墮する恐れのあるもので、アンダルセンの原作は左程に珍重されてゐないのかも知れないが、鷗外の筆は、藝術味豐かにして、且つ品位を保つてゐて、情景併せ得て遺憾なしと云つていゝ。一篇の舞臺が古藝術の淵藪たる伊太利であることも、全篇の面白味を非常に助けてゐる。この卽興詩人が、最初この歌女を一瞥して、「その優しく愛らしく些の塵滓を留めざる美しさは、名匠ラファエロが空想中の女子の如し」と、印象を述べてゐるのは、「歌麿描くところの女子の如し」と云ふよりも、若き當時の我々の空想を刺戟した。當時あこがれてゐたエキゾチックな香ひが、全篇に滿ち溢れてゐること、明治文學史上類を絶してゐる。そして、我々日本人に取つては、伊太利旅行案內として、ゲーテの伊太利紀行よりも、スタンダルやサイモンヅの記述感想錄よりも、「卽興詩人」の方が遙かに適當してゐるのだ。私と同じ時代に、「卽興詩人」に心醉した人々で、南歐漫遊を企つるならば、この一卷を手鞄の中に收むることを忘るゝ勿れ。旅の興味がどのくらゐ加はるか知れない。自己の青春の夢を隨所に辿ることも出來て、感慨無量であらう。私は、五月の半ばごろローマからナポリに向つた。ローマの市

街を離れると、古代水道の殘骸の見られる郊外は、茫漠として人家稀れに、たゞヒナゲシのみが廣野のところ〴〵を鮮明に紅く色取つてゐて、アントニオの幼なかりし頃の生活の一場景が追想された。ナポリに着くと、海際のホテルに居を定めたが、窓を開いて、五月の光に照らされた、碧く和んだ地中海を、廣々と見渡した時には「こんな美しい海がほかにあらうか」と驚嘆した。カプリとソレントの島が雲煙模糊の間に見られ、屈曲した地域の一端には、淡い煙を棚曳かせてゐるベスビイの山が見られた。「ナポリの港に舟がゝりして感慨の事ども多かりき」と抱月氏は詠歎して、ダンテの幻影を呼起して、青き道と赤き道との二つに世界思想史を大別して、哲理と藝術（この時は、ダンテも抱月氏も、赤を以つて左翼を示さうとは夢には思はないで、純文藝を指示してゐた）とを說明させたが、私は「卽興詩人」の終篇を追想し、永遠の別れを告げたアヌンチャタの遺書を讀んだアントニオの幻影を呼起して、感慨の事ども多かつた」のであつた。灣內遙かなるところに浮んでゐるカプリ島には、鷗外によつて琅玕洞と飜譯されてゐる奇勝がある。「卽興詩人」の夢物語は、その洞窟の遊覽によつて結末を告げてゐて、「凡そここへ集へる人々は、その奉ずる所の教への新舊を問はず、一人として此自然の奇觀に逢ひて、天にいます神父の功德を稱へざるものなし」と、青春の悲喜哀歡を豐かに藏してゐる物語は、地中海の五月の海の如く和やかに結ばれてゐる。

「天にいます神父の功德を稱へる」基督教も、明治の初年には、清新なエキゾチックな風趣を帶びてゐて、新代の敏感な青年の心魂を動かしたが、文學の上に強い力となつて現はれるに至らなかつた。聖書の日本譯でさへ出來榮えがいゝとは云はれなかつた。民友社に基督教文學の片影があつたが、そのうちで、德富蘆花氏の作品に、舶來の宗教が一要素として存在して、明治文學史上の異色となつてゐる。「巡禮記行」と云ひ、「富士」と云ひ、そこに神を求める心靈の惱みが現はれてゐる。內村鑑三氏の警世の文章には、伊太利の狂信者サボナローラの面影があつたが、それがいかにも弱少であつた。日本のニーチエ主義者に「牙がなく翼がなかつた」のと、趣きを同うしてゐる。外國の思潮や文學が日本へ入つて來ると、稀薄になり、手輕くなる實例は、明治文學史によつてもよく證明されるのである。

二

今日の若き文學者や文學愛好者が、西洋から輸入された新思想にかぶれて、明治大正のもろもろの文學をも侮蔑すべきものと見做してゐる如く、明治時代の若き文學愛好者も先代の文學を侮蔑してゐた。「小說神髓」に於て、曲亭馬琴が排斥され、明治後期に勃興した自然主義の讃美者によつて紅葉も露伴も、まるで取るに足らぬものゝやうに扱はれたことなど、その實例である。時

代々々の流行の變遷は世上の常であるが、新しい舶來者に對して敏捷に魅惑され、氣せわしく動かされるのは、明治以來の日本の特有性である。悠然と構へたどつしりした文學藝術の起るに相應しくない國柄であり時代であると云つていゝ。しかし、人間には古へを尚ぶ性癖がある。またいくら前代を卑んでも、前代の子孫である人間は、過去から全く絶緣した新たなるものを樹立することは出來ないのだ。

明治時代にも「文學の極致」について、さま〴〵な眞面目な研究が企てられてゐる。懷疑に乏しく、呆然として生を貪つてゐた德川の世の人々とはちがつて、外來の刺戟に心を動かされた明治の若き文人は、「人生とは何ぞや」「文學とは何ぞや」と、自から疑ひを起して、自から結論を得ることに熱心であつた。「沒理想」に關しての、逍遙鷗外兩氏の論爭は、明治文學史上、最初の眞面目な文學論爭であるが、私はこの頃兩家の所論を讀返して、深い興味を覺えてゐる。

「沒理想」といふ言葉は、今から四十年前に創刊された早稻田文學所載の、「マクベス評註」の序文中に、はじめて用ひられた。「……人々試みに自然といふものを見よ。心を虛平にして觀れば、自然は只自然にして、善惡のいづれにも偏りたりとは見えず、固より意地わるき繼母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。然るに、數奇失意の人は、これに反して造化を情深き慈母のやうに思ひて、この世を樂園とも思へり。必竟人々の思做し次第にて苦とも樂とも見らるゝが自然

の本相也。この故に造化の作用を解釋するに、彼の宿命教の旨をもてするも解し得べく、又耶蘇教の旨をもてするも解し得べし。その他、老、莊、揚、黒、儒、佛、若くは古今東西の哲學が思ひ〳〵の見解も、これを造化にあてはめて、強ち當らざるにあらず、否、造化といふものは、これ等無數の解釋を悉く容れてあまりある也。祇園精舍の鐘の聲、浮屠氏は聞きて寂滅爲樂の響きなりといへど、待雪には情人が何と聞くらん。沙羅雙樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらんが、愁を知らぬ少女はいかに眺むらん。要するに造化の本意は人未だこれを得知らず、只おのれに愁ひの心ありて秋の哀れを知り、前にその心樂しくして春の花鳥を樂しと見るのみ。造化の本體は無心なるべし、沙翁の傑作はその造化に似たり。……彼の作は、衆嗜好を入るゝばかりか、彼れの傑作は、殆ど萬般の理想を容れてあまりあり。沙翁は沒理想なるをたゝふべき也」と說かれてゐる。論者は、その頃、ゾライズムに共鳴されたのではなかつたらう。博大なる常識から、宇宙の沒理想を感得されたのであらう。

新進氣鋭の鷗外氏は、その語を捉へて、日本文壇最初の舶來の審美論を持出して戰ひを挑んだ。曰はく、「世界は實なるのみならず、また想（イデエ）のみち〳〵たるあり。逍遙は沒理性界を見て理性界を見ず。意識界を見て無意識界を見ず。意識生じて主觀と客觀と纔かに分るゝ所以を思はず。……後天にのみ注げる目は、ダルキンの論を守りても事足るべけれど、それにて造化は盡されず。孔

雀の羽のいろ〳〵は、その根より受くる養ひ同じきに、色彩の變化は一本ごとに異なり、その相異なる色彩の合して渾身の紋理をなすは、先天の理想にあらざるか。……破鐘ならぬ祇園精舍の鐘を聞くものは、待人戀しとも思ひ、寂滅爲樂とも思ふべけれど、其の聲の美に感ずるは一なり。沙羅雙樹の花の色を見るものは諸行無常とも感じ、只管めでたしとも眺むれど、その色美なりとは、目ありて能く見るために感じるにあらず、先天の理想がこの時、暗中より躍出て、この聲美也この色美なりと叫ぶ也。これ感納性上の理想にあらずや。……沙翁の作の造化に似たるは、曲中の人物、一々無意識界より生れいで、おの〳〵其個性を具へたれば也。その自然に似たるは作者の才、樣によつて胡盧を描く世の類想家に立越えたれば也。沒類想、沒主觀也」

論爭は長く續いて、しまひには枝葉の言葉爭ひのやうになつたが、私は、明治文壇の二大先輩の所論、風格を偲んで面白いと思つてゐる。鷗外氏は、十九世紀の末期に獨逸に留學し、專門の醫學研究の傍、文學哲學を熱心に學ばれたのだが、氏は歐洲の世紀末の思潮に感染しなかつた。ハルトマンの哲學に敬意を捧げながら、その厭世觀を受入れなかつた。當時のデカダンの文學を愛好し、進んでそれ等の作品の幾つかを翻譯しながら、氏自身の作品にはデカダンの影も見せなかつた。私はそれを不思議に思つてゐたが、しかし、氏が明治以前に生れたことを思ふと、それは不思議でないかも知れない。氏の後年の作品には、封建時代の道德意識、武士的氣骨、趣味性が

現はれてゐる。内村鑑三氏の基督教に舊幕の武士氣質の潛んでゐるのと同樣である。お里は爭はれないものである。逍遙氏の劇作に歌舞伎味の濃厚に漂つてゐるのも、如何ともし難い譯である。それは、兎に角、「自然は善でもない、惡でもない」と人生を觀じて、作者は、さま〴〵な理想に捉はれず、その束縛を受けないで、超然としてゐることをもつて文學の極致であるやうに信じてゐたのは、後年の自然主義者の「有るがまゝに描け」と云ふ理論と似通つてゐて面白い。この「沒理想」論は今日の文壇に當嵌めて讀んでも面白い。

元來、青年は主觀的であつて、それ〴〵の理想に熱中するのを常例とするのだが、逍遙氏は、年若くして、早くも沒理想を唱えた。これに反して、高山樗牛は青年らしく主觀文學を讃美し、シェークスピアよりもバイロン、ハイネを好むと云ひ、日本の作家も「時代精神を描け」と論じ、「文明の批評家たれ」と說いてゐる。「沒理想」論以來、明治文壇に强い印象を殘した評論は、樗牛の時代精神論、文明批評家論その他であつた。彼れは、一方では「世をうきものとは誰が言ひそめし。想へば袖ふたつには包みかねしわがこころ、うたてや年をへし長きねざめの友となりぬ……われやまさなき人に物の哀れを知りそめき。思へば葉末の露のいとはかなき終りなりし。月影のまどかなる望も、かつては其中に寫りしが、風そよぐ旦(あした)の野邊に跡もなく、もゝ夜のひじのはしがきに、君やいのちとかこちしも、思へばあだなる夢なりき」など、當時の青年文士通有の、

感傷的な涙もろい美文を綴りながら、一方では、種々雜多の批評家の矢面に立つて、傲然たる負けじ魂の論鋒を揮ひ、硯友社その他の幼稚な作品を、痛烈無遠慮に非難して、群小作家の怨みを買つた。しかし今日それ等の論文を見ると、論調が野卑でないとともに大ざつぱであつた。「吾人は玆に願みて、我邦文學者の多くが、氣節なく、德操なく、瓢々片々として時好に投ぜざらんことを是れ怖るるの薄志弱行を遺憾とせざるを得ず。依て以て虛名を得、錢利を貪るの外、彼等に於て毫も著作せざるべからざるの必要無し。彼等は唯々官吏たらず、商人たらざる代りに、假りに文學者となれるのみ。理想の重荷を擔へる胸の如何ばかり苦しきかは、彼等の未だ曾て知らざる所也」と、「文明批評と文學者」論中に云つてゐるが、樗牛自身は如何なる理想の重荷を擔つて苦しんでゐたのであらうか。樗牛の惱み、透谷の惱み、獨歩の惱み、あの時代の彼等には共通した惱みのやうであつた。あの時代ばかりでなく、青年期には誰れでもが感じる惱みではなかつたか。前に引用した「わがそでの記」の一節の如きは、その惱みを現はした一例であるが、あゝいふ感傷的の美文は、明治二十年代から三十年代にかけて盛んに書かれてゐたのだ。馬場孤蝶氏や平田禿木氏の如き、「文學界」の同人は云ふまでもなく、田山花袋氏でも、あるひは、大町桂月氏のやうな瀟逸な文人でさへ、あゝいふ感傷的美文を綴つてゐた。一時かういふ氣運が榮えてゐながら、日本の「卽興詩人」はついに現はれなかつた。貧乏なる日本の文壇である。

しかし、樗牛は、一方で盛んに精神的氣焰を吐き、一方で「世は憂きもの」と涙を流し、短い文壇の生涯を、青年らしく縱横に振舞つた。「畢竟悟らんが爲には、吾が情強きに過ぎ、迷はんが爲には、吾知、明なるに過ぐ。予は是の中間に佇徊して、遂に其の適歸する所を知らざる也」と、感慨を洩らしてゐるが、この惱みは、ある種の青年にいつまでも共鳴されるらしく、彼れの著作は今日まで愛讀者を絶たないやうである。

明治文壇史上、私の目に際立つて映つる評論は、「沒理想論」を最初とし、「時代精神」論などこれに次ぎ、その次ぎは、例の自然主義論である。これは、劃時代的に賑やかなものであつた。この自然派の中心人物で、よく論じよく作した田山花袋氏は、この流派の衰頽した頃の感想錄「近代の小說」中に云つてゐる。「藝術といふものも、矢張、その書いた時だけが新しいのではないか。作者の筆から離れて來た時だけが新しくつて、すぐ古くなつて了ふものではないか。何んなに好いものでも古くなつて了ふのではないか」と疑問を起してゐる。その疑問に就て、氏は考へて、しかし、「人間の心の底迄入つて行くやうなもの、人間の魂をも搖がさずに置かないやうなもの、いくら年月が經つても、人間が矢張やつてゐるやうなもの、もつと詳しく言へば、不易なもの、その時だけ流行つて、時が經てば、直ぐ變つて行つて了ふやうなものでないもの、例へて見れば男女のことゝか、心理的のこととか、その作品の中にその時代が見えるばかりでなしに、生きた

人間が覗かれて見えるやうなことだとか、さういふものをつかんで書いた傑作は、いつまで經つても古くならないのではないか。そのため、作者は第一義的でなくてはならないといふのではないか。その時代をすら超越するものでなくてはならないといふのではないか。社會に捉はれてゐては、社會の表面で行はれてゐることだけに興味を向けてゐては、到底第一流の作家になることは出來ないと云ふのではないか」と、自から斷定してゐる。

高山林次郎氏が「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と云つた有名な言葉と、花袋氏の時代超越說とは、甚だ內容を異にしてゐるらしく、高山氏が、ただ空漠と俗界脫却を志したのに過ぎないのに反して、花袋氏は、愛慾その他個人の心理を、人類永遠のものとし、流行不流行にかゝはらないものとしてゐる。それは花袋氏が高山氏よりも數十年人生の經驗を多く積んだためである。明治文學も年とゝもに成長した譯だ。

逍遙對鷗外の「沒理想」是非論、樗牛の「文明批評」「時代精神」論抱月花袋泡鳴などの「自然主義」論。皆相當に根據をもつた意義ある論評であつて、明治文學者の頭腦の聰明がそこに見られるのだが、創作は理窟ほどには行かなかつた。論ずるは易く、行ふは難い。衆理想を抱容し、時代の精神を如實に寫し、人間の心理を索つて、有るがまゝに描出すことは、文藝の極致であらうが、それを實現し得た大才が、明治の日本文壇に求めらるべくもなかつた。

三

よくも惡くも、明治二十年代の代表的作家と見做すべきは、紅葉山人である。新文體の建設についての氏の苦心に、天成の藝術家たる素質は充分に察せられる。しかし、私は氏の小說の殆どすべてを讀んで、可成りの興味は感じたに關はらず、多少の輕侮と反感を覺えないことはなかつた。藝術的陶醉の境地に惹入れられたこともなかつた。尤も感に打たれたものは、氏の小說よりも「病骨錄」であつた。正岡子規氏の病牀日記と云ひ、この「病骨錄」と云ひ、死に直面した人人の感想には、私は、若い頃からつねに心を動かされるのである。

文壇に於けるエロチシズムの流行は今日に限つたことではなく、小說といふものは色つぽいことを書いたものと、私など、少年時代に、誰れに敎へられるともなく、漠然と感じてゐた。「八犬傳」を讀み「美少年錄」を讀んでも、あるひは、紅葉の作品を讀んでも、そこに漂つてゐるエロチックな情趣に心をときめかしたのであつた。紅葉氏自身も「文明批評」や「時代精神」のやうな野暮つたいことは、小說に用のないものとして、ひたすら艶つぽく色つぽく文字をあやつることを心掛けてゐたやうである。露伴氏の作品よりも一般に廣く讀まれた所以である。しかし、紅葉氏の描くところの色模樣は、皮相な形式に捉へられて、生氣のない型のやうだ。

「伽羅枕」「三人妻」などが、二十五六歳の青年の筆に成つたことは、その文才の豊かさに驚かれるが、その色つぽさがつくりつけたやうで、觀察も單調である。文士としては、紅葉は社交が廣く世間をよく知つてゐたらしく傳へられてゐたが、今日、氏の小說集を新たに讀んで見ると、若い大家であつたゞけに、さう世態人情に通じてゐたとは思はれない。

「毎日の愚痴責は、仕置が重すぎて、いかい迷惑。何事もおほせの通り仕れば、向後ちと拷問をゆるめられ、寛大のお沙汰にあづからば、有がたき仕合と云へば、屹度此後を愼めと、膝にふつくり紫の入墨、齒痕を戀の極印と近松は洒落たりけり」と、「三人妻」に男女の戀の極致を書いてゐるが、同じ章下に、

「此方の思ふほどでもなく、疾くよりお心解けての御常談か。堅い〳〵、いつものやうに直と此へ來て、一めくり願ひたきものと、片膝突出せば……」と、その色男は、仇し女に痴話を仕掛けてゐる。

「金色夜叉」の滿枝は、貫一を口說いても相手の冷然としてゐるのに心を焦立てたが、最後に、「飜然と貫一の身近に寄添ひて、お忘れあそばすなと、言ふさへに力籠りて、其の太股をしたゝかつめれば……」

紅葉のエロチシズムは、かういふ風に古めかしい。抓ること嚙みつくことである。

氏は後年の「金色夜叉」の主題として、金と女の力を選んだ頃を待つまでもなく、「三人妻」に於て、早くも、人生に於けるこの二つの魅力の如何に強いかを認めてゐた。「金と女を道具に用ひはじめ、不自由せる奴は金で抑へ、それで行かぬ向は、女色でにぶらせけるに、凡そ四海にこの二重の網を切るほどの魚なく、面白く我手に入りて、死活自在の力はこの光るものと白いものに止めたり」と云つてゐる。その着眼はいゝので、その頃感傷的美文を弄んでゐた他の青年作家よりも大人びてゐた譯だが、女を描いても、衣裳持物の描寫に力を入れて、肉體を紙上に活躍させ得なかつた。金を描いても、「大様に顋で掻撫づる指の金剛石、座敷の前後十二疊を照らすを……後學のためと隙見する人數隣座敷に山を成し」のたぐゐで、ダイヤモンドその他の豪奢榮華の記述はいろ〳〵な小説に示してあつても、西鶴にあるやうに、金錢に對する人間の執念の強さは、決して現はされてゐないのだ。復讐に全心を燃やした貫一でも黄金慾が甚だあやふやである。とても、「モントクリスト」なんかの足許へも寄りつけない。紅葉の小説に現はされてゐる富豪の贅澤さは、高の知れたもので、それによつても、明治の日本の貧乏であつたことは察せられるが、資本家に對する憎惡の念も甚だ弱い。人間の所有慾の強さを知れば知るほど、所有者に對する無產者の羨望憎惡の思ひの強さをも知らなければならないのだが、紅葉氏描くところは、それ等が淡白である。

そして、私などは、氏の小説中の女性には、さしたる愛着を覺えなかつた。氏以外の硯友社の作品、あるひは、一葉女史の作品を讀んでも、そこに描かれてゐる女性の幻影を胸に銘してあこがれることもなかつた。鷗外や二葉亭などの飜譯小説の女性ほどの魅力を私達の心に投げなかつた。

明治文學は古典である。紅葉氏の小説は代表的古典である。しかも、早くも色の褪せた古典になりかゝつてゐる。誇るに足る我等の古典とは云へないのである。「囚はれたる文藝」のなかに、「十七八世紀は佛蘭西及英國の天下なり。彼の一列は佛のコーネイユ以下ヴォルテヤ等を前隊として……いづれも身だしなみ上品に、整然また瀟洒としてゐながら氣力光彩に乏しと見ゆるは……」と說いてあるが、私にはさうは思はれない。他については多く知らないが、コルネイユ、ラシーヌの古典戲曲は、氣力光彩に乏しいどころか、こんな光彩陸離目を眩するほどの文學が、他にあらうかと、私には思はれる。人間の名譽慾愛慾の強さ深さは、かくの如きかと、今更のやうに驚嘆してゐる。復讐の念憎惡の念の凄さ。私は人間性について戰慄を覺えるのである。ヴェルサイユの宮殿に遊び、ルイ王家の夢の跡に詠歎した抱月氏は、何故にルイ王朝時代の雄大なる古典文藝に思ひを潛めなかつたのかと惜んでゐる。傑れたる古典は、歲月の腐蝕時代の變遷によつて眞價を失ふものでないと、私はこれ等の古典を讀みながら感じた。傑れたる古典を有してゐる國は羨むべきかな。

紅葉作中の女性では「心の闇」のおくめなどが逸品で、可憐な日本娘がよく描かれてゐて、一葉作中の女性と似通つてゐる。一葉は、私がはじめて上京した明治二十九年頃、人氣の頂點に達してゐて、その年の夏、興津で開かれた基督教夏季講習會に於て、內村鑑三氏のやうな日本の小說なんかには無關心な宗教家の口からでさへ、彼女に對する皮肉な批評が洩らされたほどであつた。多くの男性作家を顏色なからしめたこの女秀才は、早くもその年の晩秋にはこの世を去つた。享年二十五歲。才女の夭折は、若い愛讀者の心を傷ましめるのであつたが、しかし、彼女の生存中の人氣も、女であるがために、他の男性の新進作家よりも過分に持囃されたにちがひないのだ。花袋氏が「近代の小說」のうちに、「めざまし草の大家達（鷗外、露伴、綠雨など）があゝして條件なしに褒めたのは、それは一面本當に作そのものが傑れてゐたといふこともあつたであらうけれど、一方、他の新進作家——たとへば、鏡花とか、天外とか、宙外とか、風葉とかいふものに對して、一種の面當（つらあて）といふやうな氣が釀されてあつたためではなかつただらうか。新進作家の壓迫に對する一種の防禦運動のために、かれ等に大した邪魔にならない一葉をあゝいふ風に持上げたのではなかつたらうか」と疑つてゐるのに、私は幾分の眞實性を認めるのである。彼女は文學者たる天分は豐かに有つてゐたらしかつたが、あまりに若かつた。「たけくらべ」「にごり江」など二三を除くと、他は少女小說と云つた感じがする。描かれた男女は、大抵單純で類型で、小說とい

ふよりも彼女の叙情文と云つた趣きがある。それ故、小説よりも、彼女の日常生活をそのまゝに書いた日記の方が、今日の私には遙かに面白い。頻りに彼女を訪問してゐた當時の青年文士の描寫は、彼女の小説中の人物よりも生氣を帶びてゐる。貧窶に惱みながら藝術に志を立てた若き彼女の心境は、その小説では見られないほどの生彩を帶びて現はれてゐる。筆馴らしのためか、丹念に書記されたその日記が、創作全部に匹敵するほどの分量を有つてゐるのは、國木田獨歩の、「欺かざるの記」が、殆ど彼れの創作全集と同じ量に達してゐるのと同樣である。この二つの日記は、量に於ても質に於ても、明治文學者の日記中類例のないものであつて、私は、特に興味を寄せてゐる。全體、下手に骨を折つた小説よりも、書きつ放しの日記の方が面白いに極つてゐるのだ。

一葉の日記には、日常生活の描寫に富んでゐて、藝術味があり、獨歩のには、抽象的な人生感想錄が繰返されてゐて、描寫が乏しい。續けて讀んでゐると退屈する。しかし、男は男であり、女は女である。一葉は、他人に見られることは全然豫期しなかつた日記に於てさへ、自己の心情を露骨にはぶちまけなかつたと、私には思はれる。自分が書いて自分だけが讀むにしても、謹ましやかに美しく自己の姿を映したかつたのだ。そこへ行くと、獨歩の方が率直であつた。「欺かざるの記」を讀むと、私自身若かりし頃、日常冥想したり反省したり、時には日記にも書き記したり

した感想にたび〳〵出くわすのである。二十年代の眞面目で敏感な青年の本體を知るには、この「欺かざるの記」が最も適切な文獻である。今日の青年の多くは、この日記に出てゐるやうな個性の鍛錬には、さして心を勞しないのかも知れないが、しかし、樗牛や獨歩の著書が、死後數十年の今日まで、一部の青年に愛好されて、可成りの賣行を保つて來たことを考へると、彼等には、未長く青年に共鳴されるところがあるのであらう。

綠雨でも一葉でも獨歩でも、明治の文學者は大抵貧乏であつた。彼れ等の多くが、肺病などに罹つて若死にをしたのは、貧乏が重な原因をなしたと云つていゝ。社會の冷遇が歎ぜられる譯であるが、本來あの時代に原稿料で生活しようと企てるのが間違ひであつた。德川時代の末期には、いろ〳〵な戲作文學が流行してゐたが、原稿料だけで生活してゐた作者は、馬琴くらゐなものだつた。明治になつてから、西洋の感化で文學藝術の士が尊重されるやうになつたとは云へ、まだ早創の際で、新文學の讀者が急にさう殖える譯はなかつた。だから、小說や詩で、贅澤な生活の料を得ようと思つて、その道に志した人はなかつた筈で、貧乏は覺悟の前であつたのだ。あの頃の作家で大正昭和と生き長らへて、圓本の御利益にあづかるなんか、夢のやうな話である。しかし、清貧を覺悟の文士だつて、一度贅澤の味を占めると、貧乏がいやになるのは人情の常で、從つて昔とは氣風が變つて、營利に心忙しくなるのは自然の勢ひである。

「文學者詩人にして、猥りに生活難を說くもの、亦自分は其の理由を解するに苦しむものである。歐羅巴諸國の如く、文學者を尊重する國にあつても、最初より文學を以て一家妻子を養ふべき職業となし創作の筆を執つた例を聞かぬ。文學が國家及社會に有害なりとの謬見に囚はれたる日本に生れ、日本の文學者としてこれを職業にしようと云ふ。自分は先づあまりに其の暴なるに驚かざるを得ぬ。一身の不幸一家の悲慘を見るに至るは、最初より知れきつた事である」とは、明治の末期に、永井荷風氏が、隨筆「紅茶のあと」のなかに云つてゐる感想であるが、止むなく文學を職業としたために、一身の不幸遺族の悲慘を來たした實例は、明治文學史の裏面に甚だ多いのだ。その點では世界の文學史に類がないだらうと思はれる。二月號の「文藝春秋」に、原田東風氏が「梁山泊時代の獨歩」と題して、獨歩の鎌倉生活を仔細に語つてゐるが、これによつても、あの頃の文士の生活振りが如實に見られる。そして、獨歩は、この貧生活の間に、彼一代の傑れた短篇を幾つも產出したのだ。それ等の創作には、作者の個性が發揮されて、時流に媚びたところは少しもない。多少の厭世調を帶びてゐるが、きび〳〵した文章で、貧にひしがれたところがない。後年長く青年に愛讀される所以である。

私も獨歩の作品を好んだ。短篇小說作家として、獨歩は明治文壇では類を絕してゐる。深みや強みはあまり見られないが、氣が利いてゐて、スッキリしてゐて、いつ讀んでも氣持がいゝ。「世

相を有りのまゝに描く」とか「性慾を露骨に描く」とか云はれた日本自然主義作家の範圍に、獨歩はいや應なしに引入れられたけれど、獨歩はさういふ意味の自然主義作家ではなかつた。この主義の全盛期で、その流派の幹部の一人として昇ぎ上げられたのだから、彼自身、強ひて反對はしなかつたであらうが、自分で狐につままれたやうな感じがしてゐたにちがいない。「余の從來の作物は、自然主義なる者の如何も知らずして、只だ余の見る所、信ずる所に依りて製作せる者である」と、ある所で所信を洩らし、「ウォーズオースから感化を受けた」と明言してゐる。花袋泡鳴などの「現實暴露」式「露骨なる描寫」式の自然主義とは異つて、ウォーズオース風の詩趣あり宗教味もある自然主義であつたのだ。それだからこそ、樗牛や蘆花の文章とともに、末長く靑年に好まれてゐるのである。エロとかグロとかゞ一時流行することがあつても、一般讀者に永く喜ばれるものは、あまり露骨でない、詩趣のある、そして、あまり常識道德に反しないものなのではあるまいか。獨歩のものは思想が健全なのだ。多數者には、紅葉が迎へられても、柳浪が喜ばれず、獨歩が好まれても、泡鳴がいやがられる譯は、そこにあると思ふ。一般の小說讀みは自己の弱點を抉りだされたり、人間の眞相を剔きだしにされたりすることは好まないのだ。

四

私は、去年の秋紅葉の頃、輕井澤に遊んで、雨に降られて、二日ばかり、薄ら寒いホテルに蟄居させられた間に、ホテルの書棚に收められてゐる蘆花全集を取出して、そのうちの未讀の分に目を通した。「日本から日本へ」と題する世界漫遊記。「みゝずのたはごと」と題する田園生活記錄など。

「あひびき」その他に現はれてゐるツルゲネーフの自然界の描寫は、二葉亭などの飜譯によつて、新代の青年を刺戟して、新なる目で周圍の風物を觀察させるやうになつたので、獨歩の「武藏野」はその一例として有名であるが、蘆花は獨歩以上にその感化を受けたのぢやないかと思はれる。彼自身「あひびき」や「めぐりあひ」を讀んで、「世にもこんな美しい世界があるかと嘆息し……手づから寫つした」と明言してゐる。兎に角、田舍を好んで、自然の四季をり〳〵の風光を愛して、清新な描寫を試みたものは、蘆花が明治文壇では第一であつた。古來、日本人は西洋人よりも自然美を愛する傾向があつて、繪畫にでも文學にでも、自然美はよく描かれてゐたが、それも次第に型の如くになつてゐた。源氏、枕の草子、徒然草の範圍からあまり發達しなかつたと云つていゝ。明治になつても、紀行文家の自然描寫は、多く文章に捉はれて、新しいところがなかつた。花袋の紀行文にも、私はあまり感心しない。やはり、誰れよりも蘆花を推稱しなければならぬと思ふ。

蘆花は田舍が好きであつた上に、トルストイなんかの主義にかぶれて、田舍に移住して、百姓の眞似事をやつたりしたが、その前に、後藤宙外氏も田園生活論を主張したことがあつた。この「田園生活論」と抱月氏の「文士無妻論」とは、私が學校卒業當時に心に留つた論議であつた。生活難や家庭難がこの所說に反映してゐるやうに思はれる。後藤氏は、田園生活を樂しいものゝやうに書いてゐたと記憶してゐるが、實際あの頃は、田舍暮しが、今よりは餘裕があつたのだ。私は、最近、圓本の全集によつて、宙外氏の舊作の田舍小說を二三種、久振りに讀返しながら考へたのだが、あの頃は、小說は都會中心であつて、田舍の百姓なんかのことを田舍言葉で書いたりしては、讀者にも評家にも喜ばれなかつたのだ。宙外氏は可成りよく書いてゐるのだが、その點で餘程損をしてゐた。長塚節氏の「土」の如きは、明治文壇の傑作であるに關はらず、愛讀者は極めて少いやうである。

蘆花氏は例外である。それは、「不如歸」によつて、早くから崇拜者を得てゐたためでもあらうし、純粹の田舍小說はあまり書かなかつたためでもあらう。氏は、硯友社風の文體に感染せず、獨歩のやうにキビ〳〵した筆は持つてゐないし、田舍者らしく野暮つたいのであつたが、そこに清新味があつた。氏の抱持した基督敎的人道主義も、一般の讀者に迎へられる理由になつたのであらう。

しかし、私は、氏の田園記錄は愛讀したが、晩年の自己と自己の周圍の現實暴露を企てた小說は嫌ひである。「不如歸」や「思出の記」やあるひは「黑潮」のやうな通俗小說を書いた作者が、さういふ作風に飽足りないで、自分の生涯の眞相に目を注ぐやうになつたのは、藝術家としての誠實を示したことになるので、蘆花が今日の大衆作家とは素質を異にしてゐる證據になるのだが、晩年の長篇「富士」のやうな暴露小說は、藝術以下で、むしろ醜態を呈してゐる感じがする。夫人との合作であるためかも知れないが、文章も昔の詩趣を缺いてカサ〳〵してゐる。眞劍に人間の眞相を暴露した緊張味は見られなくつて、見さかひもなく內輪のことを喋舌り立てゝゐるとしか思はれない。岩野泡鳴などの暴露小說とは異つてゐる。全體、自己の家庭や、兄弟緣者の眞相を忠實に描寫しようとするのに、夫人と合作するのはいゝ方法とは思はれない。たとひ、夫人が無私公平な觀察眼を有つてゐたにしても、夫妻の共同では、統一を缺くところが出來るにちがひない。……それに女の入智慧が、男の目をくらますのは、世上の習ひなのではあるまいか。內助の力ある賢明な婦人も、夫の製作の內容まで手をのばすのはいゝ心掛けとは思はれない。

私は、輕井澤の淋しいホテルの客間で「日本から日本へ」の漫遊記を速讀しながら、老夫婦の巡禮姿にある親しみを覺えた。ゴンクールに描かれたモーブラン老夫婦は、人生の希望を失つて殘生を引摺るやうにして、世界のあちらこちらに當てのない旅を續けた。蘆花氏夫妻は、荒廢し

たキリストの遺跡などを吊ひ、靈魂の淨化を志してゐた。それを思ふにつけて、私は自分達の茫漠たる無目的の世界漫遊に思ひ及んだ。

蘆花氏が見たか見なかつたか知らないが、ロンドンのある美術館に、ワッツの「希望」と題する美しい繪が掲げられてあつた。殘光の薄れかゝつた地球の上に、兩眼を縛られた女が、絲の切れかゝつた竪琴を持つて、手頼りなげに寄りかゝつてゐる。でも、彼女は、微かに殘つてゐる絲によつて、自分の力限りの音樂を奏せんと努力してゐる。一見して我等の心に觸れる名畫であつて、「人生といふものはこんなものだらう」と、私は感じたが、「日本から日本へ」の漫遊記を讀んで私はふとその繪を思出した。たゞの旅行記とはちがつて、著者の主觀に親しみを覺えたのである。心の淨化、永遠の希望、人類の信頼などを、老いてなほ夢みながら、世界を見てゐた。

歐洲諸國を旅行して氣づいたことの一つは、基督教の勢力であつた。基督教を外にして、歐洲の過去の藝術も文學も理解されないことは、かねて知つてゐたが、實際その地を踏んで見ると痛切に感ぜられる。今日は、科學の進歩につれて、過去の迷信から解放されてゐると云はれてゐるが、果してさうだらうか。一部の識者は別として、全體には、心の底に宗教の影を宿してゐるらしく、私には思はれる。多數の通俗映畫を見ても宗教臭が感ぜられるが、芝居を見ても宗教の色が、我々異國人には目立つのだ。しかし、西洋模倣の明治の日本文壇には宗教も素通りして、

さしたる痕跡を留めなかつた。「見神の實驗」なんかを說いた綱島梁川氏の思想も、文壇には受入れられなかつた。微溫的な人道主義が基督教に似通つた色を帶びて、いろ〳〵な作家の作品に現はれてゐるだけである。……私はかねてさう思つてゐた。ところが、この頃考直して見ると、透谷、獨歩、蘆花、それから、自然主義時代の人々が、懷疑、懺悔、告白などの言葉を口にし、またさういふことに頻りに心を勞したのは、西洋宗教の刺戟によるのではあるまいか。精神上の懷疑だの懺悔だのは、宗教から解放されてゐる人間には起らない譯だと、私には思はれる。

「あらゆる既存の人生觀は、我が知識の前に其の信仰價を失ふ。呪ふべきは我が知識であるとも思ふが、しかたがない。何等かの威力が迫つて來て、私のこの知識を征服して呉れたら、私は初めて信じ得るの幸福に入るであらう。されば、現下の私は、一定の人生觀論を立てるに堪へない。今はむしろ疑惑不定の有りのまゝを懺悔するに適してゐる。そこまでが眞實であつて、其の先は造り物になる恐れがある。……虛僞を去り矯飾を忘れて、痛切に自家の現狀を見よ。見て而して之れを眞摯に告白せよ。……此の意味で今は懺悔の時代である。或は人間は永久にわたつて懺悔の時代以上に超越するのを得ないものかも知れない」

これは、自然主義全盛時代に、抱月氏の發表した感想である。ここに信仰を求むるの聲と絕望の聲とがある。氏も、歸朝後間もなく發表した「囚れたる文藝」や、小說「山戀ひ」に見せたや

うな氣取りから脫却して、自己の心を深く省みたのだ。「予は矛盾の人也、煩悶の人也」と叫んだ梅牛は、感傷的でありロマンチックであつたが、抱月氏は冷然として說いてゐる。泡鳴氏の「苦悶則人生」說、花袋氏のよく筆にした「つらい〳〵人生」說。さういふ人生の感じ方は、今日の文壇の新人諸子には愚かしく思はれてゐるかも知れない。懷疑だの懺悔だの煩悶だのと、人間がそんなことで頭を痛めたつてはじまらないではないかと思はれてゐるかも知れない。明治以前には、日本の文學に、さういつた人生の感じ方はなかつたので、明治文學中に見られるやうな個性の煩悶苦悶は、舶來物なのだ。西洋の過去の文學には、それが激しく現はれてゐて、明治文學のは、その影を稀薄にうつしたに過ぎないくらゐだ。舊時の日本が非常な感化を受けてゐた支那文學について云つても、私などは、支那の詩を讀むと、李太白をはじめ、有名な詩人の多くが、枯淡な無慾な悟り澄ました口吻を洩らすか、磊落な豪傑氣取りを見せつけるかした詩作を殘してゐるのに、嫌惡を覺えることがあるが、日本の漢詩人は、最近までその支那の詩人の眞似をして來たのである。……明治文學中の懷疑苦悶の影も要するに、西洋文學の眞似で、附燒刃なのではないだらうか。明治の雰圍氣に育つた私は、過去を回顧して、多少さういふ疑ひが起らないことはない。

當時の創作よりも「卽興詩人」に心醉した私は、それとは趣きを異にしてゐる「浴泉記」に心

醉した。「浴泉記」はレルモントフの「現代のヒーロー」の一部分の飜譯である。今から思ふと、この飜譯小說や、ツルゲネーフの「父と子」の英譯を耽讀したのは、自分の心を素直に伸ばすためには、よろしくなかつたのではないかと思はれる。しかし、さういふものを讀まされるやうな時代に生れたのだから爲方がない。もつと早く生れたら、陶淵明や李太白や高靑邱なんかにかぶれて、摸倣的七言絕句くらゐ作つてゐたかも知れない。「須らく現代を超越すべし」と豪語したつて、それは不可能の事なのだ。文藝復興期の多くの天才も、あの時代に生れたればこそ、あの藝術が生み出せたのだ。

五

幸田露伴氏は紅葉山人と同樣に文學修業の初步として西鶴を學んだ人であつたが、文章は紅葉とちがつて重くるしかつた。紅葉ほど一般向きでなかつたが、高級な讀者には紅葉以上に尊敬されてゐた。支那文學に熟通して、年とゝもに、氏の文體は莊重雄渾の風を帶び、「運命」のやうな含蓄ある古典的作品を著すに至つたが、私は、氏の靑年期の評判の高かつた小說にも、さして親しめなかつた。氏は鷗外氏とともに、明治の作家中、最も學殖のあつた人だが、鷗外氏のやうに近代歐洲文藝に親まず、專ら東洋の古典に心を注いでゐたことが、その作品をして私などの心に

觸れさせなかつた一つの原因になつてゐたのであらう。霞の髄から天をのぞくやうに、西洋文學の一端を知るよりも、和漢の古典をみつしり討究した方が、本當の精神修養のためにはよささうに、理窟に於ては思はれるが、しかし、實際は、「きくの濱松」や、「さゝ舟」によつて傳へられる東洋風のロマンチシズムよりも、「卽興詩人」などの舶來のロマンチシズムの方が、私には一層懷かしかつた。紅葉は寫實派、露伴は理想派と、あの時代には大まかに極められてゐたが、露伴氏の作中の理想は、取立てゝ云ふべきほどのものとは思はれない。しかし、氏の晩年の「運命」などは、厚味もあり深みもある傑れた歷史小說であつて、外形の文章は舊時代の漢文調であつても、生彩ある人生世相の一面が愁然と叙述されて、我々の胸に迫つて來る。鷗外氏の晩年の史傳小說とは趣きは異つてゐるが、共に、近代の歷史小說中の最高位を占めてゐる。

明治文壇には、傑れた歷史小說はなかつた。露伴氏の「ひげ男」も外形が華やかなだけで淺いものであつた。塚原渋柿園氏の歷史小說の如きは、講談以上の何物でもなかつた。事實は小說よりも奇なりと云はれる、過去の事實の堆積である歷史からは、幾らでも興味ある題材が持つて來られる譯である。「造化の脚色は、綺語の奇よりも奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及び可からざるの警拔あらんとは」と、露伴氏も「運命」の序に云つてゐる。氏も、青年時代に、腦漿をしぼつて、所謂「理想小說」なるものを作上げた愚か

さを感じて、歴史のうちに人生の眞實を探る氣持になられたのかも知れない。

夏目漱石氏も、漢文漢詩趣味の可なり豐かな人であつた。鷗外、露伴、漱石、あるひは楞牛などゝ、漢字の知識に富んでゐたが、劃の多い漢字を自由に驅使すると、文章に重みがあるやうに思はれ、また漢文調は快い響きを傳へた。楞牛の用語の如きは、多少出鱈目であつたが、あの漢文調が詩のやうな情緒を傳へた。しかし、これも、日本外史や十八史略の素讀から學問をはじめた我々明治の青年の耳目にさう感ぜられたので、今後の讀者には、彼等の漢文的名文句も、死語として何の感じも與へなくなるであらう。西洋で希臘羅甸の古語を普通人の教課目に加へてゐる如く、日本でも、漢學は、たとひ實用價値はなくなつても、精神修養のために少年の教育に取入れなければならぬと說く人もあるが、若き人々は次第に西洋語に魅力を感ずるばかりで、漢語には何の清新味も感じなくなつて行くらしい。さうなると、つい此間の明治文學も、一般讀者には緣の遠い古典になる譯だ。

「西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも此境も解脫することを知らぬ。どこまでも同情だとか愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。……うれしい事には、東洋の詩歌はそこを解脫したのがある。……今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな、西洋人にかぶれてゐるから、わざわざ呑氣な扁身を浮べて

此桃源に溯るものはないやうだ」と、漱石氏は「草枕」のなかで云つてゐる。氏は英文學を專門の稼業として洋行までしたのに關はらず、たやすく西洋にかぶれず、東洋の文人趣味を有つてゐた作家で、初期の作品には、その東洋文人趣味が横溢してゐた。それが、泡鳴から「漱石は二流作家だ」と罵倒され、自然派の連中から輕視された所以であつた。漱石の方でも、小說「それから」の主人公に托して「凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や煩悶や、眞面目や、熱烈ほど氣障なものはないと自覺してゐる」と、暗に自然派の作家や論客に當てこすりを云つてゐる。文學史上では一時代おくれてゐる氏も、露伴紅葉と年齡を同うして、共に慶應何年かに生れたほどあつて、支那趣味や俳諧趣味ばかりでなく、武士道的道德意識からも脫け出てゐなかつた。しかし、氏は、歐洲文學に造詣深き人であつた。スキフトの眞價を見極めたり、スチーブンソンやメレヂスを讀破した人であつた。頭腦は銳敏であり聰明であつた。それ故、後年の小說には、「悠然南山を見る」底の生悟りや、封建道德の理想臭から離れた、もつと深い人間性が描出されてゐる。「行人」や「心」や「道草」や「明暗」などには、當年の自然主義作家以上に、所謂「つらい〳〵人生」が寫されてゐるから、皮肉だ。低徊趣味と評された漱石のこれ等の小說と、せつば詰つた人生を描いたとされた自然派の獨步などの小說とを、今日よく比べて見ると、どちらが暗い人間心理を一層的確に寫してゐることか。……「不如歸」を書いた蘆花が晩年「富士」を書き、「風流

佛」を書いた露伴が晩年「運命」を書き、「坊つちやん」を書いた漱石が晩年「心」を書いた。明治時代の作家は、動搖の激しい時代の刺戟を受けて進んでゐる。馬琴が「弓張月」「美少年錄」から「俠客傳」「朝夷巡島記」まで同じ態度を持してゐたのとはちがつてゐる。紅葉でも獨歩でも、もつと壽命を保つてゐたら、作風がどう變化したかも知れなかつたと思はれる。

思へば、新日本の文壇は、種々雜多な思想によつて刺戟されたものである。德川時代には、異端邪說と云つたところで概して孔孟の敎への範圍をうろついてゐただけであつた。勸善懲惡は、芝居の作者にでも草双紙の作者にでも、確固不動の憲法とされてゐた。明治になつてからは、基督敎の博愛主義も入つて來た。「消極的な利他的な道德を家者の群の道德だ」として侮蔑したニーチエの超人哲學も入つて來た。スチルネルの自我主義も、ゾライズムも、社會主義も「凡てか、皆無か」主義も、皆んな大なり小なり、矢鱈に文壇に刺戟を與へ、評論家に問題を提供し、作家の態度を動搖させたことを思ふと、日本は歐米思想の殖民地のやうにも思はれる。過去の王朝文學や元祿享保の文學、文化文政期の文學に比べると、明治文壇は色さま〴〵の百花繚亂の趣きがあるが、それとともに殖民地文學の感じがする。そして、私などはその殖民地文學を喜んで、自己の思想、感情を培つて來た。今日のマルクス主義、共產主義の文學にしたつて、今のところ、私には殖民地文學に過ぎないやうに思はれる。

最近の「プロレタリア文學」として分類される新しい小説を讀むと、自由民權熱望時代、所謂明治開花期の政治小説が、私には回顧される。國家を憂ひ社會を憂ふる意氣をもつて筆を執つてゐるところが似通つてゐる。本當の心はどうだかと疑はれるが、上べは、どちらにもさういふところが見られる。小說好きの私も小說を讀みだしたのは「國民之友」や「都の花」の發刊されてゐた明治二十年代からのことで、それ以前に出版された小說は、「佳人之奇遇」「經國美談」以外には、殆んど讀んでゐなかつた。この二つの小說が廣く流布したのは、外國の歷史的事件の物珍らしかつたためでもあつたが、憂國の精神が青年の胸に響いたためでもあつた。「世路日記」「雪中梅」「花間鶯」などは、ずつと後になつて參考のために讀んだのであつたが、當時の時勢を知るために役に立つだけのもので、小說としては馬鹿らしさの限りであつた。井生村樓の政談演說に有爲の青年が西洋の新思想を振りまはすこと、官權の無理解な壓迫の盛んなこと。自由民權の鬪士に同感し、また英語の讀本なんかを讀んで頭を束髮にして 舊弊な兩親緣者に反抗するモダーンな女の現はれてゐること。國會開設を理想世界の出現のやうに空想すること。さういふ着想を粗雜な文章で敍述してゐるのが、末廣鐵腸の「雪中梅」その他の政治小說の特色なのだ。當時の外來の思想は、のつけから大したものが入つてゐたので、ルソーの「民約論」は、中江兆民によつて飜譯され、ボルテール、モンテスキューなどの政治思想も傳へられてゐた。そして當時のジャ

ーナリズムは、自由民權に立脚した西洋の斷片小說のまづい飜譯を頻りに取入れたりした。しかし、さういふ氣運に乘じてゐても、創作は極めて皮相で、幼稚で、蕪雜で、藝術味も稀薄であつた。まだしも、舊江戸文學の殘黨たる魯文、柳北あるひは篁村などの作品に、我々の心は惹かれるのである。今日のプロレタリア派の文學だつて、このまゝだつたら、あの頃の政治小說と同樣に、後世から見られることになるのではあるまいか。

默阿彌は、明治初期の世相を舞臺に取入れて、その頃の見物を喜ばせてゐたが、今それ等の脚本を讀むと、僅か四五十年前の日本がこんなに幼稚であつたかと呆れることが多い。「酒井の太鼓」のうち、菊五郎所演の鳴瀨東藏と、團十郎所演の鳥井四郎兵衛との渡り臺詞に、「かく文明の世の中に」「開化を知らぬは」「愚で御座る」と云ふのがあつて、その當てぜりふが大受けであつたさうだ。內田魯庵氏は「思ひ出す人々」の中に、明治初年の國を擧げての西洋模倣の光景を面白く叙述して、「猿芝居」のやうであつたと評してゐる。文學のあるものには、その猿芝居の脚本見たいに思はれるものがある。

六

歐洲の壯麗なる韻語、幽婉なる詩歌を明治文壇に傳へるに努めた人は、上田敏氏であつた。思

想や話の筋を移すのは比較的たやすいが、異國の詞句の風韻を傳ふることは六ヶしい。敏氏は兎に角困難なことをやつた。「海潮音」一卷は、多數者に迎へられなかつたにしても、海外文藝移植時代の一つの寶玉と云つていゝ。西洋の詩と云へば、バイロンとかハイネとか、テニソンとか、變つたところで、ホイットマンなんかゞ喜ばれてゐた時代に、佛蘭西や伊太利の高踏派や象徴派の作品の見本を我々に示した。二葉亭の「あひゞき」に新代の青年文學者が目を見張つたやうに、敏氏の移し傳へるところのマラルメなどの象徴詩に耳を聳てた新人もあつた。しかし、詩は藝術のうちでは至醇のものである。西歐詩人の微妙な心境に入ることは、思想や散文の模倣を企つるやうにたやすくはない。

「日本の文學は不良青年の手に墮ちた」と、上田敏氏は歎聲を發したさうだ。これは蕪雜な自然主義文學を呪ふのあまりであつた。氏の高踏的藝術趣味からさう思ふのは當然であつたであらうが、しかし、それまでに明治の文學者によつて築かれた象牙の塔がどれほど莊嚴優美なものであつたであらうか、皆んな貧弱であつたのではあるまいか。技巧から云つても「彫心鏤骨實に燦爛の美を恣にした」ものもなかつた。自然主義の波は陳腐淺弱な玩具の塔を洗ひ流さうとする意氣を持つてゐた。

田山花袋氏は、晩年、氏等が努力して道を開いた本筋の文學の進路が杜絶して、低級卑俗な文

學が跋扈するのを慨嘆してゐた。私には、上田氏の歎聲が回顧される。すべて時の勢ひである。「近代の小說」のなかに、花袋氏が云つてゐる。「今日讀んで見ると、昔面白かつたものが、すべて詰らなくなつてゐる。ォヤ、こんなものだつたかしら？　あんなに感動を受けた作が？　これは私ばかりではない。誰れでも皆さういふ感じを抱かぬものはあるまい。現に私の書いたものなどでもさうである。……どうも拙くて讀めない。どうしてこんなに拙いものが、あゝいふ風に世間に迎へられたらう？「蒲團」などがどうしてあんなにセンセイションを起したらう？　かういふ風に思ふと、非常に恥かしくなる。そして、全く一種の深い幻滅を感ぜずにはゐられなかつた」

田山氏の正直な述懐で、私も同感である。昔讀んで面白く思つた明治の小說も、今日讀むと、大抵は詰らなくなつた。それは、時勢の變遷にもよるが、本當に傑れた作品が乏しかつたためなのだ。その證據には、あの頃のものでも、二葉亭や鷗外の飜譯物は、今讀んだつて、そんなに見縊めがしないではないか。「浮草」でも「肖像畫」でも「卽興詩人」でも。それ等の飜譯は、外國物と云ふよりも、むしろ明治文壇の產物のやうに、私などには感ぜられてゐる。改造社や春陽堂の「明治文學全集」の中に、多くの飜譯が堂々と入つてゐるのは、當然であるが、明治文壇に取つてはあまり名譽なことではない。

「自分はなぜこんなに佛蘭西が好きなのであらう」と自分から疑ふほどに、何から何まで佛蘭西

に心醉した荷風氏は、江戸の末期をも讃美し、明治の初期の文化にも好意を寄せたに關はらず、現在を嫌つた。氏の歸朝後の作品たる「新歸朝者の日記」や「曇天」に出てゐるやうな感じには、二十年後の今日でも、海外漫遊を終へて歸國した我々の共鳴するところが少くないが、明治初年の文化や文學を憧憬する氣には、私などはとてもなれないのである。現在の風俗でも文學でも思想でも、明治以來、昔も今もかはらない氣せわしい西洋模倣の一過程であると思はれる。いつまでも、所謂「開化期」の連續である。才人はその才に相應した業蹟を殘してゐるが、概括して云へば、新日本の文學史はまだ獨創の世界を現はしてはゐないのである。（昭和六年三月）

夏目漱石論

一

私はこの頃、はじめて「虞美人草」を讀んだ。この長篇小說は、夏目漱石が朝日新聞に入社最初の作品で、森田草平氏は「明治大正文學全集」に添附された解題に於て「この作品は、先生が入社後京都に遊んで、歸來直ちに筆を執られたもので、卽ち純粹に作家として世に立たれた道程の第一歩で、先生としても比較的此の一篇に力を注がれたらしく、想ひを構ふること愼重に、プロットの上から云つても一絲亂れず、文章から云つても實に絢爛と精緻を極めたものである」と云つてゐる。

この批評は當つてゐる。プロットが整然として、文章も絢爛と精緻を極めてゐることは、誰れにでも認められる。この一篇だけを例に取つても、漱石が近代無比の名文家であることは、充分に證據立てられる。それでは「虞美人草は讀んで面白かつたか」と訊かれると、私は、言下に否と答へる。「私にはちつとも面白くなかつた。讀んでゐるうちは退屈の連續を感じた」と、私は躊躇するところなく答へる。

漱石は、獨歩などと違つて、文才が豐かで、警句や酒落が口を吐いて出ると云つた風であるが、しかし、私には、さういふ警句や酒落がさして面白くないのだ。「猫である」は作者が匠氣なく、

興にまかせて書きなぐつたところに、自然の飄逸滑稽の味ひが漂つてゐて面白かつたが「虞美人草」では、才に任せて、詰らないことを喋舌り散らしてゐるやうに思はれる。それに、近代化した馬琴と云つたやうな物知り振りと、どのページにも頑張つてゐる理窟に、私はうんざりした。馬琴の龍の講釋でも虎の講釋でも、當時の讀者を感心させたのであらうし、漱石が今日の知識階級の小說愛好者に喜ばれるのも、一半はさういふ理窟が挿入されてゐるためなのであらう。

「氣燄を吐くより、反吐でも吐く方が哲學者らしいね」

「哲學者がそんなものを吐くものか」

「本當の哲學者になると、頭ばかりになつて、只考へるだけか、丸で達磨だね」

哲學者を評した警句として、讀者が感心するのか知れないが、私には、ちつとも面白くない。

「そよと吹く風の戀や、涙の戀や、嘆息の戀ぢやありません。暴風雨の戀、曆にも錄つてゐない大暴雨の戀、九寸五分の戀です」

「九寸五分の戀が紫なんですか」

「九寸五分の戀が紫なんぢやない。紫の戀が九寸五分なんです」

「戀を斬ると紫色の血が出るといふのですか」

「戀が怒ると九寸五分が紫色に閃ると云ふんです」

かういふ氣取つた酒落は、泉鏡花の小説のある部分と同樣に、私に取つては、ちんぷんかんぷんである。

「長篇虞美人草」の前半は、かういふ捉へどころのない、美文で續くのだからたまらない。私はさきに、漱石を無類の名文家と云つたが、名文家といふよりも美文家と云つた方が、一層適切である。兎に角、彼れは美文的饒舌家である。三語樓などが連想される。

かういふ餘計なものを取去つてしまつて、小説のエッセンスだけを殘すと、藤尾と彼女の母、甲野、小野、宗近など、數人の男女の錯綜した世相が、明確ではあるが、しかし概念的に讀者の心に映ずるだけである。女性に對する聰明なる觀察はある。人生に對する作者の考察も膚淺ではない。しかし、この一篇には、生き〳〵した人間は決して活躍してゐないのである。思慮の淺い虛榮に富んだ近代ぶりの女性藤尾の描寫は、作者の最も苦心したところであらうが、要するに說明に留まつてゐる。謎の女にしてもさうだ。宗近の如きも、作者の道德心から造り上げられた人物で、伏姫傳受の玉の一つを有つてゐる犬江犬川の徒と同一視すべきものである。「虞美人草」を通して見られる作者漱石が、疑問のない頑強なる道德心を保持してゐることは、八犬傳を通して見られる曲亭馬琴と同樣である。知識階級の通俗讀者が、漱石の作品を愛誦する一半の理由は、この通常道德が作品の基調となつてゐるのに本づくのであるまいか。

私は、最近、菊池寛君の「新珠」など、二三の通俗小說を讀破したので、連想がそれ等の小說に及んだが、藤尾や糸子、あるひは二三の青年の如き男女を表現してゐる點では、むしろ、菊池君などの方が傑れてゐるのである。わが佛尊しと見る偏見を離れて見るがいゝ。「虞美人草」の小說的部分は、通俗小說の型を追つて、しかも至らざるものである。……しかし、漱石の大作家たる所以は、その通俗小說型の脚色を、彼獨得の詩才で磨きをかけ、十重二十重の錦の切れで包んでゐるためなのであらう。私の目には、あまり賞味されない色取りであるが、他の多くの人々は、その錦繡の美に眩惑されるのであらう。美辭麗句が無限に續いてゐるやうに思はれるのであらう。

馬琴は「饑ゑたるものは食を撰ばず、逃ぐるものは道を撰ばず、貧しきものは妻を撰ばず」と云つたやうな、格言じみた氣取つた文句で、一回一章を書きはじめることがあつたが「虞美人草」は、かういふ癖を有つてゐる。「蟻は甘きに集まり、人は新らしきに集る。文明の民は激烈なる生存のうちに無聊をかこつ……」(十一回)「貧乏を十七字に標榜して、馬の糞馬の尿を得意氣に咏ずる發句と云ふがある……貧に誇る風流は今日に至つても盡きぬ」(十二回)などの書出しは、今日の讀者には、古めかしく思はれるだらう。宗近と妹との對話、藤尾と母親との對話など、サクリサクリと齒切れがよくつて、なか〳〵巧みなのだが、例の說明の邪魔が入るので、折角の興が醒

まされ勝ちになる。

要するに「虞美人草」は、最初の新聞小説であるがために、雑誌に掲げられるために執筆されてゐたそれまでの小説とは、作者の心構へが自から異つて、そこに作爲の跡が現はれ、作者の缺點を暴露することにもなつたのであらう。何としても冗漫だ。新聞の讀者がよくもかういふ長つたらしい隨筆錄漫談集を、小説として受入れて、辛抱して讀み續けたものだと、不思議に思はれる。今日の時世では、朝日新聞のやうな新聞でも、かういふ長篇小説を安んじて掲載してゐられないであらう。

私は「三四郎」といふ小説を、半歳ほど前にはじめて讀んだのであつたが、それは「虞美人草」ほどに隨筆的美文的でなかつたに關はらず、一篇の筋立さへ心に殘つてゐない。讀者を感激させる魅力のない長篇小説を讀過することのいかに困難なるかを、その時感じたことだけ、今思出してゐる。

二

森田草平氏の「煤煙」が朝日新聞に連載されて、評判になつてゐた時分のことである。ある日、私は、博文館の應接室で、田山花袋、岩野泡鳴兩氏と雜談に耽つてゐるうち、談たま〳〵「煤煙」

の價値に及んで、誰れかゞ非難の語を挿んでゐたが、

「しかし、漱石の比ぢやない」と、泡鳴は例の大きな聲で放言した。

「それはさうだね」と、花袋は輕く應じた。

私は、默つてゐたが、心中この二氏の批評に同感してゐた。「漱石の比ぢやない」といふ評語を今日の讀者が讀んだら、「草平の作品は漱石には及びもつかない」といふ意味に解するかも知れないが、あの頃なら、その評語は、「煤煙は、評判ほどのものではないにしても、漱石物のやうな詰らないものではない」といふ意味に受入られるのであつた。それほど、あの頃の漱石は、一般の讀者には盛んに、歡迎されてゐたに關はらず、文壇からはをり〳〵侮蔑の語を投げられてゐた。泡鳴の如きは、最も勇敢に漱石や鷗外を蔑視して、「二流作家」呼はりをもしてゐたのであつた。人間の榮枯盛衰、毀譽褒貶の定めがたきことは、ここにもよく現はれてゐるので、漱石の作品は死後年を追ふて、ます〳〵世上にのさばり返つて、泡鳴の作品は、この頃たやすく手に入れることの出來ないくらゐに埋沒されてゐる。それは、作品の眞價の齎らす自然の結果なのであらうか。私は斷じてさうは思はない。私自身の好惡を別にして、漱石の嶄然たる大作家たることは否定し得ないのであるが、しかし、泡鳴が漱石などとは異つた素質を有つた傑れた作家であつたことも否定し得られないと思ふ。泡鳴の作品は今日の一般の讀者に認められるべく、あまりに深いところ

を持つてゐるのではあるまいか。

世界の文學の種類は千差萬別である。批評家や讀者の好みもさま〴〵である。私にはおのづから私の好みがあつて、それはいかんともし難いのである。たとへば、明治の中期以後、特異の作風によつて、一部の文學愛好者に熱愛され、目まぐるしい文藝思潮の動搖變遷の間にも、堅くおのれを持してゐた泉鏡花氏の作品については、私は緣なき衆生と云つていい。幼少の頃から、いろ〳〵な文學に親しんで來た私も、鏡花氏などの作品を鑑賞する素質を、生れながらに缺いてゐるのかも知れない。

さういふと、「自然主義を信奉してゐる作家には、鏡花氏の藝術が分る筈がない」と、舊套的評語が、鏡花最屓の人々から下されるであらう。しかし私は、文學に於ける自然主義の信仰者であるかないかは別問題として、可成り種類の異つた文學を翫賞して來た。哀傷の文學をも詠歎の文學をも、怪奇の文學をも、艶濃な文學をも、淡彩の文學をも、みなそれ相應に愛誦して來た。私は、長い間歌舞伎芝居に惑溺したこともあつた。「即興詩人」に心魂を蕩かされたこともあつた。かつて「隅田川」を讀んで恍惚としたこともあつた。青年期に於てさへ、落寞たる實生活を經驗してゐた私は、藝術の世界に於ては、人一倍現實を離れた夢をそこに見てゐたかも知れなかつた。父祖の遺傳や環境から云つても、藝術的才華を身心に具へてゐないに違ひない私は、自から豐か

な夢を描く力に缺いてゐて、貧寒な文章をのみ書きつゞけて今日に至つたのであるが、自分の描かんとして描き能はざる美しい夢を描いた文學を愛好することは、人後に落ちなかつたと思つてゐる。しかし、鏡花氏の文字によつて描かれた夢の世界は、私には窺ひ得られざる別の天地である。氏の文字や着想は、すべて私の翫賞慾を跳ね返して、氏獨特の世界へ私を入れさせないのである。殆んど、一章をも一節をも快くは讀み得られないのである。……氏の讃美者のいろ〳〵な評語も、私に取つては、いつも空言としか思はれない。したがつて、明治以來の知名な作家の重な作品は大抵讀破したつもりの私も、鏡花氏のだけは、いくばくも讀んでゐない。讀まうとしても讀めないのである。

それでも、氏の初期のものは、昔幾篇かを通讀した。そして、「照葉狂言」「湯島詣」「夜行巡査」「高野聖」「琵琶傳」など、初期の作品は、氏のその後の作品よりも、鏡花臭があくどくなくつて、純眞素朴で、藝術として傑れてゐるのではあるまいかと、ひそかに思つてゐる。

私の學生時代には、當時の新進作家のうちで泉鏡花の名聲が最も光つてゐた。島村抱月氏主宰の下に、我々數人の文科生によつて催された合評會で、最初に撰んだものは「新小說　所載の鏡花氏の「注文帳」であつた。私が世間に發表した最初の文章は、この「注文帳」の批評であつた。私はまた、その頃數人の級友とともに、鏡花氏を訪問したことがあつた。島村氏も、屢々鏡花氏

を推讃してゐた。歐洲留學から歸朝した後、間もなく島村氏は、當時の文壇の不振について批評を加へてゐるうち、「しかし、鏡花だけは、他の凡庸の徒とちがつてゐる」と云つて、文藝倶樂部所載の「靈象」と題された彼れの新作を稱讃した。

年少の頃には、人はたやすく周圍にかぶれるものである。自然主義流行の時代にでも、マルクス主義流行の時代にでも、周圍が騒がしく囃立てゝゐると、年少の徒は、それ以外に眞理はないと思つて雷同するのである。確信をもつて異を樹つることは難い。私も、鏡花讃美の聲を、左の耳からも右の耳からも聞かされてゐると、譯も分らずに、正體も分らずに、鏡花のえらさに感歎しなければならない氣持になることもあつた。多數の拜む偶像をば、われも拜みたくなるのが、人間通有の面白い心理らしい。鏡花漱石など二三の文人について、私自身の經驗した些細なことも萬般の世相に廣く押及ぼして見ると面白いのである。

私は、今、新潮社出版の「現代小說全集」中の泉鏡花集を取出して、久振りに鏡花氏の作品に目を觸れた。しかし、相變らず讀むに堪へぬのである。何となく名文らしい感じがするだけで、私の心に響くところは少しもないのだ。卷頭の「玄武朱雀」は、ひどくイナセナ景氣のいゝ書きつ振りだが、この鏡花式とも云つていい調子づいた文章が、私には快く受取れない。有り振れた平坦な寫實的描寫を試みないのが、この作者の特色であるが、異常な特色を有つた文學は、それ

を受入れるに足る素質を備へた少數の讀者にのみ翫賞されるのであらう。「玄武朱雀」を努力して讀通した。私はこの調子づいた文章に於て、作者がうしろ鉢巻でステヽコを踊りつゞけてゐるのを見るやうな感じがした。

「國貞畫く」は、久振りに歸省した男が舊知を訪ねる道すがらの追憶などに、情趣が豐かに漂つてゐる譯なのだが、それでさへ、文章がいやに踊つてゐて、感じが私の心に傳はつて來ない。「白鷺」の如きは、優にやさしい女性の心で現はしてゐるらしいのだが、曲りくねつた文章に、私の神經はじらされるばかりであつた。……まだしも初期の文章の方が、いやみがなかつたのではあるまいか。

私は、昔の鏡花氏の小説のうちに、酒宴の席に、舞妓か誰れかゞ入つて來たのを形容して、「池田の宿から朝顏がまゐつて候」と書いてあつたのを、よく思出すのである。含蓄のある洒落で、鏡花式修辭法から云へば、一つの標本的名文句としていゝのであらうが、私の心は、かういふ表現法にはどうしても隨つて行けないのである。

三

夏目漱石は、泉鏡花を非凡な作者として推稱してゐたさうである。さう云へば、漱石の文章に

は、鏡花に似たやうなところがないでもない。「虞美人草」の中に散亂してゐる洒落や警句には、鏡花の文章から受ける感じに似通つたものがある。一種のくさみをもつた氣取りである。

これ等二氏を、舊式の文學分類法により、「ロマンチシズムの作家欄」に收めて觀察すると、兩者の間にいろ〳〵な類似を見出し得られるのであるが、しかし、それは皮相な類似であらう。

私は「虞美人草」以前の漱石の作品は、少くも過半は、發表當時に通讀してゐる。そして、運筆が自由自在で、千言立ちどころに成るといつた文才を不思議に思つた。「カーライル博物館」とか、「倫敦塔」とかを讀んで、名文章として感心してゐた。當時の文壇には、鷗外以外には、かういふどつしりした文章を書く人はなかつたのだが、鷗外はもつと骨つぽくて、漱石ほどの滋味を缺いてゐた。「草枕」を二日で書上げたとか、「二百十日」を一日で脫稿したとかいふ噂を聞いて、その筆の速さに驚いたこともあつた。しかし「二百十日」だの「琴のそら音」だのは、小說としては詰らないものだと、發表當時に、私はさう思つたのであつたが、當時の讀後感を、私は今も改めようとは思つてゐない。「倫敦塔」や「草枕」などが、漱石の天分と修養とをよく發揮した作品であつて、世相の描寫や、人間そのものの眞相を掘つて行く力は、當時の彼れには、まだなかつたのであつた。四十近くなつてから筆を取出した彼れの作品には「舞姫」も「うたかたの記」もなかつた。青春の惱みなどは、彼れはつひに描かないで濟んだ。

漱石は、よくも悪くも「虞美人草」から、小説道に踏込んだのであつた。妙なもので、小説を自己畢世の職業とすることに極まると、左右前後の人生を、小説家的眼光をもつて見廻すやうになるのである。それで、以前は淡々として、俳句か俳體詩でもつくるやうな氣持で、心のまゝに筆を動かしてゐた漱石も、(意識的にか無意識的にか)新たなる態度で、左右を見るやうになつた。彼れは、朝日新聞のお雇作家となつたがために、一歩々々人生を深く廣く見るやうになつたのである。聰明炯眼な彼れは、たとひ多く書齋裡に跼蹐してゐても、門下生や崇拜者に取卷かれて太平樂を云つてゐたとしても、魯鈍な觀察に安んじてゐなかつた。人間のいろ〳〵な心理を見る目は光つてゐた。「虞美人草」は、前期の漱石の趣味に蔽はれて、小説的人物は、たゞお粗末な形を具へてゐるに留まつてゐるのだが、それからはじまつて最後の「明暗」まで、彼れの小説道の努力は續いた。

しかし、四十以後に小説修業の途に上つた彼れは、根本に於て變化を來すことはなかつた。時代の流行に附和雷同することもなかつたし、左顧右盼煩悶苦惱するところもなかつた。乙女小説から「蒲團」に轉じた田山花袋のやうな自己革命など無論經驗しなかつた。

彼れの小説の見本は、初期の「坊つちやん」に於て決定されてゐるのであつた。「猫」とともに、最も廣く讀まれてゐる小説で、私も三四度讀んでゐる譯である。先日本鄉座の舞臺に上演さ

れたのも見た。讀んでも面白かつた。芝居でも面白かつた。通俗小說としても、通俗劇としても、しめつぽいところのない、明るいお目出たい、懷疑のない、健全なものであつた。漱石が日本の國民的作家となつてゐる所以もこゝにあるのであらうか。英國の國民的作家として先日逝去したトマス・ハーディが暗憺たる運命觀を保持してゐたのとはちがつてゐる。漱石を愛敬する日本の國民性は、しかく、明るくつてお目出たくつて、懷疑のない健全なものなのであらうか。外來の自然主義風の文學が、地味の適しないところに播かれた種子の如く、發育不良で繁茂しなかつたも、その譯なのであらうか。

私は「猫」のまだ世に現はれない以前、漱石がまだ無名作家であつた時分、彼れに關する短評を、讀賣新聞に掲げたことがあつた。それは「源兵衛村から誰れとかゞ大根を持つて來た」といふやうな瓢輕な俳體詩を、「ホトトギス」誌上で讀んで感心したためであつた。

當時、私は新聞記事の材料を得るために、近所の畔柳芥舟氏ををり〳〵訪問してゐたので、ある日、氏に向つて、俳體詩の話をすると、氏は、それに連關して、漱石の人となりを、いろ〳〵私に話して聞かせた。彼れが讀書家であること、世間的名譽の外に超然としてゐることなどを話して、畔柳氏自身、彼れに敬服してゐるらしい口吻であつた。「高濱君と俳體詩なんかをやつていい氣になつてる」と云つてゐた。これによつて見ても、漱石は、無論、他の多くの文學者の如く

文筆を以つて世に立たうとする考へはなかつたのだと察せられる。鷗外や上田柳村とも異つてゐた。私が讀賣新聞で、漱石を讃美し、柳村を貶した筆法を弄すると、柳村は「積極的に何かやらうとするものを非難して、消極的な生活に甘んじてゐるものを褒めるのはいゝことであらうか」といふ意味のことを、私に云つた。しかし、間もなく、漱石は急轉直下の勢ひで世上に活躍しだした。

當時の讀賣新聞の主筆であつた竹越三叉氏は、漱石招聘を企てて、自分で交渉に出掛けたやうであつたが、私も一度主筆の命を奉じて駒込の邸宅に漱石を訪問した。新聞記者として訪問すれのしてゐた當時の私は、學生時代に鏡花訪問を試みた時のやうな純な氣持は失つてゐて、「お役目に訪ねて來た」といふ感じを、露骨に現はしたらしかつた。部屋の様子も、主人の態度も話し振りも、陰鬱で冴えなかつた。「草枕」を發表して名聲嘖々たる時であつたのに關はらず、得意の色は見えなかつた。「竹越さんが先日訪ねて來たが、僕を先生と云つてゐた。しかし、竹越さんの方が僕よりも年上ぢやないだらうか」「小説を書きだしてから、丸善の借金は濟した」と、興もなげに云つたことだけは、今もなほ覺えてゐる。その時坂元雪鳥君が來てゐたが、この人の話の方が元氣がよくつて座が白けないで濟んだ。讀賣入社の件は無論駄目であつたが、間もなく日曜の文學附錄へ、一篇の評論を寄稿されたのが、漱石が讀賣に對する寸志と見るべきであつた。

例の畔柳氏にこの話をすると、「漱石が新聞社なんかへ入るものかと、頼みに行く方が馬鹿だと云はぬばかりに云つて、笑つた。私は成程と同感した。

ところが、それから、半年も經たぬ間に、夏目漱石先生は、堂々と朝日新聞社に入社した。私は意外に感じた。人は、處世上の利害の打算によつてどうにでも動くものである。あの人に限つてそんなことはないと斷言するのは淺墓な考へである。漱石先生と雖も例外である筈がない。竹越氏は私に向つて、「漱石は、讀賣入社については不安を感じてゐるらしいが、社では約束は確實に守る。本野一郎君に僕からさう云つて、將來の地位の安全は保證する」と云つたが、さういふ言葉をそのまゝに受入れるべく漱石は、あまりに聰明であつた。讀賣では前途に不安を感じて、乘り氣にならなかつた彼れが、朝日ならと乘り出したところに、彼れの人生觀察の目の動きが見られる。

島村抱月は、その頭腦の聰明さに於ては漱石に劣らなかつたが、晩年一婦人の愛に惑溺して常道を逸した生活を過した人ほどあつて、あまく調子に乘つて利害を見る目のくらむことがあつたらしかつた。衆人の期待を荷つて歐洲留學から歸朝した時、讀賣では、かねての關係もあることだから、彼れの助力を待設けてゐたのであつたが、彼れは、容易に日々新聞の招きに應じた。當時は文藝には緣のなかつたその新聞を舞臺として、自己の勢力を扶植しようとした。おれが出れ

ば不適當な舞臺でも生かして見せると氣を負つてゐたのであつた。ところが、滿一年を過ぎると無雜作に社の方から斷はられてしまつた。その頃私は伊原青々園氏に聞いた。氏は抱月に忠告して「君は日々のやうな場所違ひの新聞に書くよりもやはり讀賣に書いた方がいゝぢやないか」と云つたが、彼れは、自信あるらしく、忠告に耳を傾けなかつたさうであつた。

抱月よりも漱石の方が、自己と周圍との觀察に於て用意周到であつた譯だ。

四

「坊つちやん」は、筆がキビ〳〵してゐるのと、例の美文賑の低徊味よりも、事件の運びに富んでゐるのと、主人公の人となりがキビ〳〵してゐるので、萬人向の小說になつてゐる。大抵の人に面白く讀まれさうである。「不如歸」や「金色夜叉」などよりも、いやみがなくつて、いゝ通俗小說である。しかし、ここに現はれてゐるいろ〳〵な人間は型の如き人間である。ここに現はれてゐる作者の正義觀は卑近である。かういふ風に世の中を見て安んじてゐられゝばお目出たいものだと思はれる。

漱石が、モウパッサンの「首飾り」を非難した講演錄を讀んだことがあつたが、そこに含まれてゐた非難の個所は、このフランスの作家が、作中の薄給者夫妻の長い間の苦辛を無意味なもの

のやうに取扱つた點にあつた。モウパッサンに對する道德の立場からの非難は、トルストヰによつて、峻烈に下されたのであつて、さういふところに、いろ〳〵な文學者の見解の相違が見られて面白いのであるが、トルストヰ自身の描いた人間は、漱石の描いた人物のやうに、やす〳〵と道德の支配を受けるほど薄手ではなかつた。そしてトルストヰの道德觀は、彼れの深い惱みと表裏してゐた。「坊つちやん」に現はれた漱石のそれのやうに安價ではなかつた。

漱石の大部の「文學論」集や「文學評論」集は、彼れの學殖と批判力とを充分に現はしたもので、文學研究者を裨益する良書である。私は學ぶところが少くなかつた。「英國十八世紀の文學評論」は、日本人の觀察した西洋文學觀として、これほど委曲を盡したものは、他に類がないだらうと思はれる。私としては、漱石が小說は書かないでも、この調子で、英國各時代の文學史を書殘してゐたなら、もつと有難かつたと思つてゐる。

「文學論」集の序文に於て、彼れは、かう云つてゐる。

「倫敦に住み暮らしたる二年は、尤も不愉快の二年なり。余は、英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。……歸朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。去れども、余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光榮と權利を有する余は、五千萬人中に生息して、少くとも五千萬分の一の光榮と

權利を支持せんと欲す。此光榮と權利を五千萬分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若くは余が本國を去るの擧に出づる能はず、寧ろ力の盡く限り、之を五千萬分一に回復せんことを努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず、余が意志以上の意志なり。……英國人は余を目して神經衰弱と云へり。ある日本人は書を本國に致して余を狂氣なりと云へる由。……歸朝後の余も、依然として神經衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。……余が身邊の狀況にして變化せざる限りは、余の神經衰弱と狂氣とは、命のあらん程永續すべし。……」

かう鬱勃たる不平を述べてゐる。「猫」その他の隨筆錄に於てゞなく「文學論」の序文に於て、精神の惱みを直截に述べてゐるのは面白い。そして、神經衰弱にして狂人なるがため「猫」や、「漾虛集」や「鶉籠」を著はしたと、皮肉を云つてゐる。

「十八世紀文學論」のうちでは、スキフト論が最も光彩を放つてゐて、これほど微細に且つ銳利に、スキフトを解剖し觀察し翫賞したものは、英國に於てもないに違ひない。サッカレーやハリズリットなどのスキフト觀も、漱石に比べると見方が皮相である。そして、漱石は、この稀代の諷刺家厭世家スキフトを非常に高く評價してゐる。「不滿足を現はす文學的表現」の階段を四種に分ちていろ〳〵に例を擧げたあと、スキフトをもつてそのどん詰りとしてゐる。

「普通の不滿足は必ず一方に滿足を控えてゐる。もしくは夢見てゐる。スキフトの不滿足には此對立がない。……過去現在未來を通じて、古今東西を盡くして、苟しくも人間たる以上は、悉く嫌惡すべき動物であると云ふ不滿足である。從つて希望がない。救はれ樣がない。免かれ樣がない。彼れの諷刺は噴火口から迸しる氷の樣なものである。非常に猛烈であるけれども、非常に冷たい。人を動すための不平でもなければ、自ら免れるための不平でもない。どうしたつて世界のあらん限りつづく、不平の爲めの不平だから、スキフト自身は嘗て激してゐない。冷然平然としてゐる。何だかスキフトなるものが重たい石のやうに英國の眞中に轉がつてゐるやうな氣がする。さうして此石が一つある爲めに、左右前後は無論、全世界に蠢動する人間と名のつくものが、悉く石に變化した樣に思はれる。なぜと云ふと、彼れは如何に憎惡の意を洩らしても決して赤くならない。又決して憤慨にも出ない。同情は固よりない。……」

漱石の見たスキフトは、通俗の文學史家の見たやうな淺薄皮相な諷刺家ではないのである。古今東西の文學史に散在してゐる諷刺家や厭世家は、大抵は一方で甘い夢を見てゐるので、彼れと心を同うして見てゐると、世界の殆ど凡ての文學者が甘ちやんなのである。馬琴の「夢想兵衛」などは「ガリヴァ旅日記」に比べると、お話しにならないほど卑俗であり膚淺である。そして、漱石の所論を熟讀してゐると、彼れはスキフトを客觀的に研究し解剖してゐるだけではなくつて、

スキフトの見解に可成り同感し共鳴してゐるのではないかと疑はれる。さうでなければ、あゝまで深くスキフトの心境に立入つた傑れた批評が出來る譯はないと私には思はれる。

しかし、一部分だけでもスキフトと心を同うしてゐる漱石が、自分の創作に於ては、なぜ「坊つちやん」の如き、通俗的小説を書くのであらうか。留學中にも歸朝後にも滿腔の不平を抱いてゐた筈の彼れの鬱憤はこんな小説で洩らされる程度であつたのか。……私は、漱石の創作に現はれてゐる彼れの心理について、少からぬ興味を覺えだした。鷗外は聰明至極で筆致も明快であつたが、心の働きが單純であつた。漱石は複雜である。

彼れは、生眞面目に堂々とスキフトを論じてゐるうちにも、時々はおひやらかしを云つたり、忘れてゐたものをふと思出したやうな態度で卑近な道德に拘泥した口吻を洩らしてゐる。こゝらが、讓歩のない冷靜なスキフトとは違つた漱石の眞面目なのであらうか。彼れは「ドンキホテ」についても、「多數の評家は諷刺と見るやうだが、私には花見の騷同樣な感がある」と、おひやらかしてゐる。

五

私は、「それから」を改めて讀んだ。

この長篇は二年ほど前に、歸省の途上、汽車のなかで通讀して、直ちに簡單なる讀後感を『讀賣』に寄稿したのであるが、作品から受けた印象は間もなく私の頭から消失せてゐた。それほど感銘の薄い作品であつた。

しかし、この小說は、漱石の作中でも殊に深刻味のあるものとして、知識階級の讀者に推讃されてゐると聞いたので、今度改めて讀直したのである。

「虞美人草」を讀んだあとで、「それから」を讀むと、この作者の小說構成術の進步が見られる。前作では、小說らしいところはぽつちりしかなくつて、隨筆風の低徊趣味が果てしなく跋扈してゐたのであつたが、後作では、全篇の初中後がもつと有機的に構成されてゐた。作中人物のそれぞれがもつと現實の姿を備へてゐる。しかし、私には、最初讀んだ時にまさつた興味は感ぜられなかつた。

「虞美人草」でも、「彼岸過迄」でも、「心」でも、あるひは「明暗」でも、漱石の長篇小說の作風は、後に何か奇拔なことが出て來さうに讀者に期待させながら、くどく長く讀者を引きづつて行くので、讀者には辛抱が入る。凡庸な作者は讀者を釣つて行くだけで、最後に玉手箱から取出された手品の種は案外詰らないことが多いのだが、漱石の玉手箱には、いつも相應に見事なものが潛められてゐる。「それから」にも、主人公代助が友人の妻三千代に對する心理の交錯に、讀者の

心を充分に捉へる力を有つてゐるのである。彼れの胸に潜んでゐた秘密を、女の夫や、父や兄嫁や讀者の前にさらけ出した時には、彼れの人生は混亂し、「世の中は眞赤」になる譯である。……ところが作者が筆を盡してゐるにかゝはらず、事相が私には空々しく思はれて、胸を抉られるやうな感じがしないのだ。私ばかりがさうなのであらうか。

「代助は西洋の小説を讀むたびに、そのうちに出て來る男女の情話があまりに露骨で、あまりに放肆で、且つあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪しんでゐた。言語で讀めば兎に角、日本には譯し得ぬ趣味のものと考へてゐた。從つて彼は自分と三千代との關係を發展させるために、舶來の臺詞を用ひる意志は毫もなかつた」と云つてゐるが、漱石は男女關係を描くにあたつて、つねにこの心構へを棄てなかつた。人倫五常の道義を表に振翳しながら、傍ら、忌憚なく淫蕩の情景を描寫してゐた馬琴とは違つて、漱石はあくまで品位を保つてゐた。それは彼れの創作の風格として尊重していゝことなので、私は、漱石がモウパッサンなどの作風を眞似なかつたのを遺憾に思つてゐるのではないが、「それから」の代助が、そんなに熱烈に三千代を戀してゐるやうには思はれないのである。代助の心は躍つてゐない。血は湧いてゐない。作者の頭は自在に働いて、戀愛心理の經過に於ても、へまなことは書いてゐないのだが、どこまで行つても理詰めな感じがする。へまなところがなさ過ぎるので窮屈である。新聞小説執筆前の初期の作品、「猫」の如き、

「草枕」の如き、「坊つちやん」の如き、みんな、のび〳〵としてゆつたりしてゐたが、「それから」やその他の長篇小說は、くどく詳しく書かれてゐるに關はらず窮屈である。

「代助は泣いて人を動かさうとするほど、低級趣味のものはないと自信してゐる。凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や煩悶や、眞面目や、熱烈ほど氣障なものはないと自覺してゐる」と云つてゐるが、彼れの創作の用意にはこの氣持が嚴守されてゐる。普通の小說の書振りに對する彼れの反抗心もここに微見してゐる。

彼れ漱石も、ある意味で代助の如く、ニルアドミラリの域に達してゐたのであらう。……私はかう思ふ。彼れは、學究的職業から離れて、小說によつて生活の料を得ることになつて以來、當面の必要上、世界と人間の眞相を考察し冥想して、それを机上に持つて來たのであらうが、考察冥想の結果として得た人と人との間の愛慾や鬪爭を、彼れは、つまりは、ニルアドミラリの目で見てゐたのではあるまいか。彼れと同時代に自然主義作家として區別された花袋獨歩藤村などは、案外傍觀的や客觀的の作家ではなくて、漱石の見方から判斷すると、思はせ振りの涙や、煩悶や、眞面目や熱烈を作品に傾注した、氣障な作家であつたのかも知れなかつた。彼れがツルゲネーフ全集を讀んでゐるといふ噂を昔聞いたことがあつたが、彼れはツルゲネーフに於ても、思はせ振りの氣障な作家を見たかも知れなかつた。

ニルアドミラリの極は、文學としてはスキフトの域に達しなければならぬ。彼れは一面さういふ素質を有つてゐたらしいのだが、それを、徹底させなかつた。……思はせ振りのもの氣障なものを、思はせ振りのもの氣障なものとして、スキフト式に冷靜にあるひは冷酷に、人間といふ生物の愚かしき行作として描寫しないで、尤もらしく重みをつけて書いたのは、彼れの職業意識と傳統的道德癖とに由るのであらう。彼れは腹の底では、雜多紛々の色戀沙汰などに、尊い人生の意義を見たりしてなんかゐなかつたのであらうか。

深い人間心理を微細に取扱つたいくつかの彼れの小說を讀むと、よく知つてゐるのに感心されるが、いつも實感が缺けてゐて、生な人間らしいところが缺けてゐるので、强く胸を打たれることがない。

何と云つても、彼れの長篇小說のうちで生氣に富んでゐるのは「道草」である。「それから」なども、漱石の他の多くの小說の如く、頻りに道草を喰つてゐる小說で、その道草が例の如く、アンドレーフの「七刑人」の說明だつたり、ダヌンチオの部屋の色の說明だつたり、文學論だつたり、社會觀だつたりして、やゝもすると、小說の中へ雜錄がまぎれ込んだのぢやないかと思はれるのだが、「道草」は、題は明らさまに道草を標榜してゐながら、內容は首尾を通じて、生々した人生記錄なのである。

六

「門」を今度はじめて讀んだ。

窓前の若葉を見上げては目を休めながら、半日足らずの時間で讀通した。逝く春の感ぜられるこの頃の時節には、私は毎年、「花よ〳〵」と浮かれぞめきし人の心も稍々鎭まりて、一輪早咲きの躑躅花の上を、羽弱の蝶の行き戻りする四月の末の春景色」といふ、北村透谷の「宿魂鏡」の書出しの一節と、「江南四月草青々、千山花落杜鵑啼」といふ、鷗外一派の飜譯詩集「面影」のうちに收められた平家物語鬼界ヶ島漢譯の一句を思出すのを常例としてゐる。これ等の平凡な詞句にも、それを初めて愛誦した當時の、少年の夢が纏綿としてゐて、私には言ひ知らぬ懷しみが存するのである。我々の文學鑑賞には、作品それ自身の價値以外に、かういふ讀者各自の主觀の色が添つてゐるのである。

私は、「門」を机上に伏せては、窓外に淀んでゐる懶い春を眺めた。あるひは、漱石の他の文集にある「修善寺日記」や「思ひ出すことなど」を抜讀みして、小說以上の興味を感じた。漱石自身も職業意識の伴つてゐる小說に筆を執るよりも、かういふものゝ方に、自己本來の趣味を感じてゐたのである。

縹緲玄黃外、生死交謝時、杳然無寄託、懸命一藕絲、命根何處是、窈窕不可知、――――、
孤愁來落枕、又搖蕭颯悲、仰臥秋已闌、苦病欲銀髭、寥廓天猶在、高樹空餘枝、對比忡悵久、
晩懷無盡期。

病後に作られたかういふ古詩を私は微吟した。そして、この詩人の氣持がぴつたり自分の氣持に合ふのを感じた。小說については、私の氣持は何となく、彼れの氣持とそぐはないところがあるやうに思はれるのだが。……

しかし、「門」は、傑れた作品である。「それから」のやうに理窟責めのギチ〳〵した小說ではない。「虞美人草」のやうな美文で塗り潰された退屈な小說ではない。漱石は、ここに於てけば〳〵した美服を脫いで、袴も脫いで、平服に着替えて、樂々と浮世を語つてゐる。例の今に面白いものを見せるぞと云つたやうに、讀者を釣らうとする山氣がない。はじめから、腰辨夫婦の平凡な人生を、平凡な筆致で淳々と叙して行くところに、私は親しみをもつて隨いて行かれた。この創作態度や人間を見る目に於て、私は漱石の進境を認めた。――さう思つて讀んでゐた。ところが、しまひの方へ近づくと、この腰辨夫婦は異常な過去を有つてゐることが曝露された。私は、舊劇で、鰺七が引拔いて金輪五郎になつたのを見るやうだつた。安官吏宗助實は何某と變つて、急に深刻性を發揮するのに驚かされた。友人の妻を奪つた彼は、「それから」の代助の生れ變りのやう

な氣がした。さう云へば、はじめから、何かの伏線らしい變な文句がをり〳〵挿まれてゐたのだが、他の小說とはちがつて、「門」にはしみ〴〵とした、衒氣のない世相の描寫が續いてゐたので、私は、それだけに滿足して、貧しい冴えない腰辨生活の心境に同感して、變な伏線なんかをあまり氣にしなかつたのであつた。それほど柔順な讀者であつたために、後で作者のからくりが分ると、激しい嫌惡を覺えた。宗助が正體を現はしてからの心理も一通り書けてゐるには違ひないが、眞に迫つたところはなかつた。鎌倉の禪寺へ行くなんか少し巫山戲てゐる。……作者はどの小說にも〳〵なぜこんな筆法を用ひるのであらうか。腰辨宗助の平凡生活だけでいゝではないか。作者はそれだけで世相を描出し得る手腕を有つてゐるのである。

思ふに、責任感の強いこの作者は、新聞小說家として讀者を面白がらせなければならぬと云ふ職業意識から、こんな餘計な作爲を用ひたのではあるまいか。初期の漱石は、水の流るゝ如く雲の動く如くに筆を運んでゐた。

「門」のはじめの方に、「いくら容易(やさし)い字でも、こりや變だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大變迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぢつと眺めてゐると、何だか違つた様な氣がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて來る」と宗助に云はせてゐるが、かういつた感じは、私もをり〳〵經驗することがある。日常の茶の間ばなしのうちにこんなこと

を云はせて置いて．最後に迷ひを晴らしに禪寺へ行くのが、宗助の人となりとしてさう不調和でないやうに仕組んでゐるなんか、この作者が脚色に抜け目のないことが察せられる。兎に角、構成の才は充分に有つてゐる人なので、戯曲を書かうと思へば書けた人なのである。

この頃劇場で上演用の新脚本に缺乏してゐるため、盛名ある漱石の小説の戯曲化が流行しだした。「猫」のやうな、どこから見ても芝居にならないものまでも脚色しだした。やがて、彼れの他のいろ〳〵な長篇小説が戯曲化されるのではないかと危まれる。生前の漱石は夢にも思はなかつたことで、芝居嫌ひの彼れが、地下で聞いたら、作品の神聖が傷けられたやうにいやな顔をするだらう。

しかし、彼れの新聞小説には、お芝居じみたところがあるのだ。探偵小説じみたところもあるのだ。彼れは、探偵といふ者を嫌つてゐたに關はらず、探偵小説を書き得る素質をも有つてゐた。「彼岸過迄」は、殊に探偵小説らしい分子に富んでゐる。

彼れは、「門」を書いた後大病に罹つて、暫らく新聞小説の筆を絶つてゐた。責任感の強い彼は、お雇ひ作家としての義務を怠つてゐたことを心苦しく思つてゐたらしい。「久振りだから成るべく面白いものを書かなければ濟まない」といふ氣になつてゐた。俗受けを顧慮する氣持が不斷にも勝つてゐたことは、「彼岸過迄」に添へられた序文を讀んでも察せられる。森鷗外が、日日

新聞に於て、平然として、あの非通俗甚だしい考證的史傳を、書續けた氣持とは大いにちがつてゐる。

私は數年前に一度通讀したことのあるこの長篇を、今度讀直した。この小說は、この作者のどの小說よりも手の込んだもので、漱石の頭腦がいかに複雜に回轉するかに驚れる。前半の探偵趣味浪漫的探偵趣味、「異常に對する嗜欲」の發揮は、彼れが愛讀してゐたらしいスチーヴンソンなどから、暗示され啓發されたらしく思はれるが、理智に於てスチーヴンソンより優れてゐた彼は、「新アラビア物語」や、「寶島」の作者のやうに、「異常」や「冒險」に陶然として心を浸しただけではゐられなかつた。自分で作つた夢を、自分で破つてゐる。ここには、鏡花趣味も含まれてゐるが、漱石は白晝にタハイのない夢を見て、そこに安んじてゐられなかつた。蛇頭を彫つた異樣な洋杖でも、女占ひ者の神祕らしい話でも、條理明晰に取扱はれてゐる。鷗外や漱石の小說を通して見る人生には、神祕不可解の影はないので、外の作者は智惠が足りないからそんなものを感じるのではないかと思はれる。

「話が理窟張つて六ケしくなつて來たね。あんまり一人で調子に乘つて饒舌つてゐるものだから」と、作中の人物に云はせてゐるのは、作者自身、あまりに獨りよがりの心理解剖をし過ぎてゐるのに氣がついたための申譯であつて、「右か左へ自分の身體を動かし得ない唯の理窟は、いく

ら旨く出來てゐても、彼れには用のない贋造紙幣と同じ物であつた」と、他の人物に云はせてゐるのも、作者自身讀者の思惑を氣にしたための照れ隱しであらう。

しかし、この小說のうちの「須永の話」は、今度も面白く讀んだ。「虞美人草」の藤尾は、着物は派手に出來てゐるが肉體が作られてゐない。「それから」の三千代は、影が薄い。「門」のお米は日蔭の女らしく描かれてゐるが、女性としての神經が通つてゐないやうな感じがする。……私は、「須永の話」を中心とした「彼岸過迄」に於て、はじめて、漱石の頭から描きだされた潑剌たる女性を見るのである。それほど千代子はよく描かれてゐる。溫かい肉體を備へてそこに鮮かに浮出してゐる。彼女に對する須永の嫉妬焦慮の氣持も讀者の胸に迫る力を有つてゐる。今までの漱石の作中に現はれてゐなかつた氣持である。私は漱石の人生觀察心理解剖が、一作毎に深くなつて行くのを感じる。彼れは新聞小說を職業としたために、餘儀なく人生研究に目を向け、その結果が自己の修養になつたのである。

かういふ性質の須永が千代子に對してかういふ態度を取つたと云ふだけで、一篇の好材料になる譯だが、この作者は、例の如く二重にも三重にもひねくつて、須永をある不幸な運命の下に置かれた男として、そこに須永の性癖の由つて來たる原因を索つた。

鎌倉で小鯵の一鹽を食ふことから、ふと話の筋を引出して「是れはまた誰れにも話さない祕密

だが、實は單に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何處がどう違つて、何處がどう似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである——缺點でも母と共に具へてゐるのなら、僕は大變嬉しかつた。長所でも母になくつて僕だけ有つてゐると甚だ不愉快になつた。そのうちで僕の最も氣になるのは、僕の顏が父にだけ似て、母とはまるで緣のない目鼻立に出來上つてゐる事であつた」といふ須永の話を讀むと、讀者は作者のからくりに氣がついて、また例の趣向かと微笑されるのである。

果して、須永は現在の母親の實の子ではなくつて、早逝した父親が小間使に生ませた子であつた。しかし、續けて讀んで行くと、この事實が、さうした痛ましい世相として讀者を動かすほどには描かれてゐなかつた。むしろ、須永出生の祕密に關する追窮はいゝ加減にして、千代子との交涉をもつと發展させて小說を進めた方が面白かつたのだが、それは漱石は、企てゝも爲遂げ得なかつたかも知れない。

七

「彼岸過迄」の須永と云ひ松本と云ひ、「それから」の代助と云ひ、「心」の先生と云ひ、その他の作品中の某々など、漱石の小說には、可成りの資產を有つてゐて遊んで暮してゐる高等遊民が多

い。知識があつて、暇があるのだから、ともすると、丹念に自己解剖に耽るのである。そして、作中の老人は、詩會へ行つたり骨董を翫んだり謠曲をやつたりする。今日の文壇で盛んに論爭されてゐる社會意識は、彼れの小說には殆んど現はれてゐないと云つていゝ。しかし、彼れが、今日の世に働いてゐたなら、聰明なる見解をもつてそれを取扱つてゐたであらう。鷗外は、共產主義に關する歷史的研究をはじめたが、はじめたばかりで倒れた。彼れは旺んな知識慾によつてさういふものを研究はしても、盲目的に時の流行に附隨しなかつたに違ひなかつた。「善とは家畜の群のやうな人間と、去就を同うする道にすぎない。それを破らうとするのは惡だ。善惡は問ふべきではない。家畜の凡俗を離れて、意思を強くして貴族的に高尙に淋しい高いところに身を置きたいといふのだ。その高尙な人間は假面を冠つてゐる。假面を尊敬せねばならない」と云つたやうなほこりを彼れは有つてゐた。しかし、漱石はもつと平民的であつた。鷗外よりも豐かな藝術的天分は有つてゐたが、周圍を顧慮するところがあつた。「成金の亂行を見ると、强盜が白刃の拔身を壘に突き立てゝ良民を脅迫してゐるのと同じやうな感じになるのです……僕は是程臆病な人間なのです」と、云ふやうな須永の手紙の文句も、必ずしも作中の人物だけの心持ではないかも知れない。

「心」には、今までの作品のうちにも微見えてゐた僧人厭世の氣持が最も强烈に出てゐる。僧人

厭世が自己嫌悪に達してゐるのである。「私は個人に對する復讐以上の事を現にやつてゐるんだ。私は彼等を憎むばかりぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎むことを覺えた」と云つてゐる作中の人物は、つひに自分自身の憎さに堪へられないで自滅した。漱石の人間研究の最頂點に達したものと云つていゝ。そして此處には例の美文脈が全く痕を絶つてゐる。警句や諧謔がたまにあつても、「猫」や「虞美人草」時代のやうな作者自身面白がつてゐるやうな洒落や警句とはまるで違つてゐる。嚴肅である。陰鬱である。私の讀んだ範圍内に於ては、この一篇が彼れの小説のうちで、最も通俗味の乏しいものである。讀物の好奇心を惹かうとする脚色ぶりは例の通りであるが、小細工はしないで、平押しに押して行つてゐる。「私」と云ふ青年に取つての參考になると「先生の遺書」に云つてゐるのが、青年の田舍の家庭の情況に照らして、何となく適中してゐるやうでもあるし、田舍の老父の重患と「先生」の自殺とが對蹠的に人間の生存について讀者の思ひを致させるやうな書振りは、彼れの他の小説のわざとらしい趣向とは格段の相違がある。

「惡い人間といふ一種の人間が世の中にあると、君は思つてゐるんですか。そんな鑄型に入れられたやうな惡人は、世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少くともみんな普通の人間なんです。いざといふ間際に、急に惡人に變るんだから恐ろしいんです」といふ、

この一篇の結晶として見るべき言葉を、前に引用した鷗外のほこりとしてゐた假面說と比べて見ると面白い。兩者は相反してゐるやうなところもあり、似通つてゐるやうにも思はれる。「假面」も、大學生である一人の青年に向つて、主人公の信念が語られ、「心」も、大學生である一人の青年に向つてだけ、主人公の生死の祕密が洩らされてゐる。ところで、鷗外はほこりを有つて、青年の蒙を啓く如くに語り、漱石は、「先生」をして妻にさへ云はない心底を、委曲を盡くして、青年にだけ語らせながら、「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生殘つてゐるのは必竟時勢後れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました」とか、「あなたにも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしさうだとすると、それは時勢の推移から來る人間の相違だから仕方がありません。あるひは個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かかも知れません」とか、自己の强烈なる信念の發露についても、誰遜させてゐる。漱石には執筆にあたつて、移り行く周圍の風潮を顧慮するところがあると、私が云つた所以である。

「彼岸過迄」には一端を現はしてゐたゞけの嫉妬が、「心」に於ては、最も熱心に追窮されてゐる。財產に關する暗鬪、親類緣者の反目、嫉妬、孤獨感などが、在來の彼れの作品に見られないほどに强く、陰鬱に書かれてゐる。いろ〳〵な人々の心理を研究して、ついにどん詰りまで來たやうなものである。

そこで、彼れは、「心」の次ぎには、「道草」を書いた。この小説は彼れの自叙傳らしく思はれるが、この自叙傳小説を讀むと、今までの彼れの小説の人物について思ひ當るところが少くない。「道草」讀後感は、私は去年讀賣新聞に掲げてゐる。

最後の大作「明暗」は、永久に未完のまゝで殘されてゐる。結末に近づくほど波瀾を起させるのが、彼れの創作の慣例になつてゐるので、「明暗」は、どう發展して完結するのか、讀者には想像がつかないのみならず、作者自身の意圖もハッキリしてゐなかつたのぢやないかと思はれる。そして書殘された範圍に於ての「明暗」は、少し箍がゆるんでゐるやうな感じのする作品である。運びがまどろこしく退屈だ。しかし、お延とお秀などの女性は、よく描かれてゐる。これまでの彼れの小説には、多くの女性は、斷片的に現はされてゐるか、あるひは型に入つたやうな現實味を缺いでゐたが、お延とお秀と、吉川夫人とは、充分に現實の女らしい羽を擴げて羽叩きしてゐる。

「眞晝間提灯を點けて往來を歩くのは、世の中の暗黒な所を諷した皮肉な仕事と取れば、取れないこともあるまいが、一方から云へば、髭をつけて花見をすると同一の氣樂さから出ないとも限らない。花見の趣向などは現在に滿足を表はす程度の尤も甚しいもので、不平や諷刺の表現でないことは明かである。現に『ドンキホテ』なども、多數の評家は諷刺と見てゐるやうだが、私には

花見の鬘同様な感がある。」

漱石はかう云つてゐる。我々が彼れの作品に對して、事々しき穿鑿を試みるのも、花見の鬘同様なものに殊更らしく深刻な意味を附することのやうに、彼には思はれるかも知れない。

ところが、漱石自身は、「明暗」に於ても、小うるさいくらゐに、心理の穿鑿に從事してゐる。作中人物は、互ひに相手の目叩きの數までも數へて、それによつて相手の心理を批判するといつた態度で、そのために作の進行がのろく、且つ實感が水つぽくなるのである。人物の筋肉の微動にも、一ページも書續けられるほどにその人の心の表現が籠つてゐるらしく見られるのだ。漱石の面前では、うつかり痒いところをちよつと痒く譯にも行かないやうである。

しかし、「明暗」には、我々が日常見聞してゐる平凡な現實生活の眞相が多分に出てゐる。書殘されてゐる範圍内で云へば、異常な事件がない。この作者には免れがたい癖であつたロマンチクな取扱振りがない。詩がなくなつてゐる。「三四郎」よりも「門」よりも、どれよりも平凡な筋立で、人物も事件もそこらにありさうに思はれる。兄嫁と小姑、若夫婦をつゝいて喜んでゐる意地惡い中年女の交涉は、微細に渡つて實相が描かれてゐる。私は「明暗」まで讀んで、はじめて、漱石も女がわかるやうになつたと思つた。老いたる彼れは、もう「草枕」にあるやうな詩的女性を朦朧と幻想し得られなくなつたのであらう。鏡花式の夢から醒めて現實を見るやうになつたの

であらう。それ故、「明暗」は、運筆の點では作者老衰の兆が見えるにしても、意義のある作品たることを失はない。

もう一つ面白いのは、この最後の小説のなかに、小林といふ皮肉ないやがらせを云ふ變な男が拋り出されてゐることである。ニルアドミラリの域に達してゐるといふ「それから」の代助にちよつと似てゐるところがあるが、代助は、要するにブルジョアのノラクラものである。小林は、卑俗であるが、自棄的闘志を持つてゐる。プロレタリア意識をもつてブルヂョアに反抗してゐる。有産階級が彼れを侮蔑するなら、彼れも有産階級を侮蔑してやる。復讐してやるといふ反抗心を有つてゐる。漱石の作中に、皮肉揶揄反抗の氣分は珍らしくないが、プロレタリア意識を持つた皮肉揶揄反抗は珍らしい。

彼れの作品の殆ど全部を讀去り、讀來つた私は、最後の「明暗」に於て、こんな人間が、水に油を點したやうにぽつりと現出してゐるのに、甚だ興味を感じた。漱石としては、柄にない人物を創造した譯で、取扱ひ方も上手でない。しかし、社會主義か共産主義か、さういつた假色を使ふ人間を、ブルヂョア仲間へ割込ませたところに、時代に關心する作者の氣持が分るやうに思はれる。

兎に角漱石は凡庸の作家ではない。私は未完の大作「明暗」の最後の一行を讀終つて、この作者の一生を回顧した。そして、例の「縹緲玄黄外、死生交謝時、冥然無寄託、懸命一藕絲……」といふ彼の病中の詩を思浮べた。

今夜は波の音が高い。（昭和三年四月十八日、大磯にて）

右の如く漱石論を書いてしまつたところへ、手許に書物がなかつたために讀落した「行人」がふと手に入つたので、ついでに速讀することにした。

例の如く讀者をもどかしがらせる小説であるが、前半は讀者を惹きつける力をもつてゐる。弟に對する兄の疑惑には深刻性が含まれてゐて、弟と兄嫁とが暴風雨の夜和歌山の宿に泊るあたりは、異常に、緊張してゐるが、それから後は、甚だしく氣が拔けてゐる。中心を逸して、徒らにまはりを廻つてばかりゐるやうな小説である。くどくつてまどろこしくて、讀後の感酩が甚だ薄い。漱石にも似合はしからざる小説である。彼れの哲學觀宗教觀が窺はれないこともないが、それが乾燥無味な叙述に終つてゐる。この長篇執筆中、作者は病氣をして一時稿を中絶させてゐるが、作品の不出來なのはそのためかも知れない。

この小説は「彼岸過迄」と「心」の間に作り上げられたのであるが、これ等前後の作品と連關

させて考へると、この作者がいかに、男女關係についての暗い心理に思ひを致してゐたか、またさういふ暗い氣持から脫却するためにはいかに苦闘しなければならぬかと、思ひを潜めてゐたことが察せられる。…藝術として劣つてゐてもその點では興味がある。

小宮豐隆君は、漱石の修善寺に於ける大吐血を以つて、彼れの生涯の轉機としてゐるが、それはさうかも知れない。しかし、大吐血後の漱石が前期の彼れよりも、人生の見方が一層溫かになり、一層寬大になつたとは思はれない。却つて反對ではないだらうか。「心」「行人」「道草」「明暗」がそれを證明してゐる。他人の心の暗さ醜さを傍觀的に描いたといふやうな空々しいものではなくつて、これ等に現はれてゐるいろ〳〵な疑惑は、作者自身の心に深く根を張つてゐたのぢやないかと思はれる。そして、大病前の作品よりも洒落つ氣が少くて、一貫した眞面目さがある。「坊つちやん」時代の薄つぺらな明るさが影を潜めて、懷疑の深さが見られるやうになつた。

「思出すことなど」のうちの病床感想に、知友門下生愛讀者などの好意に感激して、「世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み悪いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた」と云ひ、「四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に忙しい世が、是程の手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた…」とも云つてゐるが、かういふ言葉は、大抵の病人が回復後に起す感傷語であ

つて、特別に意味の深い言葉とは思はれない。それに「さしたる過去を持たぬ男」と云つてゐるのは、漱石の謙遜した言葉であつて、若し彼が作家として名聲を博してゐなかつたなら、あんなに賑かに彼れの病床が顧みられよう筈はなかつた。

人間は氣力の衰へた時には、年甲斐もなく、いやに感傷的な言葉を吐きたがるものである。「人の死せんとするや、その言ふことや善し」と云ふのも、畢竟は、氣力の衰へをさすに過ぎないことがある。……「心」「行人」「明暗」など、漱石晩年の作品に、私は、彼れの心の惑ひを見、喘さを見、惱みをこそ見るが、超脫した悟性の光りが輝いてゐるとは思はない。（昭和三年五月）

蘇峰と蘆花

一

近來、新たに明治文學に親しんで來た私は、小說を主流とした純文學の領域以外に、明治時代の思潮に關係の深かつた文學はどういふ種類のものであつたかと回顧した。

政治宗教哲學などの方面にも能文の士は少なくなかつた。現代では、思想の發表には內容を臚列するだけで、文章によつて內容の裝飾を試みるものは、殆どなくなつた。美辭麗句の力を借りて讀者を感激させようと企てるものは見當らなくなつた。これは當然の傾向であるが、しかし頭腦が聰明であれば、所論も自から明晰であらうし、心が熱情に富んでゐれば、文章にも自から熱と力が現はれるわけである。この頃の雜誌などに現はれるいろ〳〵な論文の多くが勃窣無味で、樣によつて葫蘆を描いた感じのするのは、論者の頭腦心熱に至らざるところのあるためであらう。感激のない文章ばかりが續出してゐる。

「蘇峰文選」の卷頭の題字の「辭達而已矣」といふ言葉は、古來漢文家の金科玉條としてゐた言葉の一つであつて、德川時代の文章家も筆を執るに當つて、それを心掛けてゐたのであつたが、しかし、それは空疏な信仰に留まつて、漢文系統の文章家は、實際は內容はそつちのけで、文字の粉飾に多く苦心してゐたのであつた。實感を直寫しただけで滿足するやうなことは稀れだつた。

明治時代の學者論客も、思想を現はすに文字に捉はれて、しかも古い文字によつて、内容に乏しい思想を飾るのを常例としてゐた。そして、みんなが、直截な新しい表現法を採るやうになるまでには、いろ〳〵な人々がいろ〳〵な文體を試みたのであつた。

明治初期の福澤諭吉氏、明治中期の德富蘇峰氏などは、純文學者以外で、新文體を創始した代表的文章家である。それで、私は年少の頃、極度に愛誦してゐた蘇峰氏の作品を、久振りに讀直さうと思立つた。今日の年少の讀書子には何の感じも與へないであらうが、明治二十年代——ことに、その上半期——には「民友社」といふ名前そのものが、清新な感じを少年の心に起させてゐたのであつた。明治初期の福澤氏が多分さういふ力を有つてゐたのであらうが、私などのやうに明治二十年代に少年期を過し旺盛なる讀書好學の念に燃えてゐた者は、民友社の魅力に化せられないではゐられなかつた。

私は、今度第一に改版の「靜思餘錄」を買つて讀んだ。昔「國民叢書」として續刊された蘇峰文集中の一篇で、小型の赤表紙本で、定價も十錢か十五錢であつたのだが、改版本は、表紙の色も形も違つてゐるので、手に取つても、懷しみがなかつた。定價も二圓になつてゐる。初刊後殆ど四十年を經た今日の時代にも、かういふ書物がまだ賣れるのであらうかと、私はまづ疑ひを挿んだ。この改版本の序文に於て、著者は「靜思餘錄と第二靜思餘錄の兩冊の刊行部數は、十萬以

上二十萬の近きに上つた」と云つてゐる。「不如歸」のやうな通俗小說なら兎に角、感想文集に過ぎない書物が、讀書社會の狹隘であつた數十年前の日本で、こんなに多量に賣捌かれたことは、異例であつたに違ひない。それほど當時の青年讀者を捉へる力を有つてゐたのである。

私は、十四五歲の頃には、この「靜思餘錄」と、內村鑑三氏の「愛吟」といふ歐米の小詩の飜譯集との二冊を、繰ぢ目のほぐれるほどに日常讀耽つたものである。そのうちの多くを暗誦してゐた。今度私はこの文集を讀直すと、幼年時代に學んだ小學讀本を讀直すと同樣な感じがしたが、それとゝもに、かういふ文學の歡迎された時代の若さに思ひ及んだ。「人間は環境の產物であると同時に、また年齡の產物だ。老大にして少壯の感興を會せず、少壯にして老大の趣味を解せず。均しく同一人なるも、吾自ら吾を疑ふもの、洵に已むを得ぬ次第といはねばならぬ」と、著者自身、改版本の序文で云つてゐるが、讀者たる私も、同樣に感じた。何故かういふ文章を熱愛したのであらうかと、吾自ら吾を疑ふ氣持がした。著者の自信してゐた如く、これ等の文集には、「平凡なる思想あらん。しかれども不健全なる思想は決して無し」と云つていいのであるが、さういふ平凡健全な思想に、當時の青年讀者が感激したのは不思議である。實際今讀むと、平凡な常識以上の內容は些しも含まれてゐないのだ。內村氏の著書には、兎に角熱烈なる基督教の思想が籠つてゐたのだから、我々の若い心に影響を及ぼしたのも當然であつたが、蘇峰氏からはど

ういふ意味で感化を受けたのであらう。藩閥打破、平民主義の鼓吹などに、私は共鳴した譯ではなかつた。雜誌記者新聞記者としての蘇峰氏の政治論に感動したのでもなかつた。詰るところは、あの新體の文章に隨喜渇仰の涙をこぼしてゐたのであらう。氏の文章にも詩があつたのだ。

「嗟呼汝快樂を求むる耶。遑々然として迷兒を沙漠に尋ぬるが如し、慌々如として遺金を街頭に探ぬるが如し。人は快樂に生れて苦痛に死す、豈に憐む可からずや。それ快樂は求め得られざる耶。求め得可きものは、快樂と爲すに足らざる耶。快樂は求むる場所に在らざる耶。求め得たるものは、快樂の香味を失ふ耶。」

かういふ調子づいた文章が、當時の我々の耳には音樂のやうに響いたのであつた。飜譯聖書の稚拙ながら斬新な語調を眞似たところにも新味があつた。マコーレー曰はくとか、カーライル曰はくとか、盛んに歐米人の所說を引用してゐるのも、青年に迎へられる所以であつた。

明治二十年代は、和洋新舊の文脈が雜然として、人さまざまに混亂してゐた時代であつて、今の目で見たら、誰れの文章でも幼稚で、調つてゐなかつた。そして、そのうちでは、バタ臭い民友社調が、若い讀者には清新に感ぜられたのであつた。同じ模倣にしても、硯友社は德川文學の模倣であつたのに、民友社は西洋模倣の分子に富んでゐたのが我々を喜ばせた。カーライル曰はく、アーノルド曰はく、ビツト曰はくの方が、江戸の通人の物眞似よりも面白かつた。

あの頃は蘇峰氏も若かつた。日清戰爭の「變節」は、氏が日本の現實に接觸して心が大人びて來た結果であらう。

二

時代の關係で蘇峰初期の文章を愛讀してゐた私も、蘆花の作品には殆ど親しまなかつた。數年間、民友社のレッテルのついてゐたものは、殆ど全部購讀してゐた時代があつて、「コブデン」「ブライト」「グラッドストン」など、蘆花によつて飜譯された史傳をも譯も分らずに通讀してゐたこともあつたが、「自然と人生」や「不如歸」によつて、獨得の地位に立つやうになつてからの彼の作品には殆ど目を注がなかつた。この頃になつてやうやく、「黑潮」や「思出の記」や「富士」などの一端を覗いてゐるのに過ぎない。そして、作品そのものには、不滿を感じながら、德富兄弟の對立については、いろ〳〵な興味を覺えてゐる。

私は子供を有つてゐないので、子供に對する親としての感情は微かにしか分らないが、兄弟は多過ぎるほど多いので、その間の心理狀態はよく分つてゐる。カインとアベルの關係も推測されないことはない。不快なる人生生活は、まづ兄弟關係から一步を踏みはじめるやうなものである。古い聖書のいろ〳〵な記事の眞に徹してゐることを、私は歲とゝもに痛切に感じるのである。蘆花

最後の大作「富士」には、この兄弟間の離合反目愛憎好悪が隠すところなく寫されてゐて昔民友社に心醉してゐた私達をして、著しく幻滅を感じさせるのである。田山花袋氏を祖師とした自然主義系統の小說は、在來の道德の標準や美醜の標準から脫却して人間の眞相を有りのまゝに描き出すのを特色としてゐたが、今から見ると、それほど激しい現實暴露をやつた譯でもなかつた。却つて「不如歸」の著者の晩年の小說の方が、もつと猛烈な赤裸々の描寫を、自己と周圍を題材として試みたのであつた。花袋藤村氏などの現實描寫には、人情に驅られた感傷味に富んでゐるし、秋聲氏の作品だつて、以前のものには謹ましやかなところがあつた。蘆花の「富士」は、それに比べると、むしろ無慙と云つていゝ。年を取つてからの作品であるせいか、見榮も外聞もないと云つたやうに色氣がない。「夫婦で裸で銀座の大道を歩くやうな氣持で書いた」と宣傳されてゐたが、さういつた趣きがあつて、私は讀みながら面を背けたい思ひをしたところもある。支那のある新しい女は、舊風俗を打破しようといふ意氣込みで身に一絲を纏はず赤裸々で上海の街上を練り歩いたさうであるが、蘆花の「富士」はそんな感じがする。藤村の「新生」は、あゝいふ材料が詩に化けてゐるので、讀者に親まれるが、「富士」には何の粉飾もない。餘計な粧飾のないのは、むしろ推賞に價ひするのだが、感情が干涸らびて、主觀の嚴肅さをも缺き、描寫が粗雜であつて、私は、讀みながら藝術品に接してゐるやうな感じはしなかつた。「自然と人生」などに漂

つてゐた豊かな詩趣も晩年には全く涸れてしまつた。いくら忌憚なき眞實の敍述であつても、かういふ風に取扱はれたなら、材料にされた人間は、迷惑だらうと思はれる。蘇峰氏もこんな弟を持つたために、尊嚴を傷けられたのである。私は氣の毒に感じた。……これは他所事ではなくつて、私自身もをり〳〵過去を顧みて、おのれを責めることがあるが、自分を裸にするのは勝手であるとしても、他人の衣服までも無理強ひに脫がせることが、正しいことであらうか。作者自身の觀察が萬能の神の如く完全無缺である譯はないのだから、作品のモデルにされた人間は、尙更迷惑である。

かつて蘆花夫妻が、その緣者たる八十以上の老女を訪ねて「裸になつて自己告白をしろ」と强要したといふ噂を聞いた時、僭越無法の振舞だと私は感じた。若しもその勸告が用ひられて、八十の婆さんが裸で白晝の大道を歩きだしたらたまらないではないか。

「富士」の創作の態度には私は感心しない。そこには、著者の邪推の目のあまりに働き過ぎてゐるのを私は感じた。しかし、作者が勢一杯事實を書かうと努めたことだけは否み難い。したがつてそこに現はされてゐる親子兄弟夫婦親戚緣者の交錯した世相に、我々自身の肉親關係の影が見られないでもない。人間生活の煩はしさが推察される。ことに、私などが年少の頃崇拜し憧憬してゐた蘇峰先生や民友社の裏面の消息が細かに說かれてゐるのが、私の興味となつた。「國民之

友」が出て、「國民新聞」が出て、新興文學の源泉の如く、我々をして仰ぎ見させてゐた當時の民友社も、その內面は天國ではなかつた。遠く隔れて、その社から配附される新聞雜誌新刊書類を耽讀してゐた我々少年の心の中にこそ天國は宿つてゐたのだ。……現今の文壇と田舍の文學少年との關係も同樣であらう。

私は、小學卒業後一二年間山間の私塾に學んでゐた。そこの學生は擧つて民友社本の愛讀者であつた。私は、國民新聞の久保田米僊氏の劇評を通して團菊の舞臺を想望してゐた。蘇峰先生の「熱海だより」を讀んで、夢の世界に誘はれてゐた。「上に遊禽の囀ずるを聞き、下に淸瀨のむせぶを聞き、ヲルズオルスの詩を口すさみ候」といふ一節に、私の村塾に於ける生活が美しく描かれてゐるのを見た。同じ民友社黨であつた同窓の人々と私と異つてゐたのは、私が「國民之友」のうちから基督教を見つけて、その教に心を寄せるやうになつたことであつた。

私は、獨りで聖書を讀み、內村鑑三先生の著書に耽溺しだした。あの頃が、私の一生のうちで、最も敬虔で純潔な時代であつたかも知れなかつた。しかし「國民之友」や「國民新聞」は頻りに私の上京慾を唆かした。

三

私は蘇峰氏の思想よりも、その文章に心醉してゐたのであつたと云つたが、氏は文學的素質、あるひは詩人的素質に於て、天性が令弟に讓つてはゐなかつた。弟蘆花は無器用であつたために現友社一派とは違つた素朴な味ひを文章の上に現はしたのであつたが、兄蘇峰氏は才氣に任かせて書きなぐつたために、時世の變遷に堪へるやうな名文章は遺し得なかつた。「實用以外に何等の文學的抱負もなく自信もなし」と云ひ、「予の立言の目的は、所謂對症應急にありて、固より百載の必傳を期せず」と云つてゐる如く、その日に讀み棄てられその月に讀み棄てられるのを覺悟して書かれたに過ぎなかつたが、しかし「自然と人生」中の諸篇に匹敵するくらゐなものは、氏の文集に見つけられないことはない。小說を書く氣があつたら、氏だつて「黑潮」くらゐなものは書けたに違ひない。「宗教上には眞理の探討者、戀愛は敬遠して、家庭には多きを求めず、ひたすら公的に生くるといふ態度を兄は執つた」と、「富士」のなかに書いてあつて、蘇峰氏のやうな肌合ひの人は多分さうであらうと、一般的には思はれるが、「富士」の敍述を讀みながら言外に推察の目を注ぎ、また、大部の「蘇峰文選」を通讀してあとで考へると、必しもさうではなささうだ。蘇峰氏が宗教上の眞理の探討者であつたことに、私はまづ疑ひを挿む。氏も周圍の關係から、若い時分宗教の門を覗いたことは覗いたが、雲の彼方のことに思ひを凝らすべく、氏はあまりに俗界に興味を有ち過ぎた。「戀愛を敬遠した」とは、氏自身も、をりに觸れて屢々口にしてゐたらし

く、自から木强漢を以つて任じてゐたらしかつたが、氏だつて戀愛の情趣を感じない人ではなかつた。私は、夏目漱石の晩年の數種の長編を讀んで、彼が男女關係について人一倍思ひを勞してゐたのを知つたが、蘇峰氏だつて、異性に對して無關心でなかつたことを、その文集のうちから推察するのである。賴山陽門下の女詩人江馬細香の詩集、「湘夢遺稿」の批評の如き、女性の心理に關する微細に渡つた的確な觀察が試みられてゐる。細香と山陽との詩を列擧して解釋し批判してゐるのが一篇の情史一篇の戀愛小說のやうな感じがする。私の見た限りに於ては、蘆花氏の小說に、これだけに戀愛の情趣の語られてゐるものはなかつた。「近世國民史」に於ても、人情の機微を見る小說家的觀察は少くないのである。氏は蘆花氏の如く自分を裸にして現はさうとはしなかつたが、史上の人物などについて說きながら自己の影をそこに映した。

「悧口な兄」に對して「愚かな弟」として、幼少の頃を過した蘆花は、偶然「不如歸」で當りを取つて以來、兄を凌ぐほどの文名を得た。何と云つても小說の方が評論よりも讀者に喰入る力を强く有つてゐる。そして、通俗味を有つてゐる點では、氏等兄弟はよく似通つてゐる。蘇峰の論文に深遠な思想の宿つてゐなかつた如く、蘆花の小說に深刻、銳利な人間描寫は見られないのである。民友社で育つたために、現友社型の戲作家氣取りに墮しないで、無骨ながらも淸新なところがあつたが、「不如歸」だつて、「黑潮」だつて、卑俗である。「黑潮」にあの頃の社會が描かれてゐ

ると思つてゐる讀者は、伊藤痴遊の講談によつて明治初期の社會を見てゐる人々と同樣である。

小說家として蘆花の才能は決して豐かではなかつた。多く俗界に關心してゐた蘇峰氏とは違つて、仙骨を帶びてゐたらしく思はれてゐるが、空想力は乏しかつた。世相や人間を客觀的に描寫する手段も傑れてゐなかつた。それ故「不如歸」「黑潮」など二三を除いたら、自傳風のものを書くより外爲方がなかつたのであらう。小說といふよりも單なる旅行記に過ぎないものが多い。

「富士」に描かれた兄弟關係の如きは、事實として、小說の材料としての洞察力はそこに見られないのである。漱石の「行人」はさすがに違つてゐる。材料をそのまゝに敍したのではなくつて、作者の空想裡の產物なのであらうが、それでも、人間の心の奥の奥を見ようとする目が光つてゐる。兄の弟に對する猜疑には凄いところがある。兄嫁に對する弟の不即不離の感情に微妙なところがある。そして、作者の主觀は嚴肅である。「富士」の方では、事實の興味に惹かれながらも、讀んでゐて、屢々不快な感じに襲はれる。たゞ醜い感じだけのするところが少くない。夫人との共著であるためか、文章の甚だお粗末なところがある。漱石と蘆花とは共に流行作家であつたのだが、その藝術の素質は異つてゐた。

蘆花の小說のうちでは「思出の記」が最も傑れてゐる。そして、彼の天分に適應してゐる作品は、「みゝずのたはごと」のやうなものであらう。「不如歸」が當つたために、小說家として進んで

行つたのだが、本來は「自然と人生」の系統を追つて行つた方が柄相應であつたのだ。

四

私は日清戰爭後に上京したのであつたが、新橋に出迎へて呉れた友人に連れられて、横寺町の下宿へ落付く途中、神樂坂の雜誌屋で「國民之友」を買つた。數日後に、神田の青年會館で、蘇峰氏の演說を聽いた。日頃崇拜してゐた偉人の風丰に接して、その演說を聽く機會を、上京後間もなく得たことは、どれほど私を感激させたか知れなかつた。しかし、上京後半歲も立たぬ間に、私の民友社崇拜熱は醒めてしまつた。蘇峰氏が平民主義を棄てゝ藩閥に下つたといふ噂が盛んであつたが、私はさういふ政治上の意味に拘はらないで、民友社に對する感興を失つた。今、「靜思餘錄」や「蘇峰文選」を讀直して考へると、あの頃私が蘇峰氏の文章に興味を失つたのは、私の頭腦の發達を證明してゐるので、あゝいふものは少年期の讀物たるに過ぎない。蘇峰雪嶺棲牛桂月などは、明治時代に相續いて年少の讀書子の感激性を刺戟した文章家であつたが、今日ではこれ等の人々の地位を繼紹してゐる人は誰れであらうか。

かういふ種類の文人は、今は跡を絕つたやうに思はれる。河上肇とか大山郁夫といふやうな人人の論文は、熱心に現代の青年に迎へられてゐるやうであるが、これ等諸氏はある問題を理論的

に討究するだけを本領として、往年の蘇峰氏くらゐな詩趣をもその文章には見出しがたい。時代は進んで來て、最早文章の力で感動させるやうな稚氣を脫して、理窟一點張りで押して他を動かさうとするやうになつたのであらうか。

「蘇峰文選」の中のある一章に「今日の憂の一は、國民に英雄崇拜心の消磨せんとするにあり」と敷じてゐるが、それは蘇峰氏の英雄視してゐるものを、崇拜する者が少くなつたゞけなのではあるまいか。人間はいつの世にもいかなる形に於てか、英雄を崇拜しないでゐられないのである。英雄に雷同しそれに引きづられて行くものである。

蘇峰氏もかつては、言論家として一個の英雄であつた。しかし、內閣の壽命と同樣に、言論界の英雄の壽命もさう長くは續かないのが浮世の常である。私は短き一生に於ても、英雄崇拜の形がいろ〳〵に變つて行くのを見た。一世を指導して自から英雄にならんと志した人々が、新陳代謝してゐるのを見た。平民主義から國家主義に轉じた蘇峰氏が、假りに何かの刺戟によつて社會主義とか共產主義とかに轉換すると假定しようにも、さうなるには、頭腦がすでに硬化してゐる。新奇を喜ぶ靑年に顧みられなくなつた譯であるが、古今東西の歷史に通じてゐる氏が人間が新を好み變化を好む生物であることに氣付かないでゐるとしたら迂濶である。「唯眞故新」なりといふことも人生に於ける一面の眞理ではあるが、「唯新故眞」なりといふことも眞理である。人間

の食慾愛慾所有慾は古今を貫いて同様であつても、その外形のあらはれが、時により處により形を異にする如く、思想や主義の論爭も、畢竟外形の相違に過ぎないことが多い。蘇峰氏が平民主義を唱へたのも、新を好む若い心から出たので、當時の新を好む青年がそれに雷同したのだ。今日のいろ〳〵な新主義も、新を好む人心の現はれに過ぎないので、蘇峰氏などの昔の新人が危んだり歎息したりするのは、人間の老いを現はすのに過ぎない。今日の新は明日は古臭くなるのに極つてゐる。「新を追ふて地獄までも行く」と、ボードレール（？）が云つてゐるが、長く青年の崇拜を得ようと思へば、絶えず新味の發揮を志してゐなければならない。

老人は精神が硬化して、思想も文章も固定するのを例としてゐる。先日、久振りに德田秋聲氏に會つて、長時間行動を共にして、食つて歩いて話したのであつたが、その間に、氏は屢々「モダーン」といふ言葉を口にしてゐた。私が心身の衰頽を歎ずるのに對して、「人間は老いてゐても心に若い芽が萠えるものだ」と力說してゐた。氏の生活には永久の若さがあるのかも知れない。ゲーテなどは老いを知らない永久の青年のやうであつた。それでこそ、長く青年の崇拜を失はないでゐられるのであるが、しかし、青年は夢に富み詩に豐かな筈である。乾燥無味な理窟一點張りで滿足し得られないのが、いつの世にでも青年としての自然の本性である。その作品のうちに隱然勤王を鼓吹したといはれる賴山陽は、その政治論にも歷史にも、多くの詩を含んでゐた。明

治の青年を感激させた蘇峰楊牛桂月、あるひは内村鑑三氏などの所論にも、今日の目には幼稚に見られるにしても、兎に角詩を含んでゐる。ところが、今日は政治論社會問題論は云ふまでもなく、文學評論でも、多くは砂利のやうな文字の臚列で、どれも〳〵讀みづらい。かう堅くるしく述べなければ、所信が發表されないのであらうか。

五

私が數十年の間を置いて、新たに蘇峰氏の述作に親しみだしたのは「近世日本國民史」が刊行されるやうになつてからである。その日その月の要求に應じるのを立言の目的として、「百載の必傳」を期しなかつた氏も、老境に達したので、過去の長い文筆生活に不滿を感じて、自己の記念碑を自から刻んで不朽を遺さんと企つる氣持になつたのであらう。氏としては最も適當な題目を選んだ譯である。坪内博士の沙翁全集の飜譯と同樣である。

餘生幾千もないといふ感じは、現世に、何等かの形に於て自己の影を留めたいといふ慾念を誘ひ起すものらしい。逍遙蘇峰兩先生の如きは、自己の一生の蘊蓄を傾瀉するに適した題目を選ばれたのだから幸福である。

私などは、まだ自己の印象を後世に遺したいといふやうな感じを意識的に起したことはないの

であるが、もつと年を取つたらさういふ氣持になるかも知れない。あるひは、今だつて、自己批判がもつと鋭利になつたら、心の底に、現世に於ける自己の不朽慾の潛在してゐるのに氣づくかも知れない。

しかし、「現實」を知らんと努めて來た私も、「この世はついの住み家にあらず」といふダンテによつて代表された中世紀の感想を全く脫することは出來ない。これが迷妄であらうとなからうと、紛々たる現實の事相を嫌惡し、あるひは孤獨の寂寞に沈んだ折々、旱燥時の雨露の如く、心に一點の慰藉を與へられるのは、この夢のやうな思ひである。

少年期に受けた感化は一生を支配するのであらうか。あの頃現實主義の「民友社」の感化を受けてゐた筈の私は、北村透谷を主とした所謂高踏派の「文學界」にも共鳴し、新しい基督教の空想にも動かされてゐた。爾來世路の經驗を重ね修養を積んで來ても、少年期に心に芽ぐんだものの、霜にも風にも耐へてまだ枯れ切らないでゐるのに氣づくことがある。（昭和三年五月二十七日）

尾崎紅葉論

私は、森川町の下宿にゐた時分、ある夜「趣味」といふ雜誌の編輯者であつた西本波太といふ人に誘はれて、二葉亭四迷を訪問したことがあつた。その時の斷片的談話は私の心に深く刻まれてゐて、今も二葉亭の面影とともに、それ等の談話が、歷史的興味をもつて思出されるのであるが、その時には紅葉山人に關しても、一言彼れの感想が洩らされたのであつた。

「新しい時代の作者のものを推讃するのはいゝが、そのために過去の作者の價値を無視しなくつてもよからう」と云つて、彼れは、紅葉の小說には、時代の變遷に關はらず、紅葉としての獨得の妙所を持つてゐると云ふ意味の批評を述べた。この簡單な評語は、當時の私をして奇異な思ひをさせた。自然主義全盛の時代で、紅葉はじめ硯友社一派の文學は古くさい低級な文學として、文壇の新人にはいたましく蔑視されてゐたので、露國の大文學に熟通してゐる二葉亭の如きは、無論紅葉などの遊戲文字に同感をもつてゐよう筈はないと、私は獨り極めに極めてゐたのであつた。……今から思ふと二葉亭が紅葉の小說に好意をもつてゐたのは不思議はないので、二葉亭はロシヤ文學の感化を受けて、「浮雲」のやうな異つた小說を書いたり、人生問題に煩悶したりしたものゝ、根柢には紅葉などと似寄つた舊日本の文學趣味を湛へてゐるのだ。二葉亭ばかりではない。もつと時代の若い人々でも、紅葉と似通ふやうな文學趣味を隱然持つてゐることは今なほ舊歌舞伎劇が、何とか理窟をつけながら、喜ばれてゐるのと同樣である。日本人は日本人である。祖先

以來の傳統的趣味から全く脫却することは出來ないのである。

自然主義勃興以來、紅葉山人は文壇的には虐殺されながら、世上の小說好きには相變らず喜ばれてゐたらしい。それも、蘆花、浪六あるひは天外諸氏の小說とは異つて、讀者が各方面に涉つてゐるらしい。彼れと、後年の漱石との藝術は、最も日本人の趣味に適してゐるのであらう。そして、それは必しも通俗呼ばりすべきものではないらしく、鑑識の傑れた文壇の諸氏が、近年紅葉讃美の語を放つてゐるのが、をり〳〵私の耳に觸れるやうになつた。藝術に對する毀譽褒貶の變遷は面白い。……數ヶ月前の「新潮」の合評會にも、紅葉や一葉の噂も出てゐて、秋聲秋江の諸氏が紅葉をひどく推賞してゐた。谷崎氏が紅葉を世界的文豪として奉つてゐるといふ噂も出てゐた。歲を取ると、現在よりも過去がよく見えるものだが、「あの紅葉」の小說がそんなに傑れてゐるのであらうかと、私は疑ひながら、新たに彼れの全集を讀直さうと思立つた。

私は、少年の頃「拈華微笑」を讀んで以來、紅葉山人の作品は殆ど全部讀んでゐると云つていい。二三度繰返して讀んだものもある。「隣の女」の如きは、退屈な時にたび〳〵取出して讀んでは、面白がつて、獨笑ひを浮べた。しかし、紅葉の作品に對して敬意を表したことは一度もなかつた。

「小說といふものはこんなものであらう。おれには書きたくも書けないだらうが、書かなくても

いい」と、いつも思つてゐた。だから、私が十年も早く生れて、硯友社全盛期に成人してゐたなら、決して小説家として身を立てようなんて、柄にないことを思立ちはしなかつたであらう。

明治二十九年の二月下旬「多情多恨」が讀賣に出かゝつた頃、私ははじめて上京して、横寺町の下宿に、所謂草鞋を解いたのであつたが、間もなく、町内の古ぼけた共同門に「尾崎德太郎」といふ表札が出てゐるのを、散歩の途中か、湯屋通ひの途中に見つけたので、これが有名な紅葉山人の住所であらうかと疑つて、同宿の友人に訊ねたが、法律書生であつた友人は、そんなことは知らなかつた。數日經つて、田舍の知人から紹介されてゐた戸川殘花翁を、藥王寺町に訪ねた時にかの表札について訊ねると、翁は「それが紅葉の家だ」と答へて、「文學者は皆んな貧乏だ」と、その實生活についていろ〳〵話して呉れた。私は當時文學を志望してゐた譯ではなかつたので、貧乏と文學の關係についてさして感激もしなかつた。

私は文科に籍を置くやうになつても硯友社は好かなかつた。早稻田卒業後二三年の間に、他所ながら紅葉山人の風丰に接したことは、四五度に及んだが、敬意を寄せて凝視したことは一度もなかつた。しかし、青春の頃眼前を横切つた、明治時代第一の人氣作者紅葉山人の通人らしい面影を、今思出してみると、彼れの全集を讀みながら、追憶の興味が添つて來るのである。

早稻田卒業直後、出版部に奉職して間のない頃、牛込の明進軒で編輯會議があつて高田坪内兩

博士も出席され、會議後晩餐を饗せられてゐると、そこへ、脊のスラリとした痩男が筒袖のやうな身裝で、階子段を上つて來た。扉が開いてゐたので我々の部屋へ目を注いだやうであつたが、ふと高田博士と目を見合せて互ひに目禮した。「尾崎君ぢやないか」と、坪内博士が顧みて聲を掛けた時には、その人は向うの部屋へ入つてゐた。「横寺町の先生はこの頃よくいらつしやるかね」と、高田博士は給仕女に訊ねた。「紅葉といふ人はあゝいふ人か」と、私は意外な感じがして、その書生々々した影を心に留めた。當時の私は、十五圓の月給に有りついて、面白くもない文科講義錄の原稿集めや校正をやつてゐたので、小説のやうな六ヶしいものを書かうといふ大それた野心を抱いてはゐなかつた。講義錄の餘白へ氣紛れに「文藝時評」を書いたりしたが、無論しつかりした文學上の見識があつたのではないので、空疎な評語を並べたに過ぎなかつた。硯友社系統の作品は大抵罵倒したやうに覺えてゐるが、非難攻撃の據りどころは、彼等に思想がないといふことであつた。實人生について經驗乏しく、藝術の鑑賞力の淺い批評家が、尤もらしい文學批評を振上げるには、思想の有無を持出すのが一番樂であつて、襤褸を出さずに濟む譯なのだ。その頃露伴の小説には思想があつて、紅葉のには思想がないと云はれてゐたやうであつたが、露伴にどんな思想があつたのであらう。「一口劍」には「精神一到何事かならざらん」といふ思想が現はれてゐるから、紅葉の「おぼろ舟」の如き、情緒のみ現はれてゐる小説よりも傑れてゐると云ふ

のであらうか。

二度目に、ちらと紅葉の影を見たのは、赤城下の清風亭で「高等講談」と稱して、文學者が自作の上品な講談を自演した時であつた。私が聽きに行つた時は、その二回目か三回目かで、江見水蔭氏のあまり面白くない話を聞かされたのであつたが、氏の話の濟みかけた時分に、紅葉が庭から入つて來て、水蔭氏を招いて一緒に出て行つた。「あゝ紅葉さんが來た」と、私の側にゐた聽衆は、みんなそちらへ目を注いだ。「茶碗割」や「短慮の刃」は、この高等講談會で述べられたので、矢張り誰れのよりも紅葉のが面白かつたらしい。

三度目に、私が紅葉を見たのは、池ノ端の無極亭で、久米八門下の踊りの會のあつた時であつた。私は德田秋江君などゝ一しよに出掛けて、坪內博士のほとりで見物してゐたが、その會へは紅葉山人も來てゐて幸堂得知翁と並んで話をしてゐた。そこへ遲れ馳せに鏡花氏がやつて來たが、座席の斡旋をしてゐた中年の女が、「先生のお側へいらつしやい」と云ふと氏は禮儀正しくもそちらへ寄つて行つた。私などのやうに、先生の側で胡坐を掻いたりなんかしなかつた。間が隔つてゐるので、彼等の話聲はよく聞えなかつたが、たゞ紅葉が鏡花氏に向つて、「お前が……」〳〵と云つてゐるのが耳に留つた。そして、話は聞えなくても、兩氏の態度を見てゐるだけで、師弟對座の光景が映畫の如く浮んだ。一人が師の態度を崩さなければ、他の一人も弟子の態度を破らな

かつた。「青葡萄」に書かれてゐる師弟關係が思ひ出された。

四度目、すなはち最後に紅葉を見たのは、島村抱月渡歐の送別會の席上に於てゞあつた。私は開會前から會場の紅葉館に來てゐた彼れが、女中から飴見たいな菓子を貰つて、それを口に含んで片膝を立てゝ坐してゐる彼れを見た。發起人を代表した彼が送別の辭を述べるのを聽いた。それから、廣津柳浪氏が、當時「無花果」の作者として聲名を博してゐた中村吉藏氏を紅葉に紹介してゐるのを見た。この各方面の重立つた文學者の集つた會場に於ても、紅葉は特に文壇の第一人者らしく、あたりの人々に取扱はれてゐるのを、私は見た。彼自身もそれを當然としてゐるらしく、振舞つてゐるやうに、當時の私には思はれた。彼れは文章のためには苦心焦慮し、ことに最後の大作「金色夜叉」のためには天壽を縮めるほどの思ひをしたのであらうが、また物質の不足に惱まされたこともあらうが、自己の名聲は飽くまで樂んでゐたに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れには、二葉亭や透谷や獨歩や、あるひは樗牛なども持つてゐたやうな人生苦を感得したことはなかつたに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れは解決の出來ない人生を持つてゐなかつた文學者の一人である。

私は、この一代の才人であつた紅葉山人を、他所ながら瞥見しただけで過ぎたのであつたが、抱月渡歐の翌年、讀賣新聞に入社したゝめに、彼れに對して多少の掛り合ひがつくやうになつた。

私の入社後間もなく山人は逝去した。彼れは長い間自己の作品を發表した讀賣とは緣を切つてゐたのであつたが、過去の深い關係から云つても、また彼れの文壇に於ける功績から云つても、その傳記や逸話を紙上に掲げるのは、當然爲すべきことのやうに思はれたので、私は主筆に進言して、自分でその記事を集めようとした。それでまづ柳浪氏と眉山氏とを訪問したのであつたが、二人とも紅葉に關する話は一切避けて、私の力ではどうしようにもなかつた。變に思つて、私の讀賣入社當時に紹介の勞を取つて呉れた石橋思案氏を博文館に訪問して、譯を訊かうとしたが、氏は不在であつた。一日驅けずり廻つて何の得るところもなかつたのを忌々しくも思ひ、主筆に對しても申譯がないやうに思つて、社へ歸つたが、すると間もなく、思案氏から電話が掛つて來た。……その時の荒つぽい氏の口調は私は今でもよく覺えてゐる。「君は紅葉のことを聞きに來たんでせうが、そのお話は出來ません。君には何も關係がないのでお氣の毒だが、讀賣新聞は紅葉を虐待して苦めたのだから、我々友人は、讀賣には斷じて筆を執らんことに決議をしてゐるんです。無論話をする譯にも行きません。」

率直な思案氏の言葉によつて、私は柳浪眉山兩氏が、氣の毒さうな顏をして話を避けてゐた理由が分つた。「さういふ譯なら、此方でも書く必要はあるまい」と、主筆も承知して、私も重荷をおろした氣になつたが、しかし、全然知らん顏をする譯には行かなかつたので、私の筆で十行ば

かりの弔詞を書いて、肖像とゝもに紙上に掲げることにした。讀賣はあれで濟ませるのかと、紅葉に對する冷淡な態度を非難したものもあつたが、こちらが冷淡であつたのではない、先方からさう仕向けたのだ。……兎に角、まだ一篇の小說も書かなかつた前に、明治文壇の第一人者尾崎紅葉追悼の文章を、たとひ十行でも執筆して、當時の文學新聞に掲げることが出來たのは、私に取つて名譽であつた譯だ。

私はかねて「心の闇」と「多情多恨」とを、紅葉全作中での最も傑れたものとしてゐた。「金色夜叉」の如きは、「不如歸」「魔風戀風」などゝ同列に論ぜらるべき通俗小說であると思つてゐた。ところが今度全部を通讀して見て、さうとばかりは云へないことを知つた。文學者としての紅葉、人としての紅葉を研究するためには、「金色夜叉」をこそ選ぶべきである。馬琴を研究するには、「弓張月」や「美少年錄」や「俠客傳」よりも、「八犬傳」を選ぶのが當然であるが、「金色夜叉」は紅葉山人の「八犬傳」と云つていゝのである。……私は今度この未完の長篇を讀んで、たゞ紅葉の文學的技倆を十分に窺ひ得られたのみならず、世上の小說愛好者の心理をも察することが出來た。明治時代の世相の一端をも窺ひ得られたし、もつと廣い人生と文學とに思ひを馳せて感慨に耽つたのであつた。時代精神捕捉の必要を強說した高山樗牛は「金色夜叉」を罵つてゐたが、

しかし、この長篇には、日露戰爭前の時代の精神や苦悶が自ら作中に現はれてゐるではないか。作者はそれを意識して書いてはゐないのだが、意識してゐないところに、むしろ妙味があるのだ。今日のプロレタリア文學主唱者が、粗雜な理窟を作中に竝べて、それで時代を批判したつもりでゐるのをこそ哂ふべきである。

「金色夜叉」について所感を述べる前に、私は彼れの作品について、些少の批判を試みようと思ふ。

「新色懺悔」は云ふまでもなく、「伽羅枕」なども、西鶴その他の舊文學をお手本として、一生懸命にお化粧をした習作であるが、それ等初期の作物のうちでは、「二人女房」と、「三人妻」とがいい。「金色夜叉」に到達するまでの紅葉の素質が、この二篇に充分に現はれてゐる。私が今座側に備へてゐる春陽堂新刊の、「紅葉全集」には、「二人女房」が含まれてゐないので、たしかなことは云へないが、この小說には、あり振れた人情が、分り易く、あたり前に書かれてゐる。平凡この上なしの小說であるが、常識的で健全で、人生世相に暗い影を見ないところが、紅葉の特色であり、一般の讀者が彼れの小說を喜んだ所以である。この小說の現れた時、依田學海翁が作者に向つて、「甚だ面白い、後生恐るべし」と激賞したのに對して、作者は、「いや、まだ駄目です。四十にもなつて頭に白髮が出るやうになつたら、實の入つたものが書けるでせう」と答へたことが、

作者苦心談の中に出てゐた。二十を過ぎたばかりの若年が、學海翁の如き老人をも感動させるやうな小說を書いたことは、今から見て不思議なやうに思はれるが、これは必ずしも紅葉が非凡な秀才であつた證據にはならないのだ。紅葉は青年の頃にも、當時の一般人が見てゐる通りに、人間や世相を見て、道德觀や世間智が俗人と同樣であつたから、世の老若男女に受入られたのだ。二人の女を取扱ふにも型の如く筋を運んで行くのだから、作者も書き易かつたに違ひない。二葉亭の「浮雲」にあるやうな深入りした心理に突込んでゐるのでなくつて、腕を見せるのは文章の綾にあつただけなのだ。

「三人妻」なども、德川時代の文學の連續と云つていゝもので、文章にも着眼にも新時代の色彩の乏しいものであるが、しかし、「三人妻」は傑作である。綠雨の「かくれんぼ」の比ではない。

私は、西鶴の「一代女」や、荷風の「腕くらべ」や、里見弴の「今年竹」など、溫柔鄕裡の消息を傳へた古今の名作を、「三人妻」に比べて見た。「三人妻」には、「腕くらべ」に漂つてゐるやうな哀愁がない。近代的哀愁とも名づくべきものが讀者の胸に迫つて來るのが、荷風の作品をして硯友社の作品と趣きを異にさせるので、「三人妻」にはさういつた感じは含まれてゐない。紅葉の年齡がまだ若かつた時分の作であるためでもあらうが、色つぽい興味にのみ驅られてにがい味ひはどこにも加味されてゐない。三美人の風姿をそれ〴〵に描くとともに、個性をも書き分けたつもり

なのであらうが、それは型の如くである。花柳界見聞錄たるに過ぎぬ憾みのある「今年竹」の方が複雜な現實味を持つてゐる。……しかし「三人妻」は、一つの磨かれたる壁である。舊文學傳來の豐艷なる文字で色取つた浮世繪である。西鶴を眞似て筆致に斧鑿の痕のある「伽羅枕」よりも渾然としてゐる。かういふ種類の文章としては、德川時代の小說にも類のないほどの名文である。かういふものを讀むと、紅葉は新時代の先驅者ではなくつて、舊文學に最後の光を放つた名作家と云つた感じがする。それは先代菊五郎が歌舞伎の形式美や情緒を繼承して、舊い世話物役者として最後の光を放つたのと似通つてゐる。そして、菊五郎は舊技巧家として、最後の一人であつたのみならず、德川末期の名優にも勝つてゐたやうに想像されるが、紅葉もさうであつたのだ。

「三人妻」などは、文章美に於て舊作家を壓してゐるが、內容は、「梅曆」や「娘節用」などの人情本と同じなのだ。紅葉の持味は、「三人妻」から「金色夜叉」に至るまで失はれてゐない。「三人妻」の葛城餘五郎は、大成金であつたため、自分の心に適つた女を自由に入れて、色の樂みに耽つて、人生の幸福此處に在りと滿足してゐたのであるが、薄給の勤人で、容貌も醜くかつた粕壁讓(隣の女の主人公)は、その滿足の得られないために焦慮した。この「隣の女」くらゐ、紅葉の主觀を知り、作風を知るに都合のいゝものはない。「媒妁に妻はせられた嫁、好い加減に極めた緣談、

親などに勸められた女房、そんなのは粕壁譲の最も屑しとせざるところである。……相互に心が知れ合つて、添はう添ひましよ、死ぬ死なうといふほどの間でなければ、夫婦になるべき必要がない」と云ふのは何も粕壁に限つたことではないので、今日は、これを眞劍な戀愛のない結婚は虚僞な結婚であるなどゝ、六ヶしい言葉で言ひ現はすだけの相違であるが、粕壁譲の理想の色調は「あちらからもこちらからもやいの〳〵」と云はれる「唐琴屋丹次郎」となることにあるのだ。

作者紅葉は理想の充たされない粕壁の苦悶を取扱ふのに、歐洲近代の作家及び、その流れを汲む現代日本の作家のやうに、眞面目な同感を寄せないで、揶揄し飜弄してゐるのであるが、それに關はらず、紅葉本來の趣味は、唐琴屋の若旦那の趣味と同じ色を帶びてゐるのだ。「何だ男のくせに」と云つた調子で粕壁などを罵倒して、上べに凛としたところを見せながら、内實丹次郎の面影に憧れてゐるのは、多數の世人と同樣なのだ。本筋では粕壁の悲觀焦慮空想を寫しながら、陰ではその隣りの一室で、「隣の女」お小夜が、その旦那らしい好男子と駄洒落まじりの口説をかはしたり、あるひは情夫の巡査と痴話喧嘩をしたりしてゐるところを描いたりしてゐるのは、現實と理想を對照させてゐるやうなものだ。紅葉の小説が、多數者に愛讀され、今もなほ、可成りの愛讀者を持つてゐる理由の一半はさういふ點にあるのであらう。單なる「梅暦」ではあまりに低級で、普通の讀者の道義觀が滿足されない。それで「何だ男のくせに」といふ凛とした道念を加味しなが

ら、春色「三人妻」春色「隣の女」を書いたのが、學海翁などの通俗的知識階級の讀者にも喜ばれた所以であらう。狂訓亭紅葉である。無論文才に於ては爲永春水などは紅葉に比較さるべくもあらず、永井荷風とても遠く彼れに及ばないのである。

「金色夜叉」を、失戀の惱みを描いた小說とのみ思ふのは淺薄である。間貫一は、紅葉全作中でも類を絕してゐる色男なのである。粉壁讓をして羨望し、垂涎三尺たらしむるに足る幸福人である。讀者の興味の一半はそこにあるので、お宮は雜作なく悔悟して、命を掛けて慕ひ、滿枝は滿枝で、振られゝば振られるほど戀慕つてゐる。幾多の青年讀者が、自己を貫一の境地に置いて恍惚としたことであらう。讀者心理から云へば、光源氏も「紅樓夢」の賈寶玉も「一代男」の世之助も「梅曆」の丹次郎も、及びもつかぬ色男は貫一なので、失戀の惱みを言譯に、終ひまで女に捉へられぬところが、讀者をじらして、讀者の好色的情緒をそゝる所以である。

作中のいろ〳〵な男女のうち、赤樫滿枝は實によく書けてゐる。「三人妻」のお才などよりも一層具象的に、豐艷なる肉體が紙上に躍動してゐるのは、歲とともに紅葉の技巧が進んだ證據である。面白いのは色の口說である。西鶴時代の大まかなものから、「梅曆」時代の舌つたるいところ、紅葉を經て、現代小說のハイカラな戀愛問題に至るまでの變遷を比べて見ると面白い。そこにも時代相が現はれてゐるのである。

長篇の構圖を定める腕前は、紅葉でも得意ではなかつたので、「金色夜叉」も、通俗小說として讀者の好奇心を惹く用意はあまり周到でないので、次第にだれて來てゐるのだが、荒尾や滿枝の插話によつて僅かに興味をつないでゐる。それにしても、貫一が千葉行きの際に、兩國驛前の休憩所で仲のいゝ男女の祕密話を立聞きして自分の身に引きくらべて感慨にふけり、鹽原の宿で、また仲のいゝ男女の情死の相談を立聞きして飛込んだりするのは、智慧のない趣向である。しかも女の方が富山の思ひを掛けてゐた女であつたなど、故事つけの苦しさが思はれる。

由來紅葉は常識的の作家であるため、貫一の人生に對する憎惡感が甚だ不徹底である。風早蒲田などの舊友の懇請を斥けて飽くまで高利を貪らんとする凄味を現はしてゐるところもあつたが、隨所に弱々しい人情がつきまとつてゐて、夜叉らしい強味はあまり現はれてゐない。荒尾に對するところもさうであるし、情死の計畫者を救ふあたりは、まるで平凡な人情家である。私はその點で、讀みながら紅葉の不徹底さを齒痒く思つた。

しかし、紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小說は「金色夜叉」である。「三人妻」や「多情多恨」のやうに完備したものではなくつて、どんな批評家からも非難されさうな缺點を有つてゐるのであるが、彼としては、最も面倒な題材にぶつつかつて藝術的奮鬪を試みたので、腦漿を絞り盡して、倒れて止むといつた悲壯な感じがされる。それで彼れは自己の有つてゐるあらゆる物

を投出してゐる。繼ぎはぎではあるが、それ等の繼ぎ切れのあるものには、一代の才人の織つた錦繍の美を表はしてゐるのだ。「金色夜叉」は紅葉の作中では唯一の劇的效果を有つてゐるので、「不如歸」とともに、早くから新派劇の賣物にされ、大學生が劇場に親しむやうになつたのは、「金色夜叉」が本鄕座で上演されたためであると云はれるほどに、その芝居は世俗に歡迎されたのであるが、それは紅葉の藝術に取つてはいゝことではなかつた。私は當時劇評をやつてゐたので、高田實の荒尾や藤澤淺二郎の貫一などを見せつけられたが、その記憶が、この小說の鑑賞に於てどれほど邪魔になつたか知れないのだ。小說の筋立に芝居がゝつた不自然さがあるにしてもあゝわざとらしいお芝居にされて、しかも薄汚なく蕪雜に振舞はれては、原作の名文章が泥土に委されたやうなものだ。「金色夜叉」が最も廣く流布してゐるとともに、紅葉の作中の最も卑俗低級なもののやうな印象も我等に與へてゐるのは、新派劇の罪なのだ。

しかし、この芝居が大學生など青年男女から異常な歡迎を受けたことも時代の風潮と關係がある。舊文學の戲作者氣分で筆を執つてゐた紅葉も、知識階級の青年を主人公として、新時代の惱みを寫すやうになつた。それが不徹底であつても、我々はそこにあの時代の影を髣髴と思ひ浮べることが出來るのである。春のや主人の「書生氣質」の學生は、文明開化の空氣に浴して、ふは〳〵と氣樂に生きてゐた。それが、「金色夜叉」では、不徹底でも何でも、どうかしなければならない

と云つたやうな時代の苦しみが出てゐたのだ。明治の新日本もボンヤリしてゐられなくなつた。同じやうに貧乏であつても、學生や若い女の生活難や金錢慾に對する感じが銳敏になつてゐる。富山のやうな富者に對する反抗と羨望、青年男女の滿たされない望みが、在來の小說とはちがつて、尖つて出てゐるのである。新時代の色男としての貫一を取扱つて、讀者を喜ばせようとしてゐながら、作者は不用意のうちに時代の影をも寫してゐるのだ。自然主義以後の作家のやうに、紅葉には自覺とか自意識とか名づくべきものはなかつたのであらうが、彼れはこの最後の大作に取掛つてゐる間には、創作上の苦悶があつたに違ひない。そして、その苦悶には私はいたましく同感するのである。

貫一の失戀の苦をこれでもか〳〵と書續けてゐるのが、深く掘下げてゐるといふよりも、多くは「くどい」と感じさせられるのだが、名作「多情多恨」だつて、くどいことは隨分くどい。

四十にもなつたら實の入つたものが書けるだらうと、若い時分に述懷してゐた紅葉山人は、四十未滿で逝去した。老大家のやうに思はれてゐた彼れも、今の私の年齡よりは十歲も若くて死んだのである。世態人情に明るかつた彼れの言說も、今から考へると未熟に思はれるのも止むを得ない。「新著月刊」といふ雜誌に揭げられ、後日「唾玉集」(?)として出版された宙外氏筆記の名家苦心談(それは前代の諸作家の文學觀人生觀を

窺ふに甚だ便利なものである）や、明進軒會食後の雜話によつて、我々は紅葉の創作の用意や世間智を直接に知ることが出來るのであるが、それは、極めて常識的で、綠雨や二葉亭の所說にあるやうな銳利な觀察や不安な懷疑は全く見られなかつた。戀愛や家族生活についても、いやに老成ぶつた態度で子弟に教へを垂れてゐたが、「金色夜叉」などを讀みながら、私が氣づいたところによると、紅葉でも、青春期を過ぐるにつれて、創作その他の事について、疑惑の念が湧いて、いろ〳〵に惱んでゐたのである。たゞ、一代の大先生として奉られてゐた自己の內兜を子弟や世人に見透かされまいとして、努めて老成ぶつた態度を持ち續けてゐたのであらう。三十にも達しないうちから大家に成りすまし、ことに門下生をつくることなどは、自己完成の上に決していゝことではない。

「青葡萄」は、紅葉全集中唯一の、事實直寫の小說であつて、これによつて彼の日常生活の一端が窺ひ得られるのである。それに、言文一致體の文章はこの一篇に於て最もよく調つてゐる。「金色夜叉」などの會話は、純然たる寫實とは云はれないのだが、「青葡萄」は事實の直寫であつたために、會話が自然であつて生動してゐる。紅葉も生き永らへてゐたら、「青葡萄」の文體を押進めて、新時代の文學へ入つて行つたかも知れないが、あるひは從來維持してゐた大家の格式を崩すのを恐れて、徒らに神經を惱ましたかも知れない。……どちらにしても、紅葉は露伴氏とは違つ

てゐる。「青葡萄」では、人の師としての紅葉が、門下生に對して威嚴と情味とを兼ね備へてゐたことがよく現はれてゐて、文壇に於ける彼れの實際的勢力の大であつた原因も察せられるが、文學の上から云へば、かういふ師匠を戴くことは弟子として幸福ではなく、師匠自身に取つてもいゝことではあるまい。文學に於ては、飽くまでも自己の天分の發揮すべきもので、師匠の束縛なんか受けてはたまるものでない。好んで人の師になるものも愚かであるし、進んで人の弟子になるものも愚かである。

二葉亭、透谷、獨歩などには、將來の文學の萠芽が宿つてゐたが、硯友社の文學にはそれがなかつた。舊文學の衣鉢を襲いだのに過ぎなかつたが、しかし、紅葉山人だけは、作品の價値から云つても、日本文學史上に立派に痕を留むべき傑れた作家である。言文一致の文體を完成するに努力した一人であるのみならず、その作品のあるものは、古來の日本文學の傑作に比して、決して劣るところはないのだ。

紅葉以外の硯友社の作家と作品とを、今記憶を索つて思ひ浮べると、廣津柳浪氏の「今戸心中」その他二三が、今讀返しても見遁めがしないだらうと思はれるばかりである。時として紅葉以上との評判のあつた川上眉山の作品も、私には深い印象を留めてゐない。……さう思ふと、十數年の間小說壇を獨占してゐた硯友社も　內容は甚だ稀薄であつたやうに思はれるが、しかし、あれ

ほど旺盛だつた自然主義の作品のうちでも、今になつて顧ると、どれだけいゝものがあつたであらうか。いつの世の藝術でも、時日の篩にかゝると、殘るものは幾つもないのが當然なのだ。

（大正十五年九月十九日）

岩野泡鳴論

一

かつて、近松秋江君に小石川の往來で行會つた時、彼れは、先夜龍土會に出席したと云つて、その會の樣子を興もなげに語つたが、その話のうちに、

「岩野は詰らん坊だ」と云つた。惡意を籠めて云つたのでもなく、その批判を高調しようとしたのでもなく、笑ふでもなく嘲けるでもなく、「つまらんぼうだ」と事もなげに云つた。その批評語に私も同感したので、十數年後の今日なほ記憶によく殘つてゐる。

「君はデカダンだよ」と、龍土會の席で誰れかゞ云ふと、

「僕がデカダン？　悦しいねえ。ハツ〳〵ハ」と、泡鳴が聲高く笑ふ。……さう云つた樣子を思ひ浮べると、私にも、岩野が詰らん坊に思へたのであつた。

私は泡鳴とは一時よく往來してゐた。彼れは、原稿の捌け口を志して、ある日突然私を讀賣新聞社に訪ねて來たのであつた。その頃石川啄木も突然訪ねて來た。私は、靑白い顏をした虛弱らしい小柄な啄木と、五分刈頭のノツポの、元氣のいゝ、しかし粗野な泡鳴とを心の中で比べて、詩人にもいろ〳〵あるのだなと思つただけで、かういふ人達に寄稿を賴む氣はなかつた。その頃の私は、當時の詩人をあまり好んでゐなかつた。ところが、その後、小山內君主宰のイブセン研

究會に出るやうになつてから、泡鳴とも懇意になつた。森川町の私の下宿へもをり〳〵やつて來た。私の方からも彼れの家へ訪ねて行つたが、最初行つた時には、彼れは、赤坂臺町に住んでゐた。家は汚なかつたが、彼れの二階の書齋に洋書がドッサリ置かれてゐるのを見て意外に思つた。彼れは私を誘つて溜池の東京亭へ連れて行つた。食事をしたあとで、彼れは階下へ下りて玉を突いた。その時私ははじめてキューを手にしたのであつた。

私は、彼れが巢鴨に移轉した後は彼れの家へ足を向けなくなつたが、それまでは頻繁に往來した。最も親しくしてゐた一人であつた。一しよに球戲場へ出掛けたり、園碁に耽つたこともあつた。絕えず熱烈な議論を聞かされたり、身の上話を聞かされたりした。しかし、私は、世間で云つてゐるやうに、泡鳴の話をさう面白いとは思つてゐなかつた。秋江君の所謂「詰らん」坊といふ感じがすることがあつた。譯の分らん氣焰を吐いて、面白くもないことで獨りで面白がつて高笑ひをしてゐるのが滑稽に感ぜられることであつた。……でも、氣の置けない、表裏のない親切氣のある人間のやうに、その頃の私には思はれてゐた。小說などに表はれてゐる彼れは、氣の荒い無法者のやうであるが、あれで、案外、人の氣を兼ねる男で、世俗の風習に捉はれてゐる常識家であつた。さうでなければ、私があんなに長く交際を續け得られる筈がなかつた。彼自身の顏があんなに文壇に賣れる筈がなかつた。

二

「耽溺」といふ長編は、小説家としての彼れの出世作で、いろ〳〵な點で、彼れの小説の見本と云つてもいゝ。「坊つちやん」が、漱石全集に於て占めてゐる地位に似てゐる。しかし、文壇の一部の人々に認められただけで、世間一般の讀者に受入れられたのではなかつた。「耽溺」も「坊つちやん」も、作家が一生の半ばを過ぎて、浮世の經驗も豐富になつてゐる四十歳近い頃の作品であるが、この二つの作品の面目は著るしく異つてゐる。當時漱石は官立大學の教師であり、泡鳴は、月給二十五圓ぐらゐの大倉商業學校の教師であつたとが、作品に對する世俗の信用を異にした所以で、さながら、書畫骨董の賣立に於て大大名の所藏であるか、一平民の所藏であるかが、買ひ手の心持に影響するのと同樣であるが、作風も、泡鳴のは、漱石のやうに通俗向きではなかつた。卑近な正義觀を含んでゐなかつた。……それに、漱石は、はじめから才氣煥發と評價していゝやうな目覺ましい筆使ひを見せたが、泡鳴の「耽溺」はまだ稚拙であつた。

この小説は所謂「自然主義」時代に現はれたので、その頃には「耽溺」といふ言葉が流行してゐた。その以前には、耕牛の唱へた「美的生活」あるひは「ニーチェ主義」といふ言葉が、卑俗に曲解されて流行してゐたが、それ等の系統を追うて露骨になつたのが「耽溺」といふ用語であ

つた。小栗風葉にも「耽溺」といふ小説があつた。そして、題目を同じうする二小説が比較されて、風葉のは、無反省な耽溺で、泡鳴のは、現代的苦悶のある耽溺であるなどと批評された。

ところが、今讀直して見ると、泡鳴の「耽溺」なんかは、大した耽溺でも、現代的苦悶のあるそれでもないのである。花袋氏の「蒲團」を、今の目で見ると、有振れた甘いものと思はれるのと同樣である。自然主義の幹部として非難の矢を浴びてゐた二氏の如きも、あの頃はまだ初心であつた。彼等によつて創められて、小說作法の常態となつた自己の現實暴露は爾來二十年を經て、次第にすれつからしになつた。彼等の後繼者は藍より出でゝ藍より青くなつた。

要するに「耽溺」の一篇には、當人の意氣込んでゐるほどの苦悶が含まれてゐるのではないが、彼れは、此處から進んで行つた。自己の熱烈な努力とともに、境遇が彼れを追立てゝ一歩を進ませた。

「耽溺」は、國府津の海岸のお寺を借りて避暑してゐた學校の先生が、ふとしたことから、隣家の藝者に馴染んで、それを東京へ連出して女優にしようと企てることが、主要な筋立であつて、その藝者の土地の最負客と、先生たる主人公との間の嫉妬悶着と、先生の貧乏とが、一篇の筋立に味をつけてゐる。……ところで、作者の經驗記錄であるこの小說は、場所を、國府津の海岸で起つたことゝ指定してあるが、その材料となつた實際の事件は、野州日光の町で起つたことなの

だ。他の作家ならそれでもいゝが、泡鳴としては、その主張に照らして不徹底であつた譯で、後年の彼れは、そんな小細工はしなかつた。時々思ひ出したやうに「ふと浪の音が聞えて來た」だの「暫く忘つてゐた海水浴でもして」だのと、海岸生活らしい文句を挿んでゐるが、それは取つてつけたやうなもので、全體は山の生活らしいのである。

先生と藝者との關係なんか、いかにもバサ〳〵してゐて、しめやかな情趣と云つたやうなものは、ちつともない。これは、後年まで彼れの作品を一貫した特色である。彼れの作中の男女は、戀を語つても決して蜜のやうではない。「へん、そんなことを知らないやうな馬鹿ぢやねい。役者になりたいからよろしく賴むなんぞと白ばつくれて、一方ぢや、どん百姓か、肥取りかも知れねいへッぽこ旦つくと乳くり合つてゐやあがる」と云つたやうなのが、先生のいつもの口吻である。そして吉彌といふ藝者も「おからす藝者」といふ綽名の通り、色が黑くつて、何だか汚ならしい。戀愛小說中の女性は、概して美しく描かれるのを例として、近年の實驗記錄の小說でも、作者の主觀によつて色取られて、それに描かれる女性は、讀者を魅するところがあるのだが、泡鳴のにはそれがない。醜男醜女の情事を見てゐるやうで、讀者は讀みながら羨望の感じを起すことがない。しかし、小說を娛樂品とせずして、人生世相の眞實の記錄とする立場から見ると、泡鳴の態度に眞實性が多いのではあるまいか。

四十歳近い「耽溺」の先生は、自分より年上の、世帶窶れのした、ヒステリーの古女房に倦怠を感じてゐる。その頃、多くの作家の題材とした「中年の戀」を、彼れも求めてゐたので、ふとした機會で接近した田舍の「おからす藝者」によつてでも、心の不足を滿たさうとした。しかし、平凡人の浮氣とは違つて、彼れは、自己の抱懷せる人生觀を應用して、この單純な「見ず轉買」以上の何物でもないのに、深刻らしい意味をつけようとした。「墮落、荒廢、倦怠、疲勞——僕は、デカタンと云ふ分野に放浪するのを、むしろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた」などと云ひ、あるひは、彼れが讀みかけてゐるメレジコフスキーの「先驅者」の主人公、レオナルドダギンチの高尚典雅純潔な生涯を、自分の生涯に比して、「僕の神經は、レオナルドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐる」と云つてゐるところなんか、讀者に「詰らん坊」の感じを與へる。丹念に書かれてゐるが、作者の苦悶が紙上に現はれてゐない。直ぐにこの女を女優にしようと企てるのも滑稽だが、この作者は自分の接近した女は、誰れをでも女優にしようと、大眞面目で考へてゐたのだから妙だ。

「耽溺」一篇の苦悶は、些少の金がありさへすれば、直ぐに解決することであつたが、作者は全心の努力を試みてゐるに關はらず、運命的に窮乏に苦しめられてゐなかつたので、「妻が痩せたのを聯想するせいか、父も痩せてゐたやうだし、今相對する母（繼母）もまた頰が落ちてゐる。僕

は家族にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた」と、多少の自責の弱音を洩らしたり、免職を氣にしたり、國府津の負債の仕末をつけるために、妻君の衣類を質入れすることを、「殘念なほど明確な決心」と云ひ、「僕がわざ〳〵（年上の妻に）若作りさせるために買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、燃えるやうな緋縮緬には妻のもとの若肌のにほひがするやうなので、僕はこつそりそれを嗅いで見た」と、花袋の「蒲團」見たいな氣持を現はし、また「今の妻と吉彌とはどちらがいゝ？」とわれとわが心にたづねて、

「無論吉彌だと、云切りたいのだが、心の奥に誰れか耳をそば立てゝゐるものがあるやうな氣がして、さう思ふことさへ憚られた」と云ふなんかは、當時の泡鳴がまだ初心だつたためであつた。さういふところに、所謂人間味なるものがあつて、批評家に喜ばれるのであらうが、しかも、そんな凡庸な人間味に捉はれてゐるやうでは、泡鳴に特異性がない譯だ。すべての感傷主義を打破して自我に徹するところに、彼れの強さがあるのではないか。

彼れを裏切つた吉彌（おからす藝者）が、惡性の眼病に罹つてゐるのを見屆けて、「いゝ氣味だ」と喜んで凱歌を上げるのが、結末になつてゐるが、さういふところは泡鳴の稚氣ある特色である。

三

明治四十二年の末であつたと記憶してゐる。私は目白坂のほとりに住んでゐた。紅葉の頃京都に遊んで、有馬や大阪を經て故郷へ歸つて、歸京後は新年號の小説に筆を執つてゐた。泡鳴が樺太の事業に失敗して、北海道をうろついて、やうやく歸つて來たと云つて、私を訪ねて來たのはその頃であつた。不思議にも洋服（馬乘洋服ださうだ）を着用してゐたが、外套は着てゐなかつた。頭健な彼れの顔も窶れてゐて、尾羽打枯らした浮浪人のやうな印象が與へられた。五部作の最後の「憑き物」に描かれてゐるやうな極度の窮乏と淋しさを經驗してゐた時なのだが、さういふ事情は、私にはよく分つてゐなかつた。例の通り愚痴や泣き言は、彼れの口から出なかつたから、私は彼れの失敗談も面白づくで聞いてゐた。彼れは、差當つて原稿の捌け口を見つけることと、女を手に入れることゝを志してゐると云つて、「一人は蕎麥屋の女で、一人は教育のある女だが、どちらにしようかと迷つてゐる」と、眞顔で云つた。かういふことをアケスケと云ふのは、世の笑ひ草になるのであるが、しかし、私は、今度彼れの五部作の終篇を讀んだ後で、かういふ彼れの話を思ひ出すと、哂ふ氣になれなかつた。假面を脫した人間の眞實の聲のやうに思はれた。あの場合、どんな女でも側に置かなければ、生存に堪へられなかつたのであらう。そして、

間もなく選ばれたのは、教育のある女たる清子女史であつた。泡鳴は女史によつて救はれたのであつた。彼れは全身を捧げて女の愛を求めたに違ひない。彼女が增長したのは自然の勢ひであつた。

私は、泡鳴全集に收められてゐる日記集を、今度はじめて讀んだ。彼れがある新聞の記者になつて大阪へ行つて、池田に住んでゐた時分のもので、明治四十四年四月から、大正九年四月まで續いてゐる。殆ど止切れてゐない。ここにも彼れの熱心と忠實とが見られる。

私が彼れと頻繁に往來してゐたのは、この日記以前のことで、その後は疎遠になつた。「巢鴨日記」の大正二年八月二十一日のところに「晴、山田（孝）氏、田代氏と共に來訪。正宗（白）氏來訪……」と記されてゐるが、その時が私の方からの訪問の最終であつた。彼れの死んだ時にも、私は東京にゐなかつたので、葬式にも出掛けなかつた。彼れの最後の同棲者とは面識もなかつたので、弔辭をも送らなかつた。

泡鳴の逝去を知つたのは、旅行中に手にした田舍新聞の記事によつたのであつたが、彼れが病氣に罹つてゐたことを全く知らなかつた私は、寢耳に水の感じがした。「あんな強い奴が、そんなに脆く死んだのか」と型の如き無常觀を呼起した。

かつて、ある知人の死について、泡鳴に話した時に、彼れは「死ぬ奴は馬鹿だ」と云つたこと

があつたが、私はそれを思出した。古代神道にも現はれてゐる生々主義は、彼れの信仰であつて彼れは、無内容空虚を意味する「死」を蔑視してゐた。「僕に心熱が無くなつたら死も同様だから舌を噛んでも死ぬる」と云つてゐたこともあつた。死後の生命など說く宗教を愚劣極まるものとしてゐた。私は決して同感はしなかつたが、それ等についての、彼れの確信が、口先ばかりではないのを壯としてゐた。そして、死者生前の意志を重んじる慣例に從ふならば、泡鳴の追悼會なんか催すのは無意味であると思つてゐた。

「見ぬもの清し」といふ諺がある。また「聞いて極樂、見て地獄」といふ諺が、いろは加留多にも出てゐる。私は、東京に於ける泡鳴の住居はをり〳〵覗いてゐたし、その生活振りをも知つてゐたのだが、大阪に於ける彼れの生活は一瞥もしてゐなかつた。それ故「池田日記」にしるされてゐる彼れの生活だけは、不斷の泡鳴らしくない床しさをもつて私の目に映じるのである。箕面道にある閑靜な住宅で蜜蜂なんかを飼つて、例の「教育ある女」と、文學的生活を營んでゐる有樣が想像される。しかし、それは、直接に彼れの池田に於ける現實の生活振りを見ないで、たゞ日記を通して想像してゐるためなのであらう。離れて想像してゐると、我々文學者の生活は、多くは面白可笑しく過されてゐるやうに思はれるのであらうが「聞いて極樂、見て地獄」である。

日記を通覽すると、彼れは、一々の原稿の題目と、それの捌け場所と、受取つた原稿料の高と

を、完全に書留めてゐる。一圓二圓の零細なものだつて洩らしてゐない。極度の生活難に襲はれてゐた一葉の日記にだつて、うまい物を食べたいために金の欲しかつた子規の病床日記にだつて、收入のことをかう細かには書いてゐない。泡鳴は現實に徹してゐたので、金錢の事が絶えず心にかゝつてゐたのであらう。彼れは金に關し決してだらしのない人間ではなかつた。

彼れは實によく書いた。それも、雜誌社の强請や生活費の必要から、大儀なのを我慢して書いたのでなくつて、つねに意氣込んで筆を執つた。「實行卽藝術」「藝術卽實行」といふ信仰によつて、勇士が戰場に向ふ態度で机に向つた。……彼れはかつて云つたことがある。「朝目を覺まして新聞を讀んで、愚論愚說に目を留めると、こいつをやつつけようと思つて、寢床を出る」と。

私は、泡鳴の口から出た言葉を、今思出して書いてゐるのだが、私が書くと、彼れ獨特の語調がどうも現れて來ない。粗野な彼れの言語や文章にも、他の模し得ない力の響きがあつたのだ。兎に角、彼れはよく書いた。死後間もなく、豫約出版の形で出た泡鳴全集十八卷が私の座側に竝んでゐる。しかも、彼れの一生の文章が悉く此處に集められてゐるのではない。私の取扱つてゐた讀賣新聞文藝附錄に頻繁に揭げられた彼れの論文の多くは、この全集の目錄を搜しても見當らない。……彼れはやうやく世に重んぜられかけた時分に死んだのだが、若し今まで生存してゐたなら、どれほど多量に生產してゐたことであらう。老いても氣力の衰へさうでなかつた彼れは

「全集」として、五十卷にも百卷にも達するほどの製作を敢てしたかも知れない。

日記のうちに、原稿を××社へ送ると書いてあつても、必ずしも××社から寄稿を依頼されたのではなかつた。だから、××社から原稿返るといふ記事が多い。採用されないで突返されたことを意味してゐる。しかし、そのために氣を落すやうな彼れではなかつた。編輯者に對して女性的の怨みを抱くやうな彼れでもなかつた。「こいつやつゝけよう」と思つて、書いた抗議文を、未知の新聞社長や名士に送つて、相手にされなくつてもしよげなかつた。

日記によると、彼れの得た原稿料の高は甚だ輕少である。書きおろしの大論文集が、わづか五十圓ばかりで取引されたりしてゐる。これではいくら書きなぐつても貧乏する譯であつて、さすがの彼れも、文學ではろくな生活は出來ないと、文學に見切りをつけて、樺太の蟹の罐詰業を企てる氣になつたのだ。これが成功してゐたら、實業家岩野美衞で羽をのばして、「おからす藝者」や「北海道のすべた女郎」によつて、辛うじて耽溺慾の滿足を試みないでも、美妓を蓄へた妾宅の二三軒を持つて、彼れの好きな豐太閤や伊藤博文を氣取つてゐたかも知れなかつた……。しかし、失敗したればこそ「放浪」や「斷橋」や「憑き物」のやうな名作が現はれたのだ。

彼れが樺太へ出發する少し前に、私を東片町の陋宅に訪問したことがあつたが、その時、私の知人である株屋が座に居合せた。株屋は、泡鳴の計畫を聞糺した上、

「それは止した方がいゝね。そんな危いことをしないで、文學者は文學をやつた方がいゝぢやないか」と、眞面目に忠告した。私も同感の意をあらはした。

二三年後に、その株屋に會ふと、

「いつか君のとこで會つた蟹の鑵詰をやると云つた男はどうした?」と、彼れは訊ねた。

「無論失敗して、一文なしで歸つて來た」

「だから、おれがよく云つて聞かせたものを」と、株屋は冷笑した。

しかし、今考へると、泡鳴の樗太行は文學者として內容を充實させるための行爲であつたものだ。その樗太行の失敗は表面だけのことで、內面的には決してさうでなかつた。夏目漱石は、書齋にあつて、傑れた天分をもつて人間の心理の研究をして「心」や「行人」や「明暗」などの名作を出した。しかし、泡鳴が漱石のやうな生活を續けてゐたなら、粗雜な凡作しか世に出せなかつたであらう。北海の風雪にぶたれながら、奮鬪をつゞけてゐるために、彼れの作品に自から深さが加はつたのである。

四

泡鳴の評論には獨り合點が多い。文章もまづいので讀みづらい。しかし、日本の文學者には珍

らしく、確固たる自己の哲學を持つてゐるのに、私は好感を寄せてゐる。浮世の風波に對して、この哲學が彼れに取つては、一枚の板子ともなり、笠とも簑ともなつてゐた。彼れは日本主義を皷吹し、極端な自我主義を主張してゐたので、今日流行の思潮とは相背いてゐる。今なほ生存してゐたなら、さぞかし多勢を相手に、死に物狂ひの奮闘をするであらうと推察される。

彼れの論文では「刹那哲學の建設」と云ふのが、最も要を得る。彼れの意見としての內容が充實してゐる。チグハグなところが少い。文旨も可成り明晰である。

「單純に究理のための究理は、單純に藝術の爲めの藝術と同樣、人生にあつても、なくてもいゝ專門である。」

「所謂人類根性の奥には、神とか、正義とか、博愛とか、平等とかいふ、手段でなければ、空形式の俗習思想にからまれてゐるものがある。……個人個人の關係に於て、弱者の獨立存在は必要と思はれない。從つて、その不必要な弱者の獨立を助けようとか、教へようとか、救濟しようとかすることも不必要である。しかし、世間が兎角、その不必要なことに最もらしい理由を附して、これを行ひたがるのは俗習思想に拘束されてゐるからである。社會主義、世界主義、正義、博愛、慈悲、犧牲等の馬鹿々々しい觀念はすべてそれから起つてゐる。この諸觀念の有害無害はさて置き、根柢に於てまことに淺薄なものではないか。宇宙はたゞ優强者が弱劣者を吸收して行

くその足跡を印した名殘りだ。優強者の存在が乃ち宇宙である。人類の存在もこの優強者を維持して行くところにある。覩じ來れば、優強者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來た。」

これ等は珍らしい說ではないが、彼れはそれを日々の行動にも、文學の描寫論の上にも、及ぼした。彼れが自然主義者のうちでも、力のない客觀說を排し、主觀の燃燒を說き、描寫にも一元描寫を說いたのも、その結果であつた。加藤弘之は早くから「強者の權利」を主張してゐたが、當時の日本の通俗思想と妥協を試みることは忘れなかつた。泡鳴は他の哲學者の物笑ひを顧みないで、一本調子で徹底しようとした。ニーチェは超人を說いたが、泡鳴は、さういふものは外延的空想として排斥して、すべて、現實と自己とに於て徹底しようとした。

「佛敎の所謂小乘にせよ、大乘にせよ、僕等から見れば、五十步百步の相違だけであつて、孰れもまだ眞理を外的に追つてゐた。しかし、眞理は自己以外に無い。自己の誠實な努力と經驗との外に求めようは無い。」

「僕等は作品が永久に亘り生命であつても、なくつても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那に於て、人生全體の幻影が特殊の描寫に現はれなければならない。」

「物質的人生觀を有するもの等の作は、實質、すなはち、內容が空虛でなければ稀薄であるから、

情けないことには、まづ周圍、運命などいふ空想的道具を持つて來なければ埋め合せが出來ない。これは實に情けないことである。運命や周圍と云ふものは出て來る人物の活動若くは思想に先づ入つてゐなければ駄目だといふことを知らないのだ。」

優強者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展させるのだといふ彼れの哲學、心理は自己以外に無いといふ彼れの人生觀から出立して、彼れは文學に於ても刹那の描寫に於ても人生全體の幻影の現はれるのを志した。運命も環境も、出て來る人物の活動若くは思想に入つてゐることを期した。

彼自身の作品は、果してその哲學その文學說を具體化してゐたであらうか。

五

私は今度、彼れの五部續きの長編である「發展」「毒藥女」「放浪」「斷橋」「憑き物」を通讀した。

小說の題目からして、泡鳴式に殺風景である。「毒藥女」なんて、意味を成さないいやな題である。全集にはかういふ題をつけられてゐるが、この小說はたしか「毒藥を飮む女」として、中央公論に出てゐたものであらう。全集編纂者が體裁上字數を縮めたためか、あるひは何かの都合

で、勝手に改題したのであつたなら、無責任である。(全體この泡鳴全集の編輯振りは、甚だ不忠實である。この浩瀚の書物に、總目錄がついてゐない。著者の年譜もついてゐない。小說の解題も、どういふ譯か、第一卷についてゐるだけだ)

それに「毒藥を飲む女」といふ題目も、低級な感じのするいやな題である。薄々記憶するところによると、作者は、例の無頓着から、作中の女主人公の名前か何かを一篇の題目としたのであつたが、瀧田樗陰が、讀者の注意を惹くために改題したのださうだ。「××する女」とか「××する男」とかいふ題目が、あの頃ちよつと流行した。

「發展」その他は、「耽溺」の後を受けた作者の自傳小說である。父親が病死して、息子の義雄が家を繼いでからのことで、波瀾の多い數年間の事が義雄を中心として叙述されてゐる。小說家が大きな意氣込みをもつて長篇小說に從事しようと思ひ立つのは、大抵作者の自傳を書くことであるが、それは自然主義勃興以來の日本文壇特有の慣例になつてゐるので、泡鳴もその風潮に習つた譯である。しかし、彼れの如きは、その主眼から云つても、文壇の常套に從つて、義雄その他の小說名を用ひないで、すべて實名で通したらよささうに思はれる。彼れの排斥する遊戲分子が、そんなところにまだ名殘りを留めてゐる。

しかし、この五篇は、緊張してゐる。貧乏と情慾に苛まれながら奮闘してゐる一箇の勇士の面

目が躍動してゐる。「毒藥を飲む女」は、中央公論に掲載されたため、文壇の注意を惹き、小說家としての泡鳴の價値を重からしめたもので、そのために中央公論の彼れに拂ふ原稿料が少しばかり値上げされたことは、日記を讀むと推察されるが、しかし、五部作のうち、この一篇が特にいいのではない。五篇を通じて、彼れの通つた世界が開展されてゐるのだが、他の四篇は、東西の新聞などにきれ〴〵に出されたために、多くの注意を惹かなかつた。

無批判な批評家は、島崎藤村でも岩野泡鳴でも、自然主義の作家として、一つの檻の中に入れてしまう癖があるが、この二人は作風が非常に違つてゐる。田山花袋は一面は藤村に似て、一面は泡鳴に似てゐる。

藤村氏はかつて、「云ひたいことを何んでも露骨に云つてしまう人間は思慮が淺い」といふやうなことを、何處かで書いてゐたが、泡鳴こそさう云つた人間で、「詰らん坊」とも思はれる所以で、含蓄を志してゐる藤村氏と非常に異つてゐるのである。しかし、「春」以來の藤村氏の幾つかの生活記錄を通讀して學ぶところの少くなかつた私は、氏とは性癖を異にし作風を異にしてゐる泡鳴の五部作を通讀しても學ぶところが少くなかつた。

私は、心熱を燃やして奮闘してゐる泡鳴の五部作を、映畫に見てゐるやうな態度で傍觀した。作者が自慢してゐるやうな一種特別の人間を見てゐるやうな氣持もするし、世間通有の人間を見

てゐるやうな氣持もした。悲慘な感じもしたし、滑稽な感じもした。餓えと色とに惱まされてゐる汚らしい生物が、檻の中をのたうち廻つてゐるのを見るやうな氣もした。泡鳴の文章は粗野で、色彩なんかまるで缺けてゐる。長篇を通じて、感傷的の文字は殆んどないと云つていゝ。優美なところなんか、藥にしたくも無い。小說好きの婦女子に好まれる氣遣ひは全くないのである。

しかし、私には面白かつた。あの粗野な文章にも一種の力が籠つてゐる。あの野蠻な會話に、他の作家の模し得られない力と、一種の調子を持つてゐる。私は今度幾編を讀みつゞけてゐるうちに、泡鳴の小說の會話に、何とも云へない無技功の妙味のあるのをはじめて感じた。漱石作中の會話が巧みであるとともに、作られたわざとらしさと、もどかしさを感じさせるのとは異つてゐる。

古女房に愛想が盡き果てゝ、妥協の餘地のない嫌惡の感じは、至るところ生地のまゝに出てゐて、他の大抵の作家の試みるやうな言譯をしてゐないのが、私には面白い。子供に對してさへ殆んど愛情を寄せてゐないのが、日本現在の作家の作品のうちでは類例を絕してゐる。子供の死去の通知に接しても、葬式の煩はしさを感じるばかりで、哀れなんか感じないところにも、私は特異の味ひを感じた。

「人を呪へば穴二つ――早くあの千代子（妻君）がくたばつて呉れりやァ」と願つてゐたのに、意外にも、千代子が死なないで赤ん坊が死んだ。義雄は、龍土會の忘年會の幹事としてその夜出席しなければならないのだが、兎に角死兒の處分もしなければならなかつた。それで妾宅（と云つても、粗末な間借り住ひ）を飛出して、病院へ駈けつけると、赤ん坊が死んでゐる上に、他の子供もみんな病氣で入院してゐた。妻君千代子は、目が落込んで、頰はずつとこけて、顏全體に血の色とても少しも見えず、變挺な陰陽學なんかに凝つてゐて、憂ひと呪ひのおも影のやうに、義雄の目には映じてゐるのだが、かういふ夫妻が、死兒を前にしての感情の交錯や會話のやり取りは、凡作家の筆と違つて、名優の舞臺を見るやうに、私には感ぜられる。（「毒藥女」中の數ページを見よ）

「死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいゝくらゐのものだ」

「どうせあなたが死ぬ〳〵と云つてたから、あの子もその通り死んだのでせうし、うちには誰れも人情にあつい人がゐないのだから……まあ、とに角、死んだ兒の顏でも見納めに見ておいでなさいよ」

「血の氣のなくなつた顏などァ、手めへのを見てゐりやァ充分だ。手めへマイナス氣ちがひイクオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなも

のも、もう何度も見飽きてらァ」

棺桶を送り出しといて、義雄は、藝者などのゐる賑やかな龍土會の宴會へ出掛けるのだが、かういふところや、これに似寄つた他の叙述を讀むと、私はしば〳〵四谷怪談を見てゐる時と同じやうな感じがすることがある。義雄は民谷伊右衞門に扮して動いてゐるやうだ。彼れの目に映る千代子は、毒を飲まされたあとのお岩である。

南北の描いた舞臺は、凄慘であるとともに茶番氣もあるが、泡鳴の描いた小説の光景も、凄いうちに滑稽味が伴つてゐる。民谷伊右衞門が極惡非道の結晶ではなくつて、人間の弱さを有つてゐる如く、義雄も苦悶の哲理に徹しようと努めながら、まだ至らないところがあつて、そこから滑稽味が流れ出るのである。

棺桶を病院から送り出したあと、千代子がすすり泣きして袖を目に當てゝゐるのに、義雄は顔を背けて、愁ひの色を隱して、氣を無理に持直して考へた。死に行くものは自分に關係がない。——亡父でも自分に殘して呉れたのは、たゞ梅毒もしくは痔と僅かな財産だけだ——千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

「さうだ、どうしても、わが國の極北へ行かなければならない。——でないと、あいつ、意志が

弱いのだ、する〳〵と吹聽ばかりして、何も着手しないといふ、友人間のそしりを脫することが出來ない」

この伊右衞門が、友人の思惑を顧慮するなんか、自から固持してゐる筈の「悲痛孤獨の哲理」に徹してゐない證據であるが、四谷怪談の伊右衞門にもさういふ弱點がある。しかし、そこが、非道人にも人間味が洩れてゐるところだと、讀者や見物の道德性が滿足するのかも知れない。

島崎藤村氏の「芽生」は、幼兒の死を描いた小說であるが、それと、これと比べると、作者の態度も筆使ひもいかに烈しくちがつてゐるか。藤村氏のは人間恩愛の至情を寫してゐて、讀者の淚を誘ふのである。父は子の死に對して「我もまた、何時までかあるべき……」とか「芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た」とか、溜息を吐いて感傷語を吐いたりしてゐる。泡鳴の方では「もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつ（他の病兒）も今のうちに死んだ方がましだのに」と、病人の顏を見ながら云つたり、これから「自分のこれまでの失敗と不評判とを取返して自分の同時にまた全人的發展なるところの社會的發展をも實現することが出來るといふ希望が輝いた」と考へたりしてゐる。藤村は至純至情の人間性に浸り、泡鳴は「死んだものは掃き溜めへでもほうり込め」といふ傍若無人の意氣で進んだ。

泡鳴はファウストなどを無內容な古典として輕蔑してゐるが、ファウストが、彼れの爲めに罪

を犯したマーガレットを牢獄に見舞つたあと、彼女の苦惱なんかはまるつきり忘れたやうに、百花咲亂れる野に横はつて、山を仰ぎ虹を見て人生を面白さうに夢見てゐるのは、泡鳴の化身である義雄が、惱める妻子を踏みつけて極北の事業を夢見てゐるのと、同樣の心意氣ではないだらうか。過去を拋つて積極的に進む意氣は似寄つてゐる。ファウストが無內容である苦がない。伊右衞門の心が泡鳴の心に內在してゐたのと、メフィストの心がゲーテの心に內在してゐたのと同樣である。たゞゲーテは優美華麗な詞句を用ひ、泡鳴は蠻力で書通したのがちがつてゐるのである。

しかし、貧乏と蠻力とは、世に迎へられないので、「芽生」の人々は、醫師や看護婦に好意をもつて優しく取扱はれてゐるのに、泡鳴の小說中の人物は、ぞんざいに取扱はれてゐる。その光景が、粗野な描寫のうちに、自から浮んでゐるのが面白い。そして、義雄自身は、そんなことに心を痛めたり、メソ〳〵社會の不平を洩らしたりなんかしてゐないのである。

貧乏や不遇によつて氣を落とさないのは、泡鳴の小說を貫いてゐる一特色であるが、そこが、一方から云ふと、小說讀者の心を魅惑しない理由になつてゐる。貧乏や死別などの人間苦をうつしても、泣顏を見せて讀者の同情心に訴へる方が喜ばれるのである。

義雄が終始一貫して、いかなる場合にも、千代子をお岩あつかひして、寸毫の讓步をもしない

のも、他の作家の作品と異るところである。そして、千代子は作者から正當な取扱ひを受けてゐないのであるが、有樂座の音樂會へ義雄とその妾のお鳥とが出掛けてゐるのを察して、自分もそこへ行つて、二人を惱ますところから、二人の間借住ひを襲ふあたりは、嫉妬に狂つた女の動作や心理がおのづからよく描かれてゐる。「困りますから、早く歸つて下さい。子供が云ふことを聽きません。どうか、お願ひですから歸つて下さい。ほんとに、おねが――」と、往來の、乞食のこもの側から、窓を見上げて叫ぶあたりは、讀者に哀れをさへ傳へてゐる。女の嫉妬と、義雄がお鳥と他の男との關係についての嫉妬など、醜く、汚ならしく、しかし、生々しい實際を現はしてゐて、それは、「心」や「行人」に深く追窮されてゐる嫉妬の心理描寫が、上品であり藝術的で、現實味を缺いてゐるのと違つてゐる。……藝術と云ふものは、繪畫でも小說でもいかなる醜い題材を描いても、それに接する鑑賞家に、不快な感じを起させるようではいけないので、泡鳴のを讀んで行くと、彼れに藝術的天分に何か缺けたところのあることが察せられる。それに、粗野で無愛想なお鳥のモデルであつた女は、かつて著者に連れられて、例の「メリンス無地の牡丹色の被布」を着て、一度私の家へ訪問したことがあつたので、讀みながら、そのいやな姿が目について私の興を醒ますのである。

泡鳴は身を以つて小說をつくつてゐたので、そこに眞實の强みがあつたのだが、自己に直接に

關係のない材料を取扱つたものは、どれも大抵は、蕪雜で獨り合點で拙劣だ。戲曲のやうな客觀的才能を要するものに、傑作のないのは當然である。

彼れは、大津事件の津田三藏を題材として、一篇の小說を書いた。かつて伊藤公を小說に書かうと云つてゐたから、「そんなものが君の腕で書きこなせるだらうか」と、私が云ふと、「そりや書けるさ」と、例の自信を現はして、熱海の樋口で聞いたことがあつて、それによつて、伊藤の內面生活に喰入ると云ふやうな抱負を述べてゐた。剛情な自信家であつた彼れも、一面非常な輕信家であつた。容易に他人の口車に乘せられるのであつた。オキシヘラーとかゞ健康にいゝと云つて、頻りにその提灯持をして、私に勸めたこともあつたが、その價値について根據ある知識があるのではなかつた。彼れはかつて、旅先から讀賣新聞に、彫金術に關する長つたらしい論文を寄せたことがあつたが、それは變なものだつた。それを讀んだ專門家は嘲笑してゐた。あとで泡鳴に訊くと、彼れは、溫泉場で知合ひになつたある彫刻家（それは、名も知れてゐない男）から意見を聞かされて、それを唯一の根據として堂々たる論文を書いたのであつた。日常の座談にも、人の一言を盲信していきり立つことがあつた。……樺太の事業に失敗したのは當然であつた。

六

樺太で雜作なく失敗して、すご〳〵北海道へ戻つて來た彼れは「思ひ返へせば、彼れは人を信じ過ぎてゐた」と、やうやく目が醒めたやうに反省してゐる。

「放浪」「斷橋」「憑き物」は、一文無しで孤影悄然として北海道をうろつきながら、まだ一分の未練を事業に對して殘してゐた間の經驗記錄で、泡鳴一代の傑作である。私は、以前きれ〴〵に讀んでゐたのを、今度はじめて通讀して、豫想外の興味を覺えた。藝術として缺點だらけであるにしろ、人を動かす力は、明治文學中の何人にも劣らないのである。

東京の雜誌二三冊と手帖と、不斷着の袷と袷羽織とメリヤスのシャツとを入れた風呂敷包一つを總財産として抱へて、札幌へ戻つて來た田村義雄は、宿を取る費用を持つてゐなかつたので、ある友人——友人と云つても、十年も會はなかつた昔の同窓で、樺太渡航前にちよつと立寄つただけの間柄——の家のガラス戸を開けて「歸つて來ましたよ」と、無雜作に入つて行つたところから、小說ははじまつてゐる。

その家は、薄給の教師の家だから、寄食される方も迷惑だし、寄食する方も心苦しいわけである。東京の左ほどでもない文學者も田舍へ行くと、事々しく歡迎されるのが、常例であるが、義雄は無一文の淋しさを心のなかに潜めながら、賑やかな歡迎を受けた。これで直ぐ歸京したなら、

一ぱしの名士として記憶を後に殘して、襤褸を見せなかつたのだが、失敗したまゝ、何もいゝ當てのない東京へ歸るのが無念さに、この北地で何かし出かさうと考へながら愚圖々々してゐた。當て事は次から次へ外れて行く。敬遠されたり冷遇されたり愚弄されたりしながら、弱さを見せまいとする彼れの奮闘は、私には、有るがまゝに見た人間生存の眞相見たいに思はれる。

「世界に向つて大貿易を開くのも、一國をまとめてその手中に繰縱するのも、自己一身に立籠つて本能の無飾的な發展を全くするのも、事業並びに實行としては、決してその大小と高下とはない」と云ひながら、さすがの彼れも、現在の見窄らしい放浪生活に堪へられなくて「しかし、思ふまゝに、外面的な實行にも、もつと自己を發展して見たい」と興奮してゐる。

後藤男爵や、法相何某や、伊藤公爵などが渡來して、全道の人氣を湧立たせてゐる間に、內面的英雄たる彼れは、路傍の乞丐兒の如く人に顧みられなかつた。せめてこの機會に、北海道の巡遊だけでも試みたいと志しながら、乘車券と些少の旅費とを新聞社から得るために、いろ〳〵な屈辱を經なければならなかつた。彼れがやうやく巡遊の途に上つて、馬なんかに乘つて奥深く進むところは、痩馬に跨りながら、騎士氣取りで魑魅魍魎の退治に向つてゐるドンキホテの後姿が連想される。

彼れは、札幌に於て中學校の演說會に招かれたが、その頃、ハルピンに於ける伊藤公爵の凶變

が傳はつてゐたので、彼れは演壇に立つと、まづ伊藤公の略歴から說きはじめた。しかし公について語るのは自分自身を語ることであつた。熱心が加はつて來るに從ひ、われを忘れるほどの大聲をつゞけざまに發し、それが講堂中を振動させた。主會者が氣遣つて「あまり大きな聲を出すのは身體に惡いよ」と注意したほどであつたが、滔々二時間つゞきで自己の哲學を辯じ立て「おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙その物だ」などと叫んだ。講堂の聽衆はどつと笑つた。義雄は大いに怒つて、人々の謝つて止めるのも聞かず、鳥打帽子を忘れたまゝ驅け出した。

そのため、彼れは周圍の知人から、發狂したとの噂を立てられた。ある知人は、彼れの精神狀態を檢査するために、いろ〳〵な質問を呈したりした。知人と彼れとの間の問答のあたりは實に面白い。セルヴンテス作中の主人公の宗教的問答や氣燄が思ひ出される。小說讀者よ、ここを讀んで笑ふ勿れ。笑ふのはいゝが決して冷笑すること勿れ。愚弄飜弄のうちに辛うじて食を得て、志すことのすべてが鵞の嘴と喰ひちがつてばかりゐる主人公が、毅然として自己の所信を守つて、愚痴を云はず卑屈な態度を見せなかつた幾ケ月間の放浪の旅に於ける生活振りを顧みよ。哂ふにはあまりにいたましき人の世なのである。

知人が冷語を殘して去つたあと暫らくして、つか〳〵と入つて來る跫音がして、「わつ」と彼れの枕もとに泣き伏したものがあつた。それは、例のお鳥であつた。

「どうしたんだ」彼れがびつくりして首を上げると、
「き、氣違ひになつたと云ふぢやないか」と、すすり泣きだ。
「馬鹿！　だ、だれがそんなことを云つた？」
ところで、この二人の男女は、互ひに深く相愛し合つてゐるのではなかつた。
義雄は、この放浪の旅に於て柔しい愛に餓ゑてゐた。物足らない淋しい心を異性によつて慰められたかつた。たま〳〵手に入つた零細な原稿料などを袂に入れて、あるひは知人のお伴になつて、土地の遊女屋の客になつて、時には馴染の女の手管にやす〳〵と乘つていゝ氣になつてゐたこともあつたが、それだけでは、滿足出來なかつた。ところが、他人の家や安下宿屋の薄い冷たい夜具の中で、女欲しい思ひを凝らしてゐると、彼れに多少でも愛憎の拘はりを見せて呉れる女は、天上天下、例のお鳥一人であつた。東京にゐるお鳥の影だけが、彼れの空想に徂徠してゐた。で、その女を知人に對してのろけの種にしたり、その女に嫉妬を籠めた手紙や現狀の報告書を送つたりしてゐたが、つひにお鳥を呼び寄せる手筈がついた。
「あの皮膚の美しさ、やわらかさ、敷島（遊女）などのとても及ぶところでない」と、頻りに空想を逞うして悦しがつてゐたが、しかし、彼女は、彼れの惡疾をうつされて不具同樣になつてゐて、屢々「元の身體にしてかへせ」と、彼れに迫つてゐた女であつた。「青年時代のやうな變愛神

聖論者でも、内容の空しいのを知らないやうな理想家でもなくなつて、靈肉合致の戀を欲する」彼れに滿足を與へるやうな女ではなかつた。

でも、彼れは、さういふ女をでも呼び寄せて傍に置かうとした。彼女の方でも、病身のために自活の道がなくなつて、彼れをでも手頼らなければ、どうしようもなかつたので、遙々北海道までやつて來たのだ。

義雄の寄食してゐる他人の家で、他人夫婦の目の前で二人は一別以來の顔を見合はせたのだが、その最初の會話はかうだ。

「早く病氣を直せ。病氣さへ直れば、もうお前の世話などにならん」

「まだ直らないのか」

「ふん。……醫者にも行けなければ、直る筈はない。あんなに何度も手紙で云うてやるのに、……手紙の意味が分らん人でもなからう」

「そりや、少くとも、お前よりは讀めるよ」

「讀めるなら、なぜその通り療治代を送つて呉れん？」

「送るにも、金がなかつたのだ」

彼れが知人にのろけたり、淋しい浮世の唯一の伴侶として心待ちにしてゐた女は、會つて見れ

ばかうであつた。傍で見てゐたその家の夫婦は可笑しさやら氣の毒さやらで、さう喧嘩にばかりなつてはお相談も出來ますまいから、仲直りをなさつたらどうです？」と取做さなければならなかつた。

「いくらおとなしく話さうたつて、あの苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をされてゐては」と、男は云ふ。

「苦蟲でも何でも、病氣を直して呉れたらよろしい。病院へ入れて貰ふ。入院さして貰ふ」と女は叫ぶ。

さうかうしてゐるうち、義雄は無理工面をして女を入院さすことにした。しかし、その入院はみじめなものだつた。東京の女として周圍の人達にほこりたいと、女らしい虚榮心を有つてゐた彼女は、却つて日に〳〵屈辱を忍ばなければならなかつた。遙々訪ねて來た甲斐がなかつた。それで、毎日沈み切つた顏してゐて、義雄に會ふと、きつと、泣くか怒るかするより外なかつた。

ところが、天長節の日、雪晴れの午後、彼女は珍らしくニコ〳〵した顏つきして、病院から義雄の下宿を訪ねて來た。

「天長節が嬉しいのか」

「そんなことでもない。別に嬉しいことがあるのさ」

彼女の扁髪の前髪に蒔繪のゴム櫛がささつてゐた。「林檎を送つてやるからと云ふて、東京の友達から送つて貰ふたのぢや……ゆふべ届いた」

彼女の機嫌のいゝのは、うるさくないだけでもいゝと義雄は喜んだが、この二人の男女が睦じく話し合つたのは、この時だけであつた。數巻を通じて出没してゐる彼女に對して、讀者がその心根をいぢらしく感じて親しみを覺えるのはこの所だけであると云つていゝ。……ところが、それも暗黒の雲間からちらと洩れた一すぢの光に過ぎなかつた。

二人は仲のいゝ折をはずさないで、市中の散歩に出掛けたのだが、結果は幻滅に終つた。途中で彼女の身體が痛んだので、知人の家へ寄つて、義雄は持前の氣焔を吐いて時の經つのを忘れてゐたのだが、「葡萄色の唐縮緬羽織」のお鳥は、其家の妻君の「小豆縮緬の羽織に黄八丈の小袖」を着てゐるのに目を注がないではゐられなかつた。自慢のゴム櫛なんかを喜んでゐる自分がみじめになつた。

日暮頃に知人の家を出て歸途に就くと、間もなく、お鳥は突然「うそつき。畜生」と叫んで、義雄を亂暴にも突飛した。それから一しよに彼れの下宿に歸ることは歸つたが、二人の間の暗闘はつゞいた。

「病院へ歸るなら早く歸れ」と彼れが云ふと、

「歸つてる留守に、今夜、逃げてしまふんだらう」と、彼女が云ふ。

彼女は病氣のまゝ、知らぬ他郷に打つちやられるといふ恐れを抱いてゐる。彼れは、知人等が彼れの歸京費を醵金して歸らせようと噂してゐることを聞かされて、「北海道の新聞記者の成れの果て」のやうなみじめさを自覺したりしてゐる場合であつた。貧しいながらもこればかりは手放さなかつた記念の銀時計さへ、人に騙されて持ち逃げされてゐた。

互ひにおのれの思ひに耽つて默してゐたが、ふと、女は「あ、あッ」と叫んで突立ち上つた。肉體の痛みを感じたのである。

「どうした?」彼れもはね起きた。

「死の!一しよに死の!」

彼女の顏と聲とに惹かれて、彼れも咄嗟に死ぬ氣になつた。

二人は、死に支度をして出て死場所を捜した。ここが、五部作を通じてのどん詰りであつて、人の世の悲慘なる滑稽がひし〳〵と私の胸に迫るのである。二人はちつとも愛し合つてはゐないのだ。近松の常套的道行とは如何にちがつてゐることか。二人とも默々と歩いてゐる。義雄は、妻のことは云ふまでもなく、子供のことだつて些しも思ひ浮べてゐない。只昔の戀人と吾妻橋の上で生別れをしたことなんか思ひ出してゐる。いよ〳〵死に臨んだ間際に自分の胸の煮えくり返

るやうに、お鳥に對して憎惡を感じたりしてゐる。二人は互ひに他を憎みながら一しよに死なうとするのである。

でも、二人は抱き合つて、薄闇のなかを、鐵橋から飛び降りた。しかし、彼等は、冬中の寢雪として川床に積重なつた雪の上に落ちたのであつた。彼等の決心はそれで消えてしまつた。川床から札幌へ出るには、細い小川を渡らなければならないので、彼れは女を背負つて、編み上げの靴のまま流れをざぶ〳〵渡つた。四十歳近い男と二十二三の女だから、お牛を肩に長右衞門である。雪は降りだして次第にひどくなつた。

川を出て氣がつくと、彼女は、大切なゴム櫛を鐵橋を飛び降りる時に落してゐた。

「身代りになつたのだらうさ。また買へばいゝ」

「金がないのに、買へやせんぢやないか」

「そんなことはないだらう」

「買へやせん〳〵。探して來い」

「馬鹿を云ふな」

型の如き心中ではないので、人の世の悲慘なる滑稽がひし〳〵と私の胸に迫るのである。若し彼等が目的を遂げてゐたならば、彼等の死について、型の如き想像がめぐらされてゐたのであら

う。

私は、泡鳴のこれ等の小説を他の明治の傑作に比べて見た。鷗外の「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」などには、人間の悲喜哀歡の心理について揣摩臆測を逞うしないで、ある時代と、そこに生存してゐた一個人の外觀の行動を叙してゐるだけで却つて、ある人間の眞面目が浮かび出てゐるやうに思はれた。漱石の「心」などは、ある心理の追窮を盡くしたものである。この二作家は、明治の作家中の最も學究的の作家であつたが、一生かゝつて磨き上げた彼等の心に、晩年に於て映つた人生は、如上の作品に於て現はれてゐる。その目とその心とその筆とが渾然として、藝術家としての彼等の特色を現はしてゐる。また有島武郎の「ある女」は、女性の強さ弱さ美しさ醜さを、微細に豐かなる文章によつて現はしてゐる。これ等に比べると、泡鳴のは著るしく粗野である。一見非藝術至極である。しかし、その非藝術らしいところに、彼れ獨特の生き〳〵した心熱主義の藝術があるのである。

七

自分は蛇を好む。蛇の直立したのが人間だ」と、泡鳴は何處かで書いてゐる。しかし、彼れの

云ふところの蛇は、シェレーが好んで用ひたやうな壯嚴美を現はすためのそれではなかつた。それで、五部作を通じて現はれてゐる彼れは、直立してゐる蛇の凄さと滑稽さを帶びてゐるが、「憑き物」以後の彼れの自傳小說は、よつぽどふやけてゐる。ぬらりくらりと匐つてゐる蛇で、直立してゐるやうな緊張味が乏しい。前者のいゝのは樺太北海道の慘苦が彼れを鍛えたためであらう。

在來の傑れた文學に比べると、彼れの小說はいかにも無作法である。人間に具はつてゐる藝術慾は、かういふ者では滿足し切れないので、多くの讀者は泡鳴の作品には面を背けるであらう。ある讀者は興味をもつて讀んでも、所謂「詰らん坊」の行爲の記錄としての興味であらう。しかし、虛飾を剝いで見たら、この「詰らん坊」の小說に、自己や周圍の人々の眞相について思ひ當るところが少なくないだらうと思はれる。少し馴染んだ札幌の遊廓の女が、「あなたほど正直な人はない」と感心してゐる。泡鳴は、才氣は乏しかつたが、物事を誤魔化さうとしなかつた。頭腦は不聰明であつたが、讀者に媚びようとはしなかつた。おれはかうだと臆面もなく自己を出してゐる。後人にどう思はれようとも、彼れは作家としては悔いるところのない生涯を過した譯だ。

「首が飛んでも動いて見せるわ」と云つた伊右工門の意氣は泡鳴にも見られた。

北海道から歸つて來て私を訪ねて來た時には、彼れの「痩せ方や顏容の蒼白かつたのは、殆んど

人間らしくなかつた」と、中澤臨川の云つてゐる通りであつたが、私との交際が疎遠になつた後年の彼れは、顏がつや〳〵しくなつて元氣がよかつた。次第に世に認められるやうになつて、生活もいくらか豐かになつたらかしつたが、それが次第に彼れの作品を鈍昧にしたのではないだらうか。有名な「征服被征服」なんか、獨り合點の、いゝ氣な小說である。

泡鳴の新體詩をところ〴〵讀んだ。殆んどはじめて、彼れの詩に接したと云つていゝのである。史詩「豐太閤」は、彼れの崇拜してゐた英雄を唄つてゐるに關はらず、通俗な豐公感を述べたに過ぎない。舊套的七五調がそこでは八七調となつてゐるにしろ、それを單調につゞけて行くのが、昔流行してゐた新體詩の調子を思出させる。私は、かういふ新體詩がきらひであつた。それで、詩の惡口を新聞によく書いてゐたので、泡鳴が最初私を突然社に訪ねて來た時にも、私の無理解な罵倒について不平を述べてゐた。

しかし、今度「戀のしやりかうべ」と題した詩集に收められた小詩を讀むと、どれも面白い。小說では蕪雜さ汚ならしさ無器用さが目立つが、これ等の詩にはさういふものがなくつて、從つて反感なしに私の心に入つて來る。言葉と感じとが一つになつて響いて來る。現實の生活苦を通つて來た人の詩である。「死外七編」なんか、ことに愛誦に價ひしてゐる。泡鳴は本來、小說や戲曲の作家としてよりも詩人としての天分を豐かに有つてゐたのではあるまいか。小說發展のは

じめの方に書かれてゐる父親の死亡前後に於ける作家の氣持は、却つてこれ等の詩に、餘計なまぜ物なしに、よく現はれてゐる。作者の氣持と周圍とが渾然とした象徴になつてゐて、わざとある物を對立させたやうな、作られた象徴詩ではない。「胸のきしめき」「火葬」「庭木の刈り込み」などからは、在來の漢詩和歌俳句などから受ける感じとはちがつた、もつと自分の心に密接した詩の感じを、私は受けた。……私は、現代の詩人の作品を殆ど讀んでゐないから、泡鳴が、他と比較して、どういふ位地にゐるか知らないが、今、彼れの幾篇かの詩を讀んで、文學者岩野泡鳴の眞價を新たに見直さうとしてゐるのである。

日本主義を力說し、個人主義を主張してゐた泡鳴には、今日勢ひを得てゐる思想から見ると、時世おくれの古さがあるのだが、よくも惡くも、彼れは人眞似をしない獨自のものを一貫して持つてゐる。時代を隔てゝ讀んでも、いきくした印象の與へられる所以である。

いろ〳〵な問題に關する彼れの感想錄についても、彼れの私生涯についても、書きたいことがいろ〳〵浮んで來たが、あまり長くなるから、このくらゐで筆を擱くことにする。

（昭和三年六月二十日）

森鷗外論

一

「小説は澤山讀む。新聞や雜誌を見るときは議論なんぞは見ないで、小説を讀む。しかし若し何と思つて讀むかと云ふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小説は、此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云ふ心理的狀態で書いてゐるかと云ふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとか云ふ積りで書いてゐるものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いてゐるものが、却つて悲しかつたりする。」

森鷗外は、「キタ・セクスアリス」(明治四十二年の作、時に、作者四十八歲)のうちにかう書いてゐる。彼れが、當時の日本文壇の作品を、內心馬鹿にしてかゝつてゐたことは、これによつて察せられる。

「そのうち自然主義と云ふことが始まつた。金井君は此の流儀の作品を見たときは、格別技癢(ぎやう)を感じなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。云々」と、同じ小説のうちに書いてゐる。

日本の自然派と自稱する作家どもが、みんな一樣に色情狂見たいなことを書いて、「これが人生だ」と云つてゐるのを、不思議に思つた彼、鷗外は、ふと、「自分の性慾的生活の歷史を書いて見ようか」と思ひ立つて、この異色のある「キタ・セクスアリス」の一篇を作り上げたのであつた。二葉亭四迷の「平凡」も、當時の自然派作者の性慾描寫に刺戟されて思ひ立つたものらしかつたが、しかし、「平凡」には、舊文學の臭ひが附纏つてゐた。鷗外の古い感情から脫却した明確適切な描寫とは、類を異にしてゐた。

全體、この「性慾史」ばかりではなくつて、鷗外の後半生の小說と戲曲とは、當時の自然派に刺戟されて出現されたのであつた。自然派の作品を馬鹿にしながら、「おれも書いて見よう」といふ創作慾を、彼れは起したのであつた。彼れが前半生に試みてゐたいろ〳〵な近代歐洲文學の翻譯は獨步花袋藤村など當時の文學青年に清新な感化を與へ、舊套を脫した新文學の發生する原因の一つとなつたのであつたが、後では、鷗外自身が、知らず識らず獨步花袋藤村などの感化を受けた譯になるのである。私はそこに面白みを感じてゐる。「藝術品に對する要求が高いために容易に取り附けなかつた」創作の筆を自由に揮つて、鷗外として文學的事業を史上に留むるやうになつたのは、自然派の刺戟があつたためであつた。島村抱月が、歐洲に留學して學んだものよりも、日本の自然主義の氣運によつて、心の扉が開かれたと同じやうに、鷗外も、長年月の間に讀破し

來つた種々雜多な歐洲文學よりも、日本の若輩の、彼れの目からは浮薄低劣に思はれる新文學の作風によつて、自己の天分と學殖とを藝術の方へ、傾瀉すべき戸口を見つけたのであつた。それが、「遊び」氣分であつたにしろ、馬琴の所謂「有用な書物の購求費のために書かれた無用な文」であつたにしろ、私などは、後半生の創作に於て、鷗外に重きを置くやうになつてゐる。「現代日本文學全集」中の鷗外集が、初期の數種の短篇小說の外は、飜譯ばかりで埋められるやうだつたら、いかばかり淋しいことであらうか。私は、彼れの學殖の深さ淺さはよく知らないし、またそんなことはどちらでもいゝと思つてゐる。しかし、その創作は、讀みつゞけると、滾々として盡きざる興味が覺えられる。私は人生の事と文學の事について、彼れの作品から學ぶところが少なくない。

二

私は、年少の頃「國民之友」で讀んだ「舞姫」と、「水沫集」で讀んだ「文づかひ」と「うたかたの記」とを、久し振りで讀直した。そして、わが生の若かりし夢を偲んだのであつた。今讀んでも、好短篇として翫賞し得られるものである。「わたくしは少年の時、貸本屋の本を恥讀した。：：讀本、書本、人情本：：さういふ本を讀み盡くして、さて貸本屋に、何かまだ讀まない本は無

いかと問ふと、貸本屋は隨筆類を推薦する。……わたくしは貸本文學卒業者になつた」（細木香以」のうちに）と、自から云つてゐるほど、江戸文學に熟通してゐたのに關はらず、逍遙露伴紅葉その他同時代の他の多くの作家のやうに、舊幕時代の舊い文學に感染されてゐなかつた。

これ等の三篇は、いづれも歐洲留學記念の作品である。若かつた鷗外は、異鄉の土地と人とを題材として、自己の青春の夢を語つてゐるのであるが、これを、紅葉が、「三人妻」や「伽羅枕」などに、江戸情調の遊女女妓を憧憬し空想して、自己の青春の夢を語つてゐるのに比べると、若い夢のさまざまが思ひ出されて面白い。かの三つの小說は、歐洲近代の短篇小說の體裁を模したものだが、當時の青年作家たる鷗外の心臟がそこに鼓動してゐるのである。島崎藤村の抒情詩「若菜集」などと同じやうに取扱はれるべきものである。詩趣情味が豐かである。それに氣品も添つてゐる。後年の史傳的小說が學究の考證記事のやうな無味乾燥に墮さなかつた所以である。「即興詩人」のやうな翻譯以上の翻譯が現はれた所以である。「エリスが生ける屍を抱きて千行の淚を濺いだ豐太郎」（「舞姫」）の心を作者の心としてゐた鷗外は、アヌンチャタとアントニオの薄倖な戀物語にも心を捉へられたに違ひなかつた。「淚は讀むに隨ひて流れ、わが心の限りの淚と化して融け去るを覺えたり」とは、アヌンチャタの最後の手紙を讀んだ時の、アントニオの心を叙したばかりではなく、譯者や讀者の心も述べられてゐるやうに思はれる。

若い男女の戀を描いて、情景兼ね具はつた小説は、明治以來「卽興詩人」に及ぶものはなかつた。私は三たびこの物語を讀んだ。最初は「しがらみ草紙」「めざまし草」などに斷續的に揭げられたのを、上野の圖書館に保存された古雜誌の綴込みを搜して止切れ〳〵に讀み、その後、春陽堂出版の四號活字の二冊本によつて、首尾を通じて讀んだ。私は二十代に讀んだ翻譯文學で、最も忘れ難い印象を留めてゐるものは、この「卽興詩人」と、小金井きみ子女史の「浴泉記」とである。私は過去を追懷して、數年前に、新刊の縮刷本を買つて、「卽興詩人」の第三回目の復習を試みたのであつたが、私は自分の心がもはや作中の男女の心から遠く離れてゐるのを感じない譯に行かなかつた。

作者たる鷗外も「卽興詩人」あたりを打留めとして、青春の夢から醒めて、心は枯淡になりかかつた。現實世界の實相を見る目も冴えて來たのであつた。「埋木」「浮世の波」「惡因緣」など、「水沫集」に收められた前期の翻譯と、「一幕物」その他の後期の翻譯とを比べると、譯文の調子が變つてゐるばかりでなく、原作の選擇が異つてゐる。鷗外も以前は感傷的分子に富んど物語を譯することを好んでゐた。彼れが若し、もつと早く、「ヰタ・セクスアリス」を書いてゐたなら、あゝまで情熱を缺いた科學的態度を持してのみ、筆を執らなかつたであらう。

「世間の人は今の自分を見て、金井は年を取つて情熱が無くなつたと云ふ。しかし、これは年

を取つたためでは無い。自分は少年の時から、餘りに自分を知り抜いてゐたのでその悟性が情熱を萠芽のうちに枯らしてしまつたのである。……或は結婚もしなかつた方がよかつたかも知れない。どうも自分は人並はづれの冷淡の男であるらしい」と、作者は「モタ・セクスアリス」の結末に於て自己を省みて、一先づかう云つてゐる。しかし、忽ち又考へ直して「……自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけのことである。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。……自分は無能力では無い。インポテントでは無い。世間の人は性慾の虎を放し飼ひにして、どうかすると、其背に乘つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性慾の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅と云ふのがある。馴れた虎を傍に寢かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。あの虎は性慾の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰へてゐないのである」と云つてゐる。

性慾については兎に角、藝術に於ては、鷗外の意氣は晩年まで衰へなかつた。その悟性も學殖も、彼れの藝術を培養こそすれ、萎縮させることはなかつた。

彼れは、無論天才型の作家ではなかつた。しかし、創作は片手間の仕事で「遊び」氣分で筆を執つたことも多かつたのであらう。非凡な作品、深刻な藝術は彼れの全集のうちから捜し出せないかも知れない。……しかし、近年の私は、明治以來の種々雜多の作品のうちでは、鷗外の作品

を最も愛讀してゐる。その文章の的確明快なのを好んでゐる。無雜の痕のないのを、讀みながら快く感じてゐる。作品を通して窺はれる作家の心境に何となく親しみを覺えてゐる。何よりも鈍味なところのないのが氣持がいゝ。

三

端的に鷗外の晩年の心境の露出されてゐる小品「妄想」については、私はかつて感想を述べたことがある。「高瀨舟」は、他に托して作者の心境を述べたもので、渾然たる佳篇である。作意の晦澁を厭うてゐたこの作者は、自作自註の態度を取つて、いろ〳〵な小說に、屢々說明語を添へて、讀者の理解を助けるやうに努めてゐるが、それが却つて、鑑賞を不純にして、作品の幅を狹くすることもある。「高瀨舟」にも、この作の狙ひどころの說明が添加されてゐる。「財產といふものの觀念」と「死に掛つてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ること」との、二つの大きな問題が、この物語の中に含まれてゐることを自から指摘してゐる。しかし、この所謂二大問題なるものが、作者によつて解決されてゐるのではない。そして、私などは、問題を別にして、この小說に興味を覺えるのである。場面と人物と心理とが、寸分の隙のないやうに描出されてゐる。澄み切つた晩秋の月夜を見るやうな氣がする。

私は、鷗外晩年の作品では「高瀬舟」と「妄想」とを最も好んで、これまでに幾度も讀み返してゐた。「妄想」は、最も聰明であつた一人の日本人の人生觀として敬聽して、自省の資としてゐたのであるが、それとともに鷗外の作品解釋の鍵ともしてゐたのであつた。

私はこの二篇と「ぢいさん、ばあさん」とを好んでゐた。

「金毘羅」と「蛇」と「雁」とは、今度「現代日本文學全集」本によつて、はじめて讀んだのだが、かういふ小說に徵しても、作者の聰明な頭腦と明確な描寫力が認め得られるのである。鷗外は、ポオの怪奇小說の一つである「モルグ街の殺人」を「病院橫丁の殺人犯」と改題して、巧みに翻譯してゐる。その譯文には「ポオの推理的叙說は、今の日本文壇の好みに適しないから抄略する」といふ意味の添書きがしてあつたと、私は記憶してゐる。ポオの推理は微細を極めてゐて「黃金蟲」の如きは、その點で古今に類を絕した驚歎すべき作物であるが、それほど傑れた頭腦を有つてゐたポオも、一面、神秘不可思議な人生と宇宙とに戰いてゐたのであつた。しかし、鷗外は、推理に傑れた頭腦は有つてゐても、神秘な世界に分入つて彷徨することはなかつた。彼れは「有りのまゝ」の世界を見極めるだけに滿足して、人智で分りもしない世界に歩を進めようとはしなかつた。「人生宇宙の不思議に驚きたい」のが國木田獨歩の願ひであつたが、聰明なる鷗外は、さういふ願うて甲斐なき願ひに心を惱ませなかつた。十九世紀の終りに獨逸に留學してゐた

彼れは、歐洲の世紀末の思潮と文藝に接觸した最初の日本文學者であつた譯であるが、その思潮に感染しなかつた。ハルトマンの厭世哲學を理解しても、さういふ哲學に心醉し惑溺しなかつた。

日本流の自然派文學の「有りのまゝ」主義を標準として批判すれば、鷗外晩年の作品の多くはその標準にかなつてゐるのではあるまいか。

「金毘羅」と「心中」と「蛇」は、題材に神秘らしい影が附き纏つてゐるのだが、作者は、それを明るみに持出して、暗い影を殘さなかつた。愛慾の人情を描いた「雁」を讀んで、ことにさう思ふ。この可成り長い小說は、男女の色情についても、鷗外の目のよく働いて、理解の行屆いてゐたことを證明するものであるが、人情愛慾の不思議さについても、作者はそこに曖昧模糊の痕を殘してゐない。主人公末造にしても、その女房にしても、若い妾とその父親にしても、彼等の悲喜哀歡のもつれが、明かに秩序整然と說かれてゐる。底の知れない惱みが作品のうちに出沒してゐるのではない。……トルストイやドストエフスキーの文學と、わが森鷗外の文學との相違してゐる所以である。

「小說は說明をしてはならないのださうだが、自惚は誰れにでもあるもので、此の話でも萬一ヨオロッパのどの國かの語に飜譯せられて、世界の文學の仲間入をするやうな事があつた時、餘所の讀者に分らないだらうかと、作者は途方もない考へを出して、行きなり說明を以て此小說を書き

はじめる」（「百物語」）と、當時の雜評家を揶揄してゐるやうに、わざと堅くるしい說明語を用ひてゐるところもあつて「雁」のやうな人情小說に於てさへ、時々學者くさい筆法が散見して、讀者の素直な鑑賞を妨げるところもあるが、描寫の才能がないために、說明語を用ひてゐるのではない。この小說の舞臺になつてゐる本鄕から下谷へかけての風物、明治初期の時代の空氣は、讀者の目に映るやうによく描かれてゐる。松源での妾の目見えの場面でも、決して說明で逃げようとはしないで、描寫で委曲を盡してゐる。描寫の巧みな作家は、日本にはあまりなかつたので、小說家らしい小說家の作品よりも、有島武郎の「ある女」や鷗外の「雁」などに、却つてしつかりした描寫の見られるのを、私は不思議に思つてゐる。

夏目漱石は藝術家として、鷗外よりも豐かな天分を有つてゐたに違ひないが、私には漱石の作品はいつもくどい感じがする。

四

私は「書生氣質」以來の、明治の重な小說は、一通り見てゐる譯であるが、自己の天分を完成した作家としては、鷗外が第一であつたと思ふ。明治の重な作家は、早世したためでもあつたが、充分に自己を發揮し得なかつた。獨り鷗外は「舞姫」から「北條霞亭」まで、青年期から晩年ま

で、藝術を樂んで、天分と修養とを兼ね具へた自己相當の文學に安んじて終りを全ふした幸福な文學者である。終りまで老衰の痕を殘さなかつた。

罪人を護送しながらその話に聞惚れてゐる同心庄兵衛の輕い懷疑の氣持は、つねに鷗外の心にも存してゐたのであつたが、懷疑のために七顚八倒することの愚かさを知つてゐた彼れは、一生心の平靜を失はなかつた。「日の要求に安んぜない權利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科學で大發明をするとか、哲學や藝術で大きい思想、大きい作品を生み出すとかいふ境地に立つたら、自分も現在に滿足したのではあるまいか。自分にはそれが出來なかつた。」(「妄想」)と云つてゐる通り、古今東西の偉大なる作品に熟通してゐた彼れは、日本現代の文學者に有勝ちな誇大妄想的己惚れも起さず、また、聰明であつた彼れは「辻に立つてゐて、庵慶帽子を脫いだ。昔の人にも今の人にも敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽子は脫いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた」(「妄想」)ので、一人の人間や一つの主義に雷同して狂奔することはなかつた。そして「死の恐怖が無いと同時に死の憧憬も無い。死を怖れもせず、死にあこがれもせず、人生の下り坂を下つて行つた」といふ、晩年に到着した彼れの平靜な心境を、私は羨ましく思つてゐる。

私は、直接に鷗外に會つたことはなかつた。また會ひたいと思つたこともなかつた。たゞ、私

が森川町に下宿して新聞社へ通つてゐた時分に、電車の中で、カーキ色の軍服を着けた額の少し禿げかゝた男が、私の前に腰掛けて、小形の洋書を開けて讀んでゐるのを見て「この人が鷗外なんだな。よく見ると、何處か、三木竹二さんに似てゐるから、さうに違ひない」と思つたことがあつた。それから「ホトトギス社」に招待されて、能樂を觀に行つた時に、席を隔てゝその姿を見たことがあつた。

演劇を鑑賞するには、舞臺外の俳優に接する必要がないと同樣に、文學を鑑賞するには、作家に會ふ必要はないのである。私は目のあたり鷗外に接して教へを受けなかつたことを遺憾とはしてゐない。

前半生には、批評の筆を執つて盛んに論戰してゐた彼れも、後半生に於ては、彼自身半ば侮蔑してゐたらしい自然派の作品や評論に對して、表立つた論爭はしなかつた。しかし、自作に對する後進の種々雜多な惡評を冷眼視はしなかつた。他の大家のやうに默つてすましてはゐなかつた。短篇集「分身」に收められてゐる「不思議な鏡」や「田樂豆腐」、文學全集の「遊び」などは、小說といふよりも、當時の文壇の批評であり、自作に對する辯護文であるが、これらを讀むと、雜多紛々の世評などは、實質的に何の力もないもので、傑れたる作品は、自分の持つてゐる力によつて、存在を續けて行くことが分るのである。

「創作のなかに自己告白をしない」「告白しない自己を有してゐないから遊びの文藝だ」「情熱のない作だ」といふのが、彼れの作品に對する重な非難であつて、私なども以前さう思つてゐたがしかし、數十年間の鷗外の作品を通覽すると、その一生の自己が、自己告白を目標とした作家の作品に劣らないほどに現はれてゐるを、私はこの頃感じてゐる。

五

文學とは何ぞ？

私は年少の頃、内田魯庵の「文學一斑」を讀んで、文學といふものゝ理論的概念を注入されて以來、今日まで、文學の分類や價値批判や、その他さま〴〵な理論について、絶えず聞かされて來た。「文學とはかくの如きものなり」「かくあらざるべからず」との理窟を、三十年來聞かされ續けて來たのであつた。この頃でも、月々日々文學論の絶える時はないので、我々文筆を職業としてゐるものは、さういふ議論に全然無關心ではゐられない譯であるが、「人生とは何ぞや」の問題が永久に分り切らない如く、「文學とは何ぞや」の問題も永久に解決されないやうに思はれる。畢竟わが好むところに從ふ外はないのである。

理論は兎に角、明治以來の代表的作家の重な作品を殆んど讀み盡してゐる私は、どういふ作家

のものに心醉し、「これこそ文學だ」といふ感じに打たれて來たのであらうかと回顧すると、可成り多くを數へ上げることが出來るのであるが、しかし、さういふものも、今日手に取つて見ると、大抵色の褪せたものとして、私の目に映るやうになつてゐる。色彩の絢爛なものも、簡潔直截なものも、明るいものも、暗いものも、そこに、作家自身の一所懸命になつたところは認められても、私自身讀みながら感激さゝれることは稀れになつた。そこへ行くと、森鷗外の作品は見ざめがしない、天才らしい强烈な藝術の匂ひがないかはりに、鈍昧な痕を留めてゐないのがいゝ。明治以來の日本には、大なる天才は現はれなかつた。われ〳〵を渦の中に卷込むやうな作家はなかつた。せめて、聰明なる人鷗外の語るところを、私は耳を澄まして聽くことを喜んでゐる。

（昭和三年二月）

正岡子規論

明治時代に文學の上に痕跡を殘した人々の眞價を、私はをり〳〵顧みることがある。それ等の新しい土地を開拓した先輩に對して、敬意と親しみを寄せることもあるが、時代を隔てゝ見ると膚淺にして取るに足らないのを歎ずることが多い。近年絲雨をも透谷をも讀んだ。過去の知名の文豪のうちで、子規だけを、私は知らなかつた。

子規と云へば、私は思ひ出したことが二つある。その一つは、小杉天外氏が小田原に住んでゐた頃、私は初めて箱根に遊んで、歸りに氏の宅を訪問して、御馳走もよばれ、文學上の氣焰も聞かされたのであつたが、其時子規の死亡の通知が來たとかで、「香奠を屆けて呉れ」と、天外氏は私に包んだものを渡して賴んだ。私は歸京すると直ぐに根岸の子規の家を訪ねたが、緣側に數人の青年がゐて、私の渡すものを、頭を下げて丁寧に受取つたことを、今も覺えてゐる。當時の私は、子規といふ人に對すること路傍無緣の人に對すると同じ感じだつたので、小石川の自宅から根岸の家まで、人のお使に行くのを面倒臭く思つただけで、從つて家の樣子等をよく見もしなかつた。

も一つ思ひ出したことは、島村抱月氏が、ある時、子規と鐵幹との間に文學上の論爭があつたことを話して、彼等は美學の知識がないから、主觀客觀の別がよく解らないのだと云ふ意味で、その說明をした。「赤い椿白い椿と落ちにけり」といふ子規の俳句が實例として擧げられた。俳句

については最も知識の乏しい私でも、此の一句だけは二十年後の今尚覺えてゐるによつても、抱月氏の說明がいかに念入りであつたかゞ察せられる。

その後、次第に、子規といふ人は、明治の文學を語るに於いては見のがすべからざる重要な一人であるのに氣づくやうになつたのであつたが、それは、文壇人の筆や口によつて間接に敎へられた爲めで、私自身が直接に子規の文章や俳句和歌の類を讀んで感じたのではなかつた。

今度全集が出たので、子規の一生の功績を完全に學ぶのに都合がよくなつたが、私は和歌俳句よりも、先づその隨筆が讀みたかつた。それで島田靑峰氏の編纂した「隨筆集」を買つて、汽車の中や劇場の中や洋食屋の卓上で通讀した。そして、はじめて子規その人に面接したやうな感じがした。「墨汁一滴」「病臥六尺」など、すべて彼れの隨筆は「つれ〴〵なるまゝに」の多くの隨筆とはまるで趣がちがつてゐる。誰れでもさうだらうが、ことに私は、かういふ惱みを受けてゐる人の文飾のない述懷には心を動かされるのである。

他の病人の記錄と異つて、子規の隨筆のえらい所は、客觀性に富んでゐることである。宗敎にも迷信にも捉はれず、氣休めの療法をも信ぜず、苦痛を苦痛として、感じてゐることである。「閻魔大王との問答」、「人の希望の次第に小さくなつて、それが零となる時を涅槃救ひといふ事」など、甚だ面白い。

併し、私が感動したのは病苦の記錄である。その時々の心持の記事である。「今夜の地獄思ふだに苦し」とその苦惱に襲はれるのを豫期しながら、稍安らかな間に、只今の内にと、原稿を書いたり畫を描いたりしてゐる所に、古今の不朽の人生苦を私はひし〳〵感じるのだが、子規の文學論、その他の意見については、殆ど感動した所がない。やはり、二十年前の時代の幼稚さを見るばかりである。寫生を重んじ理想主義を輕んじたのは、一卓見で、時勢に先だつてゐる譯であるが、それもたゞ一歩であつた。……ことに彼れは、結核菌が人體の中に威力を恣にしてゐるのを體驗しながら、そしてそれを客觀的に叙しながら、人間に宿つてゐる、あるひは宇宙に散亂してゐる、さま〴〵な本能慾望などが、結核菌以上に威力を恣にしてゐることは感じなかつた。寫生は紅い椿白い椿と落ちるのを見て落ちると書いただけだつた。

近松をけなして、西鶴を推したのはいゝが、西鶴を「今日より見れば實に幼稚極る作のみなり」とし、只文章の點より彼れを取つてゐるのを見て、私の文豪子規に對する尊敬は零に近くなつた。西鶴こそ本當の寫生をしたのぢやないか。人間の內面と外面との本當の寫生をしたのぢやないか。平賀元義の輩何ぞ云ふに足らんや。

子規隨筆中取るべきは病苦錄だけである。彼れの和歌俳句については、他日暇の多い時に研究したいと思つてゐる。（昭和二年五月）

一葉と樗牛

鷗牛全集中の「文藝評論」と「想華と小品」との二卷、一葉全集、獨歩全集、二葉亭全集中の創作集と雜纂との二卷を、私は輕井澤の高原に持つて來てゐる。

若い夢を見てゐる最中に、突如として、慘い運命の斧に打たれて、生存を破壞された人間の生涯は哀れである。私は、若かつた一葉と鷗牛との遺著を讀んで、わが青春を回顧して多少の感慨を催した。彼等の若々しい感傷的な浮世物語や感想文が、今なほ青年讀者の心を動かしてゐる所以を推察し、文壇の風潮が數十年間に激しい變遷を經てゐるに關はらず、彼等の文章にその激しい變遷のために埋沒しきれない一般的のものを有つてゐることを思つた。彼等の遺著は青春の書である。はじめて新文學の起つた明治二十年代の若い作家の誰れのものよりも、一葉の小說、鷗牛の感想、藤村氏の詩が、青春の情趣を一層多く含んでゐる。

鷗牛と云へば、「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ、彼れの墓石にまで刻まれてゐる文句が連想される。作家は文明の批評家たらざるべからずと立論して、全く批評的精神を缺いでゐた當時の日本の文學を罵倒し、また、「時代精神」論を主題として、盛んに文壇を相手に論戰してゐたことが、私には直ちに思ひ出される。一ころは、多くの批評家はみんな鷗牛に向つてぶつつかつて行つてゐたので、彼れは五人拔き十人拔きの角力を取つて屈しなかつたのである。明治以來の批評家のうち、所說の內容は兎に角、外形上最も華やかな活動をしたものは、彼れ鷗牛

であつたと云つていい。

全體「時代精神」とは何であるか。今、樗牛全集を開いて見ると、彼れ曰く、「古今東西の文學史上動かすべからざる一個の事實は、大なる文學は大いなる人物と等しく最もよく時代の精神を代表せるものなりと云ふこと是也……よく當代國民の感情及び數求に最も明瞭なる發聲を與へ、其の憧憬する所の前途に最も具象の體形を附し、見よ爾等の理想茲に在りと告ぐるものあらば如何、目見る能はず、耳聽く能はず、口はた言ふ能はず、唯其の胸中の悶々を擁して、空しく閨中に摸捉せる一代民衆の胸は、猶ほ一糸響きて萬管是れに和するが如く、翕然として是に趨かむ。是の如きは所謂時代の聲たりと。つまり、彼れは當時の寫實的小說に厭き足りないで、理想主義を鼓吹したのであらう。彼れはまた、今の文學者は社會の觀察者を以て任ず、しかも彼等の觀察する所は彼等の社會のみ」と云つて、作家の觀察範圍の狹隘なのを非難し、「所謂時代精神は、待合料理屋の席上に現はれず、又粹人社會の通語によりて說明し得べからず。一國人文の根據を洞察して、內外古今の歷史的趨勢を達觀するの明あるに非ざるよりは、得て解すべからざる也。是を以て古より大文學者の多くは、同時に識見一世を拔ける大思想家也。彼等は常に天下の人を傾聽せしむるに足るべき人生觀と社會觀をその胸裡に蓄へし也」と說破してゐる。

作家の觀察範圍の狹隘、識見の淺薄、人生觀社會觀の幼稚など、樗牛が數へ上げたいろ〳〵な

非難は、數十年を隔てた今日の文壇に對しても下し得られるものである。しかしそれは、彼れの批評眼の鋭さが古今を貫いてゐるためではないので、さういふ抽象的論法は、何時の世にも何人によつても、用ひようと思へば、容易に用ひられるのである。今日は小雜誌の雜文家でも、そのくらゐのことは云つてゐる。

そこで、樗牛自身は、どういふ卓越した人生觀社會觀を有つてゐたかといふに、全集の彼方此方を搜しても、茫乎として捕捉し難いのであるが、強ひて一例を擧げると、「所謂社會小說を論ず」の條下に、

「若し道德を以て責むべきものを云はゞ、富强者須らく先にして、貧弱者須らく後なるべし。吾等は素より富强者に向つて道德上十分の反省を要む。しかも、强力卽ち權利なるの社會にありて是の如き反省は貧弱者の服從によりてはじめて得らるべきものにはあらざるか。吾等は社會進化の過程に於て、其の勢力の不平均な分配を受けたるものが、彼の强力に對して幾分の服從を示すを以つて、彼等の幸福を享受せんがための當然の要務なりと思料す。之れはた社會の秩序を維持し、人生の幸福を進むるに於て缺くべからざるなり」と云つてゐる。

見よ。識見一世を拔ける大思想家たれと作家に强要して、自から高しとしてゐた樗牛の社會觀も今日では、政治家や資本家にこそ同感されようが、文壇に於ては、小雜誌の雜文家にさへ、鼻

であしらはれるやうな流行遅れの古くさい意見なのである。「現代を超越せざるべからず」と云つても、彼れ樗牛も決して時代を飛び越えてはゐなかつた。

要するに、文學者としての彼の價値は、頭腦の聰明な、識見の傑れた批評家としてゞはなくつて、無遠慮に青年の氣燄を吐き、また青春の惱みを唄つた點にあるのだ。彼れは客觀主義よりも主觀主義を取り、シェークスピアよりもバイロンを好み、あるひはハイネを抱いて泣いた。（ハイネを讀んでの啜り泣きは、當時の文學青年の間に流行してゐた現象であつたが、鷗外はこれを揶揄して、彼等はハイネでも、英譯になつた甘い小詩だけを讀んでゐるのであらうが、ハイネにはもつと毒氣の強い肉慾的の詩があるのだと云つてゐたやうに私は覺えてゐる）

樗牛は、いろ〳〵な文學論に於ては、稀薄な內容を、外國の文豪の名前などを臚列して重味をつけ、當時の標準では名文視せられた文章で色をつけて、深い意味のあるらしくしたのであつたが、彼の本心は「時代精神」よりも「文明の批評」よりも、感傷的な青年の夢を、文學の上に見たかつたのであつた。その證據には、彼れはニーチェなどを振り翳しながら、力に徹した鷲の如きニーチェの勢ひは影をだに見せないで、ハイネに泣きサッホーに泣いた。硯友社の所謂似而非寫實を寫つて壯としながら、一方では、田山花袋氏の「わすれ水」の如き——互ひの胸の思ひを打ち明けずして別れて、他日ふと再會して、儘ならぬ浮世を歎いて涙に暮れる若い男女の幼い夢のや

うな戀物語――に萬福の同情を表はし、同窓の土井晩翠氏の作風に味方をして、島崎藤村氏の詩を朧朦體として非難しながら、その「一葉舟」を讀むと、作者とともに、哀傷の涙にむせばなければならなかつたのである。馬場孤蝶氏の「蝶を葬むるの辭」についても、あまりに哀れ過ぎるとして表面は非難しながら、「そも孤蝶、秋風も吹き初めぬ野邊に愛づべき花は澤なるに、運命拙く幼兒の手に捕はれ、今は翼破れて路泥にさすらふ哀れの孤蝶……」云々の感傷的美文に衷心から共鳴してゐたことは充分にその評語のうちに現はれてゐる。彼れは決して「現代を超越して」はゐなかつた。彼れは、戀愛神聖の俗說を打破し「戀愛すなはち肉慾なり」と說いた綠雨の「色道論」に憤慨し、羞恥の念なきものと罵り、廣津柳浪氏の「今戸心中」を讀んで、情死の美に打たれ、情死に向つて滿幅の同情を寄せながらも、「青樓遊女の汚れたる愛情に於て」のみ情死の題目を求めたのを、大なる遺憾としてゐる。彼れが硯友社一派の小說を罵倒するにも、屢々社會の風敎を紊すことを以てしてゐる。……樗牛の論評感想にこの二方面を見たことを私は甚だ面白く思つてゐる。

同じく明治二十年代から三十年代の初頭にかけて文筆を執つてゐた若き文壇人でありながら、硯友社系統の人々その他綠雨などは、德川期の軟派文士の氣風を受け繼いでゐて、樗牛が屢々非難した如く「粹人社會の通語」などを喜び、遊蕩的氣分を樂しみ洒落つ氣があつたが、一方では藤村

氏などの文學界一派その他田山花袋氏などは、センチメンタルで純情的であつた。そして、後者の系統に屬する人々は、舶來の新文學、たとへば、ダンテやバイロンや、ゲーテやハイネや、ロセッチなどを讀んでも、それ等の詩歌小說を、みんな自家の哀傷を刺戟する材料としてゐたのであつた。淚を誘はんがために讀んでゐたのであつた。樗牛の如きも、ニーチェを振り翳しなどして、儼然たる批評家面を曝しながら、バイロンを讀んで泣きハイネを讀誦して泣いてゐた。そして、その泣きの淚に映じてゐるものは、空想的乙女の影であつた。當時の島崎藤村氏は好んで乙女を詠じ、田山花袋氏は好んで乙女の小說を作つた。彼等の乙女はそれ〴〵の姿を有つたヴィアトリチェであつた。浮世の塵に汚すのも惜しいやうな純潔な乙女に對して、はかなき戀の憧憬を寄せて、青春期の惱みを惱んでゐた。樗牛が硯友社一派の女性に對する不眞面目を憤り、その小說を攻擊した所以である。「わがそでの記」「清見潟日記」の如き小說體の美文は元より、「傷心錄」などの多くの短い感想文は、藤村の詩や花袋の小說と、その基調を同じうし、色彩を同じうしてゐるのだ。……「一葉舟」を唄つて藤村氏は、世路の艱難人生の波瀾を經驗するにつれて、「春」を書き「家」を書き、ついに「新生」を著すほどの境地に達した。「わすれ水」に於て、幼い哀切な戀に泣いてゐた花袋氏は、後日一躍して「蒲團」や「生」を書くやうになつた。しかし、短命であつた樗牛は、「わがそでの記」から遠く脫出することが出來なかつた。「われやまさなき人に物の哀れ

を知りそめき、思へば葉末の露のいとはかなき終りなりし。……もゝ夜のひじのはしがきに、君やいのちとかこちしも、思へばあだなる夢なりき。かくて、吾がこころはとこしへに癒えざるべく傷つけられき。わが思ひを誰にか語るべき。月の夕、雨のあした、われ「はいね」を抱きて共に泣きしこと幾たびか」と、涙に濡れてゐた彼れ、詩人樗牛は、茫漠たる文明の批評よりも、茫漠たる時代精神の追求よりも、自己の涙に映る乙女の正體や、自己の心に潜む惱みの正體を突留める方が、彼れに取つて有意義であつたのだが、不幸にして彼れは長生をしなかつた。永久の青年として死んだ。しかし、そこに彼れの遺著の、今なほ多感多情の青年の心を惹く一つの理由が存在してゐるのであらう。……青年期には硯友社氣質よりも藤村花袋樗牛の如き、處女崇拜の純情を持つてゐる方が、文學者の素質として一層尊いのであらうと思はれる。

樗牛の文章には、よく消化されない漢語を臚列して、文意糢糊として正解しがたいものが多いが、そのうちでは、「嘲風に與ふる書」が名文である。「畢竟悟らんがためには吾が情、強きに過ぎ、迷はむが爲には吾が知、明かなるに過ぐ。予は是の中間に佇徊して、遂に其の適歸する所を知らざる也。足下よ、惡夢に魘はれたる夜は眠らざるに等し、予は實に是の十數年の歳月をかゝる煩悶の間に過ごし、人生の負荷寧ろ其の重きに堪へざるを覺えたり」と云つてゐるが、彼れは、不治の病患に罹つて以來、生死の煩悶に面接し、その苦しみから脱却せんがために、日蓮の研究を

志したのであらう。そして、宗教に心を向けるに當つて、念佛宗や基督教よりも、威勢のいゝ日蓮の方が、强がりの青年には相應しかつたのであらう。

　鷗牛の文章は、印象不明晰で、杜撰な文字を濫費してゐるが、漢文調で、ある熱情が籠つてゐるので、讀流してゐるうちに、ある種の快感が覺えられることがある。私など、日本外史國史略の類の素讀によつて文字を覺えはじめた者には、日本化された一種の漢文調によつて、藝術的感興を惹起されるやうに習慣がつけられてゐる。言文一致體の文章では感ぜられない情趣をそこに感じるのである。現代の思潮とは隔たりの多い、內容の稀薄な、鷗牛の論文集が、今尙流布してゐるのは、現代の青年にもまだ、漢文調に自己の藝術本能を滿足させる傾向が多少存在してゐる證據とされないであらうか。

　樋口一葉の文章は、二十を過ぎたばかりの若い女の筆に成つてゐるに關はらず、却つて「清見潟日記」や「わが袖の記」ほどに哀傷的でないのを、私は今度感じた。鷗牛が、たゞ浮世悲しと消え入るばかりに泣いてゐる間に、一葉は觀察し批判することを忘れなかつた。彼女の「日記」は、今の世なら「私小說」として續出せられるべきもので、抽象的煩悶記錄の連續である國木田獨歩の「欺かざるの記」よりも、遙かに藝術味に富んだものである。

　私がはじめて讀んだ一葉の小說は「文學界」に揭げられた「雪の日」であつた。上京前の少年

期には、「國民之友」や「文學界」を夢心地で耽讀してゐたので、「國民之友」の附錄號にあつた北村透谷の「宿魂鏡」を、「花よ〳〵」と浮かれぞめきし人の心も稍々靜まりて、一輪早咲きの躑躅花の上を、羽弱の蝶の行きもどりする四月の末の春景色」の書きはじめから、殆んど暗誦してゐたやうに、「雪の日」をも、繰返し〳〵讀み通したのであつた。しかし、「宿魂鏡」に含まれた眞意が解らなかつたやうに、「雪の日」にも、何處に小說的價値があるのやら、雲を摑むやうで分らなかつた。(今、彼女の日記と照し合すと、この小說は、師匠のN氏に對する彼女の心境を寫したものである)

彼女の歿したのは、私の上京した年の冬であつて、その頃の彼女の名聲は非常なものであつたらしく、私の耳へもをりをり入つてゐたが、當時神信心に凝つてゐた私は、小說書類には殆んど手を觸れなかつた。たゞ「國民之友」だけは引續いて讀んでゐたので、その新年附錄に揭げられてゐた「わかれ道」だけは讀んだ。そしてひそかに感心してゐた。

私が一葉全集を通讀したのは餘程經つてからであつた。「經机」「十三夜」「うつせみ」「わかれ道」などはよく解つて、可成りに面白かつたが、「たけくらべ」や、「われから」などは、作意がよく解らなかつたし、和文調がもどかしく、隔靴搔痒(かつかうやう)の感じがして、左程面白く思はれなかつた。

私の在學中、一二年早稻田に敎鞭を執つてゐた高山樗牛を、一度訪問した時、いろ〳〵な話の

間に、坪内先生は、紅葉の作風は客觀的だから、將來どう伸びて行くか分らないが、一葉は主觀的だから、もつと生きてゐても、書くものがさう發展しないであらうと批評されたが、果してさうでせうか」と、いふ意味の話をして、樗牛は暗に坪内博士の説に同意しかねる自説をほのめかした。客觀的の紅葉が伸びたか、主觀的の一葉の方が伸びたかは、疑問であるが、彼女は「わかれ道」「たけくらべ」あたりから、小説の本舞臺へ出かゝつたので、それまでの幾つかの短篇や小品は、習作として見るべきものである。「たけくらべ」は、明治文學中に異彩を放つてゐるもので、この一篇を殘し得ないで死んでゐたなら、彼女の名聲に大關係を及ぼしたのである。危いところであつた。

「雪の日」が一葉の初期の心境小説である如く、「たけくらべ」は、彼女の後期の心境小説である。美登利が無邪氣な少女時代から急變して、新しい計り知れない人生へ出掛かつた如く、一葉も習作時代を經て、これから文學の大海へ出掛かつてゐたのだ。文學愛好者に惜しまれる所以である。

主觀的作家であるとしても、一卷の一葉集を通讀して、作者の日常懷抱してゐるある人生觀、ある理想が讀者の胸に映つて來る譯ではない。貧窮の境涯にゐて苦闘してゐた彼女は、日記のうちに屢々衣食の缺乏について歎息を洩らしてゐるし、「さるにても意地惡の世や〳〵」などと小説のうちでも零してゐるが、しかし、作家としての心眼に映る人生に對して決して悲觀的でも絶望

的でもなかつた。むしろ健全性を具へて常識的であつた。「うつせみ」は、失戀の狂女を描いたもので稍々筆の馴れた後期の作物であるが、かういふ題材は面白からうと思ひついて書いただけで、すべて型の如く、常套を脫したところはない。「われから」にも、多くの眞實性が認められない。いくら聰明で批評の目を備へてゐた才女があつたにしても、二十を過ぎたばかりで、異性に對する體驗もなかつたらしい彼女に、人生の深いところの分らう筈はなかつた。「いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさう」と思つた「わかれ道」のお京には、作者の實感から出た共鳴があつたであらうし、美登利の心理は、作者自身の實驗した心理によつて裏附けられてゐるのであらうが、他は多く云ふに足りないのである。怜悧な少女の小說たるに過ぎない感じがする。

藤村が詩に於て、樗牛が美文と評論に於て、明治二十年代の青春の惱みを唄つた如く、一葉が小說の形を借りて、あの頃の女子としての青春の惱みを唄つたものとして、永へに後人の情緒をそゝるだけのもので、今日の文壇があの時分に比して、人生描寫社會觀察に於て遙かに進んでゐることは否定出來ないのだ。

私は、久し振りに樗牛一葉の遺著を讀んで、作品の內容には、左程重い價値を置かないのに關はらず、久し振りに青春の書を讀んだ感じがした。

序でに、長谷川二葉亭の「浮雲」を通讀した。第一編を讀進むと、これが明治二十年頃に現はれたのかと驚かされた。これは單なる青春詠歎の書ではない。悠々たる人生がそこに現はれてゐる。當時の社會相が、多少の稚氣があつても、そこに活寫されてゐる。第二編も引續いて面白かつた。しかし、第三編になると、前とは打つて變つて氣拔けがしてゐるのに驚かされた。クドクドとだらしのないこと甚しい。この間の消息は、內田魯庵氏が「思出す人々」のうちに詳しく書いてゐたやうに思ふが、兎に角、「浮雲」は明治文學中の不思議な現物である。第二作「其面影」は凡庸である。その書出しが「浮雲」の第一とソックリ同じいのが、何か深い意味があつてわざとさうしたらしくもないので、呆れた。二十年目に創作の筆を執つたのに、第二作は第一作の燒直しのやうである。「平凡」だつて左程取立てて云ふべき作品ではない。二葉亭は人物として明治の文學者中最も尊敬すべき人で、その一生の行動には學ぶべきところが少なくないが、創作家としての才能は甚だ乏しかつたのではないかと、私は以前から疑つてゐたが、今度ますます〳〵その疑ひを深くした。

獨歩全集をも今度ところ〴〵讀み返したが、獨歩の小說は、今なほ見縊めがしない。無器用なところや生硬なところは目につくが、決して陳腐な感じはしない。「牛肉とジャガ芋」や「惡魔」のやうな、獨歩式人生觀から割出した理窟つぽいものは、今の私には興味がないが、「酒中日記」「女

難」などは相變らず面白いし、「竹の木戸」「二老人」「疲勞」など晩年のものはことにいい。一葉は天與の才能を伸ばしかけた頃に死んだのだが、獨歩はその作品にます〳〵深みを加へかけて、惜しくも逝去した。

明治文壇の秀才の多くは、それ〴〵に持つてゐた藝術的天分を充分に發揮しないで死んだのである。彼等の早世の重なる原因は貧乏であつたことだと思ふ。

島崎藤村氏は、幸ひに、貧乏といふ恐ろしい重石のためにも押潰されないで、進み得られる限り自分の道を進んで來た。一葉や樗牛などと調子を合せて青春の惱みを唄つた時代から歩を進めて、いろ〳〵な作家や思潮と道連れになつたり離れたりして、ついに「新生」にまで達した。

私は「若菜集」以來氏の著作の愛讀者であつた。現在の日本の文學者のうち、藤村氏に對してはつねに仰ぎ見るやうな感じをもつて見てゐる。明治以來のすべての文學者について云つても、藤村氏には最も頭の上がらないやうな感じがしてゐる。これは私の有つてゐる迷妄の一つであらう。私は氏とは反對の道を歩いてゐる人間であらうし、氏の作品に必ずしも一々感心してゐる譯ではないのだから。……私は、この「時評」の筆を執つてゐる間に、藤村全集中の重なるものだけでも、年代を追うて讀返してよく考へて見よう。

私は、先日、小諸へ遊びに行つた。新聞に噂の出てゐた藤村氏の「詩碑」を見ようと思つて、古城趾の懐古園へ上つたが、「詩碑」はまだ立つてゐなかつた。それで、旱魃のために細々と流れてゐる千曲川を俯瞰したり、浅間山を顧みたりして、輕井澤の假寓へ歸つたが、不在中に、山崎斌氏の新著「藤村の歩める道」が屆いてゐた。これが一日早く手に入つてゐたら、小諸の田舍町が詩趣を帶びて、もつと面白く見られたであらうと思ひながら、寄贈の書物を一讀した。これは藤村全集十二卷の忠實なる解說である。作者自身が小說の形を取つて、自傳を書き續けてゐるのだから、「藤村傳」は、他の作家の傳記よりも書き易いに違ひないのだが、山崎氏は私心を挿まず、要點をよく取入れて、なだらかに書流してゐる。著者の筆使ひも藤村氏に甚だ似通つてゐる。しかし、原作者の著書を根據とした忠實な解說ではあるが、あまりに平面的で、底が淺い。原作を浮上らせる影がついてゐない。この「藤村傳」は著者の目的がそこにないのであらうから、この新作はこれでいいとしてもつと時代の背景を濃厚に描いて、かういふ作家、かういふ作品の現はれた所以を討究し、個々の作品についても、もつと進んだ批判を加へたものをも私は讀みたい。

（大正十五年二月八日）

田山花袋論

○

田山花袋氏晩年の長篇、「百夜」「戀の殿堂」「殘雪」の三種を、私は續けて讀んだ。以前は親しみの深かつたこの作家の小說にも、近年は遠ざかるやうになり、これ等の三大作をも、今度はじめて讀んだ譯なのである。このうちの「百夜」は、花袋氏最後の長篇小說であるが、「福岡日日」に連載されたきりで、氏の逝去後二週年を經過した今日、まだ一卷の書に纏められてゐないのだから、私は、ある所に保存されてゐた新聞の切抜を借覽することにした。世に忘られてゐる作品、埋沒されてゐる藝術を、獨りで鑑賞してゐるやうな興味があつた。一生を通じて創作慾の旺盛であつた作者の最後の作品はどんなものであつたか。思想的に見て、死に近づいて光明を得たのであらうか。心が圓熟してゐたか。萎縮してゐたか。私は記憶に深く刻まれてゐる花袋氏生前の面貌を思浮べながら、この長つたらしい小說に現はされてゐる氏の心の動きを見續けた。

「百夜」には、この作者が數十年來取扱つて來た人間愛慾の諸相が丹念に描寫されてゐるに過ぎないのだ。描寫と云ふよりも記錄と云つた方がいゝかも知れない。それも、くどい記錄である。愚直と云つていゝほどに、自分の感想を蔽ふところなく打明けてゐるので、「もう澤山だ」と、讀者たる私は、作者の愛慾感に食傷する思ひをした。今日の時世に、——政治經濟軍事に關して逼

迫した現實が渦を巻いて、三勇士や憂國の志士が續出してゐる今日——男女の愛慾を全生命としてゐる小說なんか讀んでゐると、時代離れしてゐるやうである。同じ男女の情事を書いても、もつと陽氣に、もつと美しく、もつと劇的に映畫的に、「所謂小說」らしく描いたのでなければ、世上の小說讀者に喜ばれないに極つてゐる。私自身にしても、これ等の小說は藝術を缺いてゐるやうに思つた。「下手だなあ」と思つた。花袋氏は、明治文學史に最も巨大な印象を留めた作家であるに關はらず、大多數の作品を殘した作家であるに關はらず、最後まで小說道の名人にはなれなかつた。三種の大長編を讀んでゐるうちに、表現のうまさに感動したところはなかつた。朗々誦すべき名文句に接したこともなかつた。どの小說にも主要人物として現はれ、「死よりも強く」愛されてゐる女の描寫にしても、「ぱつちりした黑瞳勝ちの眼」とか、「白い腕、すき透るやうな肌」とか、「赤く熟した桃の實のやうな色をした唇」とか云つたやうな、形容詞がいつも用ひられてゐるだけで、その女の姿形がいきゝと紙上に活躍してゐるのではない。美しい女の美しさが繪の如く描かれてゐるのではない。藝者生活を描きながらその社會の空氣が濃厚に漂つてゐるのでもない。鏡花荷風、或ひは里見弴の藝者小說に現はれてゐるやうな色彩は、花袋の小說に於ては全く求め難いのである。昔、氏は、「要するに私は野暮であつた」と告白して、他の笑ひを釀したことがあつたが、氏の作品は終始一貫して野暮つたかつた。芝居の人物で云つたら、氏の役所は佐

野治郎左衛門か縮屋新助であると思はれないでもない。藝者の言葉にしても、洗練された味ひは含んでゐないで、田舍くさくて粗野である。だが、さういふ藝術的缺點に滿ちてゐるに關はらず全部が誠實なる人生記錄であることに於て、他の多くの作家の藝術を壓してゐるのだ。「百夜」「戀の殿堂」「殘雪」には、氏の一生の愛慾生活のすべてが收められてゐる。氏の文學の集大成と云つていゝ。「野の花」や「名張少女」のやうな可憐な優しい美文小說の境地から一轉して、「蒲團」以後の所謂「無技巧の現實暴露」小說に熱中した花袋氏の文壇に於ける働き振りは、明治以來の文學史のうちでは壯觀を呈してゐたと云つてもいゝのだが、しかし、氏の一生の體驗を集めた、內容の充實した作品としては氏の名聲の旺んであつた頃、氣を負つて書いた幾多の作品よりも、晚年の「百夜」などの、記錄的長篇を推すべきだと思はれる。ここには、愛慾の陰影がいろ〳〵に現はれてゐる上に、當人以外に子女の戀愛のもつれが起つてゐるので、人生が複雜になつてゐる。この作者が自分の子供の情事についても遠慮なく解剖のメスを揮はんとしたのは、主義に忠實なる譯であるが、それは十分に效を奏してはゐない。效を奏してはゐないが、作者——小說中の主人公——の心の惱み、生存上の葛藤が二重にも三重にも面倒になつてゐることが分つて、私にも生きた人間の世の知識が與へられるのである。世上の多くの家庭、多くの人々の生活の實相を暴露したら、この作者の心と共通したものが案外多いのではあるまいか。從つて、これ等の小說は

世離れした閑文字であるどころか、我々の現實生活に肉迫した分子に富んでゐるのである。私は讀みながら、絶えず自分や自分の周圍を顧みた。

「百夜」は、島田と名づけられた主人公とともに、悲喜愛歡を續けて來た藝者お銀が、鏡に映るおのが姿に老の影の差して來たのを歎じ、男の氣休めの言葉なんか耳にも掛けず、「自分が何だかちよつとも知らずに、たゞさういふものだから、さうして通つて來たと云ふより外、何もなしに盲目でやつて來たやうなものですね」と、おのが一生を回顧するところからはじまつてゐる。彼女は震災で無一物になつたのを男に助けられて、郊外に借家をして、兩親と微かな暮しを立ててゐる。島田はそこへ通つてゐる。彼れ島田は、震災の三日目に女の身の上が案じられて、火のまだ燃えてゐる中を、やつとのことで、大川の橋杭の上を傳はつて危險を冒して女の行衞を搜し、十時間も川水に浸つてゐたにも拘はらず、どうにか命だけは助かつて、浴衣がけで震えてゐた彼女を見つけて、互ひに涙の對面をしたのであつて、二人の仲は並大抵の仲ではなかつた。さういふ關係の女の所へ人目を避けて通つて行く男の幸福は、昔から詩に唄はれ、繪に描かれ、中本仕立の小説に述べられて、私などもその境地を想像しては羨望するのであるが、島田對お銀の實際は、「椿姫」や「マノンレスコ」や、春水や鏡花の小説にあるやうな場景の現實化ではなかつた。持つて生れた美貌もシミや皺に腐蝕されだした女と、白髪の老翁との情事であるから繪に描いても

あまり美しくはない。序を追うて起る島田老人の感想には、眞實の經驗から生み出されたものであつて、眞實によつて裏打ちされた戀愛哲學、人生哲學と云つたやうなものが現はされてゐる。田山氏は、素質がこゝしかつたためか、自己の經驗自己の夢想を渾然たる藝術として表現し得なかつたが、誠實と根氣と體力とによつて、自己の感得したものを、兎に角文字を通じて現はすことを得た。「彼れも自分達の戀愛の總決算がいつかは一度必ずやつて來ることを思はずにはゐられなかつた。敢て古い歴史を持ち出すまでもない。今現にそこにもここにもさうした戀の址がある。どんなにしつかり心と心とを合せてゐたとて、その址になる時は屹度來る。さうして見ると、戀といふものは火花を散らす時だけのものか。その時だけを尊重して、あとは金屑として捨てゝ〳〵捨て去るべきものか。執着ならまだ好いけれども、それを通り越して、一つの習慣といふものになりつゝあるのではないか」と反省したり、「彼れは平生金は單に金だとは思つてゐなかつた。金はすなはち心だ。男が女に對してその心をあらはす唯一のものだ」と痛感したり、ついに「戀と死」といふところまで達してゐる。大抵は中途半端な所で留つてゐるからいゝやうなものゝ、戀愛も徹底すると、「死」と結びつかなければならないのであらう。その究極の境地を、田山氏は、最後の長編「百夜」に於て、いろ〳〵に手を盡して描かうとした。描寫の筆は硬張つて自在に動き得なかつたが、戀の究極を表現しようとしたのは事實だ。「若い時には、この戀と死とが畫然と二つ

にわかれてゐた。戀は戀、死は死といふ風に考へられてゐた。それが中年になればなるほど、次第にその離れてゐたものが近寄つて來て、今ではその二つの問題がぴたりと一つになつて彼れの前に現はれた。……十年前にあつては、死はまだ一つの空想であり、一つの幻影であり、また一つの思想であつたけれども、今ではもはやさう間接なものではあり得なくなつた」と云つてゐるのは、愚かな情痴の現はれとして蔑視すべきものではないかも知れない。完全に相手を所有するためには「戀愛を墓場の向ふまで持つて行かなければならない。」田山氏の自然主義的戀愛も、つひに中世紀風の宗教味を帶びて來てゐたのに、私は興味を覺えた。「二にして一、一にして二」は氏がいろ〳〵な場合に云つてゐる生存のモットーである。女の魂を完全に摑むことの困難を氏は屢々歎息してゐるが、氏の人生生存の第一義的意義は、女人の魂の完全なる摑保に在るので、ダンテやゲーテの「永遠な女性」も要するにそれなのである。ところで、私自身は、魂と魂の融和といふことなんかについて、あまり心を勞したことがないので、ダンテやゲーテや田山氏などの女人禮拜の心境については暗中摸索をしてゐるに過ぎないのだが、しかし、銀座漫步の人々にもラッシュアワの群衆にも、日常生活の雜多紛々の表面的事件を除いて、核心をのぞいて見たら、そこには何等かの形に於て、女人禮拜の面影が存してゐるのに氣づくであらう。日本の男子は今なほスバルタ的道念を尊んでゐるため、女人禮拜を斥けてゐるらしい顏してゐるが、實際は女人

を中心に、産めよ殖えよ愛せよの生存律の下に活動し、そのためにさまざまな社會生活苦を嘗めてゐるのだ。「百夜」の中で、作者は述懐してゐる。「あまりに情痴過ぎるかも知れないが、かれの經て來た五十年の生活の中では、それより以外には大したものがあつたとは思へないのであつた。金を稼ぐこと、自分の名を世間にひろげること、別な反對な勢力と相爭ふこと、生活狀態を一歩一歩好くして行くこと、さういふこともこの世に生きて行く上に於ては、かなりに無關心ではゐられないことには相違なかつたが、それも一方に彼女があるからで、若し彼女が彼れの生活の途上現はれて來てゐなかつたなら、その生活力も決してさう强くは働かなかつたに相違ないのであつた」と、斷言してゐる。

「百夜」の中の島田は、「戀の殿堂」に於ては、父親としてその娘と論爭して眞情を吐露してゐる。

「しかし、親は子のためにばかりこの世に存在してゐるのではないよ。親だつて子にわからない苦しみもするよ。子のためにならないことでも止められないこともある」

「それはさうでせうけれども。……さういふ個人的な心の境は、父さんなんかはもうとうに通り越して來てゐる筈だと思ふのです。もつと先まで行つてゐて下さらなければならない筈だと思ふのです」

「ところが通り越して來てゐなんだ。昔の通りなんだ。……お前などにはまだ分るまいが、この年

までおれは異性のうちに戀を求めて、一つとしてその戀を本當に摑んだためしがないのだ。そして、さういふ風にして戀愛放浪をやつてゐるうちに、いつか年は遠慮なく經つて行つて、もう髪は白くなる。額は皺で滿たされる。さうでなくてさへ駄目な奴が一層駄目になる。そして、お前などからは、年を取つたといふ唯一つの理由で、さういことは人間のやることでないやうに非難される。しかし政子。この父親だつて、若い人達と少しも變つてはゐはしないのだ。熱い血が燃えてゐるのだ。それでゐて、もう誰れにも相手にされないのだ。この間もつく〴〵それを痛感した」

かういふことを感じてゐるのは、彼れが特種な人物であるためではないと思ふ。公言するかしないかの相違で、多くの人がひそかに感じてゐることではないだらうか。

「幸福なんて、一生金の草鞋でぐる〳〵廻つて探して歩いたつて、とても見附からないものかも知れないのね」

田山氏に多數の小説の題材たる經驗を與へた女をして、彼女の一生の結論見たいにこんなことを云はせ、作者をしてメーテルリンクの「青い鳥」を思ひ出させてゐるが、私が、この作者の晩年の三大長篇を通讀して、特に心に留まつたのは、作者の空想の樂みと宗教的陶醉とである。これ等の小説の主人公は、さま〴〵な障礙はあつても、愛人に會つては生甲斐のある悦樂を覺えてゐるのであるが、しかし、女を目標としてさま〴〵な空想を逞ふしてゐるところに、却つて純粹の

悦樂があつたのでないかと思はれる。「蒲團」以前、すなはち、「名張乙女」や「野の花」時代と同樣の女人憧憬の空想が、六十歳近い作者の頭腦に漂つてゐるのだ。老人となると、頭腦が枯渇して空想の華が萎むと、一般に思はれてゐて、私などもさう信じてゐたが、これ等の小説で見ると少女にあこがれて詩を作つてゐた時分と同樣に、獨りで戀の境地を空想してホク〳〵喜んでゐるのだ。現實々々と云つても、空想の領分は廣く、且つ人間に取つて重い價値を有つてゐることは、これによつても察せられる。そして、田山氏だけが特種な老人であつたためではなく、多くの老人が、皺や白髪に外形の衰へは見せながらも、戀愛その他について、二た昔も三昔も前のたわいのない空想を有つてゐるのではあるまいか。……それは哂ひ事ではない。

宗教についてもさうだ。「殘雪」は、この作者が戀愛から宗教に移つた經路を書いたもので、他の小説とはいくらか趣きを異にしてゐて面白いのであるが、しかし、これを讀んで、作者が本當に悟道の域に入りきつたと思つたら大間違ひである。

作者は、田舍の寺で、偶然經文を讀んで、大いに感激し、人生の歸趨をそこに見たので、「いろ〳〵なことを知つた。解けない問題をどのくらゐ解いて貰つたか分らない。……この間もすつかり打たれてしまつて、これからの殘つた一生を佛の功德に報いても、決して悔いないとすら思つたからね。僕の經て來た艱難は、丁度海綿か何かの中に吸込まれたやうに、すつかり吸込まれて行つ

たからね。……かうした大歡喜を受けた得難い經驗を、僕は世間にも分けてやりたいとつく〴〵思つたね」と興奮して云ひ、「心は輝き光明と安樂とに滿たされた。かれはもう歸つて行く都會を呪ひはしなかつた。事業のはかなく功名の空しいのを慨きはしなかつた。またかれが住んでゐる藝術の世界の陷穽を恐れはしなかつた。人生の欺瞞乃至虛僞にも多くの心を費さなかつた。かれは再び青年に戻つたやうな氣がした。日影は明かに庫裡のひろい勝手にさし込んで來た。雀はその生を樂んで嬉々として百囀した。」と、歡喜の感を述べ、「さびしい、しかし春を豫想した冬の野が潤くかれの前に展けた」と、意味ありげな句をもつて、一篇の小說を結んでゐる。

だが、かういふ豐かな宗教感も、多分の感傷味を有つた一時の氣休めに過ぎなかつたことは、「殘雪」のあとで、書かれた「戀の殿堂」と、「百夜」の主人公とが舊態依然として、悟道の人らしいところの少しも見られないのによつて、明かに推察せられるのである。人間は境遇により、或ひは修養により、次第に變化するには違ひないが、根本的の烈しい變化は滅多にあり得ないのである。それは、他人のことよりも、自己を反省してよく分るのだ。田山氏の如きは、文學の上で非常な飛躍を試みた人であつたが、それにかゝはらず、「名張乙女」「野の花」の氣持は、最終の長篇「百夜」まで續いてゐる。むしろ、「百夜」には、初期の作品への還元が見られるのだ。

「だつて、君、人生にそれより他に何があるかね。事業とか名譽とか、さういふものも一時は大

きなものであることはあり得るさ。しかしさういふことは雪か霧のやうなものだからな。忽ち消えてなくなるからな。ところが男女のことはさうは行かない。死ぬまでくつゝいて來てゐる。人間は墓穴までその心を運んで行く」と、作者は屢々さういふ感慨を洩らしてゐるが、田山氏自身忠實に墓穴までその心を運んで行つたのだ。

「殘雪」には、女主人公が、同じ稼業の女と、ある男を爭つて敗れたため、双物三昧をして、投身自殺を企てたことが書かれてゐるが、そのために彼女が死生の境に彷徨してゐるのを慰藉し愛撫して、決して彼女に愛想を盡かさない男主人公の純情が仔細に述べられてゐて、我々讀者に作者の面目を偲ばせるのである。三種の長篇のうちでも、このあたりが最も小說的興味に富んでゐて、この作者の眞心が最もよく現はれてゐる。これに續いて、例の宗教感菩提心の發作が書かれてゐるのは、心理的に當然の順序であらう。

二

五月十三日の夜。私は、まだこれ等の長篇に目を觸れない前に、麻布の龍土軒で開かれた田山氏の三回忌——すなはち逝去後滿二年を期とした追悼會に出席した。舊くから佛蘭西料理を看板にしてゐるこの洋食屋へは、十數年來行つたことがなかつたが、その家は昔のまゝで現代化した

東京にこんな所があるのかと思はれるやうな古色蒼然たるもので、佛蘭西で見た十八世紀の料理屋を思ひ出させた。そして、我々の目には、昔の記憶が浮んで、由緒のある歴史の跡を弔ふやうな氣がした。追悼會の來會者にも、文壇の新人は一人も加はつてゐなくつて、自然主義文學凋落の影がそこに見られるやうで、追憶感はます〳〵濃かであつた。私などが文壇に出た頃、「龍土會」と名づけられた、新進氣鋭の文學者の會合が、この龍土軒を會場として、毎月催されてゐて、知名の自然主義の作家は多くその會員であつた。私は龍土會が盛りを越した頃に加入したのであつたが、國木田、小山内、岩野、蒲原、中澤などの諸氏が、元氣のいゝ聲で、議論を闘はし、饒舌を弄してゐたことが、私の記憶に明治文學史の一現象として、鮮かに刻まれてゐる。田山、島崎氏も無論會員であつたが、どちらもおとなしかつた。

田山氏は、あの頃の作家仲間では、やはり巨大な作家であつたと、私は今思つてゐる。他の誰れ彼れに比べて、氏は凡庸であるらしく見えるが、凡庸を押進めて行つて、才智を弄しないところに、巨大な作家の風貌がおのづからあらはれてゐると云つていゝ。

「戀の殿堂」などに描かれてゐる若い男女の戀愛は、老いたる主人公自身の戀愛の描寫に比べると、甚だ粗末であつて生彩を缺いでゐるし、老主人公が青年少女の情事に對する態度も隨分身勝手であると云つていゝのだが、ここに、この作者の主張してゐた客觀的態度が、作品の上には充

分に實現してゐないことが證明されるのだ。「露骨なる描寫」は試みられてゐても、この作者のよく云つてゐた「鋭いメス」はそんなに動いてゐないのだ。藤村、秋聲、泡鳴、蘆花などの諸氏が、皆んな自叙傳風の小説を作り出し、それ等の多くは、それ〴〵に一くせある感じがするが、田山氏のは凡庸で、藝術家らしい綾がない。經驗や感想を、べた〳〵書きつゞけたもので、經驗さへあつたら、誰れにでも書けさうに思はれる。しかし、これを凡庸と思ふのが、我等が、自分等の文學標準に捉へられてゐるためなので、凡庸丸出しのところに生中の非凡以上の偉大さを認めなければならぬのかも知れない。

今讀んだら稚拙凡庸の作品と思はれるだらうが、「蒲團」は、何と云つても、明治文學史上の畫期的の小説であるのだ。追悼會の席上で、森田草平氏は、昔田山氏の誤譯が問題となつたことを語つてゐたが、田山氏の飜譯に間違ひがあつたばかりでなく、「西花餘香」と題された歐洲近代文學讀後感、その他、自然主義の中心人物となつた以後の、東西文學批評や解釋なども、決して的確であるとは云へないので、自己流の早合點が多かつた。先日ある會で日本の山水美の話が出た時、某氏が田山氏の旅行記には事實の相違が多く、信用が出來ないと非難してゐた。しかし、田山氏は西洋文學を曲りなりにでも讀んで、自分自身で解釋したところによつて、自分の創作態度を改めようとし、「蒲團」のやうな、他人の物笑ひになりさうなものをも、自分でそれを是なりと

思つたが故に、斷然として創作した。「僕は昔から比較的正直に世間に生きて來た。誠實を失はずにやつて來た。言はゞ丸はだかで刀槍の林立する中を通つて來た」と、「戀の殿堂」の、宗教陶醉時分に云つてゐる。文學の上の氏の革命態度は、氏自身の作品を根本から異つたものにはなし得なかつたが、他の文學者に及ぼした影響は甚大であつた。花袋流の自然主義が流行して文壇を賑はしたのだ。贊成者でも反對者でも、盛んに自分々々の「蒲團」を書きだし、自分の戀愛沙汰色慾煩惱を蔽ふところなく直寫するのが、文學の本道である如く思はれてゐた。機運が熟してゐたためであらうが、その傾向に火をつけたのは田山氏であつた。私には、田山氏があんな創作やあんな文學觀を發表しなかつたら、自傳小說や自己告白小說があれほど盛んに、明治末期から大正を通じて、あるひは今日までも、現はれなかつたであらうと思はれてならない。その證據には、龍土會會員で西洋近代文學を耽讀してゐた者は、少なくなかつたが、田山氏以前に、自己の實生活描寫を小說の本道であると解釋したものは一人もなかつた。島崎氏は、田山氏の「蒲團」以前に「舊主人」を書き、「水彩畫家」を書き、「並木」を書き、自己の左右に小說のモデルを求めて、その眞實を寫さんと志してゐたらしく、子規一派の寫生文も小說に事實直寫の端をひらいたものと云へないことはないが、しかし、それ等は田山氏の自己暴露の自然主義とは餘程異つてゐる。西洋の自然主義文學は、客觀的分子に富んだ文學で、花袋氏の獨斷にかゝる自己の日常生活直寫とは

異つてゐる。西洋の評論家の定義によると、自然主義は寫實主義の度の強いものを云ふのださうだが、花袋流に自分の生涯の打明話をするのはその本領ではなかつた。田山氏も模範としてゐたゴンクールの「ジャーミナルラセルトウ」は、作者が叔母の家の下婢をモデルとして、事實そのまゝを寫し取つたと、自分で自慢してゐたもので、自然主義小說の最上の見本とされてゐるが、それにさへ、批評家の研究によると、幾多の作爲の痕はあるさうだ。しかし、それは止むを得ないことで、出來る限り「眞實を描くこと」「有るがまゝに描くこと」を目差すのは、創作態度として甚だよろしきを得てゐるのだ。この態度を田山氏が歐洲の近代文學から學んだのはいゝ。しかし、自己の生活を無技巧の筆でぶちまけるのを文學の正道のやうに思つたのは、當を得たとは思はれない。

田山氏の提出した小說作法は、創作を容易なものと思はせた。作家が自己の心を開いて、自由に自己を語るのは、舊套を打破するにはいゝことだが、想像力が萎縮し眼界が狹小になり、單調になるのを免かれなかつた。オーガスチンの懺悔錄は作り物語よりも讀み應へがする。ゲーテの自敍傳は彼の戲曲や小說以上に面白い。一葉の日記もその小說に劣らない妙味を有つてゐる。パシカットセエヅフ女史の日錄も極めて面白い。普通人の心覺えの日記だつて、生中の小說よりも興味があり有益である。しかし、純粹の戲曲や小說は日記以外自傳以外の魅力を保つてゐる筈だ。凡人の日記や自傳がすなはち藝術であるとは云へない。私なども、田山氏の感化に毒せられ、易

きにつき、日記小説見たいなものを濫作して來た。創作の才能が乏しいから止むを得なかつたのだが、私以外にも、さういふ作品の多かつたことを、私は回顧してむしろ呆れてゐる。どんな作風でもいゝ者はいゝのだが、凡人が何の變哲もない自分の生活を書いてそれで藝術だと思つてゐるのに同感はされない。實錄なら實名を用ひたらよささうなのに、自分や妻子や友人の名前だけを、小說的假名に變更するのもいや味である。今度讀んだ三長篇にも、主人公やその相手の女やその他の人物の名前が、三篇ともそれ〳〵に異つてゐるが、讀者たる私は、同じ男女だと思つて讀むのだ。主人公をも作者と異名同人とあると思つて讀むのだ。兎に角小說として發表されてゐるので、全部が實錄でないかも知れない——たとへば「戀の殿堂」の終りで、主人公が田舍で袋叩きにされて死んでゐるのは、無論作り事であるが——讀者がすべてを實錄として鑑賞するのは當然なので、さういふ讀者の態度を、田山氏としても非難することは出來ない。氏自身の文學觀はさういふ鑑賞態度を取らせるやうに仕組まれてゐるのである。作者の私生活についてのゴシップ興味を讀者が唆かされるのも止むを得ないのだ。田山氏は、傑れた小說は、作者の手を離れて空間に存在するものであると云つてゐたが 氏の實錄小說は、まだ作者の手を離れきつてはゐないのである。「木切れ一つなく裸體のまゝで浴室で殺された源義朝の悲痛な生涯」に、田山氏は自己を發見して、一篇の歷史小說を創作したのであつたが、それは、島崎氏の「夜明け前」に比べると、遙か

に主觀的であり、獨斷的である。しかし、作者の心境はよく分る。この「源義朝」出版記念會が田端で開かれた時に、作者が、「僕が文壇的に衰へたために、諸君が同情してこの會を開いてくれた」と、感傷的に云つたことを私は記憶に刻んでゐるが、文壇、家庭、戀愛などで悲痛な思ひに迫られてゐる作者の心が、「源義朝」に現はれてゐるのが、我々の心を惹くのである。三篇の長篇も、その氣持を疊みかけ〳〵出したものに外ならない。そして、田山花袋一生の文學は、要するに人間に希望を與へるものではなかつた。

この頃、一部の若き文學者が明治時代の自然主義の研究を試み、ゾラのリアリズムの研究にも及んでゐるらしく、先日の讀賣新聞に、阿部知二氏は「自然主義の運動全體が今までの文學の流れのうちで、最もすぐれたものではなかつたか。あそこには觀念的な服裝としてではなく、眞に人生に對した意味での思想があつた。同時にもつとも歪曲されないところの藝術の熱があつた」と云つてゐる。これは間違つた觀察ではないやうだが、私などが、田山氏の遺稿を讀みながら回顧すると、當時の新しい作家の意氣込みは盛んであり、態度もよかつたとしても、素質の傑れた作家、力に富んだ作家がなかつたためか、いつまで經つても光の失せないやうな作品は、現はれなかつたやうに思はれる。

だが、この頃のいろ〳〵な方面の新しい作家の小說が、どれも讀み應へがしないとすると、過

去に遡り、自然派の文學でも新たに研究して見ようかと考へ出すのも當然のことかも知れない。花袋、泡鳴、秋聲、藤村の四氏を比較研究すると、日本特有の自然主義の妙所も弱點も明瞭になり、將來の文學に對して何かの參考にはなるだらう。これ等四氏は自然主義の代表的作家であるが、各々面目を異にしてゐるので、今の青年批評家なんかゞ概括的に見てゐるのは間違ひなのだ。花袋、藤村の相違は、藤村と漱石との相違よりも甚だしいと云つていゝ。

だが、私は過去の自然主義文學には飽き果てゝゐる。少なくも私自身の初期の小說なんかは消えて無くなれと思つてゐる。（昭和七年六月）

二葉亭四迷論

一

「あひびき」は、ツルゲネーフの「獵人手記」のうちの、最も短かいもの〻一つの飜譯であるが、當時のいろ〳〵な作家の創作よりも、不朽性をもつて明治文學史上に光を放つてゐることは、衆人の認めてゐるところである。二葉亭や鷗外の飜譯のあるものは、單なる外國文學の飜譯といふよりも、明治文學中の重要な古典だと云つていゝ。「あひびき」は、明治二十一年に「國民之友」誌上に揭げられたのだが、その頃世に現はれたどの創作だつて、この飜譯に比べると、稚拙であり陳腐である。

文章だけについて云つても、言文一致體のそれとして、最初から殆んど完成してゐる。「浮雲」よりもいゝ。「あひびき」「めぐりあひ」の二篇は飜譯でありながら、自然と人生に對する新しい情緒と、それを生々と表現する新しい文體とを、新日本の文壇に示したものであるが、當時は幾人の讀者がその味ひを翫賞したことであらう。少數の敏感な青年文學者の心を刺戟しただけであつたと思はれるが、その以前のさまざまな、粗雜なる政治小說の飜譯とは違つて、微妙な藝術的感觸を、新代の青年の心に傳へたのであつた。この二篇が奇蹟の如く新文壇に投げ出されたあと、彼れの飜譯は暫らく杜絶してゐたが、明治三十年前後から、新たに、しかも頻繁に、露國の名小

說の翻譯が現はれるやうになつた。今度は、新日本の文學も餘程進歩してゐたので、それ等のロシア物も、前よりは多數の讀者を得るやうになつた。しかも深く翫賞されるやうになつた。そして、日本の創作よりも却つて青年の心に響くところが多かつた。

森鷗外は雜誌「趣味」の、二葉亭追悼號に於いて、「翻譯はいくら巧くつても、それだけでは、文學者の價値を上下するに足らぬ。二葉亭も創作で評價すべきものだ」と云つた意味の感想を述べてゐた。鷗外自身、すら〳〵と勞せずして翻譯の筆を執つてゐたため、翻譯を輕視してゐたのかも知れないが、二葉亭の外國文學移植はそんな手易いものではなかつた。

私は、日本はいつまでも翻譯國でないかと思ふ。明治初年の自由民權說の輸入以來、今日でも外來思想の直譯がそのまゝに受け入れられて、青年の血を湧かせてゐる。文學でも、外國の文學が今なほ盛んに翻譯されてゐる。しかも、自國の文學を今尙壓倒してゐる。新潮社の圓本翻譯文學集が、數十萬の會員を得て、多くの翻譯家が、創作家にも勝つた巨額な印稅を獲得するといふ奇異な現象をさへ呈するに至つた。

獨創の才は文壇に乏しい。二葉亭だつて、創作の方は、翻譯に比べると見榮えがしない。

翻譯のうちでは、ツルゲネーフ物が最も多數を占めてゐるが、出來榮えも最も傑れてゐると思はれる　當時の日本の文學青年は、この多感多情で、近代思想をも胸に抱いてゐた詩人的小說家

ツルゲネーフの作品に最も共鳴したものであつた。紅葉露伴一葉などの創作に對するよりも、むしろ、二葉亭によつて移植されたツルゲネーフの「片戀」や「うき草」などに於て、一層よく眞實の自己を見出したかも知れなかつた。若い心に潜んでゐるものを惹き出されたのであつた。ルーヂンやアーシャは、異國の無縁な男女ではなくつて、露伴紅葉などの作中の人物よりも、讀者の身に親しく思はれたのであつた。

私は、森田思軒が「懐舊」と題して飜譯したユーゴーの「バクジャルガル」でも、あるひは、「即興詩人」など鷗外の飜譯小説でも、明治二十年代の日本文學のうちでは、最も印象の深かつたものとして心に殘つてゐるのを覺える。そしてこれ等の飜譯家は意味を傳へるだけではなくつて、それ〴〵に文體の表現や味はひを閑却しなかつた。そのうちでも、二葉亭はことに苦心した。鷗外思軒などとはちがつて、はじめから原文一致體で、日常語を自由に使つたから、誰れのよりも新味に富んでゐた。ゴルキーの「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などは、あまりに二葉亭化されて、筆に調子がつき過ぎて、洒落つ氣があり過ぎて、ゴルキーの原作が、こんなに垢抜けがしてゐるのであらうかと疑はれるほどであるが、ゴルキー物を材料とした一つの創作として見ると面白い。日本の飜譯のうちで飜譯的創作と銘を打つていいものは、この二篇に留めを差すのである。二葉亭の面目が躍如としてゐる。多少の戯作者口調を含んで、しかも生きのいい、取り立

ての魚がぴちや〳〵跳ねてゐるやうな趣きのあるのは、この二篇で、二葉亭の才分は、ここに於て、最もよく發揮されてゐる。私は、この頃でも、をり〳〵取り出して愛誦してゐる。二葉亭の寫したツルゲネーフのある物は、今日の私には、實はあまり面白く感ぜられなくなつてゐるが、「ふさぎの蟲」などは内容も文章も面白い。

ところが、二葉亭の創作は、彼れの飜譯的創作である「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などに比べると、著しく劣つてゐる。そこが私にとつては考ふべき問題になつてゐる。

二

飜譯では文章が、ぴちや〳〵跳ねるやうに生きてゐるのに、創作では、筆が著るしくいじけてゐる。原作の束縛を受けるべき飜譯に於て、自己の才氣が隨分に働いて、自由自在に書ける筈の創作が、却つて窮屈さうに見えるのは、いたましく思はれる。

「浮雲」が、「書生氣質」などと、殆んど同じ時代に現はれたことは異例であつて、たとひそれがロシア文學の刺戟によつたとはいへ、この作者の天分に、他の凡庸の徒と違つたところのあつた證據とすべきであらうが、日本のその頃の周圍の狀境がこの作者の天分を充分に培養し發展させるのに適しなかつたためか、あるひは作者自身の心掛けが當を得なかつたためか、あるひは、天分

にそれほどの強み深みがなかつたためか、兎に角、はじめの勢ひは續かなかつた。創作道に於て作者は直ぐに息切れがした。反省力のつよい二葉亭の煩悶苦惱が、私には想像される。

「浮雲」も第一篇と第二篇とが、今日尙讀み應へのするものであるが、その續きはガタ落ちがする。讀むに堪へぬほどだらしのないものである。創作に斷念してゐた彼れが、處女作後二十年も絶つてから、新聞社に對する義理から止むを得ず執筆した「其面影」は、いくらか讀者受けはしたらしかつたが、「浮雲」以上の何物でもなかつた。彼れに對して、過分の好意を寄せてゐた內田魯庵氏でさへ、「『浮雲』の描寫は直線的に極めて銳く、色彩や情趣に缺けてゐる代りには、露西亞の作風の新らしい匂ひがあつた。之に反して『其面影』の描寫は、婉曲に生溫く、花やかな情趣に富んでゐる代りに、新しい生氣を缺いてゐた。幸田露伴はかつて『浮雲』を評して、地質の斷面圖を見るやうだと云つたが、『其面影』は、斷面圖の代りに、橫濱出來の輸出向きの美人畫を憶ひ出させた。」と云つてゐる。これは適評である。「浮雲」よりも古い感じのする小說である。哲也と小夜子とが、レストラントで會食するあたりは、作者もなか〳〵味をやつてゐるが、全體としては、たゞの通俗小說である。文章だつて飜譯のやうには冴えてゐないのだ。

第三作「平凡」では、二葉亭も、思ひ切つて自分を投げ出したので、「其面影」ほど陳腐平凡ではなかつたが、さしたる深みも厚みも、銳さも、あるひは輕快な味ひも見られなかつた。犬につ

いていろ〳〵叙述したところは、寫實の妙があるが、こんな挿話だけで生命を保つてゐるやうな小説である。しまひの方のお糸さんの一件なんか、型の如き通俗味の漂つてゐるもので、私の空想裡にある二葉亭がどうしてこんなものを書いたかと疑はれるほどに低級な感じのするものである。……しかし、この小説には、ところ〴〵作者自身の文學觀や自己批判らしいものが出てゐるのが面白い。

「平凡」は鷗外の「ギタ・セクスアリス」と同樣に、當時流行の自然主義の刺戟によつて思ひついたものらしい。「其面影」の型を脫して新しい意匠を凝らす力のなかつた彼は、日本の自然主義者等の書振りの手易さに目を留めて、おれもその手で行かうと思つたのであらう。「近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有りの儘にだらだらと、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張り夫で行く」と、はじめに云つてゐるのは、必しも戲談ではあるまい。自然主義と云ふと、日本では、二葉亭こそ最初にロシアの本場の自然派文學に接觸した文學者であつて、それを翫味しそれに心醉し、それをはじめに日本に紹介したので、獨歩でも、花袋でもその感化を受けて、新文學に向つたと云つてもいゝくらゐなのだが、しかし、花袋氏などによつて唱へられた自然主義は、ツルゲネーフやトルストイなどとは違つてゐた。「聊かも技巧を加へず、だら〳〵と牛の涎のやうに書く」ものと、

二葉亭には思はれてゐたのであらう。

しかし、鷗外は、文學に關心するところの少なくなかつた人であつたため、自己に逆らつてゐた年少の徒に對して、戰鬪的態度を持してゐたが、二葉亭は、「文學はどうでもいゝ」と思つてゐたためか、あるひは自己の才能の乏しさを感じる謙遜性のためか「愚にも附かぬことをだら〳〵と書く」日本流の自然派小說をも相當に認めてゐたらしかつた。

日本の自然主義に刺戟されて書かれた鷗外の性慾小說はあんな風であつて、二葉亭の性慾小說は、この「平凡」のやうなもので、二つを比較して、二作家の人となりの相違が察せられる。

そして、鷗外は、樂々と書きこなしたのに反して、二葉亭は「其面影」でも「平凡」でも、苦辛慘憺「造物主が天地萬物を產み出す時の苦しみ」を經て、作り出したのであつた。神經質の彼は「どうでもいい」と口では云ひながら、どうでもいゝで澄ましてゐられなくつて、一字一句にも全力を注いだのであつたが、彼れは、自分で認めてゐたやうに、創作の才は乏しかつた。

彼れの飜譯を讀むと、しきりに名文句に出くわし、譯者の筆に感歎されるのだが、創作には滅多にさういふところが見つからない。三篇が三篇とも、愚圖々々した煮え切らない男を主題としてゐるのだが、作者の觀察の目や描寫の筆が、一作ごとに深くも銳くもなつてゐるのではない。彼れは、實際界に於ては夢想家であつたが、藝術家としては、空想力が極めて貧弱であつた。文學

を一生の事業とする氣にならなかつたのは、自己を知る明があつたと云つていゝ。私なども一生懸命に骨を折つて、そして、貧弱無味な作品を作り上げて、自己の無能を歎息することが多いので、二葉亭の作品を讀みながら、身につまされるのである。私は明治二十年代の作家のうちでは最も二葉亭に敬意を寄せてゐる。最も親しみを覺えてゐる。しかし「其面影」や「平凡」は、作それ自身は、決して傑出した藝術ではないと、私はいたましく確信してゐる。それが當時文壇の人人からも期待され、相當に重んぜられもしたのは、二葉亭の人格の力と、飜譯者としての手腕と及び、文壇の戰闘範圍外に超然として敵を有つてゐなかつたためであつた。夏目漱石が、虛子の「俳諧師」を批評して、「平凡」よりいいと遠慮しながら一言云つたのに、私は同感である。

三

「平凡」では、雪江さんのところも、お絲さんのところも、筆つきが鈍昧である。むしろいやみである。年少の頃書いた「浮雲」のお勢ほどの生氣もない。しかし「平凡」には、作者の感想が洩らされてゐるので、その點が面白い。

「私が感化を受けた友と云ふのは……文學が專門だから、文學書は私より餘計讀んでゐたといふだけで、何でもない事だが、それを私は大層えらいやうに思つてゐた。まだファウストを讀まぬ

時ファウストの話を聽かされる。なに、友は愚にも附かん事を言つてゐるのだが、その愚にもつかん事を、人生だ、知識だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脫だといふやうな意味のあり氣な言葉で勿體をつけて話されると、何だか有難くなつて來て、これを語る友はえらいと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。……讀んで分つたところで、ファウストがどれ程の物だ？　技巧の妙を除いたら、果してどれ程の價値がある？」

「文學の實際は、人間の墮落だ。墮落を潤色して、懦弱な人間を更に懦弱にするばかりだ。……」

「私は、自然だ人生だと口には云つてゐたけれども、唯書物でそんな言葉を覺えただけで、意味がよく分つてゐるのではなかつた。……小說、殊に輸入小說には、人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。作の新舊を論じてその價値を定めてゐた。自分はこんな下らん眞似をしてゐながら、他の額に汗して着實に浮世を渡る人達がたま〳〵文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵つて、獨り自から高しとしてゐた。獨り自から高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落してゐた。」

作中の人物に云はせてゐるかういふ感想を、直ちに作者自身の述懷と見做す譯には行かないかも知れないが、をり〳〵噂に聞き、又雜誌などで讀んだ彼の生前の文學觀を思ひ出すと、「平凡」の主人公の所感は二葉亭の心境を幾分言ひ現はしてゐるのであらうと思はれる。

彼れは、一面文學を蔑視してゐた。……私は、よつぽど前に、坪内博士を訪問した時「世の中の出來事にさう珍らしいことはないやうですから、文學に扱ふ材料も大抵似たり寄つたりで、詰りは文學の價値は技巧だけぢやないでせうか」と云ふと、博士は「二葉亭がさう云つてゐた、文學は技巧だけのものだと云つてゐた」と云はれた。……

「ファウストだつて、技巧の妙を除いたら何が殘る？　愚にもつかん事を、人生だ、煩悶だ、と勿體つけて見ても、馬鹿な話だ。」と「平凡」のなかでも云つてゐるが、そのくせ、彼は、「人生とは何ぞや」といふことを、頻りに考へてゐたらしい。これは、ロシヤ文學の感化でもあらうが、空漠たる懷疑は絶えず彼れの心に宿つてゐた。「人生」とか「死生」とか、さういふことを「眞正直」に考へてゐた。今日の目で見ると、何でそんな取留めのないことに心を痛めてゐたかと陳腐に感ぜられるだらうが、そこに、明治二十年代の惱みが見られて、二葉亭の存在に興味が感ぜられる。彼れはその小説の主人公の如く、少し愚圖で頭が冴えてゐなかつたらしいが、正直であつた。今日のある種の青年のやうに狡猾なところ、輕薄なところは少しもなかつた。あの三つの小説は、藝術として幼稚ではあるが、人間の正直さは現はれてゐる。

內田魯庵氏の「思ひ出す人々」のうちに、「二葉亭四迷の一生」と題して、彼れに關する追憶と批評とが、面白く記されてゐるが、これは二葉亭の人となりを知るためには、必ず讀むべきもの

である。創作と云つては、たつた三つしか書き遺さなかつた二葉亭が、明治文學史上に重きを置かれた所以が、内田氏の所説を讀むと理解される。「こんなまづい物を書いて原稿料を取つては相濟まん」といふ自責の念、自己の才能に對する過分の否定は、周圍の甘い賞讃によつてもぐらつく時がなかつた。これは、他に例のないことで、私などは、自己の創作については、常に不足を感じ續けて來たのに關はらず、世間に推賞されると、うかといゝ氣になるのである。夏目漱石でも、世間のおだてに乘せられて、自分も一ぱしえらいものになつた氣でゐたらしい。藝術家で名譽の快感を覺えないのは、藝術家としての特權を失ふ譯であるが、唯二葉亭にだけはそれがなかつた。その點では不思議な人であり、また不幸な人であつた。自作の世に認められないのを憤つて、たまに惡評を下されると、親の敵のやうに深く記憶に留める文學者氣質は、二葉亭の氣持とは正反對である。

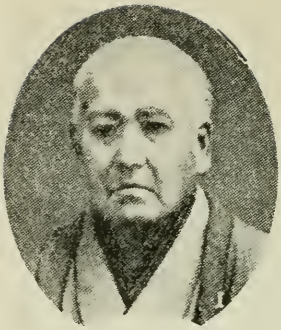
四

鷗外が新日本の文壇の先覺者として重んぜられたのは、近代の西歐文學に早く接觸したのに由る。二葉亭が早くから異色を呈したのも、偶然、近代のロシヤ文學に刺戟されたためであつた。陳腐な儒教によつて少年期の精神を鍛錬された彼れは、青年時代にロシヤ文學の感化を受けてあ

あいふ人間になつたのであつた。儒教氣質と、詩趣を帶びた夢想癖との、矛盾した傾向の混和が、二葉亭といふ人間をつくり上げた。昔の支那文學で培はれた國士とは違つてゐた。ガッシリした體軀の持主で、天下國家を志してゐたあの二葉亭が「氣の鬱したる時は、外出せば少しは紛るゝ事もあるべしと思へど、わざと引籠りて求めて煩悶するが却つて心地よきやうに思ふ」と、自から云つてゐたやうに、空漠たる人生問題なんかに思ひ惱んでゐた有樣を想像すると、いかにも不調和に思はれる。紛屋のチョンが、譯の分らぬ「ふさぎの蟲」に取付かれて煩悶するのが、傍目には滑稽に思はれるのと似寄つてゐないこともない。國木田獨歩も空漠たる人生問題に苦しんだ。北村透谷もさうであつた。綱島梁川もさうであつた。

しかし、今日は時代が變つた。一般の心意氣は違つて來た。

私は、たつた一度、人に連れられて二葉亭を訪問したことがあつたが、その時、彼れが、年にも似合はず、「藤村操の投身」事件を話題として、同情のある感想を述べてゐたのを、今も覺えてゐる。（大正十五年九月）



河竹默阿彌論

私は、讀書するには頭が疲れてゐるし身體を動すのも大儀に感ぜられる時には、地圖とか年表とか云つたやうなものを見ていろ〳〵に空想を恣にして、退屈さましをすることがある。芝居道の達人田村成義氏の「續々歌舞伎年代記」なども、數年前その出版者たる嗣子壽二郎氏から寄贈されて以來、たび〳〵取り出して、漫然と目を觸れてゐる。この一見五六十年間の興行目錄に過ぎないやうな、普通の讀者の目には極めて乾燥無味に思はれさうな浩瀚な書物を、私は全部が手垢で汚されたほどに弄んでゐたのである。明治初期の劇界の大策士守田勘彌の權謀術數が、興味ある挿話としてたび〳〵記されてゐるし、著者自身の興行上の苦心談も隨所に洩らされてゐるし、名優の逸話などもあるし、劇評もあるし、特異の社會をつくつてゐる演劇壇の表裏の消息が散見してゐるのだが、私はさういふ記事が掲げられてあるために、この書物を愛讀してゐるのではない。東西の歴史年表を見て、國家の興亡起伏を想像すると同じやうに、また地圖を見て、世界の光景を想像すると同じやうに、上演目錄と登場俳優の名によつて、その時々の舞臺を、私は想像して樂しむのである。數百年の間民衆の娯樂機關として最も有力であつた歌舞伎劇が明治の中期まで、繁榮して、時代の影響を受けて舞臺の色彩が多少づゝ變化しながらも、都人士の享樂の中心とし

て持囃された有様を、「年代記」を道しるべとしてその後を辿つてゐると、維新後の世相の一面が、私の眼前によく浮ぶやうに思はれるのである。明治の末期から今日に至るまで、演劇の外形や内容に非常に變化が起つたのであるが、歌舞伎劇はまだ殘喘を保つてゐる。他日、歌舞伎趣味が民衆の心から離れてしまふ時こそ、武士道などの舊思想も、舊弊な通人趣味も一洗される時であらう。

さういふ議論は別として、この「續々歌舞伎年代記」に現はされてゐる五六十年間の演劇壇は、俳優の方から云ふと、團十郎と菊五郎との成長發達圓熟の歴史であつたが、作者の方から見ると河竹默阿彌一人が活躍してゐたのであつた。默阿彌がゐなかつたら、明治前後の演劇は餘程違つたものになつてゐたであらう。今日の芝居もまだ少なからず、この大作者の亡靈につきまとはれてゐるのである。坪内博士は「默阿彌傳」の序文に於て、彼れを評して「三世紀に亙る我近世演劇史上、一作家にして前幾代かの蘊蓄を兼該し、其の最終の集大成者にして、後には一人の來者をも有せざる默阿彌の如きはあらず。彼れは眞に江戸演劇の大問屋なり、徳川平民文藝の羅馬帝國なり。卽ち彼れは一人にして一大都會なり、一身にして數世紀なり」と云つてゐられるが、この作家の技倆は、新時代の文學者によつても、いろ〳〵の方面から研究されて、眞價を認められてゐる。

しかし、私は今こゝに、演劇史家らしい態度を持してこの作家を研究し論評しようとは思つてゐない。たゞ「默阿彌と私」といふ題目が相當してゐると思はれるやうな態度で、例の無遠慮な

感想を吐露しようと思つてゐるだけである。

私は、少年の頃、田舎にゐて東京の芝居を空想してゐた時分、春陽堂刊行の「狂言百種」によつて、「勸善懲惡覗きからくり」や、「春霞空住吉」など三四の脚本を讀んで、はじめて、默阿彌といふ名を知り作品にも接したのであつたが、左程面白くは思はなかつた。上京後頻繁に劇場へ足を運ぶやうになつてからも、俳優の所演を鑑賞するばかりで、作者については殆んど考へるところはなかつた。無論原作を讀んだことは滅多になかつた。概して西洋の戲曲は讀んだだけで感心し、日本の脚本は上演されたものを見たゞけで感心するのが、數十年來私の演劇に對する態度であつた。

ところで、私は歌舞伎芝居を隨分見續けて來たのであるが、今考へて見ると、どの作者のよりも默阿彌物を最も多く見てゐるのであつた。私は長い間、知らず〳〵この作者に親しんでゐたのであつた。從つて、私は人生と藝術とに關して、默阿彌の感化を受けてゐなければならぬ筈である。無論、これ等の作者は明日の役者のために脚本の筆を執つたのではなく、自己の主義主張を現はすために物を書いたのでもなかつたのだから、書卸しの當時の舞臺を見たのでなければ、完全に作者の技倆を感得する譯に行かないのであらうが、兎に角私は、飜譯や抄譯によつて歐米の文學に親しんだ程度に於て、數十年の間舞臺上の默阿彌に接してゐた。學生時代に、河内山と直

侍」や「島ちどり」や「高時」や「伊勢三郎」など、團菊の所演に心醉したのであつたが、その原作者は、默阿彌であつた。「十六夜清心」「三人吉三」「髪結新三」などをはじめ、私の頭の中に茫漠として殘つてゐる默阿彌製の劇的場面を思ひ浮べると、それは殆ど限りがないのであつた。自分の數十年間に見聞して來た實社會の光景よりも深い興味を以て思ひ出されるものも少なくない。(私は近年心醉して芝居——殊に舊劇——を見たことは一度もないのだが、さう云へば實人生の事實についても感激し心醉したことは殆どないと云つていゝ。)

それでは、どういふ感銘を默阿彌から得てゐるのであらうかと、今努めて客觀的に自己批判を試みたが、それは江戸情調と云ふべき詩趣であつた。江戸末期の見物の好みに投じて舞臺で成功しようと努力した默阿彌の作品に江戸情調の流れてゐるのは、田舍の野良唄に田園趣味が漂つてゐると同樣で、今更こと新しく云ふのが滑稽なくらゐであるが、私が、最初默阿彌の二番目物に心醉し、その後長い間舊劇に幻滅を感じながらも、をり〳〵退屈さましに、見に行く程度にでもかすかな興味を覺えたのは、彼れの作品には、昔ながらの詩があるためであつた。彼れの舊い詩は私の頭に浸潤してゐる。私は一方でそれに反抗するのを續けたのであつたが、默阿彌が俳優や舞臺や音樂家を通して唄つた詩は、私の頭からのぞくことが出來なくなつてゐるのである。學者的戲曲家福地櫻痴の脚本の如きは、殆んど全く詩を缺いてゐる。默阿彌の後繼者の如きも、無臺

の技巧を別としても、全く詩を缺いてゐる。鶴屋南北など、默阿彌以上の奇才として、この頃ある種の人々に推奬されてゐるが、彼れには寫實的技倆もあり、奇想人を驚かすものがあつたにしても、默阿彌ほどの詩がなかつた。

默阿彌も、當時の世相を巧みに描く寫實の才があつた。小團次が喜んだのもその點であらうし當時の見物が歡迎したのも、一半はその點にあつたのであらう。しかし、私などには德川末期の遊女屋の光景や水茶屋の有樣や、貧乏旗本の生活振りを、舞臺で見ることが、さう大した興味にはならない。たゞ、そこに流れてゐる詩趣に心が惹かれただけなのだ。默阿彌は、酸いも甘いも嚙みわけた人情通であつたに違ひないが、深い人生觀察があつたのではない。當時の常識に從つてゐたのに過ぎなかつた。心の廣い人であつたであらうが、深みのある人ではなかつた。私は、舞臺で見た彼れの製作のうちでは、「縮屋新助」と「小猿七之助」とに於て、人間性に對する彼れの目が深く入つてゐるやうに感じたが、それだつて、舞臺上の通俗的の面白づくに妨げられて徹底を缺いてゐる。「鑄掛松」や「淸心」の心機一轉などは面白いが、作者自身があの氣持に對する情熱がないために、あとがフヤけて茶番見たいになつてしまつた。

私は、今度「默阿彌全集」を側へ置いて、その中から代表的のものを選拔して、「忍ぶの惣太」と、「宇都谷峠」と、「河內山と直侍」とを通讀し、其他三四の脚本中の見せ場だけを拔き讀みし

た。そして、芝居の運びのうまさと、南北や五瓶などよりも遙かに人情味の豊かなことを感じた。「辻番の場」の鼠小僧でも、「筆職幸兵衛」内の場の直侍でも、默阿彌は、甘つたれた人情の濫費をして見物を喜ばせようとしてゐる。講釋本種であるほどあつて、講談情調を脫しないのだが、しかし、讀んだだけでも、詩趣の漂つてゐることは否まれない。彼れの先輩瀨川如皐の「浮名の横櫛」の如きは、作者一代の傑作とされてゐるが、それは徒らにこみ入つた長つたらしい愚劣極まる趣向を綴り合せたもので、默阿彌の物と比べると、藝術と非藝術との差が歷然としてゐる。

全體、その時々の興行に當りを取るのを唯一の目的として書かれた者を、普通の小說か何ぞのやうに、書物の上で讀んで批判されるのは、作者の意外とするところであらうが、默阿彌の脚本は讀み物としても、德川末期の草双紙や人情本などよりは、よつぽど勝つてゐるのである。「前幾代かの蘊蓄を兼該し、最終の集大成者」であつた面目は、この頃のやうに抄略されて上演される物を見るよりは、完備した正本を讀んで一層よく認められるのであるが、認めるといふのは必ずしもこの「集大成者」の所行のすべてに敬意を拂ふことを意味してはゐない。私はこの「江戸演劇の大問屋」の作品の通讀によつて、德川時代の劇作術を伺ひ、今日の目では、それがいかに下らないものであることかを知つた。作者になるために拍子木叩きから稽古して行く瑣末な形式的の修業法の愚かさは云ふまでもないが、長い間にいろ〳〵な脚本製作上の型をつくつて、どうしても

そこへ持つて行かなければ、芝居にならんだの「幕が切れん」だのと妄信するやうになつたのは今日からは憫殺すべきものである。名人小團次の演劇觀でも、舊幕的マンネリズムに墮してゐたので、今日から見ると、むしろ笑ふべきものがある。默阿彌の出世作とも云ふべき「忍ぶの惣太」の梅若殺しの場が、最初小團次の氣に入らなかつたので、作者は苦心慘憺して、堤の殺しの場へチョボを入れ、舞臺と花道を割ぜりふに直したら、小團次は非常に喜んだと云ひ傳へられてゐるが今この脚本によつて、惣太と梅若との割ぜりを讀んで見ると、明治二十年代に流行した「美文」といふものを讀むやうに甘たれたいや味が感ぜられる。明治初期の新體詩の調子を舊弊に云つただけだ。寫實に徹底しようとした小團次も、こんな幼稚な感傷的せりふを喜んでゐたのかと思ふと、彼れの寫實の技倆に對して私は疑を起すのである。惣太があの慘い殺人を企てる心理の表現は、あれではぶち壞しであつて、いつそあんなものは全部ない方がいゝくらゐだ。シェークスピアのマクベスや、近松の「油地獄」には、流石に、殺人に於て、あんな甘たれたお芝居はやつてゐない。日本の役者だつて、團十郎はあゝいふ感傷的演技を好まなかつたであらうし、默阿彌自身が最も敬服してゐたといふ關三十郎なども好まなかつであらう。しかし默阿彌は、一度小團次の歡心を得たのに味を占めたせゐか、「十六夜清心」をはじめ後年の作品には、劇作術の一つの動かすべからざる條件の如くに、このマンネリズムを遵奉してゐるのである。

いつだつたか、新劇に理解の深い文學者諸氏の舊劇合評を讀んだ時に、諸氏が口を揃へて、默阿彌の「つらね」とか「たん火」とか名づくべき美文調のせりふに感歎して、自分だちにはとても書けないと云つてゐるのを見て、私は奇異な思ひをした。私などよりも一代若い文學者諸氏でさへ、まだあんな空疎な美文に感心してゐるのであらうか。默阿彌のあんな臺詞に感心するくらゐなら、それよりも一層巧みに七五調を操つてゐた曲亭馬琴の美文に一層多くの敬意を拂つていゝ譯である。默阿彌は、極めて低級な文辭しか綴れなかつた通人的文人のみ蠢動してゐた幕末と明治初頭に於ては、鶴群の一鶴として、文才に富んでゐたので、珍重されてゐたのであつたが、文章の上に獨創の妙はなかつた。德川演劇の「大集成者」であり、「大問屋」であつたが、そのかはり文章に清新なところはなかつた。「この青柳の一樹の蔭」「一河の流れ汲合ふも、盡きぬ緣の稻瀨川」「結ぶ氷りも一夜に」「別れて末は白浪の」といふ、例の清心と、求女の割ぜりふによつて、も、彼れの慣用語が察せられるが、われ〳〵はかういふ文辭を名文句と今でも感じなければならぬのであらうか。登場人物の心理にピツタリ嵌るやうな辭句を用ひようとはしないで、傳統的に美辭佳句とされてゐるやうなものを寄せ集めて來るのが彼れの常套手段であつた。

さうして、私自身も、何十年間茫然として觀劇に耽つてゐた間に、空疎な七五調を耳に快く感ずるやうに教育され、感傷的な音樂と色彩とによつて、奇怪な夢に遊ぶやうに習慣づけられたの

であつた。私は江戸末期の藝術を古今に類のない低調なものとして、この頃は極度に侮蔑しながら、生れた時代が悪かつたために、少年時代青年時代の私の心にそれが染みついてゐて、今となつてはどうにも洗ひ落すことが出來なくなつてゐるやうに思つて、それを歎息してゐる。

私は春秋に富んでゐる文學愛好者に告ぐ。纖細な遊戲的技巧にのみ捕はれてゐた江戸末期の文學演劇には接觸する勿れ。戲曲に志すにしても、默阿彌物などを讀む必要もないのである。默阿彌や南北などを推稱する者があつても、それは老人の骨董趣味として取扱つてゐればいゝので、眞に人生を見詰めて、それに對する自己の解釋を加へんと志す者は、江戸末期の通人文學の大家などから、敢て教へを乞ふ必要は寸毫もないのである。

菊五郎の如き才氣のある俳優も、默阿彌などの江戸狂言を、「芝居になつてゐる」ものとして珍重してゐるやうでは、新時代の俳優たる資格を失つて、やがて映畫役者にも劣るやうになるだらう。私が幸うじて數年間見ることを得た團十郎は、非凡な名優であつたと、今も空想してゐる。彼れだけは江戸劇の常套から脫却せんとしてゐたのであつたが、彼れの天分を十分に發揮さすに足る作者がなかつた。默阿彌も先代菊五郎の技能を舞臺に燿かさせる新作を仕組むことは出來たのであるが、團十郎の才を伸ばさせる力は有つてゐなかつた。

今の舊俳優や座付作者や、見物などが默阿彌の芝居などを標準にして、新作を批評して「芝居

になつてゐる」とかゐないとか云ふのは、眼識が腐つてゐるのだ。默阿彌は「德川芝居の大問屋」として、歷史的價値を持つてゐるのに過ぎない。坪內博士が「小說神髓」に於て馬琴を放逐しようとしたのは四十年の昔である。それに、芝居の方では、まだ默阿彌が跋扈してゐて、容易に追放の憂目に會ひさうでない。十一月の帝劇では「河內山」の通しをやるさうだが、見物はまだあゝいふものを歡迎するのであらうか。「合法鬼」の痴呆性殺人劇よりはまだしも氣持よく見られるだらうが、今度原作で讀むと、あの芝居も上手に作られてゐるが、河內山の化込みなんか一種の茶番である。茶番と云へば、西洋人にも茶人が多いので、日本の歌舞伎劇を激賞してゐる者もある。それをまた謹聽して、蒙を啓いたつもりの日本人がゐるから面白いではないか。

私は自分で戲曲を書くに當つて、何より大切なことは、「歌舞伎年代記」を忘れ默阿彌を忘れ、數年來自分の心にこびりついてゐる芝居の一切を忘れることであると思つてゐるが、長い間惑溺してゐた惡女の記憶を心から綺麗に絕ち切ることが出來ないのと同樣に、完全な忘却は遂げられないらしい。秋の夜の獨坐のつれ〴〵には、昔見た舞臺の面影を奇怪な夢としてたび〳〵思ひ出すのである。（大正十五年十月二十三日）

芥川龍之介論

「處女作に於て、その作者の一生の作風は決定されてゐる」

さういふ意味のことを、ウェルスが云つたさうである。芥川氏は、氏がさほど感心してゐないウェルスについても、この言葉だけは同感であると云つてゐたのを、私は何かの雜誌で讀んだことがある。

一

私が最初に讀んだ、谷崎潤一郎氏の作品は「新思潮」（？）に掲げられた「象」であつた。芥川龍之介氏の作品で、はじめて私の目に觸れたものは「孤獨地獄」であつた。この二つの作品は、それ〴〵に後年の二氏の藝術を豫定させてゐるやうである。

夏目漱石に激賞されたため、芥川氏の出世作となつたといふ「鼻」は、早くもこの作者の特色を現はしてゐて、人間の心理洞察の目と、諸諚（ユーモア）の才をそこに認めることが出來て、いかにも漱石の好みにかなつてゐるのであるが、私としては、この作者の他の一面を現はしてゐる「孤獨地獄」の方に心が惹かれた。

私は、年少の新作家のこの小品を讀んだ時に、興味を覺えたのは、舊套を脫した藝術の萠芽をそこに認めたためではなかつた。斬新な技巧の光に打たれたためではなかつた。作中に語られて

ゐる話が面白かつたのだ。作者が母親を通して又聞きをした大叔父の話を、簡單明晰に、作者自身の主觀をまじへて述べてゐるのが、私の心にピツタリ嵌まつたやうに感じたのであつた。

彼れの大叔父といふのは、幕末から明治初年へかけての大通人山城河岸の津藤のことで、この津藤が吉原のある遊女屋で偶然近づきになつた僧侶の心境を語つたのが、五十年後に、年少作家龍之介の若い心に觸れて、かの小品となつた。

僧侶禪超は大通津藤に向つて語つてゐる。

「佛說によると、地獄にもさま〴〵あるが、凡先づ、根本地獄、近邊地獄、孤獨地獄の三つに分つことが出來るらしい。それも……大抵は昔から地下にあるものとなつてゐたのであらう。唯、その中で孤獨地獄だけは、山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる。云はゞ目前の境界が、直ぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前するのである。自分は二三年前からこの地獄へ墮ちた。一切の事が少しも永續した興味を與へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を變へずにゐれば、尙苦しい思ひをする。そこでやはり轉々としてその日〳〵の苦しみを忘れるやうな生活をして行く。しかし、それもしまひに苦しくなれば、死んでしまふ外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だつた。今では……」

ここまで語つて、禪超はまた三味線の調子を合せながら、低い聲で云つたので、最後の句は、津藤の耳には入らなかつたさうである。

年少作者龍之介は、この小話を述べたあとに、自己の感想を添加して、かう云つてゐる。

「一日の大部分を書齋で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禪僧とは、全然沒交渉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は德川時代の戲作や浮世繪に特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかし、自分の中にある或心もちは、動もすると孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、ある意味で自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。」

私は、かつてこの小話を通して、幕末の僧侶禪超の心境を想望したのであつたが、今讀直すとこの小品が、暗示に富んだ筆で津藤と僧侶とを描寫してゐるのに氣づいた。母親から傳聞したただのお話の記錄ではないのである。

思ふに、この材料を充分に驅使して、僧侶禪超の生涯を、もつと具象的に細敍したなら、遊廓の背景や脇師の津藤の通人振りとともに、絢爛にして凄慘なる名作が現れた譯であつたが、芥川氏は、その短い人生行路に於て、さういふ材料を生かすほどの實驗を心身に吸收し得なかつた。

…氏はかの小品に於ては、禪超の心の一端を瞥見して、ある理解を試みたのに過ぎなかつた。津藤の言葉として「これを嫖客のかゝりやすい倦怠（フンニュイ）だ」と解釋したりしてゐる。「酒色を恣にしてゐる人間がかゝつた倦怠（けん）は、酒色で癒る筈がない」とも云つてゐる。そしてその後の十數年の作家生活の間にも、この材料を生かすほどの人生味は身に體し得なかつた。

「自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だ」とは、年少者が氣まぐれに口にする感傷語とばかりは思はれない。芥川氏の腦裡に嚴存してゐた感じであつたらしいが、その感じが歲を取るにつれてどう働いてゐたのであらうか。作品の上にどういふ風に現はれてゐたのであらうか。

二

小品「往生繪卷」も「孤獨地獄」と同じやうな意味で私には面白かつた。…五位の入道は、狩りの歸りに、或講師の說法を聽聞して、如何なる破戒の罪人でも、阿彌陀佛に知遇し奉れば、淨土に往かれると知つて、全身の血が一度に燃え立つたかと思ふほどに、急に阿彌陀佛が戀しくなつて、直ちに刀を引き拔いて、講師の胸さきへつきつけながら、阿彌陀佛の在所を責め問うた。そして、西へ行けと教へられたので、彼れは「阿彌陀佛よや。おおい。おおい」と物狂はしく連呼しながら、西へ〳〵と馳せてゐたが、やがて、彼れは波打際へ出て、渡るにも舟がなかつた。

「阿彌陀佛の住まれる國は、あの波の向うにあるかも知れぬ。もし身共が鵜の鳥ならば、すぐそこへ渡るのぢやが、……しかし、あの講師も、阿彌陀佛には、廣大無邊の慈悲があると云ふた。して見れば、身共が大聲に、御佛の名前を呼び續けたら、答へ位はなされぬ事もあるまい。さすれば呼び死に、死ぬまでぢや。幸ひ此處に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか」と、彼れは單純に決心した。そして梢の上で、息のある限り、生命の續く限り、「阿彌陀佛よや。おおい、おおい」を叫んで止まなかつた。……彼れはその梢の上でつひに饑死したのであつたが、その屍骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐて、あたりに異香が漂うてゐたさうである。

この小品の材料は、この作者が好んで題材を取つて來た今昔物語とか宇治拾遺とか云ふやうな古い傳說集に收められてゐるのであらう。その傳說が作者の主觀でどれだけ色づけられてゐるのか分らないが、私はこの小品を「國粹」といふ雜誌で讀んだ時に、非常に興味を感じた。ことに「孤獨地獄」と對照すると、藝術としての巧拙は問題外として、私には作者の心境が面白かつた。孤獨地獄に苦しめられてゐるある人間が、全身の血を湧き立たせて阿彌陀佛を追掛けてゐると思ふと、そこに私の最も親しみを覺える人間が現出するのであつた。しかし、これ等を取扱つてゐる芥川氏の態度や筆致が、まだ微溫的で徹底を缺き、机上の空影に類した感じがあつたので、私は

龍之介禮讃の熱意を感じるほどには至らなかつた。

私は、この小品の現はれた當時、その讀後感をある雜誌に寄稿した雜文の中に書き込んだ。……五位の入道の屍骸の口に白蓮華が咬いてゐたといふのは、小說の結末を面白くするための思付きであつて、本當の人生では、阿彌陀佛を追掛けた信仰の人五位の入道の屍骸は、惡臭紛々として鴉の餌食になつてゐたのではあるまいか。古傳說の記者はかく信じてかく書きしるしてゐるのかも知らないが、現代の藝術家芥川氏が衷心からかく信じてかく書いたであらうかと私は疑つてゐた。藝術の上だけの面白づくの遊びではあるまいかと私は思つてゐた。

かういふ私の批評を讀んだ芥川氏は、私に宛てゝ、自己の感想を述べた手紙を寄越した。私が氏の書信に接したのは、これが最初であり最後でもあつたが、私はその手跡の巧みなのと、內容に價値があるらしいのに惹かれて、この一通は、常例に反して保存することにした。今手許にはないので、直接に引用することは出來ないが、氏は白蓮華を期待し得られるらしく云つてゐた。「求めよ、さらば與へられん」と云つた西方の人の聖語を五位の入道が講師の言葉を信じて疑はなかつたと同樣に、氏は信じて疑はなかつたのであらうか。

私はさうは思はない。氏は、あの頃「孤獨地獄」の苦をさほど痛切に感じてゐた人でなかつたと同樣に、專心阿彌陀佛を追掛けてゐる人でもなかつたらしい。芥川氏は生れながらに聰明な學

者肌の人であつたに違ひない。禪超や五位の入道の心境に對して理解もあり、同情をも寄せてゐたのに關はらず、彼等ほどに一向きに徹する力は缺いてゐた。

三

小說家として芥川氏は、新技巧派の一人として認められてゐた。氏は早くから文章家らしい文章を書いてゐて、幼稚なところも蕪雜なところもなかつた。私は、新潮社出版の現代小說全集中の「龍之介集」を通讀した時に、數十種の作品のうち、一つも出來損ねのないのに感心した。現代の文壇では稀れなる名文家であると思つた。しかし、有島武郎の作品に清新なる技巧を見る如くには、芥川氏の作品から斬新な技巧を感受することは出來なかつた。夏目漱石の作品のやうに明敏なる頭腦をもつていろ〳〵に趣向を凝らしてゐるに關はらず、文章は在來の日本の文章のやうである。「紅毛人の文學」に熟通してゐるらしいこの作者も、自己の文章には異國の情趣をあまり吸收してはゐなかつた。……私は、文章の形ばかりを云ふのではない。形は新しさうに見えても、新しい生命がどれだけ通つてゐるかと考察してゐるのである。

私は、氏を名文家として推讃するに躊躇しないが、傑れたる新技巧家であるとは思つてゐない。それから、年少にして孤獨地獄を感じてゐた芥川氏も、人間を見る目に於ては、つまりは平凡な

有り振れた人情を一歩も出でゝゐなかつたとを、氏の作物を讀みつゞける間に痛切に感じた。：：これは、必ずしも氏を非難するのではない。氏は平凡な人情を脫却して、人生宇宙の現象を見ようと、いくらか藻掻いてゐたらしいが、その態度を徹底的には持し得なかつた。それだからこそ、氏の作品が世に迎へられたのであるし、古今の多くの文豪も、つまりそこへ落ちて安んじてゐたので、それでいい譯なのであらうが、津藤によつて語られて、芥川氏によつて片鱗を描かれて、われ〳〵の心にも映じてゐる「孤獨地獄」の主人公僧侶禪超の心境は、そんな生やさしいものではなかつたに違ひない。

試みに、「蜘蛛の糸」を見よ。「杜子春」を見よ。あるひは、作者得意の切支丹物のうちの「おぎん」を見よ。どれも、美しく敍述された物語である。そして、どれも有り振れた人情に雷同して作爲された物語である。「蜘蛛の糸」の犍陀多は、生前の惡行のために地獄の底に墮ちてゐたが、ただ一度蜘蛛の生命を助けたことがあつたのが、お釋迦樣の記憶に浮んで、その善行のむくひとして、地獄から救ひ出されることとなつて、お釋迦樣の手から一筋の蜘蛛の糸が、その地獄の底へ下ろされた。犍陀多はその糸を見つけると歡喜して、それに縋つて天上へ上りかけたが、他の多くの罪人も彼れに習つてその糸に縋りついた。彼れは多人數の重みで糸の中斷することを恐れて、「この蜘蛛の糸はおれのものだぞ……下りろ下りろ」と喚いた。すると、その途端に、蜘蛛の糸

はぷつりと切れて、犍陀多は眞逆さまに暗の底へ落ちてしまつた。……つまりは、自分ばかり地獄からぬけ出さうとするこの男の無慈悲な心が、その心相當の罰を受けたといふのである。作者はここで、極り切つた秩序ある世界をやすくと受け入れて、そこに何等の懷疑の苦をも感じてゐない。書振りが童話として書かれたらしく思はれるが、作者の心持までも童話の世界に安んじてゐる。私はこの頃「ガリバア旅行記」を讀み直したが、ここに描かれた童話の世界を見詰めてゐると、寒風に胤の擘かれる思ひがされる。それに比べると、「蜘蛛の糸」などの童話の世界は、ストーブで溫められた溫室的書齋での假寢の夢に過ぎないやうに思はれる。……無論溫室の夢も藝術として價値があるのに違ひない。私は「蜘蛛の糸」をも愛讀した。只、私は「孤獨地獄」や「往生繪卷」以來、芥川氏に對しては、世界の文壇の常套的藝術以上のものを期待してゐたために、不滿を感じたのである。

「杜子春」は支那の傳奇の飜案とも云つていいもので、龍之介集中の傑作の一つであるが、型の如くに事が運んでゐて、「私は仙人にはなれません。しかし、私はなれなかつたことも、反つて嬉しい氣がするのです。いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、默つてゐる譯には行きません」と、杜子春は最後に夢から醒めたやうに云つて、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、誓ひを立てゝゐる。……かう

いふ程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安んじてゐたのであるか。それなら、禪超の「孤獨地獄」の惱みは、そこになかつた譯である。

「おぎん」は、自分一人天國の門へ入るよりも、天主のおん教へを聞く機會のなかつたために地獄へ墮ちてゐる筈の兩親の跡を追つて、自分も地獄へ落ちようと決心して切支丹の教へを棄てた。……作者はここでも人情に安んじた。讀者もここに描かれた人情に感動して涙を落すのである。

芥川氏は、屢々題材を古傳說から取來つて、人情を說いてゐる。溫室のなかで文學讀者を集めて、巧みな言葉で人情を說いてゐる。「山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる」と、禪超の云つた「孤獨地獄」は、その溫室に於ける作者の眼前には現はれなかつたのである。無論溫室の屋外に、幾億萬由旬に渡つて吹きすさんでゐる寒風は、作者の耳には響かなかつたのである。

四

芥川氏は、切支丹物と稱せられる變つた物語を幾つも創作して、讀書人の注意を惹いた。自然主義以來の常套に習つて、凡庸貧弱な自己の日常生活を書く外に能のない多くの新進作家に比べると、芥川氏の態度は、遙かに賢明であつた。藝術的天分の傑れてゐたことも證明される。そし

て、氏は、それ等の古い物語を、たゞの古い物語として書いてゐるのではない。それ等に於て、いろ〳〵に人間の心の動きを洞察してゐるのだ。藝無しの身邊雜記作者以上に、自己の心をそこに現はしてゐるのだ。「奉教人の死」「るしへる」「おしの」「きりしとほろ上人傳」など、いづれも完成したる藝術品である。「保吉の手帳」など、作者自身の現實の生活記錄よりも、一層よく作者自身の面目を現はしてゐる。(私は、保吉といふ男を主人公とした小說は概して藝術價値の低いものだと思つてゐる)しかし、切支丹迫害時代の壯烈悲痛の逸話を取扱ひながら、稍々もすると、一般の人情の發露、あるひは逆說的心理の摘出を試みたに止まつてゐるのに、私は多少の遺憾を覺えてゐる。作者は「孤獨地獄」の苦惱の一端を覗いたに過ぎなかつたと同樣に、迫害された切支丹信者の壯烈悲痛の心境、あるひは夢幻的歡喜の境地に、自己の心を浸染させてゐたのではなかつた。……文學はそれでいゝので、文學の本領はそこにあるのかも知れないが、さうすると、文學は要するに智惠の遊びに過ぎないやうにも思はれる。

智惠の遊びとして、芥川氏の技巧の妙を見るべきものは、切支丹物では「報恩記」を最上とする。「藪の中」など二三、同じ趣向の立て方を試みたものがあるが、「報恩記」に於て、最もよく作者の藝術的手腕の冴えを見せてゐる。傑作の一つである。

しかし、これよりも、一層傑れてゐると思はれるのは「地獄變」である。私は自分が讀んだ範

園内では、この一篇を以つて、芥川龍之介の最傑作として推讃するに躊躇しない。明治以來の日本文學史に於ても、特異の光彩を放つてゐる名作である。氏の多くの切支丹物や、王朝物は、智惠の遊びに過ぎないところがあつて、一度は着想と奇才に感歎しても、二度三度繰返して讀むと興味索然たるものもあるが、「地獄變」は今度讀み返して一層深い感銘を得た。芥川龍之介の持つて生れた才能と、數十年間の修養とがこの一篇に結晶されてゐる。聰明なる才人の智惠の遊びではない。心熱が燃えてゐる。夏目漱石や森鷗外に似て、いくらか型が小さいやうに思はれるところがないでもないが、この「地獄變」一篇は、鷗外漱石の全集中にも斷じて見難いものであると確信してゐる。私が藝術の上からのみ批判してかういふのではない。「孤獨地獄」や「往來繪卷」に一端を示したこの作者の心境がここでは渾然として現はれてゐるのに、ある尊さをさへ感ずるのである。……私は芥川氏の日常生活を知らない。氏が家庭に於て社交に於て、どういふ言葉を口にし、どういふ行動をしてゐるか知らないが、さういふ外形の生活はどうであらうと、氏が、良秀の「地獄變の屏風」完成の由來をここまで見たことは、氏自身が持つて來た心力の限りを盡くして、世界を見たやうなものである。……普通の人情や逆說的心理の摘出にのみ拘はつてゐた氏も、ここでは假面を脫した人間生存の姿を見たやうなものである。「現代小說全集」の目次を開いて見ると、「地獄變」の作られたのは大正七年のことである。氏が三十歳に達した頃であらう。

そんなに若くつて、かういふ大作を著はしたことに、私は驚歎してゐる。

氏の如き神童型の作家の晩年は自から推知されるが、最近數年間の氏の作品に、私は痛ましき衰頽の影を見てゐた。「改造」に連載されてゐた文藝評論などは、多くは氏の頭腦の混亂が示されてゐた。

五

曲亭馬琴を題材とした「戲作三昧」のなかに、錢湯の中で、入浴中の馬琴に當りちらしてゐる男の言葉として、

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一點張りでげす。まるで腹には何もありやせん。あれはまづ寺子屋の師匠でも云ひさうな、四書五經の講釋だけでげせう。だから又當世の事は、とんと御存じなしさ。それが證據にや、昔の事でなけりや、書いたといふためしはとんとげえせん。お染久松がお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口眞似をすれば、そのためしさはに多かりでげす」と云つてゐる。

作家の好みはさまざまである。お染久松を「松染情史」として書かうとも、自己の生活の直寫をしないで、王朝物や切支丹物に於て人間を書かうとも、それは作者の自由である。しかし、芥川

氏は、現代の寫實に於ても、可成りに傑れた技倆を現はしてゐる。「秋」には若い姉妹の心の動搖が巧みに描かれてゐる。ことに「一塊の土」はいゝ。「地獄變」と相並んで、この作者の全作中で、最高位に立つものである。お民といふ田舍女の忍苦の生涯には、作者自身の心が動いてゐる。そして、自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗談がない。……私は數年前「新潮」に掲げられたこの小說を、故郷で讀んだ時、芥川君もこんなに現代の寫實に巧みであるのかと感歎して、直ちに讀後感を書いて「文藝春秋」に寄稿したことがあつた。……しかし、この小說以後の芥川君の作品には殆んど一つも感心しなかつた。

谷崎潤一郎氏の藝術觀には、強い自信が現はれてゐる。力がある。芥川氏のには、頭腦の混亂が現はれ、懷疑の惱みも見られる。谷崎氏は、かつて、熊谷直實が、淨土のある西方に背を向けるのを憚つて、逆さまに馬上に跨つて歩を運んでゐたその敬虔なる心構へに感服し、自分にはさういふ宗教心はないが、藝術の美に沒頭して安んじてゐるといふ意味の感想を、ある雜誌に述べてゐたが、芥川氏はさういふ藝術至上主義者ではなかつた。禪超や五位の入道や良秀について無關心ではゐられない人であつた。私が以前から氏の作品に共鳴を感じてゐたのはその點であつた。

聰明であつた氏は、谷崎氏のやうな自信を缺いてゐたのであらう。自己批判に疲れたのであらう。（昭和二年八月八日輕井澤にて）

小山內薰論

一

「新潮」の三月號に掲げられてゐた「明治大正期の文學回顧」座談會の筆記錄を、私は興味をもつて讀むことは讀んだが、漫然たる座談であるため、諸氏の說くところが、隔靴搔痒の感があるのを免れなかつた。事實相違の點もあるやうだつた。人間の記憶力は薄弱なもので、私などは、自分で直接に見聞したことをも間違つて記憶してゐることが少なくない。過去の歷史を確實に傳へることの如何に困難であるかが推察される。明治文學の研究も、時々試みられてゐるやうだが、今の間に、あの頃の文壇に活動した人々が、まだ死に絕えず、或は毫發しきらない間に、確實な史料を蒐集し整理して置くことの必要を私は感じた。明治大正期の文學なんかは、世界の文學史の前に置いて見ると、甚だ矮少で、事々しく研究なんかする必要はないではないかと思はれることもあるが、しかし、明治以來の日本に生育した我々に取つては、それ等矮少な文學を除外して、遠い世界の傑作にのみ親しむ氣にはなれないのだ。まづ自分に關係の深い者によつて人生を知りはじめるやうに、自分に親しい、自國の現代文學を熟知することが、遠い世界の大文學を鑑賞する基礎となるやうにも思はれる。

兎に角、日本に文學愛好心が消滅しない限りは、明治大正の文學史、或はその時代の個々の作

家について、もつと正確な調査を試み批判を試みることは必要であり、また興味あることであらうと思はれる。

「新潮」の座談會にイブセン會の話が出てゐたので、私は忘れてゐたその會の事を思ひ出して、懐かしさを感じた。あれも明治文學史の一事件である。イブセンの研究會は他にも幾つもあるかも知れないが、私の知つてゐる「イブセン會」は小山内薫氏主催の下に開かれたのであつた。氏によつて創刊された雜誌「新思潮」に、その會の記事が連載された。參會者は、田山花袋柳田國男岩野泡鳴蒲原有明長谷川誠也その他二三氏で、島崎藤村氏も加はつてゐたやうに思ふ。會場は神田の學士會の會場であつた。「新思潮」は直きに廢刊されたが、その附屬物見たいなイブセン會も長くは續かなかつた。しかし、この會に刺戟されて、我々はイブセンに多少親しんだのであつた。私は會へ出るために、「野鴨」や「少ァイヨルフ」の英譯本を買つて來た。私はイブセンがよく解らなかつたので、出席しても默つてゐるより外爲方がなかつたが、長谷川氏と柳田氏とは最もよく意見を述べてゐた。「野鴨」について二氏の云つてゐた批判はときれ〳〵に今でも覺えてゐるが、それ等の批判によつて、私は啓發されたのであつた。岩野泡鳴ともその會で知合ひになつて、その後頻繁に往來するやうになつた。小山内氏が自由劇場を起すに當つて、名目だけでも顧問役にされたのは、我々イブセン會の會員であつた。自由劇場第一回興行の出し物として、「ボークマン」

が選ばれたのは、島崎藤村氏が、どういふ意味からか、この戯曲を持出し、小山内氏がたやすくそれに同意したためであつたと、私は記憶してゐる。私は、芝居の初日を觀るまで、この戯曲について何等知るところがなかつたが、實演を觀て、他の人々のやうに感動しなかつた。それで、最後の一幕は見殘して家へ歸つて眠つた。泡鳴などが非常に興奮して、大詰の幕が下りたあと、有樂座の食堂で、座員と祝盃を擧げたことなんか、後で聞いたのである。「自由劇場最初の一夜」といふ明治演劇史に異彩を放つてゐる場景に身を置きながら、當時まだ青年であつた私が、何故感激も興奮もしなかつたか、今考へても不思議に思はれるのである。老境に達してゐる今の私なら、「ボークマン」の實演を觀たら、作者の氣持に共鳴したかも知れない。この戯曲は、イブセンの晩年の作である。青年によつて計畫された新劇運動の最初に、この作品を選んだのは、必ずしも當を得たのではないやうにも思はれる　早稻田の文藝協會でイブセン物を演ずるに當つて、「人形の家」を選んだのは、平凡ではあるが、適當してゐたやうに思はれる。しかし、理窟は兎に角、日本ではじめてイブセンの戯曲が舞臺に上つたといふことだけで、青年の見物が感激して、新劇の前途を祝したのは、さもあるべきことで、あの頃の私は、人並外れて感激性が缺乏してゐたのであらう。

私は、イブセン會のお蔭でイブセン物を幾つか讀んだ。それから、當時、外國の書物なんか、

あまり讀まなかつた私が、新刊の英譯モウバッサン全集を丸善から取寄せて、汚ない本箱に竝べた。その頃の新しい文學者の間には、小說ならモウバッサン、戲曲ならイブセンが斯道の守本尊のやうに奉られてゐたのである。だが、イブセンがどれだけ理解されてゐたのであらう？　日本の戲曲の上に演劇の上に、どれだけイブセンの感化が及んでゐたのであらう？　森田草平氏が二月末、東京會館で開かれた「飜譯ユリシーズ出版祝賀會」の席上での演說のうちに、「あの頃は、誰れと誰れとが丸善からツルゲネエフを買つて讀んだといふやうなことが文壇の噂になつて、ツルゲネエフを讀んだといふことだけでエライ人間になつたやうに思はれてゐた。よつぽど妙な時代であつた」と云つてゐたが、イブセンについても、さういつたやうなものがあつた。

文藝協會の演劇新運動が帝劇にまで進出して、ハムレットを上演した時に、「今の時代に沙翁劇を有難がつて出すやうでは」と、イブセン會の或る人々は笑つてゐたほどに、イブセンその他の歐洲近代劇は、當時の日本の新人に尊崇されてゐた。今考へて見ると、イブセンは一通りの意味ではさう難解ではなささうである。ハムレットなんかこそ、摑まへ所のないやうな戲曲で、解りにくいことは、ケーベル博士でさへ、「私にはハムレットは殆んど解らない」と云つてゐる位であるが、イブセンの戲曲は理路整然としてゐて、登場人物も大抵は鮮明にその面目を現はしてゐる。そしてこの作家ほど、演劇構成の技術の傑れた戲曲家は、古今東西に類が無いのではないかと思

はれるが、しかし、「ボークマン」にしろ、「人形の家」にしろ、「幽靈」にしろ、日本の舞臺では隨分ひどい無味乾燥のものとして現はされた。翻譯の大家鷗外にしても、「ボークマン」の臺詞は決して巧妙に譯されてはゐないやうに思はれる。私は、イブセンの原文は無論讀めないし、英譯だつて言葉の微妙な味はひを味はへるほどには讀めないのだから、斷言は出來ないが、イブセンほどに作劇術の極致を自得してゐる作家が、鷗外の譯語のやうに、緩急強弱の心の動きを無視した對話を登場人物にさせてゐる筈はないとひそかに思つてゐた。鷗外の翻譯のうまさは、概して卽興詩人のやうな文章體の小說に於て見られるので、戲曲の翻譯はさして妙所に達してはゐないのである。元來鷗外がかくも多數の戲曲の翻譯を殘したのは、弟三木竹二の死後、亡弟が多年守り育てて來た雜誌「歌舞伎」を持續させんための義俠心から、毎月、多忙の時間を割いて、面白さうな海外の戲曲を翻譯して讀者の興味を惹かうと企てたためであつた。そして、それ等の翻譯はすべて、鈴木春浦といふ筆記の天才に口述して筆記させたのであつた。歐洲の文字にも日本の文字にも熟通してゐる鷗外のことだから、仕事は極めてたやすかつたのであらうが、譯語の正確は必ずしも演劇の臺本を巧妙に日本語化することにはならない。私はたゞ一度、イブセン役者として有名だと云はれる、或女優の「ヘッダガブラ」をアメリカの劇場で見て、その臺詞や擧動に、歐洲の日常生活を見せられたやうな自然さを感じた。無論完全には分らなかつたが、自然らしい中に、

いろいろな氣持の現はれを感じた。あれがよく分つたら、渾然たる人生圖の活寫に我々は陶然とするのであらうと空想されたが、それは私の愚かなる妄想であらうか。イブセンなど西洋の正劇は、日本の活歷芝居や新派劇のやうな詩趣を缺いた臺詞で筋を運ぶだけのものであらうか。「イブセン會」の昔、長谷川氏や柳田氏の周到な研究によつて啓發された私は、イブセンを作中人物の性格や思想の上から觀察して、人生問題の提供者批判者として敬服してゐたのであつたが、本當のイブセンには、我々を陶醉させる藝術美があるのではあるまいか。日本のイブセン飜譯者には、その微妙な味はひを傳へる力なく、俳優にはそれを表現する技倆なく、そのために日本では歐洲近代劇が無味乾燥な理窟つぽいだけの者に化したのではあるまいか。その歐洲近代劇の感化を受けたつもりの創作劇が藝術として完成しなかつたのも、近代日本の青年作家にイブセンその他の眞髓を味得する能力がなかつたためではあるまいか。

鷗外が「キタセクスアリス」の中で云つてゐる。「小說は澤山讀む……藝術品として見るのでは無い。藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は此要求を充たすに足りない」と。鷗外の高い審美觀からは、當時の自然派系統の小說なんかは藝術としての價値が極めて乏しかつたのだ。世界の文學史の前に置かれた日本の新文學の矮少を、鷗外の如きは最もよく感じてゐたのであらうが、鷗外自身の近代歐洲戲曲の紹介飜譯も、藝術として高い要求を充たす

ものではあるまい。日本に長く滞在したヘルンやケーベルの日本觀を讀んで、觀察が皮相で、可否ともに日本の眞相を穿つたところが少なく、多くは自分の空想の日本を說いてゐるに過ぎないのを見るにつけても、外國の文學藝術の鑑賞の困難が察せられる。一通りは分り易いイブセンにしても、我々が分つたつもりの外の所に、本當の藝術のうま味があるのに違ひない。自然主義とか理想主義とか、プロレタリア文學とか、表面的の相違によつて文學を分類してその優劣を判ずるなんかは、要するに文學鑑賞の初步であつて、それ〴〵の文學の有つてゐるうま味を味はゝなければ、藝術鑑賞の甲斐がないのである。文學の修養を積んで行くと、次第に鷗外の所謂「藝術品に對して非常に高い要求」をなすやうになるのだが、その極致は生田長江氏が「宗教至上」論中に至つてゐるやうに、宗教の極致と相通じてゐると云つていゝのかも知れない。「文學のうま味」といふのは、言葉の言ひ廻しのうまさをも意味してゐるが、如何なる見方に於てか、人間の眞相を底の底まで見せて呉れる（と、讀者を眩惑させる）うま味である。宗教が畢竟阿片たるに過ぎないかも知れないと同樣に、文學も阿片であるかも知れないが、阿片だけの力のある文學は現代の日本には乏しいではないか。私は阿片を飮んだことがないが、阿片は强烈な魔力を人間に及ぼすさうである。そんな强烈な魔力を有つた文學は現代の日本に存在してゐないではないか。

二

「國語と國文學」の四月特別號は、「明治文豪論」と題されて、諸家の明治文學論が蒐集されてゐる。かういふ研究が積み重なつて行くと、明治文學も意義のある存在となるのである。そのうちの森鷗外論の劈頭に「鷗外漁史、森林太郎の生涯の歴史に就いて、その文學的閲歴を辿るものは、げに明治文學全史の總索引が、こゝにこそ含蓄されてゐるといふ、激しい嗟嘆の痛撃に襲はれる」とあつた。私も同感であるが、たゞ總索引といふ語の解釋については、多少論者と見解を異にしてゐる。新文學をして世界的水準へ昇らせようとするのが、明治文學史を貫いてゐる意圖であつたとすると、鷗外はその最も有力なる指導者であつた。世界的水準昇騰意識の代表的人物であつた。しかし、この指導者には熱意は乏しかつた。そして彼れの目に映つた明治文學は、概して矮少で、小兒の文學らしく思はれてゐたらしかつた。私は先頃大阪の新聞に連載されてゐた竹内栖鳳氏の畫談の一部を速讀したが、そのうちに、氏が數十年前に歐洲の繪畫研究に出掛けたことが書かれてあつた。感激性の強い青年期に、はじめて異國の古名畫に接した時の驚異の感が回顧談のうちに微見してゐたが、そのうちに「これ等西洋の美術に比べると、日本繪は餘技のやうに思はれた」といふ意味の言葉が述べられてあつた。この評語は私の心を打つた。「西洋の繪畫にこそ

藝術の眞面目が認められるが、日本の繪畫は藝術家の餘技のやうな觀がある。」私がひそかに感じてゐたことが、栖鳳氏のやうな日本畫の名家によつて簡明に言ひ現はされたのである。察するところ、今日の氏は、さうは思つてゐまい。一見餘技らしい東洋美術に、却つて西洋美術に見られない幾多の妙所が潛んでゐるといふ優越感を起してゐられるかも知れないと、忖度される。

美術の話はさて置いて、明治文學は文學の餘技と云つた感じがしないこともない。鷗外自身の創作は、世評の如く「餘技」であつたが、彼は當時の周圍の作家の製作品を、文學の餘技見たいに扱つてゐたのだ。田山花袋がたび〳〵云つてゐた「水火のなかに鬪つてゐる作品」、岩野泡鳴の所謂「眞劍の文學」をも、鷗外は自分の要求してゐる藝術とは似つかぬものとしてゐた。自然主義の作品に、彼れは飽き足りなかつたばかりでない。自然主義勃興前の明治文學についても、彼れは重きを置いてゐなかつた。例の雜誌「歌舞伎」の古いのを偶然見てゐると、明治三十三年（二十世紀になつたばかりの年）鷗外が九州の小倉に赴任してゐた時分に、隱流といふ匿名で、その雜誌に文學論を寄稿してゐる。田舍から東京の文壇を揶揄してゐるのがなか〳〵面白い。「新進作家と云はれる人が、遠目に女の姿を見ても氣を失ひさうな、極端なプラトン主義の作を出してゐて、自からハイネを愛讀すると稱してゐると、批評家はそれを取上げて、あれはハイネに私淑してゐると云つてゐる。いかにもハイネの詩抄には、わざと少いものに讀ませるために、罪のない、

無邪氣な作ばかり選り抜いた小冊子もあるさうだが、彼の野合のマチルドと巴里に客死したハイネの全集を見たらどうだ。浮氣な、氣の多い、人の悪い根調が全體に亙つて、プラトン主義と反對の熱い色情が、我等の地球の中心の火の如く、その底に潜んでゐるではないか」と云つたやうな調子だ。ハイネのみではない。●バイロンでもニーチェでも、日本へ來ると弱く小さくなつてしまふ。歐洲近代劇にかぶれて出來た新劇も、當事者の熱心と努力の甲斐もなく、歐洲劇から骨と皮だけを輸入したやうな形となり、藝術の「餘技」に過ぎない狀態であつた。創作を餘技としてゐた鷗外にしても、その新作戯曲は餘技中の餘技で、戯曲的生命が極めて乏しかつた。それで、新劇運動に熱中したあの時分の青年は、夢を喰つて腹を滿たしたつもりになり、空中樓閣を描いて有頂天になつてゐたのだ。俳優の技藝は第二として、西洋劇のまづい飜譯、まづい創作戯曲。……だが、私はあの新劇運動、新劇讃美を輕蔑するのではない。向上心のある青年の意氣を認めて、私自身もその氣持に共鳴しないこともない。大觀すると、世界の文學史も、この新劇運動を擴大したやうなもので、文學は畢竟、人生に取つてタワイのない夢であり、世界の文學讃美者は内容のない空中樓閣を見て有頂天になつてゐる痴者だと云つてもいゝ。ここまで突き詰めると、文藝評論の筆も萎けてしまふが、さういふ第一義的の考へには目を瞑つて、現實の明治文學史を回顧し、新劇運動の消長を考へることは、私には一つの興味となつてゐる。

新劇運動には多くの人々が關係してゐたにしても、私は小山内薫氏に最も心が注がれるのである。森鷗外が明治文學全史の總索引であるなら、小山内薫は、明治大正の新劇運動全史の總索引であると云つていゝ。氏は新しい形式の小説を書いた。新しい情緒をもつた詩を書いた。新しい宗教觀にも觸れようとした。そして、演劇をもつて自己一生の事業とするやうなのだが、これ等の藝術に對して、自分の内心の要求を充たさうといふ立場から進んで行つた。同時代に文學に志した私などが氏に同感する基礎はそこにあるのだ。氏は默阿彌を評して「彼れの作に内心の要求から生れ出たらしい物は一つもない。謂ふ所の勸善懲惡も因果應報も、決して心の深い奥からの叫びではなくて、強ひて世間道德に追從して行かうとする作者のおとなしい對社會的態度の現はれに過ぎない。彼れは長庵や新三や清心や鑄掛松や小猿七之助などの如き、頽廢的人物を描くに非凡な手腕を持ちながら、いつも彼等を、人爲的な『廻る因果』の前に譯もなく萎縮させて、これら惡魔的人物の終局を、甚だしく小さく且不徹底なものにしてしまつてゐる。默阿彌は果してこれら諸人物の『最後』に道德的の安心を得ることが出來たのであらうか。私は決してさうは思はない。彼は唯世間に對して——世間の道德に對して——惡人は是非とも殺すか悔悟させるかしてしまはなければならないと思つただけで、惡人の死や悔悟に決して必然的な深い動機を求めようとはしなかつたのである」と云つてゐる。演劇に對して、内面の要求なんかを云々するのは、芝

居道の人々からは、分らず屋と思はれさうなことだが、小山内氏は私など、同様に、藝術界へ踏み出した時に、さういふ野暮つたい考へを有つてゐたのだ。氏は、その根本的藝術態度から、島村抱月氏の妥協的態度を非難してゐる。「總ての藝術の内で、芝居といふものだけが俗衆と妥協しなければ生存出來ないと云ふのだね。語を換へて云へば、芝居だけは終に眞の藝術になる事が出來ないと云ふのだね。」と云つた調子で詰め寄つてゐる。氏は、繪畫や小說に於けると同樣に、演劇に於ても通俗を排斥してゐる。そして、かう云つてゐる。「勿論、芝居といふものは金がなければ出來ない。金は芝居の第一條件だ。それはおれでも知つてゐる。しかし、正直な生活に入るだけの金は正直な爲事で得られる。純粹な藝術に入るだけの金は純粹な藝術で得られる。それは夢だと笑ふ人もあるかも知れないが、おれはどうもさうより外信じられぬ。勿論その境地へ行けるまでには、鹽も嘗めなければなるまい。水も飮まなければなるまい。しかし、最後にはきつと人間並のパンが食つて行ける。きつと食つて行ける。この信仰がない位なら、初めから藝術などは止めてしまつた方が好いのだ。」

この強い信仰は尊い。人生を信じる青年の強い意氣が見られる。「學べば祿その中にあり」と云つた孔子の樂天觀が思ひ出される。しかし、實際の人世は複雜であつて、若かりし小山内氏の信仰や孔子の說敎も實現されるとばかりは限らない。小山内氏もその後十年二十年に涉る新劇事業に

於て舊時の信仰の破れるやうな痛い經驗をしたのであるまいか。今日の世では、さういふ信仰を抱いて文學藝術に志す者が極めて稀れであるばかりでなく、純粹藝術なんかを有難がる人間は阿呆のやうに思はれ出した。鷗外を總索引とする明治時代の文壇と、今日の文壇との根本の相違はさういふ所にも存在してゐるのだ。あの時代には、才分が乏しくつても、心は純粹な藝術に向つてゐた。今日は才分の有無にかゝはらず純粹な藝術を輕視するのを常例とするやうになつた。時世の氣運と云へばそれまでゝある。小山内氏とても自由劇場時代の考へを墨守することなく、築地小劇場時代には時代の影響を受けて、その藝術觀が變遷してゐる。抱月氏の「民衆との妥協」說を非難した時とは違つて來た。今日氏が生存してゐたら、ます〳〵民衆と妥協したかも知れない(?)

三

平民劇にしろ何劇にしろ、要は脚本であると、氏はある所で云つてゐるが、私は贊成である。そして、氏は築地小劇場創立當時、多分「演劇新潮」の座談會に引き出された時であつたと記憶してゐるが、山本有三氏その他の新進の劇作家諸氏から、「なぜ日本の新作を上演しないか」と詰られ苦しい辯解をしたことがあつた。私はそれを讀んで齒痒い思ひをした。島村抱月氏は、須磨子

事件で文藝協會を離れた時には、協會が「思ひ出」のやうな良好な通俗劇を演じたのをさへ、藝術の墮落のやうに云つたくせに、自分が藝術座を組織して實際の演劇界へ進出すると、そんな理想的なことは公言し得られなくなつて、小山内氏に擯斥されるやうになつた。小山内氏も小劇場を守立てゝ行く地位に座すると、有力な新進の劇作家にも氣を兼ねて直言を憚るやうになつてゐたのかも知れない。だが、私は小山内氏と同感であつた。小劇場創立の數年前に、氏は「飜譯劇の運命」と題して云つてゐる。「貧弱な日本の演劇はまだ〳〵西洋戲曲の糧なしには育たないと大言壯語をする人がある。もう日本にも西洋に負けない作者が出來て來たとか、もうイブセンでもあるまい。マアテルリンクも底が知れたねとか。……私は平氣でかういふ詞を吐く勇氣がないのである」と。私が小山内氏の地位にあつたら、「精根を盡くして新劇を上演しようとする我々が、ろくでもない日本の新作なんか選ぶ氣になれるものか」と斷言したであらう。鷗外の所謂「高き要求」から見て、明治以來傑れた戲曲なんか絶無の有樣ではないか。

小山内氏が飜譯劇をやりたがつたのは當然であつた。しかし、悲しいかな、飜譯にもろくな飜譯がなかつた。少くも原作を巧みに日本語化し、微妙な味はひを傳へた飜譯はなかつた。氏自身も、「近代劇の飜譯も今まで隨分出てゐる。イブセンで私の知つてるだけでも、高安氏の『人形の家』『社會の敵』千葉氏の『建築師』『ヘッダガブラア』橋本氏の『幽靈』等である。しかし、私の所

謂臺詞の呼吸の出てゐる飜譯は、まあ『建築師』一つくらゐなものだ……」と云つてゐる。鷗外の飜譯だつて、イブセンの戯曲の意味を傳へる以上のものとは言ひ難い。飜譯劇もさういふ臺本を用ひて奮闘したのだから、勞多くして效果の乏しかつた譯である。

明治大正の文學史(演劇も含めて)に於て、小山内薫は、西洋文藝飜譯の化身であつた。いゝ意味でも悪い意味でも飜譯の化身であつた。そこに氏の面目があり、生命があり、それによつて、氏は明治文學史上に時代精神の代表的面目を備へた存在となり得るのである。私などが親しみを覺えるのもそこにあるのだ。鷗外には武士道だの日本の古典だのがからみついてゐた。しかし、小山内氏にはそれがなかつた。無論、氏は歌舞伎劇にも通じ古代近代の日本文學をも相當に知つてゐたのであるが、氏の創作や論評に現はれてゐる限りに於て、氏は誰れよりも舊臭を脱してゐた。永井荷風氏は、佛蘭西文學の熱愛者であるにかゝはらず、その創作には佛蘭西文學感化の跡は多く認められない。岸田國士氏ほどにも佛蘭西文學の味はひは取入れられてゐない。小山内氏には、歐洲近代文學が器用に受入れられてゐる感じがする。氏は學生時代に内村鑑三氏を崇拜して、内村式基督教徒となつたこともあつたが、氏が演劇に於て、心の糧を求めたのも基督教に於て精神の糧を求めてゐたのと同じ心理だと云はれないこともない。宗教や文學や演劇などいろ〳〵な方面に於て、外國物に對しての感受性は可成り強く、その結果としての氏の藝術は、いつも清新

らしかつたが、稀薄でもあつた。これは氏の創作力が薄弱であつたためでもあらうが、多忙なためでもあつたのであらう。

演劇論者として及び「演出家」として傑れてゐた小山内氏も、創作家としては我々に左程手應へのある作品を出してゐなかつたと、かねて斷定してゐた私は、今度久し振りに、氏の代表作數篇を讀み返した。

「第一の世界」は、「私には世間で云ふ現實の世界が幻影で、世間で言ふ幻影の世界が現實なのです。私は自分に取つての現實の世界に生きてゐるのです」と云つて、孤獨生活をしてゐるダンテ研究者を主人公としたもので、青年時代に内村氏の宗教思想の影響を受けた作者の心の跡を見ることが出來る。飜譯らしいが、これは小山内氏の心境を寫した創作劇である。だが作者のかういふ心境は西洋近代文學の飜譯心境なのだ。この作中の書生がついに主人に見きりをつけて、「僕は世間へ出て行かうと思ひます。先生の世界はあまりに脆いものでした。世間に一寸觸れると、直ぐに毀れてしまひました。先生はこれでもまだ、先生の世界を幸福だと思つてゐるんですか。この卵の殻のやうに脆い世界を。」「先生の世界ももう絶望ですね」と云ふと、主人は「いや、俺はやつとおれの行きつく所へ來たのだ。……絶望は人生に於ける崇高な瞬間だ」と答へて、これから永遠だけを相手にして本當の生活をはじめると決するところで幕になるのだが、一篇の經過に必

然性を缺いてゐる。全體が骨と皮だけのやうに痩せてゐる。「ボークマン」など西洋劇を演じても、そこに有るべき筈のたつぷりした藝術味は移し得なかつたやうに、新劇創作も具體的に人に迫る力を缺いたものばかり現はれるのがある頃の常態であつた。「第一の世界」の如き、六ケしい、そして勞して効なき劇も實演されたのだから、作者も俳優や興行主の新劇無理解を一概に非難し得られない譯である。かういつても、私は小山内氏にケチをつけるのではない。翻譯心境は私なども絶えず經驗してゐるので、これが明治大正、或は昭和の文學者の或特色にもなつてゐるのだ。ことに小山内氏が、最高の世界、最高の境地を仰いで、その心境を舞臺に表現せんと試みた抱負は、默阿彌その他の職人的作者の思ひも及ばないところで、我々が親しみをもつて小山内氏を追憶するのもその點にあるのだ。手腕が足らなくつて成功しなくつても、氏はつねに高所に目をつけてゐた。通俗的成功ばかり心掛けて筆を執らうとしない態度に私は好意を有つてゐる。

「ペテスダの池」も、材料が基督敎に關したもので、翻譯的心境の象徴劇である。「息子」は、舞臺上成効した戯曲で、これは、アイルランドか何處かの戯曲の翻案であると聞いたことがあつたが、この作に於ても、私は藝術の貧しさを感じた。氏の作品は簡潔とか暗示的とか、言外に意味があると云ふのではなく、作者の筆がそこまで達してゐないと思はれることが多い。

「戯曲作家としての私はまだ一年生であると云つていゝ。天分の厚薄はやむを得ないことゝして、

戯曲作家としての私は未知數である。そして私はそこに私自身の希望をつないでゐる」と、小山内氏自身で云つてゐるが、氏が長生してゐたら、飜譯心境から脫却した大作を産出し得るやうになつたかも知れなかつた。舞臺上の實際の經驗に富み、高き態度を持し、豐かな學殖のあつた氏の戯曲が、あの程度で止まる筈はなかつた。

小山内氏が亡くなつてから新劇といふ者がひどく淋しい。氏が生き永らへてゐても、あゝ云つた種類の新劇は、もはや榮えなかつたであらうが、演劇を生命としてゐた氏は、いかなる方法に於てか、劇壇に新味を注ぐことを企てたであらう。

文藝協會、自由劇場、藝術座、その他新劇團體が雨後の筍のやうに發生し、論爭が盛んであつた時代を回顧すると隔世の感じがする。そして、大山鳴動鼠一匹と云つたやうな思ひがされる。世の中の事多くさうであるが、それにしても、あの盛んな氣運に際會して、傑れたる戯曲一つ殘されてゐないのはどうしたものであらう。新劇勃興時代を代表するに足る脚本一つないではないか。私は、小山内氏の戯曲や島村抱月氏の「運命の丘」や「清盛と佛御前」などを今度讀んで、新劇道の大家の創作力のあまりに貧弱なのに驚いたのである。今更のやうに議論はたやすく創作は難いと感じた。そして、演劇にしろ小説にしろ、新氣運を意義あらしめるのは創作第一であると思つた。傑れたる創作を産み出さない新劇運動は要するに空騒ぎであつたのだ。

「要は脚本である」と、小山内氏も云つてゐる。たとひ民衆のための演劇にしても、要は脚本である。脚本に眞個の平民劇が生れて、それが不當な干渉なしに演ぜられるまでは、いくら觀劇料を安くしても、いくら大勢見物を收容しても、それは眞の平民のための演劇にはならないのである。（昭和七年四月）

德田秋聲論

一

藤村氏は久し振りに、可成りの長さの小説を發表した。「新生」に接續する自傳の一章とも云ふべきもので、この頃氏の舊作を讀みつゞけた私は、「改造」の九月號が今日手に入ると、直ちに「嵐」を讀んだ。老いて行く父親と、ズン〳〵伸びて行く子供との關係が、主觀と客觀と融合の名筆でよく書かれてゐる。(子供のない私は、「なるほどこんなものであらうか」と、傍觀的に感心するところが多くつて、作品の中へ吸ひ込まれるところは少かつたとも云へるが)

「嵐」の後で「元の枝へ」を讀むと、明治以來の日本文學もある一面では老いたことが感ぜられる。小說と云へば若い者の藝術とされて、生活でも戀愛でも、若い者の目で見たもの、若い者の心身で經驗し或は空想したものゝみが文壇にあらはれてゐたのであつた。世路の艱難を經た老人の心境を寫したものは極めて稀であつた　青年である子の立場から父を取扱つた小說は頻りに現はれてゐたが、父親の立場から青年期に達した子供を取扱つた小說は殆んど無かつた。今度の二篇は、自己の周圍と生活や戀愛についての老人の心境を精細な觀察を加へて、圓熟した筆によつて叙說し描寫したところに、私は汲めども盡きぬ興味を感じた。平生小說を讀み馴れない世上の老人も、これ等の小說を熟讀翫味したら、共鳴することが少くないだらうと思はれる。

「嵐」はむしろ嵐の後と題した方が適切ではないかと思はれ、秋聲氏の「元の枝へ」にこそ主人公の心に嵐が吹き荒んでゐる。あるひは、浮世に老いて疲れた弱々しい人間の、嵐に吹きもまれてゐると云つてもいゝ。「嵐」の中には、これから成長して世へ出ようとする新しい少年少女の心持が隨所に出てゐるが、藤村氏はそれを取扱ふに當つて、書出しの背丈くらべから結末の子供の送別會まで一篇の結構をキチンと調べてゐる。不用意に書き流してゐないで、自然に起伏する人生の事實のうちに文章の法則を見てゐるのは、例の藤村式であるが、秋聲氏は、さういふことを、あまり念頭に置いてゐない。私は「嵐」の中の子供の一人が、自己の運命を開拓すべく、都會を離れて祖先の地へ歸らうとする結末を、「春」の主人公が自己の運命を開拓すべく都會を離れて東北へ赴任する結末に比べて見た。これ等二つの小説の間には三十年の歳月が經過してゐる。あれを思ひこれを思ふと、人生流轉の姿が亡靈の如く私の目先にちらつくのである。しかし、「嵐」の中の「私」が、「その墓地から起上る時が、どうやら自分のやうなものにも來たかのやうに思はれる」とか、「ほんたうに私達への道が見えはじめた」とか云つてゐるのは、私にはその意味が分らない。「元の枝へ」の材料は、今春以來、この作者がたび〳〵取扱つたものであるが、今度は、微細に渡つてゐるので感銘が深い。近松秋江氏の作品のあるところを思ひ出させるところもあるが、しかし、かれは獨身者の戀情のもつれであるのに比べて、これは、多くの子女を擁し、且つ青年期に

達した息子を持つてゐる一家の老主人の愛着の惱みを描いてゐる點で、一層の深刻味がある。「春」や「家」よりも更に深く「新生」に感動した私は、「黴」や「何處まで」や「未解決のまゝに」よりも更に深く、この「元の枝へ」に感動させられなければならなかつた。心を取亂した人物の心理と行爲を描寫してゐるが、作者の態度は殆んど取亂されてゐない。作者の持前の藝術上の客觀性は嚴として存在してゐる。父子で女の行衞を捜しに行つて卒倒したところ、その後での父子の會話などは、シエークスピア全集のある場面に挿んでもいゝやうな妙味を私は感じた。(あの十數行の簡潔な父子の會話と簡潔な描寫は、秋聲數十年の作中に比較するものゝないほどに、無技巧の妙境に達してゐるものである。)病んでゐる少女に心惹かれながら、捜さずにはゐられない女を捜しに行くところ、偶然に捜し當てた時のよろこび、最後に息子が、女に金を貰つて買つたらしい異色のネキタイを着けて歸つて來たところなど、たくまずして妙を盡してゐる。女も、從來この作者の取扱つた多くの女とは全く種類が違つてゐるので、この一篇を引立たせてゐるが、しかし、この女の描寫にはまだ物足りないところが多い。

私が藤村秋聲二氏の新作に感心したのは、私自身がすでに老境に達してゐるためかも知れない。小說好きの若い男女は、かういふ作品には、多分興味を寄せ得ないであらう。新時代の青年作家もかういふ文學は好まないかも知れない。無論それでいゝのだ。青年作家がそれ〴〵にもつと廣

い世界に向つて自由に進めばいゝので、これ等の先輩の持つてゐる心境の如きところに彷徨する必要はないのだが、若い人々も、一度かういふ老境の人生記錄を熟讀して置いて、他日年を取つた時に回顧したら、多少の感慨を催すこともあるであらう。

先月、梅牛一葉などの青春の書を讀んだ私は、今月は、新たに老年の書を讀んだ。悠々極りなき人生の一面はかれにも現はれこれにも現はれてゐる。（大正十五年八月二十四日）

二

德田秋聲氏の小說には、去年の夏輕井澤の高原で、「元の枝へ」を讀んで、老いて愛慾に惱んでゐる作者の痛ましい心境と、その枯淡な筆致に情趣を湛へてゐる當代に類の無い技巧とに感歎して以來、月々誌上に現はれる氏の短篇には殆んど目を觸れなかつたが、それ等の短篇にはどういふことが取扱はれてゐるかといふことについては、新聞の文藝欄の評語や知人の噂によつて、その大要を伺ひ知つてゐた。

ところが、今四月の中央公論の創作欄に、「春來る」と題された氏の新作が現れると、間もなく、激しい惡評が、あたり近所から私の耳を襲つた。去年の後半期に、「元の枝へ」が島崎藤村氏の「嵐」と並んで、近年に例のなかつたほどに、喧しく推讃された後、藤村氏は大風の後のやう

に鎭まり返つてゐた間に、秋聲氏は、かの大作の後日譚をボツボツ語つてゐたのであつたが、世の物語の後日譚が多くさうである如く、氏の後日譚も讀者や批評家にあまり喜ばれないやうであつた。そして、ひそやかな冷笑侮蔑の聲が何處からともなく聞えてゐたが、今度「春來る」が現はれるに及んで、作者に對する嘲罵の聲が渦捲いて來たやうである。(世間の狹い私が、さう感じただけで、一般の文壇ではどう云つてゐるのであるか、今のところまだ私には分らないが)それについて、毀譽褒貶の手賴りなさを私はまづ感じた。

それで、この頃暫く月刊雜誌の創作欄を遠ざけてゐた私も、徒らに押入れに積み重ねられてゐる寄贈雜誌の中から、中央公論を引出して、「春來る」を讀みかけたが、長い間馴染の深かつた秋聲氏の作とは、まるで樣子が違つてゐるのに驚かされた。驚くと云つても、作に惹き入れられる種類の驚きではなくつて、我慢にも讀み切れなかつた。それで、一目十行の驅け足で通り抜けて、ホツと息をついた。……誇張して云ふと、私は滿身に冷汗を掻いたのである。讀むべからざるものを讀み、見るべからざるものを見たやうな感じがした。私は休息しながら憂愁に捉はれた。(冷汗を掻いたと云つたのは、誇張した言葉ではなくつて、私の感想に適切な象徵語であるかも知れない。)

これでは、藝術と事實との關係から云つて、讀者が眉を顰めるのも無理がないと思はれた。同じ種類の材料が取扱はれてゐるに關はらず、「元の枝へ」には、讀者の冷笑を招くやうな間隙がな

かつた。それに比べると、今度の作品は著しく弛緩してゐる。目も口も帶も締つてゐない。

三

讀後何日かが經つた。その間「春來る」が心の拘はりとなつてゐて、私をして、藝術家の一生について、あるひは人間の老境について、いろ〳〵に思ひを馳せさせた。

島崎藤村氏が、かつて、感想錄のうちに「ある作家が自己の經驗した事實を書いたものは、それだけで價値がある。それが藝術になつてゐたなら更に尊い」といふ意味のことを書いてゐた。過去に於て、「足跡」や「たゞれ」や「何處まで」のやうな、人生世相をさながらに寫した多くの大作を出した秋聲氏の、老後の心境記錄が、さう蔑視される筈はないと、私は思ひ返して、再び雜誌を取上げて、「春來る」を開いた。今度は、人生記錄に直面したつもりで、襟を正して、行から行へと熟讀した。ペンを持つて、何かの意味で自己の心の刺戟されたところに線を引いた。

田山花袋氏の「蒲團」以來、近松秋江氏の幾つかの「所謂痴情小說」、島崎藤村氏の「新生」、筆に上されなかつた島村抱月氏の痴情小說の材料、武林無想庵氏の「コキユー」物などによつて、人生を學んで來た私は、自分で老境に入つてゐる今日、「春來る」によつて、つひに老人の戀を學ばねばならぬやうな機會に接した。舶來の書物によつて嘗て學んだストリンドベリーやゲーテの

晩年の戀愛も、孱弱として思ひ出される。以上の諸氏は、身を以つて當つて、滿身に創痍をあびて、艱苦をも歡喜をも體驗したつはものである。私は、廣津和郎氏が先頃の時事新報の文藝欄で云つてゐたやうに、一介の從軍記者たるに過ぎない。したがつて、いくら心眼を凝らして見ても、それ等の作品の心髓に徹することは出來ないかも知れない。……しかし、如上の諸作品も特異の奇事奇想を描いたのではなくつて、その多くは世間にザラにあることが取扱はれてゐるので、我々も自己の心裡に、これ等諸作品に現はれてゐるもの、萠芽を有してゐるのである。だから、共鳴を感ずることも反感を起すことも、あるひは前車の覆轍として自から戒めることも出來るのだ。

「春來る」は、世上周知の一老文學者と一美少婦との戀愛記錄の一篇で、この材料については、作者ははじめは、遠慮しながら書いてゐたやうであつたが、次第に歩を進めて、今度のになると、臆面もなく材料をぶちまけてゐるやうな態度を取つてゐる。しかし、その態度は、二三の作家の愛慾小說の如く、藝術的勇猛心とか、自暴自棄的苦悶とか、あるひは藝術によつて自己救濟を試みようとするやうな念願に基いたのではなくつて、次第に馴れつこになつて、臆面もなく何でも書き得るやうになつたといふ程度のものである。同じ作者の「元の枝へ」や「暑さに喘ぐ」などとは、根柢からして態度が違つてゐる。

戀愛小說にも種類が多い。そのうちで、男女の相剋に關したものが、藝術の好題目になるらしく、讀者をも感動させ易いやうである。「春來る」の如く、男女相愛の甘い遊戲を描いたものは、作者の主觀が餘程嚴肅であるか、あるひは作者の筆致に讀者を陶醉させるやうな妙味を含んでゐて、有無を云はせず、作者の戀愛境地に讀者を惹込むやうでなければ、藝術としての效果を奏し得ないのである。手放しの惚氣には辟易するといふ世俗の人情は、心理的考察を試ると、他の幸福に對する人間固有の嫉妬心に基くらしいが、傑れたる戀愛藝術に於ては、さういふ嫉妬心を壓倒するに足る魅力を有つてゐる。森鷗外譯の「卽興詩人」やツルゲネーフの「戀の凱歌」などは、その例として取出していゝ。元の戲曲「漢宮秋」の如き、哀傷艷美の詞句が綿々たる情緒を生動させて、讀者を恍惚たらしめるのだ。

ところが、秋聲氏の作風と文章とは、元來かういふものには適當しないのだ。簡潔枯淡な筆で、色つぽい姿態や情緒をほのめかす巧みな手腕は、かねて氏の作品に現はれてゐたのであつたが、あくどい色話は氏の筆には不適當である。それにしても「たゞれ」や「あらくれ」の作者が、「春來る」のやうな、冴えない混濁した、薄汚ないやうな作品を一篇たりとも出したのは、一應は呑込みかねる。……しかし、私は熟讀後に思ひをめぐらして、人生と藝術との微妙なる交涉に感慨を催した。この一篇を讀んだあとで、氏の過去の作品を讀返すことは、文學研究に役立つ點

が少なくないと思はれる。

四

私は詩人的詠歎に包まれたやうな島崎藤村氏の小說を昔から愛誦してゐる。詩的空想に捉はれない、世上の實相の描寫に巧みなる德田秋聲氏の長短篇にも、類例のない文學として推服してゐた。そして、詩から小說に移つた藤村氏は、詩的空想を恣まゝにすることを避けて、最も多く自敍傳風の小說を書き續け、忠實に自己の見聞自己の經驗に卽して筆を執つた。秋聲氏は自己を離れて他を描くことにも巧みなのであつたが、自己の日常生活、自己の周圍の見聞錄見たいなものを題材として、そこに、人生の一片をさながらに現はすことにも妙を得てゐた。二氏は、ともに詩的空想を離れた寫實に徹しようと心掛けてゐたのであらうが、二氏の產み出した作品は甚だしく趣きを異にしてゐる。藤村氏は、詩を離れようとしながら、その作品には自ら詩趣が漂つてゐる。ことに、「新生」は一篇の詩であると云つていゝ。いろ〳〵な人間や事象は離げで、作者の唄ふ哀切な唄が讀者の心を誘ふ。そして、氏の自傳小說を續けて讀むと、そこらに有り振れた凡庸な人間とは違つた、何等かの意味でえらいところのある一人物が、年少にして信州の山奧から都會へ出て、浮世の辛苦艱難な道を辿つて老境に達した物語を聽いてゐるやうな感じがする。作者は物

語の主人公たる自己を取扱ふに當つて、飽くまでも謙遜の態度を執つてゐる。謙遜過ぎるくらゐに謙遜してゐる。西洋の文豪の自敍傳に比べるまでもなく、日本の花袋氏や秋聲氏の作品に現はれてゐるものに比べてさへ、藤村氏は人生に對し一層多くの謙遜の態度を執つてゐるのだが、それに關らず、氏の自敍傳小說は、辛慘の生を經てゐる偉人の物語のやうな感じを讀者の心に傳へる。あるひは、少年より晩年に至るまで、たゆみなく人格の陶冶を試みてゐる一人物の物語のやうにも思はれる。ところが、秋聲氏の自傳風の作品を讀むと、そこには、浮世の波に漂はされてゐるたゞの普通人の姿のみが、さながらに我々の目に浮んで來るのである。天の使命を帶びて下界に下つたのでもなければ、惡魔の陰謀を携へてこの世に假りの姿を現はしてゐるのでもなくつて、たゞの人間が動いてゐるのである。それは、濱の眞砂の一粒に等しい人間なのである。……二作家がそれ〴〵に自己の三十代の生活を描いたと思はれる「家」と「黴」とを比べて見ても、私はさう思ふ。

私は六七年前に、珍らしく藤村氏と對座して、長時間の雜談に耽つたことがあつたが、その時、氏は秋聲氏の「黴」などを稱讃したあとで「しかし、主人公がその夫人に對して情味の發露の缺けてゐる」のが、腑に落ちないらしく、そこに不滿らしい評語を挿んだ。たとひ互ひに飽足らぬ思ひをし續けた夫婦關係であつたにしろ、長い同棲生活の間には、自から情味の湧く時もあ

つたであらうのにと、藤村氏は疑ひを挿んでゐたのであらう。成程、氏らしい意味のある見方であると私は思つた。

從來、秋聲氏の小說は、ある種類の讀者には、詩のない乾涸らびた作品のやうに思はれ、ある讀者や批評家には、衒氣稚氣を全く脫した、灰汁の抜けた、枯れた、錆びた、名匠の所作のやうに思はれてゐた。あるひは、東洋的悟道の靜境地に化身してゐる藝術家のやうに見てゐる批評家もあつた。……しかし、今度の「春來る」によつて、さういふ批評家も、我々も、一人の人、一人の藝術家の心境を輕々しく固定的に判斷することの危さを、痛感しなければならない。人間は境遇によつて動くものである。他人のことよりも我々自身、いつどう動くか分らないのだ。

兎に角、秋聲氏に取つては、春の來るのがあまりに遲かつた。

この新作に於ては、藤村氏の氣遣つてゐた情味が堰を破つて横流してゐる。作者は情味の海に呆然として漂つてゐる。こゝに於ては、以前光つてゐた作者の目は盲ひ、藝術の帶はしどけなくなつてゐる。が、一方から云ふと、以前の作品には缺けてゐた詩が、よくも惡くもこゝに現はれたと云はれないことはない。

私は、この作品が三人稱で客觀的形式の下に書かれたことも、作の內容と不相應で、失敗の一つの原因になつてゐると思ふ。この小說だけを引離して、作者の名前をも匿して、文壇の消息に

通じない讀者に讀ませたなら、理解し難いところがあるであらうが、それは、この作に限らないで、作者の藝術と日常の行爲とが交錯して、一を以て他の足らざるを補つて讀まれるのを例としてゐるのは、日本現代の小說の特異性なので、この作などには、それが少し度が强いだけなのである。

この作は、三人稱になつてゐるが、三人稱らしい傍觀的態度は全く見られない。この小說に於て、老いたる小野の目に映る美女愛子は、信仰の對象ともなし得られる一つのマドンナである。容色といひ、聲といひ、才氣といひ、文字までも、よくつて〳〵堪らないほどに、完全無缺な女なのである。色戀に溺れたものゝ目には、相手の女の「頭の天邊から足の爪先きまで」が美しく見えたり、何から何までが氣に入つたりするのは、あたり前なので、そこに惑溺した人間の面目がさながらに現はれるのであらうが、しかし、作者の筆がべた〳〵してゐるのは、藝術として最も忌むべきことである。他の作家なら兎に角、秋聲氏は、たとひ筆致が無味乾燥に失することは、あるひは有り得ても、金輪際、べたづく弊はあり得ないと、かねて信じてゐたのであつた。べたづくといふことは、芝居道で謂ふところの緞帳趣味の藝風であるのだ。「春來る」は、作中の人物がべたづいてゐるだけでなくつて、作者の筆が締りなくべた〳〵してゐるのである。だから、作中のべたづいてゐる人物が、讀者の同感を得るやうに生動して來ないのだ。此處に現はれ

てゐるところだけによると、愛子は妖婦でもなく、才女でもなく、多少の淫蕩性を有つてゐる一凡婦たるに過ぎないし、主人公小野も、血液の最後の一滴も涸れるほどの戀の苦悶をしたミュッファ伯爵のやうでもない。四つ這ひになつて、唸りながら、ナナのふくら脛をギュッと噛むことの熊遊びをさせられたり、犬になつて、ナナの投じたハンカチフを咥へて來させられて「いゝ狗ねえ」と云はれて興じたりするほどの凄慘味があるのではない。「小野はベットを下りて、彼女を後ろから抱き上げた。そして部屋中を歩いた。それから愛子が小野を負つて歩いた」といふやうな、讀者の氣を惡くさせる程度のものである。

作者は、節制なく相手の女子を讃美して「例の頭腦の好さ」とか「愛子の頭腦のよさも好きであつたが」などと頻りに云つてゐるが、何處を熟讀しても、この女子に、有り振れた女子以上の頭腦のよさがあるとは思はれない。そんなところは何處にも描かれてゐないのだ。藝術に關する會話の條下など、乳臭さと齒の浮くやうないやみを感じさせられただけだが、それは、私に女性批判の目がないためなのであらうか。

「暫くでも愛子が傍を離れて行くと、直ぐ心が空洞になつた」とか「己はすつかり自己がなくなつてしまつたやうだ。己は何にも出來やしない。愛子が居ればゐたで、居なければ居ないで」とか云ふやうな心境を中心として、年齡の相違やその他の關係から、女が自分を離れはしないかと

いふ不安な思ひを背後に潜めてゐる老人の戀の實相を、在來のこの作者の技巧でスッキリと書いたなら、一つの傑れた藝術品が現はれて、文壇を豐かにするのであつたが、作者は、筆を運んでゐるうち、稍々もすると、さういふ藝術上の用意はスッカリ忘れて、ホク〳〵と相好を崩して悦に入つてゐるのである。

しかし、この「春來る」が、藝術品になりそこねたところに、藝術と人生に關するいろ〳〵な意味を搜し出さうとすれば出來ないことはない。

五

私はこの一篇を讀んでゐるうちに、ふと玄宗と楊貴妃との情事を思ひ出した。淀君に惑溺した老耄の秀吉を思ひ出した。「天に在つては連理の枝、地に在つては比翼の鳥」と、後代の詩人に唄はれた玄宗の、國を亡ぼしても悔いない心境は、歷史の隔たりによつて美化され、詩人文人畫家などによつて色取られてゐれ〳〵の心に映つてゐるが、現代の寫實的眼光で世話に碎いて、その眞相を見たなら「春來る」と同じことだつたかも知れない。「天に在らばお月樣地にあらば玉霰を玉の床と定め」と、元祿の世之助は、時代相當の俳諧趣味で、白樂天の詩句を飜案してゐるが「春來る」の男女にも「段々憂き世放れのして來た」二人だけの世界の恍惚境が存在してゐるに違ひ

ない。そこは、花袋氏などが屢々云つてゐるやうに、金も名譽も世間も藝術も塵芥に等しく思はれる恍惚境なのであるが、それを、惑溺者自身が文字に傳へるのは至難のことなのであらう。藝術の神はエホバ神の如く嫉妬の神である。甘い惚氣を、そのまゝに捧げ物としても受納しないのである。

過去の秋聲氏の小說は、所謂客觀的態度を基調としたもので、あるひは事相から離れ過ぎてゐるかも知れないが「春來る」は、事相に卽し過ぎてゐる。材料に甘えてたゞベタづいてゐるのである。數十年の間、世相の經驗を重ね、藝術上の鍛鍊を積んだ作家も、一朝溺愛の境地に墮すると、こんなになるものかと思ふと、それは、私に取つては、等閑視しがたい重要な問題なのである。

「ほんたうに好いと思ふね。この材料を己も書かうと思ふが、書く必要はなくなつたやうだ。今に己の株を取つちまふだらう。いや、それ以上に己にないものが愛子にある」

「うゝん嘘よ。先生なんて三十年もの積み重ねがあるんですもの。知つてますよ……でも、これならよく書けたと云ふものね」

他の點は兎に角、文學の上ではまだ乳離れもしないやうな少女が、假りにも、三十年の水火をくぐつて鍛鍊されて來た作家と自己とを比較して、いゝ氣な口を利いてゐるところを讀んで、私

は滑稽に思ふよりもむしろ憤慨の感を起した。藝術に對する冒瀆である。

現代の婦人雜誌が、俗惡な讀者の趣味に投じるために、ゴシップ種になりさうな婦女子を引摺り出して、物を書かせることが流行してゐるが、それが、どれほど文壇を賑し、婦女子その人の將來をもあやまるかも知れない。この頃、二三の婦人が「あんな女でさへ、小說なんか書いて、世間に名を賣つて、多額な原稿料をも取つてゐるのだから、私だちも、何か書かなければ損だ」と云ふ意味のことを、私に云つてゐた。さしたる修業もしないで、虛名と慾のために、文壇へ出ようと、ヤキモキしてゐる婦女子が、この頃は少なくないやうである。婦人雜誌がこの惡弊をつくつたと云つても、見當違ひではあるまい。さき頃「改造」に揭げられてゐた數氏の婦人雜誌攻擊の文章には、私は略々同感である。それに對する辯護說も何處かに出てゐたが、かういふ婦人雜誌が續出するのは世間の要求に基くので、それが止むを得ないことであるにしても、堂々たる批評家が、婦人雜誌の肩を持つて、現在の惡風潮を助長させる必要はあるまい。

六

私は「春來る」の作者が「春來る」の境地を拔け出たあとでは、氏の藝術が、過去のそれとはちがつた色彩を帶びるであらうと豫想した。惑溺の體驗は藝術家の重要な心の糧となるのである

が、渦巻のなかにゐて渦巻を描くことの至難さは、この一篇がそれを證明してゐる。

しかし、こゝでも、實行と藝術について私は考へた。戀愛にしろ、勞働にしろ、戰鬪にしろ、あるひは社會革命のやうな事業にしろ、さういふ實行に身を托してゐる人々には、藝術なんていふ影のやうなものはどうでもいゝので、古來人類が閑餘に考へ出して積み重ねて來た藝術觀は、宗教意識とともに、一つの迷妄なのではあるまいか。私などは長い間藝術に浸つて來たのであるが、そこに自己存在の意義を靈感して、そこに全心を托して安んじたことは一度もなかつた。

ストリンドベリーは、晩年の感想錄「青卷」の最後に於て、惱みの多かつた一生の結論として「祈りながら働け。苦しみながら望みを抱け。天と地とを共にわが裏に有つのだ。永久の定住を求むるな。この世は巡禮の世である。故郷ではなくて、さすらひの場である……。」と、中世紀の口吻を用ひて、神祕の境地を天の一方に望んでゐるが、それは、私などが達せられない境地である。

さう結論をつけたストリンドベリーは、同書の他の章下に、ルッソウの言葉を引用してゐる。それは私の心胸に觸れるところがあるから、長くとも轉載しよう。

「若い時分、私は人生の疲弊に堪へかねて自殺した一英國人の記事を讀んだことがある。その青年は、毎日はめたりはづしたりするボタンの數を數へてゐたといふことである。すなはち、下着には半ダース、日中のシャツには半ダース、カラーとカフスに半ダース、チョッキ、上着、外套

に一ダース、長靴、ゲートル、手袋に二ダースといふやうに、彼れは馬車に乘つて出る時にも、中食晩餐の折にも一々服裝を變へてはボタンを數へてゐた。

かう云つたら、可笑しな話だと思はれようが、しかしこれは人心の眞相を暴露した話である。彼れは生活が疲弊したので無益なことをして半日を費してゐたのである。すなはち不必要な訪問をすること、電話をかけること、用もないのに手紙を書き、新聞を讀むこと、特に衣裳と云つても、もとは紐で結べば事濟んだものである、今ではボタンをつける、フックをつける、眼をつける、紐をつける、リボンをつける、留針をつける、ビヂョ金をつけるといふやうに事々しい。我我の衣裳たるや、多くは無益のノンセンスたる煩瑣な時間空費の文明を縮圖的に表はしたものである。田舍に居つて土地を耕すものは、美術も科學も、文學も必要が無い。自然を有して美術も宗教も必要のないものは科學者文學者よりも尊い人である。教會は到る處にあれど、博物館、劇場、書店、倶樂部は町ばかりにある。それ等が必要であるか否かは別問題である。」（柳英彦氏譯）

前世紀までの累世の舊套を脫した新しい目で人生を見た新人中の新人であつたルッソウが指摘した人心の眞相、生活の疲弊は、今日に至つては、ます〳〵激しくなつてゐる譯である。ノンセンスな煩瑣な時間空費の方法は、文明の進むとともに、ます〳〵頻繁に案出されるやうになつたこと、地下からルッソウを連れて來て見せたなら、驚嘆して目をまはすだらうと思はれるほどで

あるが、しかし、彼れの謂ふところの「自然を有して、田舍に居つて土地を耕すものは、美術も、科學も、文學も必要が無い、……科學者文學者よりも尊い」といふことも、今日の世となつては、彼れの時代に彼れの道破した時ほどの權威をもつて我々の胸に迫つて來ない。さすがのルッソウもすでに古臭くなつてゐる。生活の疲弊は今日は田園人も都會人と同じことになつてゐるではないか。救ひがそこにあらうとは思はれない。みんなが心靈の安住を得ない「さすらひの旅」をしてゐるやうなものである。

ストリンドベリーは、「この世は巡禮の世である。故郷ではなくて、さすらひの場である」と云つた後で、直ぐに言葉を續けて「眞理を求めよ、さらば發見し得る。只道理であり、生命であるキリストと共にあつてのみ眞理が悟られるのだ」と、解決をつけて、一卷——あるひは彼れの一生——の締括りをつけてゐるが、それが、東洋の末世に生れた私などには取つて付けたものゝやうに思はれる。ルッソウも、その「懺悔錄」に於て「この一卷を提げて神の審判の前に立つ」と云つてゐるやうに、あらゆる舊套を脫しても古い神から脫却することは出來なかつた。

今日の時世に生れた我々は、おのづから神から脫却されるやうになつてゐる。「懺悔錄」の流れを汲んで、赤裸で自己告白をすることも常套月並になつて來たが、これ等現代の作家は、前代の新人ルッソウの心に潛在してゐた神の名殘りをも、最早留めてゐないのである。

私が、突如として、ストリンドベリーやルッソウを持出して來たのも、「春來る」に何となく關係を有つてゐると思つたからなのだ。

數十年の間、たゞの普通人の世相をさながらに見て來た德田秋聲氏の晩年の心境がここであつたとすると、文學の修養は心靈の陶冶にどれだけの價値があるかと疑はれる。少女との手頼りない一時の戯れを外にしては、空虚な淋しさが、救ふすべもなく老主人を襲つてゐるらしく、私には推察された。「暫らくでも彼女を見失ふことは、矢張り寂しかつた。」それは生活力の衰へた老人の普通の心情なので、私なども、自分の前途をそこに見なければならぬのであらうが、それでは、文學の鍛練は心性にさしたる關係はないやうに思はれる。小說だの感想だのゝ形に於て、赤裸々に自己告白を何十年しつゞけて見たつて、それはそれつきりで、自己の眞生命に取つて何の足しになるのであらうと思はれないではない。西鶴の「置土產」には、蕩兒の末路がいくつも描かれてゐるが、そこには、命に安んじてゐる暢達の風趣が漂つてゐる。色修業は文學修業よりも、心靈の陶冶については一層力をもつてゐるのではなからうか。

文學、文學。書齋裡で文學に沒頭して、浮世の影を追つてゐる私は、たま〳〵「春來る」を讀んで、いろ〳〵に作者について考へ、自己について思ひを廻らしたが、周圍は荒凉としてゐた。

（昭和二年四月十四日の夜、若葉にそゝぐ雨の音を聞きながら、大磯にて）

幸田露伴論

今夏輕井澤に避暑してゐた頃、日々新聞に連載されてゐた幸田露伴氏の「華嚴瀑」遊覽記を讀んだ。同新聞はその撰定した新八景の宣傳のために、諸家を累はして、名勝記を書かせてゐたのであつた。私は「枕頭山水 以來、久し振りで露伴氏の紀行文を讀むことに興味を感じたのであつたが、古典的文章美は相變らず具つてゐるにしても、山水に對する情熱は以前のやうでないのを見過す譯には行かなかつた。しかし、氏が自發的に華嚴の美をさぐりに出掛けたのではなくつて、新聞社の依頼により、お義理で見物に行つて書いたらしいこの紀行文を、私は今事々しく取上げて論じようとするのではない。たゞ、そのうちに「大事な命を粗末にする馬鹿ものども」と云つたやうな言葉で、華嚴瀑投身者を罵つてゐたのを讀んで、「露伴は昔からかういふ風な人なんだな」と、ちよつといやに感じたのを思ひ出したためである。紀行文の何回目かにさういふ文句の出てゐたのは、芥川龍之介自殺後、五六日過ぎたばかりの時だつたので、露伴氏は、龍之介を間接に罵つたのであるまいかと、私は疑つて、一層いやな思ひをしたのであつた。

しかし、それは私の思ひ過しで、あの紀行文は、脫稿後餘程經つてから新聞に揭載されたので、芥川自殺の是非には關係がなかつたのであらう。投身者罵倒は投身者罵倒に止まつてゐるのであらう。

「自殺者は馬鹿だ」とは、世上の誰れでも云ひさうなことで、問題にするに足らぬ譯であるが、

露伴氏が簡單にさう云ひ切つたことは、露伴氏の小說を鑑賞し批判する時の一つの鍵となりさうだと、私はその時、ぐつと自分の記憶に押し込んで置いたのである。

同じ時代の人でも、二葉亭四迷はさうは云はなかつた。(これは私が直接に氏から聞いたから確かだ。その時、氏は、四十を過ぎた人にも似合はず、最初の投身者藤村操について、いろ〳〵に心を勞して考へてゐた。)國木田獨歩もさうは云はなかつた。森鷗外だつて、華嚴を俯瞰して「命を粗末にする馬鹿ものども」と、一概に云はなかつたに違ひない。

逍遙紅露とおの〳〵の頭文字が熟語となつて、明治文壇の大家が定まつた時分から、私は露伴氏の作品をも、目に觸れたものは、大抵讀んでゐたのであつたが、氏のものに限つて、殆んど何等の興味をも覺えなかつた。紅葉の作品は何と云つても面白かつた。「紅葉は文章は巧いが內容が乏しい。露伴は想が傑れてゐる」などと、あの頃の文學青年は云つてゐたものだ。露伴の方が非凡らしく云はれてゐた。世評がさうだから私もさう思はせられてゐたが、その非凡さを自分の頭腦に感得したことはなかつた。あの頃のもろ〳〵な作家のうちで、露伴氏は巨木のやうであり、英雄のやうであり、他に異つたえらさがありさうに思はれてゐたが、しかし、私は何となくさう思つてゐただけで、直接に氏の作品によつて感動さゝれたことはなかつた。氏は早くから和漢の文學に造詣深く、文章が六ヶしく凝つてはゐたが、しかし、少年時代の私が讀み惱むほど、氏の

小說が難解の書であるとは思はれなかつた。「一口劍」や「五重塔」など、文章が雄健で男性的氣魄を含んでゐるらしく云はれて、紅葉一派のおしろい臭い柔弱らしい小說に飽足りない人々に喜ばれてゐたのであつたが、當時、青年の惱みを惱み、時代の空氣に感染してゐた私には、露伴氏の作品は、神經の太い、頭の古い、古武士の書物のやうに思はれてゐた。二葉亭でも、「文學界」の連中でも、民友社の人々も、外來の思潮に動かされて、明治二十年代の若い惱み、若い希望を、心に抱き筆にも現はしてゐた。しかし露伴氏にはさういふ所がなかつた。當時の重立つた作家のうちで、露伴氏が最も保守的で、純東洋的で、清新なところがないやうに、私には思はれてゐた。……日本古來の標準から云ふと、名文であるのか知らないが、氏の文章の重苦しさ、兜をかぶつて鎧を着て歩いてゐるのを見るやうだつた。

「風流微塵藏」と總括的題目を附して、遠大な計畫のもとに筆を執られたらしい連續長篇の一部、「さゝ舟」「きくの濱松」などを、私は、神田のいろはといふ貸本屋から借りて來て、努力して讀んだことを、今思ひ出しながら、改造社新刊の露伴集に收められたそれ等の長篇大作を讀み直した。昔讀みづらかつた如く、今度も讀みづらかつた。私の老眼で圓本の細字を讀むことそのことが、すでに惱ましいのであつたが、例の重い鎧を着た上に、魯智深の持つてゐたやうな何十貫もする鐵の棒を引摺つてゐるやうな文章の後をつけて行くのは、樂ではなかつた。今の青年讀者はかう

いふものはとても讀み切れないだらうと察せられる。

巻末の年譜に照らして見ると、露伴氏が「微塵藏」中の長篇數巻を世に出したのは、三十歳前後の時であつて、そんな若い時に、よくもかういふ古典的文章を綴り上げたものだと、今日の文壇の有様に比べて見ると不思議に思はれるが、しかし、内容に於ては驚かされるところはないのだ。一箇所たりとも心を打たれたところはなかつた。たゞ、八犬傳よりももつと古い時代の文章を讀んでゐるやうな感じがした。出て來る人間は、みんな型の如く、自由な生々したところはちつとも見えない。昔から露伴氏の好きな、生悟りの、悟らんとして悟りかねたやうな人物、僧侶栽松が出たり、また氏の好きな朴訥な老人が出たり、また氏の好きな、精神一到何事か成らざんといふ意氣のある青年が出たり、善惡兩様の人物が形を調へて對立したりしてゐるが、私は讀んでゐて、人生の實相に接したやうな感じのしたところはなかつた。少年少女たる新三郎お小夜の親しみが細かに書かれてあつても、そこに「たけくらべ」のやうな詩趣も情味も感ぜられなかつた。いくら美しい言葉を並べ、小説らしい趣向を凝らしてゐても、作爲の痕のみ目について「たけくらべ」のやうに泉の湧き出る趣きはなかつた。

私は、讀みながら、露伴氏の思想の古さを感じた。人生觀察の古さを感じた。かういふ小説が打噛されてゐたのを見ると、自然主義の起つたのも無理はなかつたと、私は事新しく感じた。「文

章のための文章」が、一時極端に排斥されたのも無理はなかつたとも思はれた。「文章のための文章」に浮身を窶した巨頭として、紅葉山人は、自然主義時代に非難の矢を向けられてゐたのであつたが、その實、露伴氏の方が一層多く、「文章のための文章」に苦心してゐたのであつた。紅葉は專ら文章に凝つてゐたにしろ、その筆からは隨所に、浮世の姿が流れ出てゐる。しかし、露伴氏の作品には、文章にはじまつて文章に終つたものが多い。その所謂「理想」や「思想」は、あまり古臭くて、乾涸らびてゐて、私には風馬牛相關せざるものである。「雁坂越」など、言文一致調のものは、露伴氏には不適切な作品である。紅葉は形の上でも新らしくならうとして、言文一致の新文體に苦心して、「多情多恨」に於て見られるほどの妙境に達したのであつたが、露伴氏は、在來の文章體がその本體であつた。

氏にも、文學上の煩悶があつたのか、「出廬」と題する新體の長詩を讀賣新聞に連載したが、當時青年であつた私などの心に觸れるところは少しもなかつた。「あほだら經」のやうに感じてゐた。後藤宙外氏が「はじめて國詩に接す」と云つて、この長詩の提灯持をしたことを、柳田國男蒲原有明氏が嘲笑してゐたのを、ある會で私は聞いたことがあつた。

「天うつ浪」は、私が讀賣入社後に紙上に連載されたもので、不惑の齡に達してゐた作者が、大なる抱負をもつて、自己の蘊蓄を傾瀉したのである。十年前の「風流微塵藏」と、これとが、露

伴氏半生の二大作品である譯だ。私は、今度、この未完の長篇「天うつ浪」を讀み直して「金色夜叉」が紅葉の代表作であると同樣に、この長篇は露伴氏の代表作としていいものだと思つた。そして、氏の過去の作品から受けてゐた茫漠たる印象を新たに思ひ浮べた。

「釣を垂れては、つく〴〵人間の技の小さくして、天運の力の大なる事を知り、棋を試みては、七情の騒げども益なく、一理のたゞ頼むべきをおもふ」(洗心廣錄より)といふ氏の感慨が、「天うつ浪」の上にも漂つてゐるやうである。十年後の氏は十年前の氏ではなかつた。「微塵藏」は、外形は大作であつても、内面はうつろであつた。「天うつ浪」は、技巧のみを弄したものではなくつて、兎に角充實してゐる。作者の胸中にある人生の世相がのびやかに現はれて、生命の波を打つてゐる。在來の露伴型の人物が都合よく配置されて、小説らしい世界をつくつてゐるのだが、それ等の人物が、をの〳〵面目をそなへてわれ〳〵の前に現はれて來る。私は作者の筆に心を惹かれて、全部を讀み終つて、その未完結を惜んだ。作者は「微塵藏」の時と同樣に行詰つたのであるか。小説なんか詰らないと思つて投げ出す氣になつたのであるか。

この作品は、古い型の道念を底に潜めてゐる。普通の人情を表によく現はしてゐる。この作者が昔紅葉の寫實と相對して理想派と云はれた所以が、これを讀めばよく分るのであるが、しかし、この古い型の道念と普通の人情とは、紅葉の作品にも充分含まれてゐたので、兩作家の間にさし

たる相違は發見されないのだ。この作者の作品に存在する理想や思想は紅葉の作品にも見つけられないことはない。

お龍お彫などの女性は、以前の氏の作中に現はれてゐた型の女子ではあるが、今度は肉體を具へてそこに現はれた感じがする。ことにお彫には、作者の理想的女性の影を見せようとしたものらしく、なか〳〵手が込んでゐて面白さうなのだが、未完の作品は、彼女をして充分に發展させないで終つてゐる。

この長篇が紙上に掲げられつつあつた間に、舊文學打破の自然主義が次第に勃興したのであつた。露伴氏は、文壇の風潮にいや氣がさして、この長篇を中絶させた譯ではあるまいが、「天うつ浪」は偶然、舊文學最後の大作として、文學史上に跡を止むるものであつた。森鷗外は、新風潮を冷笑しながらも、その感化を受けて、作風に一變化を來したが、露伴氏はさういふ風潮からは全く顏を背けてしまつた。紅葉でも長生してゐたなら、自然主義の感化を受けたのであらうと察せられるが、舊大家のうちでも、露伴氏だけは、さういふ感化を受けるべき素質を缺いてゐた。頑強な作家である。「自殺する奴は馬鹿だ」と罵倒するだけあつて、氏の作品には、初期の作品以來懷疑の跡がない。この動搖の激しい時世に生れながら、氏は疑惑動搖の姿を讀者に見せてゐないのである。兎に角恐ろしくしつかりした人である。……私は、今度氏の舊作を讀み返しながら、

その點を面白いと思つた。この動搖しないしつかりしたところを持ち續けた人なればこそ、後年「運命」などのやうな重味のある大作を創成し得られたのであらう。氏の多くの作品のうち、私の心魂を搖がしたものはこの一篇であつた。醫勃たる力がそこに湧き出てゐた。森鷗外が、彼れの純粹の創作よりも、晩年の考證的史傳に於て、一層よく人生の眞相を描出した如く、露伴氏も、前半生の多數の小說よりも、晩年の史傳に於て、氏の本來の型は飽くまで保ちながらも、一層深く人間を描いてゐるのである。

私は、かつて氏の戲曲「名和長年」を帝劇で見た。この勤王劇は、男の見物を泣かせると云はれてゐたが、露伴氏の本領はそこにあつたのである。昔の氏の小說が男性的だと云はれて、ある種類の讀者に喜ばれたのと同じ譯なのだ。作劇の態度も人物の取扱ひ方も、日本傳來の型を追つてゐるだけで、鷗外の戲曲にあるやうな新味は全くなかつた。

私は、今思ひ出したことがある。……私が讀賣在社中「天うつ浪」が紙上に揭げられて、中絕したあとで、花袋氏の「生」が揭げられたり、藤村氏の「家」が揭げられたりした。自然主義は天下を風靡してゐたのであつた。ところが、そのうち、老社長が死んで、嗣子たる本野一郎氏が社長の位置を襲ふとともに、自然主義を嫌ひ新進の文學者を嫌ひ、私學出身者を嫌つて、老大家を招聘することに熱中した。それで私などはおのづから遠ざけられたのであつたが、この時新社長

は、紅葉露伴と並稱された昔を偲んで、露伴氏の小說を渴望したらしく、巖谷小波氏などを煩はして向島の臥龍を呼び起さうとしてゐた。私はひそかにそれを察して、「露伴は書けまい」と云つてゐた。熱心なる依頼を斥けかねたためか、露伴氏もやうやく新聞に寄稿することはしたがそれはたゞ一回(?)だけであつた。在來の氏の作品とは、稍々趣きがちがつて、筆致が世話に碎けたものであつたと記憶してゐる。……氏は何故に一回だけで中止したのであらう。頑強なる氏は、周圍の若輩の自然主義の跋扈ぐらゐ、雲烟過眼視していい譯ではないか。……「天うつ浪」を中途で投げた氏は、創作上の行詰りを感じたのではあるまいか。

兎に角「天うつ浪」は舊文學の最後の長篇であつた。爾來二十年の歲月が經過してゐる。その間いろ〳〵な文學が起つたが、田山氏などを先達とした日本流の自然主義の扶植した勢力はなかなか衰へなかつた。自然主義の作物と分類される種類のものは衰へたにしても、田山氏などのはじめた新小說作法は、いつまでも追隨者が多かつた。自然主義反對者でも、頻りに、自己の日常の言行錄や身邊雜記を發表して飽くところを知らぬ有樣ではないか。元來歐洲の自然派作家の作品は、多くは客觀的のもので、自己の言行錄すなはち小說といふやうなことはない譯なのだが、日本では、自然主義、すなはち自己描寫主義となつたから不思議である。

かういふ作風が十年も二十年も流行したために、文壇は單調に陷り沈滯して、變化を求める聲

は、長い間、をりに觸れては聞かれた、小説に對する讀者の要求は、つねに滿たされない有樣であつた。大衆文藝や通俗長篇が近來歡迎されだしたのも、自然の勢ひなのかも知れない。

それでは、二十年の過去へ返つて「天うつ浪」や「金色夜叉」の作風を此處に復活させるのであるか。さうも思はれない。

私は、「大菩薩峠」を第一卷だけ通讀した。

文壇の小說、及び婦人向きの通俗小說に飽き足りない讀者は、この「大菩薩峠」のやうな小說を、以前から愛讀してゐたらしい。谷崎氏や菊池氏がこの小說を推讚してゐたのを、何かで讀んだことがあつたが、私は、いろ〳〵な知人が、この小說を耽讀してゐるのを知つてゐる。皆んな面白いと云つてゐる。

何だか、「天うつ浪」を打留めにした古風な小說が、自然主義系統の文壇小說跋扈の間に、地底にくぐつて、「大菩薩峠」のやうな形を取つて新たに現はれたやうな氣がする。露伴氏の作品に男性的氣魄があるのなら、中里介山氏の作品にもそれがある。それに、どちらも佛教臭い。佛教臭いところが、また傳統的に日本人に有難がられるのである。第一卷だけを讀んでも、以前の露伴氏の作品の風格に似たものが感ぜられる。

年少の頃、八犬傳を愛讀してゐた時分に、「大菩薩峠」を手にしてゐたなら、私も夜を徹して讀み耽つたかも知れないが、今日は私は、奇抜な筋の變化には驚かされなくなつてゐる。たゞ、机龍之助といふ主要人物が、在來の講談的英雄型を脫してゐるのを面白いと思つた。この人物は、ひどく人情を沒却してゐる。講談的英雄でも、あるひは露伴式豪傑でも、どうかすると涙を濫費して、讀者の感傷癖に媚びるのであるが、龍之助は、飽くまでも冷徹である。それから、金藏といふ男の執念は、描いて眞に迫つたところがあり、第一卷のうち最も精彩を放つてゐる。……まだ大長篇の一部しか讀んでゐないのだから、全體に涉る立入つた批評は差控へることにする。

「洗心廣錄」を讀む。小說よりもかういふものによつて、露伴氏の學殖文藻識見が充分に伺はれるのである。氏が德川時代に生れてゐたなら、一代の大文章家として天下を風靡してゐたかも知れない。今時、かういふ漢文崩しの名文を書きこなす人は他に無ささうに思はれる。私なども讀みながら、文辭の上に一種の興味を覺えるのであるが、しかし、そこに含まれてゐる思想や處生訓からは、さして深遠な味ひを味ひ得られないのである。

「鏡に對へば忽然としてそこに人の姿あり。身より出でたる像ながら、此の身も滅せず、鏡に添へるものながら、彼の鏡も增さず、不增不滅の彼此の間に、忽生忽滅のすがたありて、眉は橫な

り、鼻は堅なり、笑む時をかし、それもまことよ。泣く時悲し、それもまことよ。阿字本不生いよよまことよ。たゞ何事も夢のたはむれ」など、面白い感想もあるが、舊幕の道學先生の講釋見たいなことを、六ヶしい文字を連ねて云つてゐるところも少なくない。

露伴氏も、現代の青年に對し新しい文學に對して、をり〳〵老人らしい冷語を洩らし、當てこすりをも云つてゐるが、さういふものを見ると、時代を超越したらしい巨人でも、全然周圍を氣に留めないではゐられないことに思ひ及ぶのである。

同じく「雜文」とか「隨筆」とか云はれるものでも、「洗心廣錄」を讀んだあとで、新年號のいろ〳〵な雜誌の雜文隨筆を讀むと、表現の方法がかうも違ふものかと驚かれる。同じ處世訓でも威儀を正して說かれると重味があるのだが、今後は、こんな古典的名文を書き得るものは出て來ないだらう。露伴氏には模倣者がない。最後の一人である。（昭和三年二月）

志賀直哉と葛西善藏

一

「荒絹」「老人」「清兵衞と瓢箪」「赤西蠣太」「十一月三日午後の事」「小僧の神様」「矢島柳堂」……志賀直哉氏のこれ等の短い作品を讀んで、私は、少し大袈裟な言葉であるが、醇乎として醇なる藝術に接した感じがした。蕪雜な荒つぽい毛むじやらな腕をまくつて、ゆすり文句を並べてゐるやうな文學を、屢々讀まされてゐる今日、私は志賀氏のある作品によつて、胸のすが〳〵しくなる氣持がした。強烈なる文學、戰鬪的な文學、濃艶な文學、悲壯な文學。古今の文學はそれ〴〵の形に於て存在の價値を保つてゐるのであるが、激しさしつこさを表に現はしてゐない、和やかな感觸を讀者に與ふる藝術も、尊重していゝのである。ことにこの頃は、さういふものがなさ過ぎる。

如上の小說には、淡彩の日本畫といつたやうな趣きがある。これ等に比べると、有島武郎氏の作品は油繪である。志賀氏のやうな作品は、原稿料を當てに生活してゐる作家には、とても書けさうでないが、そこに、文學者としての氏の弱點も潛んでゐる。世路の經驗を經たあとでも、溫室育ちのお坊ちやん氣質の痕を留めてゐるところがあつて、讀者に與へる感銘に於て損をしてゐる。氏の初期の作品ではあるが、「網走まで」を取つて、葛西善藏氏の「急行券」といふ小品に比

べて見るといゝ。共に、汽車のなかで起つた小事件であるが、二人の作者の日常生活を反映してゐて面白い。無論前者の方が物を見る目も傑れてゐるし、筆の使ひ振りにうま味もある。しかし、後者の、作者自身に備はつてゐる生活苦から染み出てゐる哀歡の影に、前者の遊び氣分よりも我我の心は惹かれ勝ちになるのを如何ともしがたい。

それで、志賀氏には「溫室育ちのお坊ちやん」らしい所が、隨所に作品に現はれてゐて、時として作品を安つぽくしてゐるが、藝術家としての天分の備はつてゐることは、葛西氏などとはよほど違つてゐる。人間を見る目が冴えてゐて、頭腦も粗笨でない。

「老人」がいゝ。「小僧の神様」がいゝ。二つとも私の好きな作品であつたが、今度新たに讀直して、新たに興味を覺えた。藝術の匂ひがしてゐるやうで、人生味も豐かだ。かういふ作品には、有勝ちな感傷語の濫用がない。ユーモアが自から備はつてゐて、わざとらしさがない。下品でない。「老人」は、圓本の細字で僅か二ページばかりの小品であるが、ある老人の心境を、簡にして細かに寫してゐる。作者の初期の作品であるが、若くしてよくこれだけ客觀的に印象明晰に書けたと思ふ。

この小品を一つの問題として、もつと批評を進めよう。老人にもいろ〳〵ある。概括して云ふと、世上の老人といふものは、ここに現はされてゐる「ある老人」のやうに物分りがよくはない。

もつといやらしいものである。もつとしつこいものである。もつと意地きたないものである。しかし、老人の醜いところを捉へて、面皮を剝がないで、和やかに彼れを取扱ひながら、空疎な描寫に墮しないこの小品は、志賀氏の藝術のいゝ方面をよく代表してゐる。またかういふ藝術をも愛賞し愛好し得る興味が、私の心にもあればこそ、この世の生存に堪へられるのである。

十年ほど前に、當時の新進作家菊池寛氏は、「文章世界」に志賀直哉論を寄せてゐたが、そのうちで「老人」を推賞して、「かういふ題材を自然主義の作家が扱つたなら、皮肉の目で老人を見たであらう」と、結末のところなどを例として擧げてゐたと、私は今も朧ろげに記憶してゐる。老人が死んで、「かつて老人の坐つた座布團には、公然と子供等の父なる若者(老人の妾の密夫)が坐るやうになつた。その背後の半間の床の間には、羽織袴でキチンと坐つた老人の四つ切りの寫眞が額に入つて立つてゐる。……」といふ結末は、讀者を微笑ませもするし、悠々たる人生の影がそこに映つてゐるやうにも感ぜられる。しかし、この老人の一生をかう見ないで、この作者の閑却した方面から老人の心に喰入つて、結末に於て、人生の破産の影を見せる作風が、菊池氏の思つてゐたらしく、藝術の邪道であるとは思はれない。志賀氏のやうな境地もいゝが、それに安んじ過ぎると、世の中があまりお目出た過ぎるやうになるのである。

あの頃は、世間一般に自然主義系統の作品に嫌厭を感じてゐたためか、微溫的な明るみある

「白樺」一派の文學が、文壇に地歩を占めた。ことに、志賀氏はあの頃の新進作家の仲間に敬畏されてゐたやうであつた。廣津和郎氏も、會ふたびに、私に向つて、志賀直哉讃美の語を放つてゐた。芥川龍之介氏は、あれほどの才人でありながら、志賀氏の前へ出ると頭があがらなかつたといふことも、この頃聞いた。去年芥川變死の後間もなく、輕井澤に私を訪ねて來た某氏の話によると、志賀氏は、芥川氏の作品をも人となりをも、あまり好まなかつたさうだ。それ故、面と向つて芥川氏から敬意を表せられる時には返答に困つたさうだ。私はその話を聞いた時、「何だ。芥川は志賀なんかに對して引け目を感じる譯はないぢやあないか」と、口に出かかるのを危く壓えた。龍之介は直哉の藝術のどういふところに畏服したのであるかと、私はあとでいろ〳〵に考へた。それから、自分を輕視してゐる人の前でその人を讃美することの、いかに頓間であるかをも考へた。……一昨年の一月であつたと記憶してゐるが、「新潮」の合評會に私は出席した。その時花袋氏も芥川氏も出席してゐたが、志賀氏の「鷄」といふ小品を、花袋氏は特に推賞した「いい日本繪である」といふ意味の評語が下されたやうだつた。私が何とか云つて非難すると、芥川氏はその非難を不當とするやうなことを云つた。今度讀んで見ると、この小品は、成程、茶室掛けに相應はしい繪である。龍之介はかういふ作物に現はれてゐる風韻に傾倒してゐたのであらうか。

かういふ藝術味は、感覺の粗雜になつた今日の文壇では味はれなくなつてゐる。しかし、「白樺」派の盛時に於ても、多くの青年讀者は、志賀氏の持つてゐた風韻や雅致を賞味してゐたのではなくつて、むしろ、彼れの作品の中の一つの特色となつてゐた所謂「人道主義」といつたやうな思想感情に共鳴を覺えてゐたのであらう。「十一月三日午後の事」といふ小品の如きが好個の代表作である。

二

「十一月三日午後の事」が發表された時、その月の雜誌月評を讀賣新聞でやつた和辻哲郎といふ人は、この小品を極度に賞讃して、この寶玉のやうな傑作の前では、他の雜誌小說は瓦礫のやうだとでも思つたらしく、他のすべてを默殺したことがあつた。文學その他の藝術については、異性に對すると同樣に、好きとなると、盲目的に好きになるもので、そこがまた面白いのである。志賀氏のこの小品が、當時迎へられたのは、そこに「人道主義」「非軍國主義」の感情思想が現はれてゐるためであつた。田舍道を鴨を買ひに行つた主人公が、途上で兵隊の演習の苦勞を見て心を動して、「自分は一人になると又興奮して來た。それは餘りに明らか過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハッキリしないではゐない事がらだ。何しろ明る過ぎる事だと思つた。すべ

ては全く無知から來てゐるのだと思つた」と、現今の軍事組織を憤慨して、家へ歸つても、折角買つて來た鴨を殺すことは勿論、自分で食ふ氣もしなくつて、他所へ送つてやつたといふのが、この小品の要點である。この小品は、田舍の秋の街道の光景を叙し、演習の片影を叙し、それに觸れそれに離れる主人公の微妙な氣持をまつはせて、味ひの深い純藝術品をつくり上げてゐる。私は、今度も愛讀した。しかし、和辻といふ人などの感服したやうな非軍國主義の現はれに感心したのではない。軍國主義の非難は、談何ぞ容易ならんやと思ふ。小説家が秋のそぞろ歩きに二三の兵士の勞苦を見て感傷的感慨を起したくらゐで、國家の大事が極められるものではない。「すべては全く無知から來てゐる」と云つても、實際について深くしらべたら、どちらが無知か分つたものぢやない。由來詩人藝術家は、あはれみの情に富んでゐるので、他の勞苦を見るに忍びないのだからこの小品には、その詩人らしい美質が現はれていいのであるが、しかし、その思想を實際界に當嵌めて卓見視するのは幼稚である。

當時の青年批評家が「卓見」視した志賀氏の思想は「山形」といふ短篇や「和解」といふ長編や、その他の小品のなかにも、をり〳〵微見えてゐるが、しかし、十年足らずの間に時代の思潮は變つて、今日の青年讀者や青年批評家には、志賀氏の社會觀などは微溫的なものとして冷笑されるやうになつた。もつと荒つぽく根本的でなければならぬと云はれるやうになつた。しかし、

それは志賀氏の作品が價値を失つた證據にはならないので、藝術家たる氏の藝術を味はゝないで、附屬の思想を見るから起つたことなのだ。トルストイを廢物視するのも、粗雜な頭惱をもつた一部の現代青年の愚昧な所業であつて、トルストイのえらいところは、原始宗教觀や無抵抗主義の說敎にあるのではなくつて、その藝術にあるのだ。今日のプロレタリア文學だつて、一知半解の思想や理窟だけで、藝術としての價値を有つてゐなければ、明日は亡んでしまふのである。「十一月三日午後の事」にしても「小僧の神樣」にしても、一幅の人生圖として翫味してゐると、今日見ても、昨日見た時に劣らないほどの味ひが味はゝれるので、十年や二十年で廢物になる譯がない。假りに、兵隊の演習が廢止される時代が來ても商店の小僧制度がなくなる時代が來ても、それ等の作品の妙味は失はれないのである。文學は日常の實用品とは違ふ。

同じ「白樺」派であつても、有島武郎氏の「生れ出づる惱み」と、志賀氏の「清兵衞と瓢箪」とを比較すると、この二人の作風が如何に異つてゐるかゞ分つて、年少の徒の小說學研究の好資料になるのである。どちらも美に對して敏感な貧家の少年を題材としてゐるのだが、武郎は、力を籠めた筆使ひでゴテ〳〵と書いてゐる。直哉は、いかにもアッサリと書いてゐる。油繪と日本畫の相違がある。武郎の油繪には、今春上野の博物館に陳列された松方所藏の英國の前世紀の繪畫に見られたやうな、鈍重さギコチなさがいくらか見られ、直哉の日本畫には、昨秋芝の美術俱

樂部で、山陽遺墨と共に陳列された竹田の畫帖にでも見られさうな含蓄のある筆致が見られる。

私の愛好する志賀氏の作品は、所詮はかういふ短篇や小品の範圍に留まると云つていい。作者は「圓本」の序詞に於て「作者といふものから完全に遊離した存在となつてゐる」藝術を渇仰してゐる。藝術の極致はそこにあるのかも知れない。樂屋落ちの興味によつて辛うじて存在を保つてゐるやうな瑣末な身邊雜記小說の如きは、藝術として、下の下なるものかも知れない。そして、氏の小品のうちには、作者から遊離した藝術の趣きの偲ばれるものがないでもない。

「遊離」といふ言葉に、志賀氏はどういふ意味を寓してゐるのか知らないが、私は、この言葉の意味を、自我を無視したものとして受取らない。むしろ自我が完全にその作品に融和し盡くしたものと思つてゐる。

三

ところで、私は、志賀氏の自傳的小說には、あまり興味を有つてゐないのである。ある家庭ある社會の事相の記述として、多少の興味が寄せられないことはないが、それは敬意を持つた興味ではない。傑れた藝術に對しての興味ではない。

長篇「大津順吉」の甘さ淺さに、同人雜誌小說見たいな未熟を感じるばかりでなく、「ある朝」

「鵠沼行」などの短篇にも、ある人の日常雑記以上のものは感じられない。この點では、葛西氏の身邊雑記小説のある者はまだしも讀者を動かす力をもつてゐる。そこには自から生活苦が出てゐるからだ。

私は、最初雑誌に出た時、非凡な小説のやうに云はれて、文壇に珍重された、この作者の製作のうちでは長篇の部に屬する「和解」にも、さほど感心しない。無論よく書かれてゐるのだ。描寫に於て凡庸の作家の及ぶところでない。しかし、父子の爭闘の根本が曖昧模糊の感じがする。かういふ生活の餘裕のある家庭では、お互ひの我儘から、こんなことがあるといふ、客觀的態度を、作者があくまで持してゐるのではなく、作者は、こせ〳〵と主人公たる自己をいじり廻してゐるので、作柄が小さくなつてゐる。この主人公は、自分に接觸した人物の瑣末な一言一行一擧一動を、自分勝手に解釋して、「いゝ印象を與へられた」だの、「不快だ」のと云つてゐるのが、私にはせゝこましく思はれることがある。志賀氏は芥川氏のお辭儀の仕樣にまで難癖をつけてゐたと、去年某氏が云つてゐたが、小説家には有勝ちの神經性によるとは云へ、「和解」には、これに類した煩はしさがある。

私は、はじめにこの作者には「溫室育ちのお坊つちやん」風のところがあると云つた。しかし、武者小路氏とは、「お坊ちやん」ぶりが違ふ。武者氏は、正統的お坊ちやんで、お目出たいところ

があると云ふもに、天空海濶のところがあり、物に拘はらないのび〳〵したところもあるが、志賀氏は、その作物によつて判斷すると、なか〳〵に神經質で氣六ヶしくて細かいところによく氣がつくのである。家庭の事情にもよるのであらうが、生存に對する不滿の影も、彼れの心に差してゐる。これで、生活難があつたら、葛西氏よりもこの方が陰氣な厭世家になつてゐたであらうと想像される。

「和解」は、當時この小說を微細に批評して激賞した小宮豐隆氏を泣かせたものらしい。頑な父子の反目も解けて、父も子も目を濡らし、繼母も泣き叔父も泣き、妻も泣き妹も泣くといふ一篇の結末は、多くの讀者をも泣かせたらしい。ところが、私は、ここの場面は、通俗小說の泣かせ場のやうな感じがした。志賀氏のやうな作家にあるまじきところだと思つた。「老人」を書いたやうな態度で、なぜここを冷靜に書き得なかつたかと思ふ。作者は、自分の事であるためか、自分に甘へて書いてゐるのである。私は「和解」を通讀して、根柢の淺い葛藤につゝかれて來た揚句の果てに、涙攻めになるので愛想を盡かした。この場面と、「濁つた頭」とは、私の讀んだ範圍に於ては、志賀氏の惡作であると思ふ。私は、小說を書きはじめの頃、藤村花袋の兩先輩が、ある所で執筆難を語り合つてゐるのを傍聽したことがあつたが、花袋氏は他人の事を書く困難を云ひ、藤村氏は、自分の事を書く方が一層困難ではないかと云つてゐた。要するに、どちらも、よく書

きこなすことは六ヶしいのであるが、龍之介直哉などの作品では、自己の直接實驗を直寫したものよりも、題材を離れた所から取つたものに於いて一層よく藝術的效果を現はしてゐる。芥川氏は、死の少し前くらゐまでは、自己の露出を嫌つてゐたらしい。志賀氏は「自分の仕事の上で父に私怨を晴らすやうなことはしたくないと考へてゐた。それは父にも氣の毒だし、尙それ以上に自分の仕事がそれで穢されるのが恐しかつた」と云つてゐるやうな遠慮をもつてゐた。

しかし、「和解」には私の心の押へられたところがあつた。ことに赤兒の病氣と死亡のあたりは眞に迫つてゐて、しかも主人公の心は混亂してゐながら、描寫は客觀性を持して亂れてゐない。私はここを讀んでから間もなく葛西氏の「不良兒」を讀んで、子供のために苦勞する親心を想像した。私には體驗のないことであるが、葛西と志賀のやうな、他の題材は稍々もすると遊び氣分を作中に現はしてゐる人達の藝術にも、子供の生死の危機、運命の岐路に立つと、極度の緊張を示してゐるのに感動した。

四

文壇に割據してゐるいろ〳〵な團體のうちで「白樺」派と云はれてゐる仲間は、私に取つては最も緣の遠いものゝやうにかねて思はれてゐた。志賀直哉氏の如きは顏も見たことがない。葛西

善藏氏は早稲田に學んだ縁故で、文壇で「早稲田派」と云はれる系統に屬する作家であつたが、私はこの人とも殆んど面識がなかつた。たゞ一度、德田秋聲氏夫人の葬式の時に、寺院の庭で會つただけである。で、私は、個人的に葛西氏をよく知らなかつたのみならず、氏の作品にもあまり親しんでゐなかつた。

「子をつれて」といふ短篇を「早稲田文學」で讀んだ時、この作者の名をはじめて知つた。そして、貧窮の生活を敍してゐるうちに飄逸なところのあるこの小說を面白いと思つた。それから、「贋物さげて」といふ小說を、やはり「早稲田文學」で讀んで、よくある材料だが、かういふ題材を取つた小說では、近松秋江氏の「伊年の屛風」の方が面白いと思つた。その後、二三葛西氏のものを讀んだ筈だが、私には興味がなかつた。

ある時、文學志望の青年が來訪した時の話に、彼れは葛西氏の作品に最も敬服してゐると云つて、「あの人はどうして自殺しないのでせうか」と云つた。突き詰めた生活をしてゐるこの作者に取つては、自殺が當然の運命であると、この青年は思つてゐるらしかつた。またさういふ運命にある人間を、凡人とちがつたえらい人間であるやうに思つてゐるらしかつた。私はかういふ見解には同感しなかつたが、葛西氏に心醉する青年もあるのかと、むしろ不思議に思つてゐた。

今、「葛西善藏全集」を披いて、幾つかの短篇を續けて讀んで、私はウンザリした。「暗欝」、孤

獨、貧乏」の生活記錄の繰返しであつて、それが外形的にも思想的にも單調を極めてある。「私の一番悲しく思ふことは、貧乏であること、そしてその貧乏に打克つてグン〳〵金持になつて行けるほどの豐富な創作力を惠まれてゐないと云ふことである」と、自分で反省してゐるが、その通りであつて、氏の創作力の貧しさに、私は驚いた。兎に角四十餘歳までの生涯を文學に托して、呻吟苦惱、かういふ作品をこれだけしか書き上げられなかつたのは悲慘に感ぜられる。これだけのものも、貧乏の鞭が彼れを追立てたればこそ書けたのである。改造社などの雜誌社が彼れをせき立てゝ書かせたればこそ、幾つかの身邊小說も辛うじて出來たのらしい。世が彼れの天才を虐遇したのではなくつて、貧苦の運命は彼れの身に具はつてゐたのであつた。

しかし、それに關らず「葛西全集」は、現代の日本の文壇に存在を價ひする資格は有つてゐるのである。才氣に乏しいかはりに彼れは自己の藝術に誠實であつた。當て氣や通俗味は藥にしたくもなかつた。世俗に所謂成功の資格たる「運、鈍、根」のうち、彼れは「鈍」は充分に持つてゐたが、「運」と「根」とがなかつた。しかし、飮んだくれに有勝ちの、瓢逸さ、多少身に帶びてゐた仙骨が、彼れの暗鬱鈍昧な作品に、藝術の光を差させてゐるのである。

「私は、妻子を棄てて、あの鬼のやうな繼母の迫害に堪へかねて、鄕里を飛び出して來た。それ以來、私はすべての女性と云ふものに對して脅迫と敵意を感じてゐる。どんな女に對しても、私は

私の繼母と云ふものを通さずには、考へることが出來ないのだ。私は自分の妻や娘たちのことすら、信じたく思はない。すべての女性の蔭には、私の繼母の邪鬼のやうな影がひそんでゐる」(暗い部屋にて)と、彼れは云つてゐるが、しかし、その作品には、さういふ態度を持つた觀察に基く女性は、一人も半分も現はれてゐないやうである。「彼等はすべて邪惡で、毒婦で、涙にも媚にも、すべて死の毒を含んでゐるのだ」と、どうしたはずみか、興奮して毒吐いてゐるに關はらず、そんな女性を一度も具體的に書いてゐない。そんな女性もこんな女性も、女といふものを小說のなかに丸で書いてゐないのは珍らしい。主人公の妻とかおせいとか、溫泉場の藝者とかで、作中に出てはゐるのだが、女の名前でそこへ坐つてゐるに留まつて、外形に於て女の容姿を備へてそこに現はれてゐるのでもなければ、一人の女としての心理の動搖がそこに見られるのでもない。「急行券」のなかに、主人公の妻が、ちよつと見つかりにくいところへ、夫の小使錢を入れて夫に渡してゐる女らしい心使ひを、私はこの作者の作中では珍らしいと、思ふくらゐである。あれほど主人公と關係が深く、あちらこちらの作中に現はれてゐるおせいだつて、少しもいき〳〵して描かれてゐない。この女の心理なんかを、作者は歪みなりにも觀察してゐない。「いつも相手を疑はない」薄ぼんやりの女として、作者は見てゐたのかも知れないが、さういふ平凡な女としても明晰に描かれてゐない。

やくざな書畫を賣つて大金をせしめようとした「贋物」と同じ心理を取扱つてゐる「馬糞石」は、葛西氏の傑作で、田舎者の無知な慾心が、無器用なうちにも一種の味ひのある筆でうつされてゐる。村のスケッチである「仲裁人」もいゝ。しかし遺憾にもかういふ田舎の世相を寫した小說も、さう多くはないのだ。一人の異性をも描き得なかつた彼れは、自己を離れた世態人情をも描き得なかつた。彼れは、たゞ狹小な範圍でころがつてゐたのだ。

私は、私の讀んだ彼れの數十篇の短篇のうちで「仲間」といふのが、最も彼れの面目を知るに都合のいゝ代表作であると思つてゐる。これは割合に自由に書けてゐる。世才にも文才にも貧しい、しかも、肉體に病氣をも有つてゐる彼れが、差迫つた金の工面をしに上京して、運のいゝ友人達が面白さうな生活をしてゐるのを見て、心を暗くすること、友人達に揶揄されること、金策は不成功に終つて病氣の惡くなること。……みじめなことの連續なのだが、そこに、獨得の諧謔味がにじみ出てゐるので、自から一つの藝術境をつくつてゐる。

「狸」といふ綽名を仲間からつけられたことを氣にして、哀しき狸……」と、泣きたいやうな自嘲の氣持で呟き、「若い彼等の眼には、自分のやうな人間は、餘程珍奇に見えるに違ひない。老いぼれの道化者としか彼等には見えないのだらう。ほんとに泣いてゐる自分の心持は、全盛揃ひの彼等に理解されやう筈がない」と歎じてゐる。

しまひの方で、全盛でない方の友人を訪ねて、自棄の戯談をお互ひに取りかはしたりしてゐるあたりからが面白い、細君に逃げられたその友人と、急を要する金の工夫のつかない上に、九度近い熱の出てゐる彼れとは、喰ひ散らした佃煮などを肴に、金持、才能、名譽、美、藝術、健康、女性——さう云つたすべてのものに口から出任せの罵倒を浴びせて痛快を叫んだ。あらゆる者に向つての罵倒のはてが、今度は二人の間の罵倒となるのが面白い。不平不滿、胸のもだえの極は、互ひに他を罵つたゞけでは收まりがつかないで、面と向つた二人が互ひにぶつゝかり合ひでもしなければ、どうにもならなくなるのだ。

「貴様は臆病者だぞ、卑怯者だぞ、巷に出ろ」と、だしぬけに友人が、主人公たる「彼れ」を叱咤する。

「さう云ふなよ。おれは病氣ぢやないか」

「だから尚出るんだ。貴様の壽命なんか後幾ら持つものだ。おれについて來い。おれは原稿なぞ書いてやしないさ。糞骨折つて、猶太人見たいな人間共に頭をさげて持廻るなんか眞平御免だよ。……われは民衆に赴かん。……」

昂然と云つて、やがて、

「K來い。角力を取るから來い。」

「駄目だつて云ふに、そんなことしたらおれは死ぬぢやないか」
「死んだつて構はない。生きとつたつて何になるか。さあ来い」
「貴様は若い細君に遁げられたんで、おれに角力を挑む氣なんだな。……よし、貴様なんかに敗けてたまるか」
理由のない取組合ひがはじまつた。
「貴様はおれを殺す氣か。……参つたから放せ」
「放さん。貴様のやうな病弱者はいつまで經つたつて放さんぞ」
「そんな亂暴なこと云はんで放して呉れよ。苦しい。苦しい。おれはまだ血が出るよ。許して呉れ、……君許して呉れよ」
主人公は半ば泣聲になつて、依然友人の咽喉を攻めながら云つた。
虐げられたる人の一生といつた感じが、讀後に油然として起つて来る。「虐げられた」と云つても、それは、天才が衆愚に認められないで侮辱されてゐるといふ意味ではなくつて、才能の乏しい人間が藻掻いてゐる苦しさが、傍人に侮蔑の目で見られることを私は意味してゐる。「半ば泣聲になつて依然友人の咽喉を攻めて」ゐるのは、自から葛西善藏の一生を表象した言葉である。力乏しくして書けないのに苦しみながら、なほ相手（藝術）の喉から手を離さないで闘つてゐるので

ある。

五

「女性はすべて邪悪で、涙にも媚びにも、すべて死の毒を含んでゐる」といふ女性観を眞に痛感してゐたのなら、自分の鬱憤を晴らすためにも、小説の好材料としても、數十年の作家生活の間に、それをこそ力を入れて書くべき筈なのに、さう云つた女性の片影をさへ書かうとした形跡もないのは、不思議である。作者は果してそんな女性観を持つてゐたかどうか疑はれるくらゐである。たまに、彼れの筆から出て來る女は、「死の毒を含んでゐる」どころか、凡庸なお人よしである。そして、彼れの周圍の男性にしても、どちらかと云ふと、人がいゝのである。彼れの老父は、わが子と一しよに酒を飲んで、わが子に唄はせたり踊らせたりして悦しがる人間である。たびたび作中に出て來る彼れの弟は、貧しいながらも、心力を盡くして、兄の世話をしてゐる。志賀氏の身邊雜記風の小説のなかの人物の親しみが形式的に見えるのと異つてゐる。愚鈍の善良さが彼れの作中の人物にはよく現はれてゐる。此喩が提灯と釣鐘になるが、彼れの文學的面差しはドストエフスキーに少しは似てゐるのであらうか。それが彼の創作上の總財産である。

「暗い部屋にて」は、彼れが力をつくしていろ〳〵な人間を書いたものだが、どうも抽象的で客

観性に乏しい。「湖畔手記」は、彼れの晩年の作品であるが、鈍重な筆にも錆を帯びてゐる。心境と筆致とぴつたり合つたい〻作品である。「春」や「雨」や「歳晩」は彼れの詩である。「寺の梅も堅いながらに最早蕾を揃へ、枯れ朽ちたとしか見えない牡丹の枝にも瑪瑙の牙のやうな芽を見せて、年を送り春を迎へる用意が出來てゐるが、自分自身を顧みて見ると、北嶺に寒い姿ばかりで、南枝に香しい梅の面影と云つたやうなものは、どこにも望まれなかつた」と歎ずるなんか、文學者通有の感傷語で、私などは聞き飽きてゐるのであるが、小説に現はれてゐるやうな葛西氏も、獨居靜座の折には、自然と自己を對照して、かういふ月並の感想に耽つたのかと思ふと、新たなる興味が覺えられる。

（志賀氏の「暗夜行路」は、前編だけはかつて通讀して、讀後感を述べたことがあつた）（昭和三年八月二十五日輕井澤にて）

島崎藤村論

一

私は輕井澤へ着いて間もなく、近所の空別荘を見て歩いたが、それ等の別荘のガラス窓には、古新聞が貼られてあつた。風雨に曝されて黄ろくなつてゐる古新聞の日付などを見てゐるうち私はふと長野のある新聞の文章に心を惹かれた。それは近所の小諸の事を書いたものであつたが、その中に「小諸といふと、我々は藤村氏の筆で現はされたその土地を心に浮べる。我々は知らず識らず藤村氏の目を通して小諸を見せられるやうになつてゐて、有りのまゝの小諸といふ土地は最早見られなくなつてゐる」と書いてあつた。

私は、そこに傑れた藝術家の偉力を感じた。土地の印象ばかりではない、ある藝術家の筆に動かされて、我々はその傀儡となつて、人生世相を見ることが多い。藤村氏の如きは、さういふ魅力を以つて讀者に働きかける作家の一人であるらしい。あの勿體ぶつた重苦しい執拗な人生鑑賞に、私などは引摺られた經驗を有つてゐるが、先頃、山崎斌氏の「藤村の歩める道」を讀んで、現代の青年にも、藤村宗信徒の少なくないことを察した。

今度久し振りに「若菜集」「落梅集」などの含まれた「藤村詩集」を讀返した私は、新たに「千曲川のスケッチ」を讀んで、作者がこの山國の自然と人事とを、濃淡さまざまな繪として描いて

ゐるのを見た。この文集には、散文詩と云つていゝやうなものが多かつた。氏の小説の材料をいくつもそこに發見することも出來た。

引續いて、私は「春」と「家」と「新生」とを、三日がゝりで讀んだ。氏が詩から散文に移つた時の最初の長篇で、明治文學史上劃時代的の作品とされてゐた「破戒」は、着想にも文章にも以前の文學に見られない清新なところがあつて、相當に面白い小説であるに關はらず、まだ作者が自分の藝術についての方針の定まらない時分のものとなすべきであつた。新時代の文學者としての藤村氏の事業は「春」からはじまると云つていゝのである。態度があそこで極つた。しかし「破戒」あるひは、その前に作られた「水彩畫家」などの短篇の方が却つて、「春」よりも藝術として傑れてゐるばかりでなく、あの調子で創作の道へ進んで行つた方が、「春」によつて極められた道を取つたよりも、詩人藤村氏の天分を充分に發揮するに相應はしかつたのではないかと、今の私は思つてゐる……兎に角「破戒」と「春」との間に、藤村氏の藝術觀は一變化したらしいが、そこには「蒲團」などの短篇や幾つもの力の籠つた論文によつて、「自己解剖」「現實暴露」「無技巧」などを、文壇の問題として持ち出して、人々の視聽を集めた田山花袋氏の感化があつたのではあるまいか。單に花袋氏の感化とは云へないにしても、時代の風潮が藤村氏をも動かしたのであらう。

あの夢のやうな詩を振棄てゝ、有りのまゝの現實を見詰めようとした藤村氏の努力の苦しさを

私は氏の一生に於て見つゞけた。氏は、藝術に於ても人生に於てもつねに「艱難の道」を辿つて來たやうに、ともすると詠歎してゐるが、それは、氏が飽きもせずに書き續けた自傳小說を讀むとよく察せられる。氏は事物を苟くもしない人であるから、自國の傳統をも人一倍重んじてゐる。芭蕉西行一茶などは云ふまでもなく、「文學に現はれた國民性」(飯倉だより參照)によつて知られる如く、前代の人々の所行に一々敬意を寄せて、そこに深い意義を見ようとしてゐる。源氏物語をも推稱してゐる。外國の作家についてもさうであるし、私は氏の感想を讀んで、氏が內外の文學者から受けた重荷についても考へさせられた。書物を讀んでも、讀んだものが筒抜けに消えてしまふやうでは詰らないであらうが、藤村氏に於て見る如く、重つ苦しく心に停滯してゐては苦しいだらうと思ふ。

中澤臨川氏は、「家」の序文に於て、作者をツルゲネーフに比較してゐる。「生活の狀態から感情の發露までよく似てゐる。作風に就て見ても、兩者ともリアリストであり乍ら、心底は詩人である。その作物は努めて平明に實人生の描寫を狙ひ、九分までは眞を以て讀者をうなづかせるが、殘りの一部は感情で補つてゐる。それが缺點でもあれば特徵でもある。一方から云へば徹底しないといふ譏りがある」と云つてゐる。これは、當を得た批評のやうであるが、「眞」と「感情」とを別にしたところに、異論を挾み得られるし、「家」以後の藤村氏は、ツルゲネーフとは餘ほど色

彩を異にしてゐるとも云ひ得られる。淺間の山麓で敎鞭を執つてゐた時分の氏は、「獵人日記」などによつて、自然を見る目を開かれたらしいことは察せられるし、「破戒」の着想が「罪と罰」に負ふところのあることは、明かに分つてゐるし、「春」の書出しはツルゲネーフの「處女地」の開卷の描寫からヒントを得てゐるやうに思はれるが、「家」は、作品そのものの價値批判は別として、まぜり氣のない島崎藤村の作品である。氏は「破戒」や「水彩畫家」から進んで行かれる道を通らないで、外界の瑣末な事實に拘泥したやうな自傳體小說の道を通つたが、「家」を完成するに及んで、兎に角、眼界の廣い山上の一端に達したのだ。

「春」も、明治二十年代の、多感多情の青年の一むれを描いたものとして、相當の價値を持つてゐるし、ことに、北村透谷の一面が現はされてゐるところに、私は興味を寄せて讀んだのだが、しかし、あまりに淡々として水の如く、作中の人物をモデルの實名に引直してゞも考へなければ、讀者に生きた印象を與へないほどに、人間が活躍を缺いてゐる。叙事的平面的で、作者の持つてゐる詩によつてところ〴〵味付けられてゐなかつたなら、退屈で讀むに堪へられないだらうと思はれる。若い夢を見てゐる青年を描いても、ツルゲネーフのものは、情味横溢してゐる。詩趣が流れてゐる。

この「春」は、朝日新聞に連載されたのだが、當時は、かういふ非通俗の作品があちらこちら

の新聞に現はれてゐたのだから不思議だ。藤村氏のものは、たとひ一般向きでなくつても、作者の文壇的盛名によつて讀まれるであらうが、長塚節の「土」が、腰斬の憂き目に會はないで、最後まで新聞に出されたのだから不思議だ。

「家」の前半は讀賣新聞に連載された。當時文藝部を擔任してゐた私が、主筆の命を奉じて、作者を新片町に訪問して寄稿を依頼したのであつたが、幸ひに作者に腹案があつたらしく、容易に承諾して貰へた。私も讀んだり讀まなかつたりで、無論讀者受けはしなかつた。その前に連載した花袋氏の「生」ほどにも受けなかつたらしい。しかし、主筆の方からは一言の苦情も出なかつた。この長篇連載中、老社長が逝去して、當時駐露大使であつた本野一郎が後を嗣いだ。新社長は佛蘭西文學に通じてゐるとかで、得意になつて歐洲文學を語つてゐたが、新代の日本の文學については全く盲目であつて、言文一致の懸賞文を募集しようぢやないかなどゝ、時代錯誤の事を平氣で云つてゐた。それで「家」などの文章は、言文一致として甚だ面白くないものと思つたらしく、新聞を引寄せて、「……三吉はかう云つて」と、一節を私に讀んで聞かせて、自己の言文一致觀を云つた。會話に挿む地の文に、「××はかう云つて」「かう××は云つて」と、近來書くやうになつたのは、藤村氏が元祖なのである。

新聞には「家」の前半が出たゞけで、後半は中央公論に「犠牲」と改題されて、二度に分つて

揭げられたのだが、それは、作者の方で、一時休息するために新聞を斷わつたのか、新聞の方から作者を斥けたのか、當時文藝擔任を免ぜられてゐた私は、その間の消息を審らかにしなかつた。

私はそんなことを思ひ出しながら、今度改めて「家」を通讀した。田山氏のとは違つて、藤村氏の作品は、概して取りつきにくい感じのするもので、「家」も、はじめの方は隨分讀みづらかつたが、讀み込んでゐるうちに、次第に作中に惹き込まれた。をり〳〵退屈して、一日十行の連續をしたところもあつたが、大體に於て作者の歩む道を、私も隨いて行かれた。いろ〳〵の男女、それ等の人々を環の如くつながせ因緣を保たせる有形無形の家といふもの、暗々裡に變遷しつゝある時代といふもの、背景。私は、作者とゝもにそれを見ながらページからページを進んだ。そして、讀み終るとゝもにこれは、量に於ても質に於ても、明治以來の大作の一つであると、斷定せざるを得なかつた。……私はこの一卷を机上に置いて、讀んだあとを回顧したが、いろ〳〵な問題が自から私の頭に浮んだ。私自身の過去半生を、この一卷に現はされてゐる人生に見つけようとしたりした。

「家」は、それまでにこの作者の書いた幾つもの短篇を、順序正しく一纏めにしたものと云つてもいゝ。作者の自傳として「春」に接續して、四十歳前後の壯年期に及んでゐるのだが、内容は前作よりも甚だ複雜になつた。夫妻間の暗闘、生存の苦闘、幾人もの子供の死、親類關係の煩累な

ど、主人公の上に起つた雜多な事件が、要點を逸しないやうに取扱はれてゐるのだが、全篇から受ける氣持は甚だ陰鬱である。初めからしまひまで貧乏が附纏つてゐて、金不足のために、「家」の人々が冴えた生活の送られないのが、一篇の色調を陰鬱にした原因の一つであるが、材料を取扱ふ作者の態度や筆使ひが、我々を陰鬱にする大なる原因になつてゐると、私は思ふ。獨歩や花袋氏の作品には、暗澹たる材料が取扱はれてゐても、こんな重苦しいねばつこい感じが漂つてはゐない。獨歩は筆が冴えてゐる。サラ〳〵としてゐる。底が見えないといふやうな感じの作品はない。彼れは自傳小說は書いてゐないのだが、彼れの面目はその作品の上に見え透いてゐる。自然主義勃興當時の幹部のうちでも藤村氏は餘ほど柄が違つてゐる。

氏はかつて、ツルゲネーフの小說には、書かれてあるものよりも書かれてゐないところに大切なものが潛んでゐると、これを水面に一端だけ現はした海底の巨巖にたとへたことがあつた。ツルゲネーフにそんな趣きがあるか否か、私は疑つてゐるが、藤村氏には確かにさういふところがある。筆を抑壓して說き盡くさず、底にいろ〳〵なものを潛めてゐるのが「家」の作風である。この作者は忍耐が强い。

この「家」を形づくつてゐる人々と同じやうに、私なども舊家に育つて、田舍の舊家に付纏ふ因習には接觸したのであるが、私は境遇と性癖とから「家」にあるやうな煩はしさから免がれる

ことが出來た。

「あなたにしろ、私にしろ、われ〳〵兄弟の一生、……いろ〳〵人の知らない苦勞をして……その骨折が何に成つたかといふに、大抵身内のものゝために費されてしまつたものです」と、三吉は兄に向つて歎息してゐる。それから、彼はまた沈んだ眼付をして、「橋本の姉さんがあゝしてゐるのと、あなたがこの宿にゐるのと、私がまた、あの二階で考へ込んでゐるのと、それが、座敷牢の内にもがいてゐた小泉忠寛と、どう違ひますかサ……われ〳〵は何處へ行つても、みんな舊い家を脊負つてるんぢやありませんか」と、痛切な語を吐いてゐる。

舊い家の桎梏を破つて新しい世界へ出ようとする努力は、隨所にうかゞひ得られるが、傳統の支配を離れることは容易に出來ないのだ。それに、新婚とか藝術上の新事業とか、希望ある生活へと轉換を試みても、そこには、直ぐに暗い影が附纏つて來るのだ。同じくらゐな年輩の三吉と正太との自からなる對照が私には面白かつた。志すところに雅俗の相違があり、無反省と自己反省との相違があり、陽性と陰性との相違はあるが、どちらも、舊い家の腐つた沼から匐ひ出して、何處かに清新な世を迎へようと努力してゐるのは同じことなのだ。ところが、どちらも、希望や努力の愚かさを證據立てゝゐるやうにうまく行かないのだ。それで、作者の憂鬱な目は、陰性な人物を取扱ふ場合に見据ゑられてゐるばかりでなく、陽性な人物の動靜を見てゐる時にも、その

人物のやがて包まるべき影を豫想してゐるやうに沈んでゐる。……この憂鬱な沈んだ目を露骨に働かせて、アケスケと無斟酌に筆を揮つたなら、意地悪く見られ、皮肉らしくもなるのだが、この作者は、底に憂鬱を湛へながら、個々の人物を優しく取扱つてゐる。いかにも人のよさそうな一面を見せた親切があるので、藤村愛讀者の多くは、そこに親しみを持つてゐるのであらう。しかし「家」などをよく讀んだら、それは決して人に希望を抱かせる書物ではないのだ。

「春」の結末では、作者は「あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい」と思つて、深い〳〵溜息を吐いてゐる。どうかして生きようとした、その後の十餘年の生涯が、この「家」に現はれたやうな生涯であつた。作者は、三吉と對照されてゐる正太が、仇なる望みを抱いてゐたまゝ死んで行くのを以て、創作便宜上の一段落としてゐる。そして、三吉は正太に最後の別れを告げたあとで、激しく泣いてゐる。それから彼れは、妻のお雪としめやかな話に耽つたあと、

「お雪、何時だらう……そろ〳〵夜が明けやしないか」

(かう云ひながら、雨戸を一枚ばかり開けて見た。屋外はまだ暗かつた)

「家」の最後の句は、作者の心の象徴として用ゐられたのであらうが、これから「新生」へ移つて行くと、「まだ暗かつた」のでなくつて、「もつと暗くなつた」やうにも思はれる。

「生ひ立の記」「櫻の實の熟する頃」から「春」に「家」と、一人の作家の連續した自傳小說として讀

後に回想すると、艱難の道を辿つた一人の作家の生涯を、有りのまゝに書留めて行つたものである。に關はらず、抑揚あり頓挫あり、伏線あり照應あり、金聖歎に批評された水滸傳のやうに感ぜられるのは不思議だ。作家が意匠を凝らして作り上げなくつても、人生をよく見てゐると、自からそこに、文章の法則と同じやうなものが存在してゐる譯なのだが、人間流轉の生涯を、あとから見て意味をつけて、ある意圖の下にいろ〳〵なことが起つたらしくするのは、藤村氏の持つてゐる作風なのだ。同じく「有りのまゝ」を書いた作家とされてゐても、德田秋聲氏とは餘程違つてゐる。秋聲氏のは批判がないと云へば云へるが、強ひて勿體をつけぬところに、一層多くの自然らしさの感ぜられるところがある。

藤村氏の作風は、實例を擧げれば幾つもあるが、「春」の岸本が坊主頭になつて歸つて詫びるところが、「新生」の岸本が髯を剃つて佛蘭西から歸るところと照應してゐる。青年期と壯年期との相違はあつても、同じ人間のすることだから、似てゐるのは當然であらうが、それに對する作者の意味のつけ方が重々し過ぎる。「家」の中で、三吉がお俊の手に觸れるところなどが、「新生」の伏線として線の太いものなのだ。從つて、「新生」の第十三回を讀んで、突如として驚くのは、讀者が迂濶なので、作者は、その前作に於て筋の一端を水面に現はしてゐたのであつた。

作者は「家」の作風を說明して、「これは文章で建築をする心掛けであつた。それには屋外で起

つたことを一切ヌキにして、すべてを屋内の光景にのみ限らうとした。寝床から書き、玄關から書き、夜から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、初めてその川のことを書いて見た」と云つてゐるが、これによつても、藤村氏が創作に際して、見聞し實驗したものを、たゞ有りのまゝにはたから書竝べようとはしないで、藝術的趣向を凝らしたことが推察される。不用意のやりつ放しは藤村氏には見られない。

客觀的態度を持して、底には憂鬱を湛へながら、上べは冷靜を裝つて、文章で建築を試みた「家」から、「新生」へ轉ずると、そこには、客觀的態度だけでは濟ましてゐられなくなつてゐる。「春」や「家」を隔てゝ、「若菜集」「夏草」などの若い時代の作者の影が、人生のきびしい鍛錬は受けてゐながらもここによく現はれてゐる。上べの「所謂自然主義」風の冷靜は失はれて、作者本來の面目である、純粹的詠歎的の持味が「春」や「家」時代の抑壓を受けないで、自在に出てゐるのである。「新生」上卷の前半、或は下卷の後の方は、作者の本領が最も高調に達したところである。作者は描いてゐるのでなくつて唄つてゐるのだ。自己の苦惱を唄つてゐるのだ。

藤村氏は、かつてゾラとフローベルと比較して、「ナヽ」は、どの章を開けて見ても、獨りで高い聲を出して笑ひたくなるやうなところがある。ボヴァリィ夫人の方は讀むに隨つて笑へなくなつて來る。私ははじめてあの小說を讀んだ時は、途中で恐ろしくなつて、書籍を伏せてしまつたこ

とがあつた」と云つてゐるが、我々が「新生」を讀むに當つても、それに似た感じがする。しかし、「新生」は冷靜なる人生鑑賞ではなくつて、主觀の發露である。苦惱に鍛えられた主觀が宗教的恍惚境に達するほどに高調されてゐる。さういふ點で明治以來の文學で他に全く類のないものである。私は、以前、この長篇が新聞に連載されてゐた時分には、止切れ勝に讀んだのに過ぎなかつたが、今回これを通讀して、少からぬ感動を覺えるとともに、藤村氏の本領は峻嚴なるリアリストたるに非ずして、ロマンチシズムの作家たるにあると感じた。あの傑作「家」に比べてもこの方がどのくらゐ生彩を放つてゐるか知れない。

二

「新生」は、懺悔文學と見做されてゐるらしい。作者自身も「懺悔」のために書いたらしい口吻を洩らしてゐる。聖オーガスチン以來、歐洲には懺悔文學が頻りに出てゐるが、これはキリスト教といふお宗旨に關係を有つてゐる。神エホバに向つて懺悔するのだ。キリストに向ひマリヤに向ひ、あるひは一介の僧侶に向つて、罪を詫びるのだ。人間を罪の子としてしまつた宗教の迷妄は甚だしいものである。宗教の迷信の打破された今日でも、宗教的懺悔の氣持は人心に根深く殘つてゐる。……日本に於てもさうだ。

しかし、私は、世に謂ふところの神が若し有るとしても、それに向つて決して懺悔すべきものではないと思ふ。他人に害を加へた時に自己の罪を詫びることや、自己の過去の行爲を悔悟することは屢々有るにしても、絶對の立場から云つたら、人間の行爲に是も非もあつたものぢやない。それで、オーガスチンの懺悔錄などを今日の目で讀むと、隨分馬鹿らしく思はれるところが多い。あんな空妄なことに懺悔の涙を流すのは、人間の意力を削ぐやうなものである。

島崎藤村氏の「新生」について考へると、その所謂懺悔は、宗教的情調を帶びてゐるに關はらず必竟社會の制裁に對する恐怖に基いてゐる。「オーガスチンなどが恐れてゐた神の影は薄らいで社會が神になつてゐる。私のやうなものでもどうかして生きたい」ための焦慮煩悶であつて、その恐怖焦慮煩悶が現實の人間苦として我々の胸を打つのだ。「破戒」の丑松が、自分の素性を傍人に疑はれて嶮しい目で見られるのに堪へられなくなつて、つひに自分から進んで自己の素性を告白する心情は、「新生」の岸本の懺悔の動機と比較さるべきものである。丑松の方は自分には何の罪もなくつて、社會の因習がいけないのであり、岸本の方は現在の人間社會の道德に違反した自己の行爲に基くのであるが、どちらにしても、社會の侮蔑を恐れ人々に疎外されることを恐れてゐるのに差別はない。丑松の父が素性を「隱せ」と子に敎へてゐた如く、岸本の兄も「隱す」ことによつて社會的平和を得ようとしたのであるが、隱し了せるに堪へられなくなつた岸本は、棄

身になつて、所謂懺悔をした。そして、その結果から起つたいろ〳〵な苦艱を經て、つひに、自己一人の世界に安住するやうな聖境に達したらしい氣持にもなつた。が、それも詩人的の夢に過ぎないので、生きた人間を支配してゐる本能は、夢を食つて安んじてはゐられなかつた。「人の經驗といふもの、力なさがその時ほど彼れを嘆息させたこともなかつた。——あれほど寂しい流浪の旅に行つて、異鄕の客舍の床の上に跪き、……男泣きに泣いても足りないほどの痛苦を一度經驗しながら、——その經驗が少しも彼れの賴みにならなかつた。彼は新たに同じ事を悲しまねばならないやうな位置にその時の自分を見出したのであつた」と云つてゐる。

それで「新生」二卷は、朗らかな新生に到着してゐるのではなくつて、讀み了つて憂欝と本能の執拗さに溜息を吐かされるのだ。迷つた人間が、迷つた苦しみと、迷はない人間では味ひ知られない秘密な喜びとを唄つてゐるので、この懺悔文學に人生の救ひがある譯ぢやない。さう思ふ者のあるのは、懺悔を宗教と連關させて、懺悔をしたら罪が亡んで神に救はれるといふ傳統的空想に支配されてゐるからなのだ。藤村氏自身の「淺草だより」の一節に曰く、「新生は言ひ易い。しかしながら、誰れがたやすく新生に到り得たと思ふであらう。北村透谷君は心機妙變を說いた人であつた。そしてその最後は悲慘な死であつた。新生を明るいものとばかり思ふのは間違ひだ。見よ、多くの光景はむしろ暗黑にして、且つ慘澹たるものである」と、氏自身が豫め、後年の自

作を批評してゐるやうなものだ。

我々は作者の熱情と藝術上の手腕に心を奪はれて、陶醉狀態に陷つて讀み了るのだが、根本の問題は、社會制裁の恐怖と、本能の强烈とにあるので、その問題は、つまりは未解決のまゝ殘つてゐる。

「私共はすでに〳〵勝利者の位置にあることを感じますね」と、終りの方で節子は云つてゐるが我々はそれを文字通りに感ぜられるであらうか。むしろ痛ましく思はれるのではないか。作者は女の臺灣行を壯としてゐるが、私などは懺悔により解脫した、所謂浮世の勝利者を彼女の上に見ることは出來ないで、浮世に惱み疲れた一人の淋しい女の影を、そこに見るばかりである。

（昭和二年八月二十日）

三

私は近年丸善、その他の書店へ行つた時、西洋の新刊書のうちで最も心を惹かれるのは、いろいろな傳記である。濱の眞砂にも譬ふべき世界各國の無數の出版物のうち、氣まぐれに渡來した僅かな新刊書によつて判斷するのは、輕卒のやうではあるが、西洋では研究と娛樂とを兼ねた讀物として、傳記が流行してゐるのではあるまいか。ナポレオンやクレオパトラやネロのやうな、

史上に際立つた印象を留めた英雄、美人、暴君の傳記が、新しい史材や新しい觀察法によつて小説風に面白く書かれてゐるのが續刊されてゐるのみならず、古來の知名の文學者の一生が、新たな色彩を帶びて寫し出されてゐる傳記も續々と現はれてゐる。舊文學の新解釋に興味があるばかりでなく、文學者の生涯を小説のやうに面白く書いてゐるものが少くない。フランシスグリツブルといふ人の、バルザック、ルソー、バイロン、ジョルヂサンドなどの數多の文學者傳は、戀愛方面を主として描いてゐるため、ことに面白いのであるが、さうでないものでも興味本位の文學者傳によく出くわす。それ等を讀みながら、私は日本の文學者傳もかういふ風に書いたら、英雄傳に劣らぬほど一般讀者に喜ばれるだらうと思つてゐるが、しかし、日本の文學者の生涯は、あまりに凡庸で、薄つぺらで、淡泊で、傳記作者が、手腕を揮つて小説化しようにも出來ないのではないかと思はれないこともない。西洋の文學者だつて、皆んなが波瀾に富んだ生涯を過してゐたのではないが、日常の生活が日本人よりも何かにつけて濃厚であり、芝居がゝつてゐるために、その傳記が面白いのであらうか。モウパッサンなども變化ある生涯を經た譯ではなかつたが、この頃シエラードのモウパッサン傳を讀むと、含蓄の深い小説を讀むやうに面白かつた。

私は、明治あるひは大正期の文學者の生涯を屢々回顧することがあるが、何となく「貧寒」と云つた感じがする。物質的方面から見てさう思はれるばかりでなく、精神的にもさう思はれる。

絢爛なところも、剛莊なところも太々しいところもあまりなささうである。作品だつて未熟であり、榮養不良の感じのするものが多い。環境が作家個有の才能を發育させるのに適しなかつたものかも知れない。だが、いろ〳〵な異つた素質を有つた文學者が、新しい藝術の花を咲かせようと努めたことについては、私としては看過し難い氣がする。年少より文學を好み、文壇と名づけられる社會の人と、いつとなしに成りすました私は、意識するしないに關はらず、明治大正の文學者とその作品とから、多分の感化を、自分の心魂の上に受けてゐるにちがひないのだ。外國の文學を愛好し憧憬し、日本の古典にも多少は親しんでゐるにしても、私の作品には、それ等よりも明治大正の文學の感化の跡が却つて多いのではあるまいかと、自分で疑ふこともある。國木田獨歩の小說集を讀まなかつたら、私が初期の習作時代に書いたやうな短篇を書かなかつたかも知れない。チエホフの短篇に心を打たれてゐたにしても、それは天外から洩れて來る音樂に聞惚れてゐるやうなもので、自分でさういふものを作り出さうとは思ひも染めなかつた。が、獨歩は直截に私に小說作法を教へてくれた。田山花袋の文學觀によつて、私も世間並に動かされたことは云ふまでもない。

島崎藤村氏は、感想集「淺草だより」の中で、「最早二葉亭も舊いとか、獨歩も舊いとか、透谷なぞは全く時代後れだとか、左樣いふことが形式的に考へられるほど無意味なことは無い。……

今日の文藝は日露戰爭を一區劃として全く面目を新しくしたと云はれるけれど、その文藝の生命はずつと以前に根ざしてゐる。これからさき、何といふ盛んなジャパニイズ・ルネッサンスとでも云ふべき時代が假りに來ようとも、その新しい文藝は矢張今日の文藝が基礎になつて、そこから更に出發して行つた人達にはぐくまれるより他はあるまい。世間の公衆は、好きとか嫌ひとかの情で、多くその結果をのみ判斷するが、左樣飛び離れた文藝の芽が生じて來るやうに想像されるかと思ふと心細い」と云つてゐる。これは二十年前に發表された意見で、老境に達してからの藤村氏の言葉ではない。所說平凡ではあるが、若い時分から傳統を重んじる氏の氣持は、これによつて推察されないこともない。一方ではさう云ひながら、他方で藤村氏は「青年は老人の書を閉ぢて先づ青年の書を讀むべきである」とも云ひ、新を求めて地獄までも行かうとするボードレールの詩には感激してゐる。

傳統を重んじるとともに、新境地の開拓に努めた藤村氏の六十年間の藝術を「若葉集」から「夜明け前」まで、私は、自分相應に凝視して來た。しかし、獨步花袋兩先輩には感化されてゐたと信じてゐる私も、藤村氏からは、自分の創作の上ではさして感化されたとは思つてゐない。藤村氏の藝術はむしろ傍觀して來たので、彼れは彼れ、我れは我れといふ態度を取つてゐたのであるが、それにかゝはらず、明治以來の文學者の誰れよりも藤村氏に對して、私は終始變らない敬意

を寄せて來た。私は、藤村氏にだけは、いつも自分から一目置いてかゝるといふ氣持がしてゐた。自然主義全盛時代に、文學に「遊び」を排して、嚴かに人生に接觸しなければならぬといふ思潮が盛んに唱へられ、鷗外や漱石には遊び氣分があるとされ、岩野泡鳴などから、通俗作家呼はりをされてゐたほどであつたが、さういふ立場から見ると、藤村氏ほど終始一貫して、自己の生活と文學とを融和させ、二にして一、一にして二と云つていゝ境地に達した作家は明治以來なかつたと云つていゝ。「遊び」がなかつた。その態度に敬意を寄せたのかも知れない。「ユウモアの無い一日は、極めて寂しい一日である」と云ひ、「世の中に何が齒痒いと云つて、ユウモアの通じないほど齒痒いものは無い」と、自から云つてゐる藤村氏の文學は、決して重苦しく澁面をつくつてゐるのではなく、泡鳴のやうに眞劍を烈しく揮つてゐるのではないが、正座して人生を見極めようといふ態度は六十年間を通じて崩れてゐなかつた。それで、若しグリッブルやシェラードのやうな傳記家が明治文豪傳を書くとすると、藤村傳が最も書榮えがあるだらうと思はれる。明治文學者のうちではコクがあるやうに思はれる。

私は藤村氏の文學的天分が群を拔いてゐるとは思つてゐない。その作品が必ずしも傑出してゐるとは思つてゐない。鷗外の聰明なる頭腦、漱石の豐かな文才こそ、他の群小作家を壓してゐると信じてゐるが、藤村氏にはコツ〳〵と倦まずたゆまず自分の道を歩んで來たその辛抱力に感心

するのである。「人の一生は重荷を負うて遠くへ行くが如し」と云つた感じがする。鷗外漱石その他或種の作家のやうに樂々と筆を運んだことはなかつたにちがひない。出たところ勝負で書きなぐることなんかなかつた。紅葉山人の身を削るやうな文章上の苦心は、世に傳へられてゐるが、しかし、山人の苦心は文章だけの苦心で、出來上つた自己の文章に、自己陶醉をして門弟などに誇つたであらうが、藤村氏にはもつと深い文學的苦勞があつたらしい。氏は、フローベルの「眞才は根氣なり」といふ言葉を屢々思出してゐるが、この言葉は、氏の作品の批評にもなるのである。私は、氏の才能に感心するよりも、その根氣に感心するのだ。明治以來の作家に最も缺けてゐるものはこの根氣である。傍で何と云はれようと、氏は默々としてこの根氣をも失はないで來た。「運、鈍、根」といふ諺は氏の生涯に當嵌められさうにも思はれる。「私のやうなものでもどうかして生きたい」と、氏はある小說の中に書いてゐる。「どうかして人生を知りたい」と、氏はそれを絕えず望んでゐた。誰れだつてどうかして生きたいとし、どうかして人生を知りたいのだが、氏の小說を讀むと、その氣持が痛切に根氣よく現はれてゐるのだ。藤村小說集を讀む人は、このどうかしてといふ氣持がねばり强く出てゐるのに目を留めるやうに私は忠告して置く。案外藤村氏の小說よりも遊び派の漱石の小說などの方に、人間の心理が深く洞察されてゐることもあるのだが、私は才不才、能不能よりも、人間の態度に、時としては一層多くの敬意を拂ふことがある

のである。

「何とかさんは、茶屋酒に浸りながら、雑誌記者を次の室へ待せて置いて、一篇の小説を書き上げたさうです」とか、「誰れとかさんは、一晩に五十枚も書くさうです」とか云つて、「世の中にはえらい人もあるものだ」と云ひさうな顔して、私に話して聞かせる人もあつたが、私はどうもさういふ人をえらい人として尊敬する氣になれない。どうかして人生を知りたいと望んで筆を執つてゐる作家の態度如何に心惹かれる。

四

新聞や雑誌の連載物を日を追ひ月を追つて讀續け得ない私は、「夜明け前」をも、ところ〴〵瞥見してゐたのに過ぎなかつたので、今度その第一部が纏まつて出版されるに及んで、はじめて通讀した。年を取ると回顧的になり、考證趣味も出でゝ歴史に興味を覺えるのが人間の通有性らしく、露伴鷗外諸氏は晩年頻りに史傳や歴史小説を書くやうになつた。この二氏の歴史癖は不思議でもないが、田山花袋氏のやうな作家も晩年には歴史物を書きだした。藤村氏が維新前の世界を小説の題材としたのもちよつと意外に感ぜられたが、氏として、筆が行くところへ行つたので、他の作家のやうな單なる好奇心や好古癖などに基づいてゐるのではない。どうかして人生を知り

たいと望んでゐた氏は、詩を棄てゝ小説に轉じたのだが、「千曲川のスケッチ」「生立ちの記」「櫻の實の熟する頃」「春」「家」「新生」その他幾多の短篇や旅行記に於て、自己と自己の周圍の種々相を見詰めて來た。そこで、自己の生れる前の時代に人生探索の目を向けたのは、氏のやうな態度の作家には、當然の順序である。用意周到の氏は、自己を描き「家」を描き、それから「時代」を描かんと企てた。そして、この「夜明け前」は、歴史小説であるとは云へ「家」と同じ態度で書かれてゐる。ここにこの作者の態度に敬意を拂ふとともに、これが如何に難事業であつたかを痛感して、讀む方で苦しくなつた。

幕末の史實は、大衆作家などによつてさんざんに踏み躙られてゐるので、私はその時代について考へても嫌惡を覺えるやうになつてゐる。「夜明け前」の作者が劍劇的誘惑にかゝらないのは當然であるが、所謂「遊び」のない作者は、かういふ題材に向つてどう筆を着けていゝか、手も足も出ない思ひを幾度もしたのぢやないかと疑はれた。作者が「家」の舞臺であつた木曾の谷間から崩壞せんとする幕府の末の世を見たことにしてゐるのは、現實感を強くする上から云つても用意がいゝのだ。しかし、「家」とはちがつて、過去の世界をいきくと描き出すためには、豐かな想像力が必要なのだ。ところが、藤村氏はあまり想像力の豐かな作家ではない上に、自分で想像を驅使することを遠慮してゐる。劇的事件が續々と出現してゐるのに、作家は少しも劇的に取扱つて

ゐない。等持院の足利尊氏の木像の首を抜取つて三條河原に晒した尊王黨の一人が木曾まで逃げて來たのを土藏に隱して置くといふ事實についても、小說讀者は、ここで何かの葛藤が起るかと待設けてゐるのに、興味本位で世間を見ない作者は、この志士がその隱れ家を出て江戸へ旅び立つたことを書いてゐるだけで、幕府の捕吏と斬合つたりなんかしてゐない。作者の調べた事實がさうであつたのを、面白づくで曲げて書くことは出來なかつた。橫濱で外人から受取つた生絲賣揚げの利得のうち、小判で二千四百兩の大金を、木曾まで送り屆けるので、その任に當つた老學者は、「前途百里の思ひに胸の塞がる心地」がした。小說讀者も、途中で何かの變事が起るにちがひないと危まれるのに、人も金も無事に木曾の谷に着いたゞけで終つて、讀者に張合ひ抜けをさせてゐる。事實がさうであつたから仕方がないといふ譯だ。

「新生」は、個人の心の苦悶を叙した主觀的作品であり、「家」は、或家族の推移を描いた客觀的作品であり、「夜明け前」は、過去の或村落が時代の波に動かされる有樣を印象的に叙せんとした作品で、作中人物の個性を描くことに重きを置いてはゐない。たゞ若い人々と老いたる人々とが對照されてゐるくらゐであるが、それ等の人々が或種の老若の型のやうであつて、讀者に迫つて來る力を缺いでゐる。「家」の人物は奇を弄しない叙述のうちに、我々の胸に浸染する人間性を示して、出沒するのだが、ここに挿まれてゐる人物、宿役人の吉左衞門や金兵衞や、田舍醫者の宮

川寛齋や、それ等の後繼者たる半藏や香藏、あるひは半藏の妻お民などは、南畫の點景人物たる以上に、あまり人間的特色を發揮しないやうである。作者の意圖がはじめからここにあつたのであらうか。

「此の節は何でも力づくで行かうとする。力で勝たうとするやうな世の中になつて來た」といふさういふ世の中を觀察して、それをいろ〳〵の方面から見て行かうとするのが、作者第一の意圖であるにはちがひない。それから、力づくの混沌たる末世を現はすうちに、本居、平田などの復古思想、「自然に返れ」といふ天啓的叡智が、この混沌たる末世にも何處となくきらめいてゐたことを觀察し、「どうかして生きたい」といふ衆團的人間性を描かんとしてゐる。從つて、伊勢太神宮のお札が下つて、「えゝぢやないか」と、世直しの陽氣な唄が盛んに唱へられたところで、長篇の第一部が結ばれてゐるのは、この作者の他の小說に見られる如く、一つの象徵的叙述となつてゐるのだ。用意周到の作者は、起稿のはじめから、この「えゝぢやないか」の民衆的陶醉を頭に置いて、ここまで長い道中をコツ〳〵書いて來たのだ。「あの本居翁の書き遺したものにも暗示してある武家時代以前にまでこの復古を求める大勢が押し移りつゝあるといふことは、おそらく討幕の急先鋒をもつて任ずる長州の志士達ですら意外とするところであらうと彼には思はれた」と書かれてゐるが、作者が「この復古を求める大勢が押し移りつゝある」微妙な實相を一篇を貫いて

描かんとしてゐることに、讀者たる私は最も目を着けなければならぬのである。作者は聲を大にして、それを說いてはゐないが一篇の生命になつてゐる。半藏の耳には思ひがけない新しい聲が聞えて來た」と、作者は結末になつて云つてゐるが、半藏が偶然友人に誘はれて江戸に出掛けて平田家に入門の誓ひを立てたのも、父の病氣平癒を禱るために御嶽神社參籠を思ひ立ち、平田篤胤の講本「靜の岩屋」を持つてそこに出掛けて、王瀧の宿で、さびしく聞えて來る夜の河音を耳にしながら、その先覺者の書を讀耽るところなど、作者は、この山間の青年を通して時代の暗黙裏の推移を、絶えず描寫してゐるつもりなのだ。この青年も自覺してゐるのではなく、暗黙裏の推移に動かされてゐるので、最初江戸へ行つて入門したあと、江戸の光景などを見て「世は濁り江戸は行き詰り、一切のものが實に雜然紛然として、互ひに叫びを擧げてゐる中で、どうして國學者の夢などをこの地上に實現し得られようと考へ、自分のやうな愚かなものが、どうして生きよう」と藤村小說中の人物らしく考へつゞけてゐる。將軍の上京、皇妹の御降嫁、各藩の有名な志士の往來や論爭、武田耕雲齋一黨の決死的鬪爭など、この時代の大事件は、概して噂の聞書程度に書かれ、記事文程度に書かれてゐるに過ぎないので、讀者を退屈させるのだが、これは作者が表面的華々しい事件よりも思想の隱微な推移の方に重きを置いてゐるためでもあらう。「半藏さん、君は時々立ち止つてぢつと眺めてゐるやうな人ですね」とか、「香藏さんがまた極りを始めた。

君は出し抜けに何か云ひ出して、ときぐ〵びつくりさせる人だ。しよつちゆう一つ事を考へてるせゐぢやありませんかね」とか、作中の二青年は、在來の藤村小説中の人物らしく現はされてゐるが、作者も、この波瀾多き時代を取扱つた長編に於て、しよつちゆう一つ事を考へ、時々立ち止つてぢつと眺めてゐる。ところで、讀者は作者とともに、一つ事を考へ、ぢつと眺めてゐるのに退屈して來るのだ。對象が激刺として動いてゐないのに齒痒くなることがある。

ルソーは「自然に返れ」と云つた。それがフランス革命の原動力ともなり、近代の思想や文藝の根本精神ともなつた。「本居宣長が古代の探求から見つけて來たものは、直毘の靈の精神で、その言ふことを約めて見ると、自然に歸れと教へたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復歸の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、又は大人のあの戀愛觀も、物のあはれの説も、すべてそこから出發してゐる」といふ、その思想の動きを、作者は、時々立止つてぢつと見詰めてゐる。

ここで思ひ出されるのは岩野泡鳴である。泡鳴と藤村とは、共に自然主義作家と見做されてゐるが、その作風の非常にちがつてゐることは誰れにでも分つてゐる。ところで、泡鳴は早くから、この本居平田の復古思想に共鳴し、日本人の日本人らしく生きる道をそこに發見し、古代神道を熱烈に讃美し、その生々主義刹那主義を喜んだのであつた。例の粗雑な文章で、周圍に當り散ら

して傍若無人に説き立てたので、讀者の反感を買ひ眞面目に相手にされなかつたのみならず、新時代に不適切な馬鹿げた古くさい思想のやうに思はれてゐたが、しかし泡鳴の見解にも、今日になつてよく讀直して見たら、棄てがたい味ひがあるかも知れない。「過去に探求の目を向けた先人はもとより多い。その中でも、最も遠い古代に着眼した宣長のやうな國學者が、最も新しい道を發見して、その方向を後から歩いて出て行くものに指し示した」と、「夜明け前」に書かれてゐるが、泡鳴の自然主義は、外國の自然主義文學よりも、日本の上代の思想に一層多く刺戟されて生み出されたのだから面白い。「平田先生は本居先生よりももつと露骨だ。考へることが丸裸だ——いきなり生め殖せだ」とも書かれてゐるが、泡鳴の露骨主義、實行卽藝術說は、本居の說を實行の方へ進めた平田の潑剌たる意氣に匹敵してゐる。それで、私は、藝術家としての素質が泡鳴とは類似性の乏しかつた藤村氏が、「家」や「新生」或は「エトランゼ」の時代の人生經驗を經て、泡鳴と同じやうに古代に日本人の眞生命——如何に生くべきかを——見るに至つたのも面白く思ふのである。「古ながらの古に歸るのでもなく、新しき古を發見し、新しき古を人智のます〳〵進み行く近つ代に結びつけて考へる」ことに深い意味を見たのは、泡鳴も藤村も同樣である。藤村氏は以前から簡素を尊ぶ人であつたが、しかし「若菜集」以來の氏の文學や思想は、上代ぶりの簡素直截のものではなかつた。「夜明け前」の文章だつて簡素直截とは云ひがたく、枯淡の味ひがあ

りとは云ひがたい。そして、氏特有の文章のうるほひと云つたやうなものは、いくらか稀薄になつてゐるやうに思はれる。

五

兎に角、藤村氏の新作は、日本では新しい型の歴史小説であると云つていゝ。田山花袋の「源義朝」の作者が、史上の人物になりきつたやうな書振りともちがふ。森鷗外の「伊澤蘭軒」や「澁江抽齋」のやうな、故人の史實を的確に記述しつゝ、自然に時代と人との面目を浮上らせる書振りともちがふ。當時の動亂の本源地からは懸け離れてゐる木曾山中の、云ふに足りない小村落の凡庸な實生活を叙して、時代の背景を或ひは遠く或ひは近く、蜒々と起伏させ、目に見えぬ思想の流れをも絶えず取入れてゐるので、歴史小説に對する作者の抱負は小でないと云つていゝ。だが、志したところは達せられたのであらうか　私は、この長篇の第一部を讀終つて、近時の日本の文壇には珍らしい大作であると感じ、啓發されたところも少なくなかつたのだが、何となく物足らぬ思ひもした。「家」や「新生」を讀終つたあとで感じたやうな壓力が感じられなかつた。この作者もかつて云つてゐた如く、イブセンやツルゲーネフの作品には書かれてゐるものよりも、書かれてゐないところに大切なものが潛んでゐるのであり、「家」や「新生」にもさういふところがあ

り、筆を抑壓して說き盡さず、底にいろ〳〵なものを潛めてゐるが、藤村氏の作風であるのだが、「夜明け前」ではそんな感じがしない。作者が筆を惜んでゐると云ふよりも、作者の筆が萎縮してゐると云ふ感じがするところがないでもない。

トルストイの「戰爭と平和」は、ロシアの片隅から、ナポレオンが歐洲を踏荒してゐる時代の光景をのぞき見してゐると云つていゝ書振りなのだが、多くの人間の描寫が縱橫自在變幻出沒の活氣を持つてゐる。トルストイの想像力の豐かさは驚嘆すべきものである。「夜明け前」は、作者の態度がちがつてゐるので、トルストイの小說に比較するのは不當のやうでもあるが、いくら個個の人物描寫が主要な目的となつてゐないにしても、こゝに現はされてゐる幾人かの老人や青年の面目が、南畫の點景人物的にあまりに稀薄に過ぎる。お上品過ぎると云つていゝかも知れない。「家」に於て見られるやうな夫婦間の暗鬪、親類同士の面倒な關係、さう云つたやうな現實味が、「夜明け前」にはいき〳〵と書かれてゐない。幕府の統治力が衰へて、無法な命令や暴力の橫行によつて村民が苦むことは、少しくどいくらゐにたび〳〵書かれてゐながら、村民苦痛の光景が、具象的藝術の冴えをもつて現はされてはゐない。それは、注意して物を見、物を聞き、物に觸れるのを例としてゐる作者は、「家」の材料については知るところ多く、人間性の眞實の現はれをいろ〳〵な點から觀察し得られ、筆を採りながらも、描かんとするものが明晰に眼前に現はれてゐ

たのであらうが、「夜明け前」では、いくら當時の史實、當時の村落の生活狀態を、記錄や、古老の話などによつて詳しく調べたにしろ、「家」よりも一屋間接的であるため、あれほど明晰に眞相を觀察し得られなかつたためではあるまいか。

氏は、二十年前の感想集「淺草だより」の中で、「黑船」と題して、「歷史小說としても、歷史畫としても、面白い題目ではあるまいか。私はこの秋、木曾に旅して、姉の家であの船の圖を見出した。半紙一枚程の大いさの古い粗末な木版畫だが、それを見ると當時のことも想像される。いかにあの船が當時の人の眼に映じたらう。そのために幾何の人が狂死したらう」と云つてゐる。二十年後に大作「夜明け前」の現はれる緣口を、私はこゝに見つけたやうな氣がするのであるが、氏はその感想に續けて、「歷史」と題して、「現代といふものを研究すればするほど、過去の歷史に書いてないことの澤山あることが分る。過去の歷史を讀んで見れば見るほど、現代の眞相もある程度までしか歷史の上に傳はつて行かないやうな氣がする。今の教育は、あまり歷史上の人物に重きを置き過ぎる。いかに古人に傑れたる人があつたとはいへ、要するに過去の人である。吾等と何等の直接な交涉もない人である。古人を友とするといふこともあるが、それは自己を見出し得るにとゞまる。吾等に取つては、例ひ平々凡々でもそこらに歩いてゐる男や女の方が、昔のエライ人達よりも大事だと思ふ場合が多い。かうして生きてゐるといふことは、どれほど大切なこと

だか知れない」と云つてゐる。若い時分の藤村氏の考へさうなことで、その頃はまだ自分で歴史小説を書く氣にはなつてゐなかつたであらう。しかし、年を取るにつれて、氏も過去の時代の眞相を索ることに、興味を感じ、深い意味を感ずるやうになつたのだ。現代を見極めるには、過去をも討究しなければならぬと、痛切に感じだしたのであらう。「過去の人が吾等と何等の直接な交渉もない」と云ひ切れなくなつたのであらう。然し、氏は、いざ歴史小説に筆を採るとなると、「そこらを歩いてゐる男や女」のやうに、過去の男や女を鮮明に描くことが難しかつたのである。半藏にしろ香藏にしろ、吉左衞門にしろお民にしろ、陰影が乏しい。鮮血が流れてゐるらしくない趣きがある。作者の手を離れて自然にそこに動いてゐる人間といふよりも、強ひて作り出された人間と云つた感じのする所もある。過去の人間に作者が自己の影を見出したのはいゝ。さうでなければ、藤村氏ほどの人が單なる面白づくから、歴史小説を書く筈はないのだ。過去に自己の影や知人の影や、現代の影をも見るのはいゝが、過去の世界を小説の舞臺に取ると、それ等の影が生氣を失ひ、萎縮し、窮屈さうになるのを、私は遺憾に思ふ。

明治以來、歴史小説には傑れたものが極めて少なかつた。森鷗外の短篇に幾つかの傑作を見つけられるくらゐなものだ。鷗外はさほど力を籠めて創作の筆を執つたらしくもないのに、その歴史小説は、現代小説と同程度に樂々と書きこなされてゐる。その他では、やはり「盲目物語」が

傑出してゐて、その作者の想像力の豊かなことを證明してゐる。私は繰返して云ふ。藤村氏が、「家」に於て一むれの人間を寫實的に描いたと同樣な態度で、「夜明け前」中の人物と世相を描き出さうとしたのはいゝ。しかしその世界が過去であるために、寫實的筆致を自由に驅使させる原動力たる想像力を要することが大であつて、從つて藤村氏も十二分の效果を擧げ得なかつたと、私には思はれる。

木曾の自然を描いたり、村落の年中行事を描いたりしたところには、作者特有の詩趣があり情趣があり、老いた筆になほみづ〳〵しさを失つてゐない。それで、私は、半藏の御嶽山參籠のあたりを、情景かね備はつた名文章として愛誦した。

傳統を重んじると云つても、傳統にもいろ〳〵ある。「夜明け前」も、後篇はどう發展して行くか分らないが、前篇だけについて云ふと、漢學や佛敎によつて毒せられない上代の朗らかな、おのづからなる人の氣持や行動が、尊き日本の國粹であり、その古(いにしへ)に返ることによつて、純眞の生の歡喜が得られさうに、作中の人物も、作者自身も考へてゐるらしい。文學について云つても、古事紀萬葉集の傳統を重んじることになるのだ。その古い泉は、その流れを汲む者にいつも清新な力を與へると思はれた。明治後の新代に於ても、そこに氣づいた者が少くなく、今なほ萬葉は盛んに流布してゐるやうである。菊池寬氏が、二月號の「文藝春秋」所載の「話の屑籠」のなかで

「日本のあらゆる書籍の中で、たゞ一つだけ選擇せよと云はれたら、自分はいつでも萬葉集を採るだらう」と云つてゐるのを讀んで、私は不思議に思つたが、それほどに萬葉集は今日の文壇人に重んじられるのである。德川期に眞淵宣長などによつて眞價の發見された萬葉古事紀の傳統的魅力は、私もこれを是認してゐる。萬葉の和歌は永久に日本人の心をそゝるにちがひない。しかし、嬰兒の如くならなければ天國に入られないとしても、我々はいつも赤ん坊のやうな氣持で人生に對してはゐられない。人間の眞相世界の眞相はそんなにお目出たくはないのである。舌たらずの赤ん坊の言葉で天地を讃美してなんかゐられないのである。日本人が外來の佛教なんかに感化されたのも、上つ代の單純な思想では滿足されない心の動きの結果であつた。赤ん坊が成長したのであつた。そして、次第に、日本通有の人生觀とか、日本趣味とかいふやうなものが、發達の道を取つた。文學について云つても、今なほ日本人の心魂を動かすに足る傳統的文學は、萬葉古事記系統のものばかりではないのだ。

私は過去の日本文學を回顧して、「平家物語」なんかを、傳統的日本文學の精粹のやうに思つてゐる。それから「徒然草」に日本趣味が最もよく現はれてゐると思つてゐる。あそこに現はされてゐる花鳥風月趣味、生活についての注意、人事に對する好惡の氣持にあの頃の日本人らしさが見られるのみならず、今日の日本人になほあの趣味が殘つてゐるのだ。芥川龍之介は、何處かで

「徒然草」を詰らない書物としてケナしてゐた。藤村氏も、「文章の美しいものが古典としてすぐれたものだ。われ〳〵は先づこの偏見を破らねば成らぬ。この偏見は古代の僧侶の書いたものから兼好の徒然草のやうなものゝみを尊重させた」と云ひ、この僧侶の隨筆集に重きを置いてゐないらしい氣ぶりを見せてゐる。また、兼好が「四十にして死なんこそ、めやすかるべけれ」と云ひながら「如何にして住まんか、如何にして食はうとか」そんなことを頻りに書き、芋を食つて萬病を治した坊さんのことまで書いてゐるのを「厭世家の養生」だと、稍々冷かしたやうな調子で批評してゐる。私はこの二氏の說に反對ではない。「徒然草」は詰らないと云へば詰らない書物なのだ。叡智にみちたパスカルの隨筆とはちがつてゐる。しかしこの隨筆集を詰らないと云ふのは日本趣味を詰らないと云ふことになるのである。日本趣味なんて、要するに徒然草趣味なので、その審美觀、人生鑑賞は深くも高くもないのである。そして、作品を通して見た芥川君には多分の徒然草趣味が認められるが、藤村氏といへども可成徒然草趣味を有つてゐられさうである。だから、私は、よくも惡くも、日本趣味の經典としてこの隨筆集を愛讀してゐる。「世を厭ひながら尙且つ生きんと志した」矛盾に滿ちた生涯は、我々をして兼好に親しみを深くさせる所以で、方丈記の作者も藥草を植ゑたりしてゐる。孤獨主義の芭蕉も、頻りに人懷かしがつて、門人に會ふことを喜んでゐた。

藤村氏は新時代の青年であつた時から傳統を重んじた人である。それが氏の新文學の强味であつて、晩年の今日に至るまで讀者の信賴をつないで來た所以である。輕薄なところがない。だが氏の作品には、遊びがなく、鈍重であり、慰みに讀まれるものではないのに、なぜ、花袋泡鳴秋聲など同類の作者よりも多數の讀者を得てゐるのであらうか。氏の筆には感傷的の甘さがあると一般に云はれてゐるが、私にはさうも思へない。氏の小說を讀んだあとでは、明るい感じよりもむしろ陰鬱な感じを殘されるのを私は例としてゐた。生きることの惱みを說いたのは、藤村ばかりでなく、泡鳴も花袋も同樣なのだが、後者の方はもつとサッパリしてゐて、藤村の方はもつとねち〳〵してゐる。ねち〳〵して齒切れが惡く陰鬱ではあるが、藤村氏の作品には博大の心と云つたやうなものが何處となく漂つてゐるために、讀者が馴付くのではあるまいか。博大の心といふものはどうかすると感傷趣味に墮する恐れがあるが、藤村氏は他の某々作家のやうにそこまで低下してはゐない。この心は明治以來の作品には缺乏してゐるのである。氏が「新生」のやうな宗教的感情の高調に達した、日本文壇に比類なき名作を出したのもさういふ心を有つてゐるためである。「夜明け前」が全部完結したら、讀者たる我々はどういふ高い所、あるひは深い所へ連れて行かれるか分らないが、この前編だけについて云ふと、作者の捧げてゐる傳統的燈火に、私は餘り心を照らされないのである。博大な心は相變らず見られるが、その心を導く洞察的眼光が弱

い。そして、歴史小説だから過去を過去だけのことゝして描き、過去の道を照らした明りは、ただそれだけの明りであるとして見るのでは物足りない。これは人物その他に於て、作者の描寫が手薄いためではないだらうか。私は平家物語を單なる昔物語として讀んでゐないので、我藤村氏の最近作を昔の物語として讀むのでは飽足りないのだ。

六

「一切は神の心であらうでござる」と、篤胤の遺著「靜の岩屋」の中から取出した言葉で、三年間の努力の結果である長篇の第一部を締めくゝつた藤村氏は、「何となく今夜は眠りがたい」と附記して筆を擱いた。氏として感慨無量なるものがあつたであらう。氏の如く四十年にも渡つて、たゆみなく創作の筆を執りつゞけて來た文學者は、現代日本では絶無と云つていゝくらゐに稀れなのである。しかも氏は老いてなほ、今度のやうな大作に從事する根氣を持つてゐるのだ。私は讀み終つたこの大作を前に置いて作者自身の通つて來た道を回顧したばかりでなく、透谷、獨歩、花袋、泡鳴を追想した。そして、自分がかういふ人々と時を同じうして生きて來たことを考へ、自分もかういふ人々の後を追つて、やがて「壇の浦で斬り死にするか水底の藻屑となるかするのだ」と考へたりした。

私は幼少の頃、今から四十年前に「文學界」といふ純文學の同人雜誌を、よく分らぬなりに愛讀したことがあつた。藤村氏も同人の一人として、その雜誌に盛んに書いてゐた。詩か戯曲か浄瑠璃か、今思ひ出すと、餘程變挺なものが書かれてゐたので、多分藤村全集にも收められてゐないだらうから、若い藤村崇拜者は知つてゐないであらう。明治二十五六年の頃で新時代の文學が起りかけてゐた時分であつても、要するにまだ文學の戯れに過ぎなかつたので、藤村氏もはじめはその戯れに耽つてゐたのだ。それから脫却して、遊びのない文學を志して、根氣よく修業を續けた。花袋も泡鳴も文學を熱愛した根氣のいゝ人で、多量の生産をしたのだが、それ等の作品は、文學史上の殘骸たるに留まつて、今日以後の讀書子の目には、何の魅力もないものになつてしまふのであらうか。一時意氣旺んであつた新劇運動も、日本の地質に適しなかつたのか、要するに無駄骨折で、何の效果をも現はさなかつたと、この頃をり〳〵噂に上ることがあるが、花袋泡鳴その他あの時分の人々の作品も、あの時分の新劇と趣きを同じうしてゐるのであらうか。若しさうだつたら、諸氏の根氣も要するに無駄骨折見たいなものであつた。さう思つていゝのか、だが、若し諸氏の作品が眞の人間世界を、外面からでも內面からでもよく描出してゐたなら、さうたやすく魅力を失ふ筈はないと私には思はれる。人間といふものを本當に知りたいといふ欲望を有つた人はいつの世にも存在してゐる筈で、さういふ人々は、根氣よく人生の奥底を描破した作品に

心を寄せない筈はない。泡鳴花袋時代の所謂自然主義文學にしても、藤村氏が屢々推讃してゐる二葉亭獨歩透谷の文學にしても、次第に讀書社會に影の薄い存在となるとすると、それ等の作者が人間を徹底的によく書いてゐなかつたか、或は人間の眞相を知りたい慾望を有つた人間が少なくなりつゝある爲めなのであらう。兩方とも本當であるかも知れない。

藤村氏は「多くのすぐれた人達の書いたものを見ても、直ちに創作として許すべきものは、その人達の全生涯を通じて數へるほどしかない」また「眞の人間を書くことに骨折りたいとトルストイが云つたといふ。ある時は人間を天使にまで持ち上げる、ある時は人間を惡魔として踏みつけるやうなさういふ見地から書かれたものは、たとひその人間の衝動がどんなに生き〳〵と書かれてあつても、長くは私達の心をひかない。そして、さういふ衝動が色濃く塗つてあればあるほど眞の人間といふものから遠いやうに思はれる」と云つてゐる。かういふ氏の說から推して見ても明治以來の文學に、創作として許すべきものはさう多くはないのではないかと思はれる。在來の定評に捉はれないで、過去の文學を檢討する文學史とか作家傳とかゞ出てもいゝのである。そこで眞の人間を書くには、どういふ態度を持したらいゝかといふとこれは困難な問題で、自然主義作家は殊更醜いことを描くと非難されたものだが、ここに引用した藤村氏の見解は、文學の正道であると思はれる。人間を觀察する態度人間を描く態度は、正にかくあるべきものゝやうに思は

れる。ところが實際の作品について見ると、氏の見解が當つてゐるとばかりは云はれない。文學藝術は微妙なものである。人間の眞相を洞察するのも描寫するのも靈妙不可思議な作用のものである。「稟才は根氣なり」といふ言葉の意味は年少の頃から動かすべからざる世上の眞理として聞かされてゐて、それに反對するのは横紙破りのやうであるが、少なくとも文學藝術については根氣は根氣稟才は稟才で、根氣だけで達し得るところは高が知れてゐるやうに、この頃の私は痛切に思ふやうになつた。我々は何十年可成りに根氣よく書き續けて來たが、やはりどうにもならないと絶望を感じてゐる。この「夜明け前」讀後感執筆中に、非常に眞面目な態度で、自分で自分を鞭打つてゐるやうな態度で書かれた或青年作家の小說を讀んで、その心掛けに或程度の感心はするものゝさういふ態度だけで人生の眞相が描かれると、今日の私は思へなくなつてゐるのだ。德富健次郎氏の「富士」にしても、自分の生涯をむき出しによく書いてゐると思ふだけで、人間の實相が嚴然と我々に迫つて來るやうには感じられなかつた。

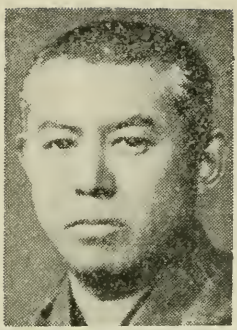
人間を天使と見たり惡魔と見たりする小說は、坪內博士の「小說眞髓」以前の小說と云ふべく今日では、大衆小說通俗小說を除いたら、さういふ態度で筆を執るものはなくなつてゐる譯だが、バルザックなんかを讀むと、彼れは、そんなことに頓着なく、人間を强烈な惡魔にしたり純白な天使としたりしながら、その描寫は眞に迫つて我々に人間の心を見させてゐるのに驚かれる。モ

ウバッサンは男女間の微妙な心理をよく描寫したと云はれてゐるが、傳記によつて見ると、彼れは三十歳以前にすでに黴菌に肉體を冒されてゐたので、「女の一生」の作者が生の現象を理解する力の次第に混濁して行つたのも、トルストイの云つてゐるやうに、長篇小說の成功と新聞雜誌の評判と、社會殊に婦人の阿諛と、出版業者の酷しい要求に誘惑されて輕々しく筆を執つたためばかりではなく、彼れの頭腦が惡疾によつて腐蝕されてゐたためであつた。だがトルストイも云つてゐるやうに、モウバッサンには天才があつた。彼れは要素から事物を見た。だから無意識のうちに眞理も發見した。この眞理は、トルストイの考へてゐたやうな道德的眞理ばかりでなく、人間關係のいろ〳〵な眞理なのだ。それから、傳記學者の研究によると、モウバッサンは我々が想像してゐたやうな遊蕩兒ではなかつた。彼れの小說は、必ずしも彼れの實驗記錄ではなかつた。さういふことを考へるにつけ、傑れたる文學藝術は究極するところは、天才の無意識の產物で、法則も何も必要なのは初步の間だけなのだといふことに、話が落ちて來る。

藤村氏をはじめ、明治以來のいろ〳〵な作家評家に感化され指導されて來た私も、この頃になつて、創作は六ケしいものだとつく〴〵感じるやうになつた。「創作として許すべきものは滅多にない」と、藤村氏の云つたのは本當である。

私は、氏の舊作を、ところ〴〵讀み返して、「新生」と「エトランゼ」とに、以前讀んだ時にも增

して、最も推服した。これ等のものはたゞの寫生や身の上話や見聞錄ではない。これ等こそ、滅多にない創作中の創作として許すべきものだと思はれる。「新生」を泡鳴の「放浪」に比し、「エトランゼ」を荷風氏の「佛蘭西物語」に比して考へると光彩は更に加はるのである。（昭和七年二月）



谷崎潤一郎と佐藤春夫

一

いゝ意味か悪い意味かで多少文壇の批評に上つてゐるらしいのに讀書慾を刺戟されて、私は、「武藏野少女」といふ新刊の長編小說を通讀した。佐藤春夫君の最近の創作である。

これは時事新報に連載されたものだが、新聞社を喜ばせた小說ではあるまい。一回毎に多數の讀者の興味を惹く性質のものではない。藤村花袋秋聲漱石などの長篇は多く新聞に發表され、文學史上に殘るやうなそれ等の傑作が新聞紙を發表機關とすることも、さして不似合には思はれなかつたが、それは一昔も二昔も前の事で、今日の新聞はそれ等の長篇物を甘んじて連載する舞臺ではなくなつてゐる。新聞小說といふ別種の文學が要求されてゐるので、その方で巾を利かせようと思へば、それに適應する態度を取らなければならぬので、徒らに俗惡呼ばはりして新聞社の小說選擇態度を非難するのは、迂愚な沙汰である。新聞社や劇場が、讀者受けのしないものや見物受けのしないものを、たとひそれが藝術的逸品であつたにしても、採用しないのは當然過ぎるほど當然なことで、物質上の損失の大嫌ひな我々人間が、大切なお得意である讀者や見物の御機嫌にかなはないものを取り上げる譯はないのだ。

それで、新聞といふ舞臺が作家の金と名を得るための最大重要な場所であると極まると、それ

に反抗するものがあらうとなからうと、それに適應するやうな作風が流行するのは、大きく云へば宇宙自然の理法なので、水の低きにつくが如くである。適應しない作家は落伍する外はないので、自然淘汰の天則はここにも行はれるにちがひない。私は、菊池寛君や山本有三君の新聞小說は、出來不出來はとに角、その舞臺に適應するやうに企てられてゐると思ふ。はじめから通俗作家を志して文壇に出たとは思はない二氏も、素質がそれに適してゐたのか、時世を見る明があつたのか、新聞小說讀者の好みに投ずる用意は有つてゐる。

「武藏野少女」には、その用意が乏しい。佐藤君も、新聞小說を可成り澤山書いてゐるらしいから、中には新聞小說作法にかなつた傑作があるのかも知れないが、少くもこの小說は新聞向きでないと思はれる。……しかし、私は、新聞社の文藝面擔任者ではないし、新聞社の株主ではなしかういふ小說のために讀者が殖えようと減らうと、自分に取つて何の損得もないので、純粹の文學愛好者としての小說を讀み、何の拘束のない自由批評家として、批評を試みようとするのである。一卷に纏つたものを一日がゝりで讀切つたのだから、一回々々の小細工をした興味に釣られもしなかつた。讀んでゐるうち、をり〳〵退屈した。物足らぬ思ひをした。だが、作家が人間を描かうとする眞面目な態度を持し、面白づくで空々しい筋立をつくらうとしてゐるところのないのが、私には氣持がいゝので、兎に角結末まで見ることにした。この頃幾つかの長篇小說に對し

て、讀みかけて中途で卷を投じたやうな侮蔑をこの小說には加へなかつた。讀後、少なくもこの作品を對象として、わが文學を論じ人生を語つてもいゝやうに思つたのである。

私は短篇ばかり書いてゐるのでよく分らないが、長篇小說を筆にたるみなく書き上げるのは容易な仕事ではないであらう。「武藏野少女」は、以前の佐藤君の特色であつた主觀的な抒情味の豐かなものではない。廣い世界を素材として、いろ〳〵な人間を描寫し、いろ〳〵な人情を叙したもので、「田園の憂鬱」の作者の小說道も進步發展し、大いに老熟したやうに思はれたが、それとともに全體から受ける印象が稀薄なやうにも思はれた。私はちよつと齒痒いやうな感じもした。可憐な少女が物質には惠まれなくても、溫かい愛情に包まれて、成育して、悲劇を身に背負はないで結婚生活に入るのは、讀者も安心して一卷を讀終れる所以で、筆づかひの刺々しくないのが、その作者の特色なのであらうが、しかし、人間の扱ひ方が常識的なところに停滯してゐると思はれないではなかつた。この小說を讀んで私が思ひ出したのは、この作者の出世作である「田園の憂鬱」と「都會の憂鬱」とであつた。「武藏野少女」の育ての親の家庭である東京近郊の生活者伏見一家の人生は田園の憂鬱の再現であり、生みの親である貧しき東京生活藤木一家の人生は都會の憂鬱の再現であると云へないことはない。新作長篇の材料は友人から提供され、友人の體驗も取入れられてゐると、作者自身も云つてゐるが、しかし、この作品に藝術的生命の與へられたのは、作

者が十數年前に心にはぐくんだ田園都會の兩憂鬱の力であると私は感じた。爾來十數年の人生經驗が作者佐藤春夫の小說を成育させ、いろ〳〵な美しい花を咲かせ實を結ばせたのに違ひないがかの初期の二篇に於て作者の藝術の基調は極つてゐるのである。さう思つて私は、嘗つて速讀したことのあつた、かの二篇を新たに讀返したが、二つとも面白かつた。この頃雜誌でをり〳〵見る佐藤君の作品よりも面白かつた。ヘルンが日本の學生に教へてゐる如く、二度三度繰返して讀んでも價値の薄れない作品が、本當の傑れた藝術であると云つていゝので、かの二篇は數多き大正期の小說中で注目に價ひするものなのだ。私は元來佐藤君などとは、文學藝術に對し嗜好を異にしてゐるらしく、その作品も、平生あまり讀んではゐないのだが、今度かの舊作二編を清新な藝術に接した氣持で通讀した。「田園の憂鬱」は、私も田舍生活をしてゐるので、自分が日常見聞してゐること感じてゐることが、この作者によつてよく書かれてゐるのに興味を覺えた。明治時代にも、かういふ田園生活を書いた小說はあつたが、多くは粗笨で、且つ型に捉はれてゐて生氣がなかつた。獨歩にも、武藏野生活者を題材とした短篇が幾つかあるが、自然の描寫は清新であつても、人間の現實は書けてゐないで、今讀むと稚拙の感じがする。今ヘルンの名を出したので思ひ出したが、ヘルンの日本田園讃美の感想は要するに異國人の夢であつて、眞相を穿つてはゐない。そこに彼れがロマンチストであり夢幻趣味の藝術家であつた面白さがあり、明治以來のロマ

ンチシズムの作品は、日本の作家のうちから傑れたものを求むること難くして、ヘルンの如き外國人の作品か、或ひは森鷗外などの創作的飜譯にこれを求めなければならぬことになるのだ。それにつけても、ヘルンの西洋文學評論に心醉することも警戒しなければならなかつたのだ。ヘルンは自己の趣味に惑溺する人であつた。

「田園の憂鬱」には、斷片的ではあるが、憂鬱な青年の目に映つた田舍の光景が印象深く描かれてゐる。田舍の老若男女の面目が一瞥的にでもヴィヴィッドに現はれてゐる。それに比べると、「武藏野少女」は細叙されてゐるに關はらず、それから與へられる印象が稀薄だ。伏見の爺さんはまだいゝ。婆さんや少年の豐作は甚だ平凡だ。かういふ人間の性格描寫になると、時代おくれと云はれてゐても、自然主義時代の秋聲泡鳴藤村等の諸氏の作品の方に斷乎として傑れたところがあると、私は考へた。爺さんは人がよくつて、婆さんは里子のお德を可愛がりながらも打算的なところがあると、嫗翁兩者の性格別をするのも、「舌切雀」以來の舊套である。無論作者が爺さんをさういふ人物として描き、婆さんをさういふ人物として描くのも結構だが、それなら、もつと心理と行動に突込んだところがなければならぬ。婆さんにをりをり邪推を廻させたり慾の深さうなことを云はせるのも、取つてつけたやうである。それに比べると、「都會の憂鬱」のなかの、妻君の母親の方は何でもないやうな對話の間に、その心理狀態が躍如としてゐる。

「都會の憂鬱」は「田園の憂鬱」以上に面白い。文學志望の青年がまだ志を遂げざる間のさまざまな惱みを書いた小說は多い。名を成した後に無名時代不遇時代を回顧して一篇の小說に作り上げるのは、作家として快心の事で、そこは、筆の立つ有難さで、政治家や實業家や軍人や俳優などの過去の追憶談、立身の物語とは違つて、自由に、思ふ存分に自己を發揮し得られるのである。しかし、百人の文學志望者のうち、かういふ快心な題材を取扱ひ得られる幸運兒は、一人か二人あるかないかと云つていゝくらゐで、大抵は、父母兄弟知人に侮蔑され、貧乏に苦しめられ、自己の才能の有無についての疑惑に惱まされたきりで、局面轉換の幸福は味ふ由もない者が多い。「都會の憂鬱」は、憂鬱な青年期を脫した後に書かれたものらしいが、他の或種の文壇成功者の回顧小說に見られるやうに、「幸福の地位に立つて不遇なりし昔を思ひ出すほど喜ばしきことはなし」と云つた得意な調子は見られない。青年期の憂鬱がそのまゝに現はされてゐる。しかし、自然主義時代の憂鬱小說のやうに薄汚なくはない。プロ派の描く貧乏小說のやうに理窟つぽくも薄汚なくもない。藝術味横溢して、ユーモラスで、憂鬱のうちに一抹ののどかさがある。この小說の中に、女優である妻君が、「女といふものは、時にははつきりと命令をして貰ひたいものなのです」と、夫に要求してゐるが、それが「武藏野少女」の少女お德が、自分の身の處置に迷ふ時に、兄に要求する言葉になつてゐる。かの新劇女優が、「何かの臺詞にでもあるのを應用したらしい」その言葉

が、少女お徳の心の動揺を作者が描出するに當つて役に立つてゐるのである。この新長篇中の犬や猫の描寫も、「憂鬱篇」中の小動物愛撫の延長で、一匹の子猫を作中に取入れたことが、田舍家の生活描寫を餘程豐かにさせてゐるのによつても、作家たるものは日常の自己の經驗や雜多な知識をおろそかにしてはならないことが察せられる。伏見の爺さんが子猫の餌食にするために寒鮒釣りに出掛けて道に迷つて、知らない男から魚を貰つて歸る話なんか、かういふ挿話には、他の長篇作家に見られない佐藤君獨特の妙味がある。「春風馬堤圖譜」の描かれる所以である。

作中の重要な人物である藤木は、都會の憂鬱を感じてゐる男であるが、それが、舊作「憂鬱篇」の主人公やそのお仲間の江森渚山などと同類の人物らしく、失敗した事業家としての面目が現はれてゐない。植民地浪人の如きはどれも描き足りない。なか〳〵細かに書かれてゐるのだが、印象が手薄である。どの男も女も稍々お人よしに過ぎるやうに受取られた。藤木夫妻にしても、夫の方から云ふと、妻が夫に對して無理解であり、人生に對して不徹底といふこと。妻の方から云ふと、夫が我儘で得手勝手といふこと。つまり、あらゆる夫婦喧嘩の言ひ分の公式見たやうなことを根據として衝突をするのだが、二人の衝突が、日常の烈しい生活苦に責められてゐながら、眞劍のやうに思はれない。二人の寶子を里子に出したり、先夫の子を背負つたりしてゐる藤木夫婦の間には、もつと息苦しい葛藤がありさうに思はれるのに、さういふ所は抄略されてゐる。こ

の夫婦もお人よしに過ぎるやうに受取れた。だが、かういふ風にのんびりしてゐるところに、この作者の小説價値が認められないこともない。

私は永井谷崎里見諸氏の作品に親しんでゐるほどには佐藤君の作品に親しんでゐない。さう澤山は讀んでゐないのだ。それで、私の讀まないものにどういふ傑作があるか知らないが、今度偶然最近作の「武藏野少女」を通讀し、併せて、舊作田園と都會の憂鬱篇を復讀して、この作者も永井谷崎氏等も同樣、生れながらの藝術家であると感心するとゝもに、この作者はどうして、かう浮世を甘く見るのだらうと、多少意外に感じた。作者は、自己の趣味に照らして、田舍人の醜陋に眉をひそめてゐる。いろ〳〵な人間の奸策や邪念をも見のがしてはゐない。だが、それ等は上つ面のことで、水に流れる塵芥や泡沫見たいなものだと云つたやうな態度で取扱つて、常識的な見方で安んじてゐるやうに思はれる。人生の底を流れる滔々たる獨流に目を注がうともしないやうに思はれる。明治以來の日本文學はどの方面でもお手輕であつて、ロマンチストの夢も淺いのだが、佐藤君の作品にしても、淺いと云ふのが語弊があるとすると淡いのだ。日本では傳統的に淡いもの小さなものに愛着を寄せる傾向があるのだが、明治文壇のロマンチストの代表者高山樗牛でさへ、天下凡そ物の小さきを好むこと、我が國民の如きは無かるべし。彫刻は根附にあらざれば置物なり。畫幅は扁額に非ざれば掛物なり、八州の山河を前にして人は盆栽に苦心す。文壇

に歡迎せらるゝものは、十七字の俳句にあらざらざれば、百行以内の短篇小說……」と慨歎してゐる。形の大小はどちらでもいゝと私は思ふが、小にして淺くては物足りない。私はロマンチストたるバイロンの烈しさを好む。人間に對する憎惡から、神の掟に對する疑惑と反抗の烈しさにまで達してゐるのを好む。熱血とか血淚とか云ふと、維新の豪傑の持ち物のやうに思はれるが、バイロンのやうに藝術と抱和した血淚は我々の心をも動かす魅力を有つてゐるのである。

佐藤君は、ある作品の跋文に於て、「作者はだん〳〵年とゝもに、ロマン的色彩を失ひつゝある。」と云つて、その埋合せに、「何ものかゞ別に加はるかも知れぬ」と期待してゐる。「何ものか」とは、現實的知識か何かであらうが、私などは、「武藏野少女」が生半可な寫實的なものにならないで、ロマン的色彩の濃厚なものになつてゐたら、もつと面白かつたであらうと思つてゐる。時世の止むを得ざるところであるが、日本では詩人にして小說家に轉じるものが少なくなかつた。英國のハーディは、文學に志した初めには詩を作つてゐたのだが、當時の英國文壇は小說の全盛期で、詩を賣つたのでは豐かな生活が出來さうになかつたので、詩を止めて小說を作ることにした。そして小說作家として大成した晩年に、年少時代の志を繼いで作詩を樂むやうになつた。日本でも詩人としては生活費が得難く、また小說家ほどに世間的名聲が得難かつたために轉業者があつたのである。だが、日本の讀者が詩を好まないのではない。古來和歌や俳諧の流布してゐた我國

の讀者は他國人よりも一層詩を好んでゐる筈なのだ。それで、小説にしても詩を取入れたもの、詩の味はひを加味したものが喜ばれるので、詩人的素質を有つた小説作家の作品が、却つて小説的素質を有つた小説作家の作品よりも、多數に迎へられたりするのである。佐藤君の如きは、豊かな詩人的素質を有つた作家であるから、その素質を大切にして、縦横に自己の特色を發揮すべきである。

私などでも、「さんま」の唄や「殉情詩集」の詩の或ものを愛誦してゐる。嘗て瀧田樗陰君が私に向つて、「佐藤春夫といふ人は、小説を書きながら涙をぼろ〳〵落してゐますよ」と、今見て來たことを感動して話したことがあつた。欠伸しながら筆を執つた經驗にのみ富んでゐる私には、さういふ作家の氣持は分らなかつたが、笑ひ事とは思へなかつた。畔柳芥舟氏(?)の話として、誰れかから間接に聞いたと記憶してゐるが、「高山樗牛が田山花袋といふ男は不思議な男だと云つてゐたよ。一しよに箱根か何處かへ遊びに行つた時に、花袋は山の眺めの美しさに、感激して涙を流したさうだ」といふ意味の話であつた。

これ等二つの逸話を今思ひ出して、私は二つとも面白いと思つてゐる。花袋氏も、本當は、平面描寫とか現實暴露とかに捉はれず、ゴンクールやフローベルなどの冷徹主義の作家にかぶれず、持前の詩人的素質を發揮して小説道に進んで行つた方が、却つて自己の大を成すためによかつた

のではなかつたかと疑はれる。

二

「武藏野少女」は小說として充實してはゐないが、作者が廣い世界へ足を踏み出して、あたりを見渡してゐるやうな感じはした。長篇小說の通俗化した今日、この新作にはまだしも藝術味が豐かであるとして注目していゝのである。佐藤君はこれからどういふ風に進んで行くか知らないが、氏が昔から持つてゐた奇談怪說趣味よりも、田園都會の憂鬱系統の方面で、氏が大成することを私は望んでゐる。佐藤君が十數年の間に變化し發展し、或ひは同じことを繰返してゐることを考へるにつけ、私は、谷崎、志賀、里見、武者小路諸氏——概して明治文學を受繼いで、それ〴〵の特色ある新文學を産出した大正時代の才人の文學過程について考へた。明治から大正に移ると日本の國運の進歩とともに、文學も進歩してゐることは認めなければならない。經濟的にも、大正時代は前代よりも遙かに惠まれてゐたのだから、絢爛たる藝術の華が開いたのも當然なので、この時代に活躍した人々に比べると、貧乏しながら文壇の地ならしをした明治の文學者は餘程割が惡かつたのだ。

牡丹の花のやうな絢爛な色彩を有つた藝術家は、古來日本には乏しいので、明治以來では、紅

葉山人でなし、泉鏡花でなし、里見弴でもなし、佐藤春夫でもなし、やはり、谷崎潤一郎である。枯淡とか簡素とか哀愁とか瀟洒とか氣品とかの味ひを有つた作家は多いが、絢爛の美を有つた作家は少い。繪畫の方では鑑賞者の目を眩惑させる豐麗なものがあるではないかと云ふかも知れないが、あれは繪具の力でごて〳〵したケバ〳〵した色を出してゐるだけなのだ。日本の文字は日本の繪具とは違つて、絢爛豐麗な感じを、外形だけでも現はすに適しないやうに思はれる。

谷崎君は、新作家として類稀れな派手な色彩を發揮したために、異常に歡迎されたが、あゝいふものは早く凋落するだらうと、我々には思はれてゐた。氏には、はじめからロマンチックな幻想を喜び、怪奇な探偵的事件を好しがる傾向があつて、この點佐藤君と趣味を同じうしてゐたらしく、「李太白」や「指紋」のやうな佐藤君初期の作品を稱讃して、雜誌へ紹介の勞を取つたりしたのは、永井君が谷崎君の作品を引立てたのと揆を一にしてゐるのである。ロマンスらしいロマンスの乏しい新日本の文壇では、「李太白」や「指紋」も珍らしいものにはちがひないが、しかし、佐藤君の幻想や怪異趣味の方面の作品は大したものではないと私には思はれてゐる。佐藤谷崎兩氏の文學的素質の甚だ異なつてゐることは、前述の私の批評によつても察せられる譯である。兩者とも藝術派でありロマンチストであると云はれないことはないが、さう云へば、小川未明君だつてロマンチストである。

派手なものは早く凋落するのを例としてゐるのに、谷崎君の藝術は、我々の豫想に反して凋落しなかつた。數多の作品を發表しながら讀むに堪へないやうな駄物は、殆んど一つも出してゐないのは、他の作家に例のないことである。だが、平凡な群作家の間に立つて鬼面人を脅かしてゐた趣きもあつた。華多くして、まことの乏しい憾みがあつた。人工の妙天工を奪つてゐるとも云へるが、谷崎君の初期の作品は、技巧の力で嘘をまことらしく描いたといふよりも、嘘を嘘らしく描いてゐると思はれることがあつた。佐藤君の純情的作品とは違つてゐた。

（小説について、人生の眞實を見たつもりでも、それは、作者の技倆によつてまことらしく描かれた嘘であることが多い。チエホフの書翰集を讀むと、スヲーリンに與へた書翰のうちに、彼れはツルゲネーフを評して、「父と子」は、眞に天才の作品であると云ひ、しかし、老婆や百姓女などを除いたら、ツルゲネーフの描いた娘や女は凡て不自然で虚僞であると云つてゐる。それは私には意外であつた。リザでもエレーナでも、「煙」のなかのイリーナでも、明治時代のツルゲネーフ崇拜黨が、ロシアの眞實の婦人として感激の目をもつて見上げてゐた婦人も、チエホフに云はせると、「ロシアの娘」ではなくつて、下らないものだとのことである。外ならぬチエホフの批評である。我々他國の讀者には反駁する資格がない。これによつても、小説によつて人生の眞實を見てゐるつもりでゐるのも、自己欺瞞に墮する恐れがある）

谷崎君の初期の作品は、小説らしい小説であつた。營養不良兒見たいな痩形な作品の多かつた中に、くり〳〵とよく太つた惡たれた小僧見たいな小説であつた。そして、「憂鬱篇」に於て自己の才能を悲觀してゐる佐藤君などとは異つて、自己の藝術に強い自信を有つて、倦むことなくおのれの道を進んで來たやうである。この作者の好んで描いたやうな人物は、見たところいかにも現實の婦人らしいツルゲーネフ作中の婦人が、不自然であり虛僞であるが如く、不自然であり虛僞であると云はれないこともない。だが、さういふ人物が實際界に存在してゐてもゐなくつても作者の心中には、潑剌として存在してゐたのだ。ツルゲーネフの描いた婦人は「ロシアの現實の娘」でなかつたかも知れないが、作者はさういふ婦人に興味を有ち、自分で描いて自分で樂しんでゐたのであらう。谷崎君も、自分の好みにかなつた婦人を現實界に求められなかつたので、作中にそれを創造してそれに惑溺してゐたのかも知れない。春信や歌麿が自分の美人繪に自分で惑溺したであらう如くに——さう考へると、ロシアの自然派の作物も、日本の空想派の作物も、作者の態度は類似したことになつて、文學史上の流派別なんかは皮相な見解となるのである。

「蓼喰ふ蟲」以後の谷崎君の作品には、初期の作品に附纏つてゐた臭氣が脫け、絢爛だつた色彩が澁味を帶び、作家が渾然たる藝術の境地に達し切つてゐるやうに、私などは敬服した。「まんじ」にしても、「吉野葛」にしても、「盲目物語」にしても、材料が異なり着想も異なつてゐるが

ら、それ〴〵に古典的完成を遂げてゐる。初期の作品には江戸末期の趣味が連想され、浮世繪と共通してゐる藝術境が窺はれたが、近來の作品には、もつと古い日本の古典の味はひが傳へられてゐる、日本の傳統的文學の妙味は充分に吸收されて、それに作家の主觀が活躍してゐるのだから申分のない譯である。「まんじ」の如きは、古典趣味とは餘程異つてゐるやうだが、作者はこの小說に於て、洗練された大阪言葉に興味を有ち、さういふ日本語の美をあらはさうと努めてゐる。……私は、今此處で谷崎君の小說に對する讃美の辭を繰返すために論評の筆を進めてゐるのではないので、「日本文學の傳統」といふことについて、最近の感想を述べたくなつたのである。谷崎君の初期から最近までの文學經路を見てゐると、西洋文明模倣時代の日本に生長しながら、この作者はさほどには歐米文學に感化されず、日本の傳統美を發揮してゐることが明かだ。佐藤君だつて、自分が發行してゐる雜誌を「言靈」と名づけたほどあつて、日本の言語文字を尊重してゐるらしい。島崎藤村氏の「夜明け前」には復古思想が見られるが、藤村氏とか晩年の鷗外氏とかを、特に取上げるまでもなく、四十を過ぎ五十を過ぎた作家は、青年期に一圖に西洋禮讃をつとめてゐたにしても、次第に、自分で意識しないうちに、傳統の日本趣味に復歸するものらしい。西洋の作家が年を取ると、カソリックの宗教信者になりたがるのと同樣である。先日、ある新聞に、ファッショの伊太利では、國語の純化運動が盛んで、「廣く使用されてゐる外來語をすべて廢

止」せんとする計畫があり、料理屋の名前でも床屋の看板でも、日常の生活用語でも古典的な表現法が用ひられだしたと報道されてゐたが、國粹主義が勢力を揮ひだしたこの頃の日本でも、さういふ傾向が起らないものであらうか。カッフェの看板語や、マルクス論者の用語のやうな蕪雜な外國語が一掃されるのはいゝことであるが、しかし、少なくも文學の上で、傳統的日本趣味は、本當のところ有難いものなのであらうか。谷崎君などは傳統趣味に依つてあゝいふ傑れたる藝術を造り出した。しかし、その態度を眞似てばかりゐられない作家も多いにちがひない。

小山内薫君などの飜譯心境を、私などは哂ふ譯に行かない。今日の青年作家の幼稚な外國文學模倣をも、一概に蔑視されないのである。私には、萬葉の和歌や芭蕉の發句だつて、それほど有難いものには思はれない。怪しい外國語の學力で辛うじて皮相なところをのぞいて眞似をしたつて、はじまらない譯だが、過去を顧みても故郷の風色は落莫としてゐる。野口米次郎氏などは日本の浮世繪を激賞してゐるが、浮世繪が日本特有の美感の現はれにはちがひないとしても、あんなに極度の推讃を價ひするほどの藝術であらうか。浮世繪の婦人畫なんかを見るたびに、それが痴呆美であるところに、多少の興味を寄せながらも、一種の侮蔑を感ずるのは、私一人だけなのであらうか。婦人畫ばかりではない、役者繪を見ても、それ等浮世繪師の多くは、そこに、人間に潜んでゐる威力をも魂をも、我々に示して呉れないのである。西洋人が異國情調に自己陶醉を

して褒めてくれたために、それにかぶれて、俗人に媚びるのを目的として描かれた低級な藝術を理窟をつけて激賞するのに、私は同感し得られないのである。

かういふ浮世繪と手を取合つて共存共榮をした舊幕の戲作者文學を振切つて、新しい道に進んだのが、「小說眞髓」以來の明治文學者の態度であつて、傳統無視偶像破壞が、今日までの間に屢屢志されて、最近では反宗教反ブルジョア文學唱道のマルクス主義文學も起つたのだが、傳統破壞は、今なほ上つ面だけに過ぎないことを、我々もをり〳〵考へさせられる。國民の他の思想に比べて、文學藝術だけが特殊の道を進む譯には行かないと見えて、いつとなしに國粹の色彩が濃厚になるものと思はれる。日本の文學を罵倒して外國の名作を激賞し、それ等に心醉してゐるらしく云つてゐた高山樗牛も、本當は日本主義者であつた。「偶然に生を享けたる國土の如きは、我故郷とするに足らず」と揚言した内村鑑三氏も、本當は、武士道的日本の讃美者であり愛國者であつた。藝術や思想に國境なしといふコスモポリタン的考へは、人間の本性に適しない淺薄な考へかも知れない。だから、日本の傳統の文學藝術の眞價がどうであらうとも、我々はそれに勿體をつけて讃美し、それを守立てて行くのが、正しい道であるかも知れない。そこへ行くと、谷崎君の如く、無駄な懷疑に惱まされないで、傳統的文學趣味を抱擁しながら、自分の藝術を築いて行ける作家は幸福である。

三

「自分は、歌舞伎の形式の尚將來に利用するに足る事を信ずる」と、坪内逍遙先生は云はれて、そして、最初の試みとして、その形式の一つであるチヨボを復活した新作を發表された。ある理論の主張とともに、その理論を具體化した作品を示されるのが、先生の在來の慣例である。

偶像破壞傳統無視の精神によつて起された新劇運動も、傳統の怪物たる歌舞伎劇壇から追放するさきに、新劇自身の方が亡んでしまつた。イブセンやストリンドベルヒの精神や形式よりも、歌舞伎の形式の方が、將來の日本の演劇に多分に利用すべき分子を有つてゐるかも知れないと、我々も時として考へないこともない。しかし、チヨボの復活、「チヨボの新式化」は、我々の豫想しないところであつた。「阿難の累ひ」は、役々の臺詞にはすべて現代語が用ひられ、それにチヨボが挿まれてゐるのが、奇抜に思はれ、實演してどういふ效果を奏するかと興味を惹かれるのである。たゞ讀んだだけでは、何の不調和も感じられず、突飛な感じもしないのは、作者が老練なためでもあるが、題材が古代から取られ、舞臺面が歷史的であり空想的であるためでもある。

この新作は、歌舞伎の形式利用から思ひつかれた新しい音樂趣味、新しい形式美を主要な點として試作されたもので、作中の男女の性格とか、思想とかにはそれほど重きを置かれてゐないの

かも知れないが、たゞ讀んだだけでは、その方がよく我々の心に映じた。「二つの魔障」は、道を修する者の障りとして、西洋でも東洋でも古來說かれてゐるやうであるが、それ等を脫却した所謂法悅の境地は、空漠たる淋しい枯野原のやうであると、私などには思はれる。老病死を現はした假面に脅かされて心機一轉した少女や、釋尊の暗示的な言葉に心の窓を開かれたといふ青年の心を私はいろ〳〵に忖度したが、それは、「旭光輝き、微妙な音樂」の聞える舞臺とは調和しさうでないやうに思はれた。

さういふ理窟をこの戲曲に求めるのは、外道の考へであらう？　假面をかぶつて、病苦と老衰との說明をする樣特の振事なんかは、一見日本の舞踊に相應しいものゝやうに思はれるが、在來の例によると、かういふ振りは、道化た可笑味に富んだものになり勝ちなので、この新作を正しく現はすためには、俳優は舊套を脫する必要があるのだ。可笑味に墮したら、少女の心機一轉の動機が弱くなるのである。この少女は、作者が指定されたやうに、「生れ附きが至つて單純」であるとともに極めて情熱が强くなければならぬので、從つて、この役に扮し得る女優は、今の劇壇にはありさうに思はれない。役柄が昔の岩井某瀨川某を連想させられる。（昭和七年四月）

菊池寛論

菊池寛君を論ずるのは現代を論ずることである。この雑多紛々の現代に於て、ある一人を以て現代の標本とすることは困難であつて、範圍を文壇に限つても、現代を背負つた標本的人物はそこらに散在してゐるやうであつて、特に一人を選び出すことは困難である。

しかし、今日の私は、多く躊躇するところなく、菊池君をもつて好箇の現代の代表者としようと思つてゐる。私は彼れに於てよく現代の影を見てゐる。現代は絶えず動揺してゐる。明日はどういふ風が吹くか知れない。從つて、私の菊池君に對する評價は、明日の日どう變るかも知れないが、今日の彼れは、よく日本の現代を反映してゐる。どちらかと云へばいい意味で日本の現代を代表してゐると云つていゝ。よくも悪くも現代に無關心で生存してゐられない私は、菊池君についても無關心でゐられない譯である。

最近の文壇人のうちでは、故芥川と、久米菊池の兩氏とに、私は、いろ〳〵な意味で興味を寄せてゐた。私は、年齡の差違のためか、この三氏に對して、羨望嫉妬憎悪あるひは偏愛、仲間最屓などの私情をまじへずして、その述作を味ひ、その行動を注視してゐられるのである。

他の二氏のことは暫く置く。菊池君は素直に現實を受入れる人である。現實に對して相應に敏感な人である。外形も精神も今の日本に生きてゐると云つた感じが生々としてゐる人である。彼れの述作は、さういふ感じの率直な表白である。日常の行動も多分さうであらうと思はれるが、

社會民衆黨（今度の選擧に際して、そんな名前の黨派のあることを私ははじめて知つたのであるが）の一員として、第一回の普選の代議士候補に立つたことも、氏の行動として、ふさはしく私に思はれる。氏が落選したことによつて、「現代の日本の代表者」たるに價ひしなかつたと見做すのは、最高點の投票數を得たと云はれる高木正年氏を、「現代の日本の最高の代表者」たるに價ひしてゐると見做すのと同樣に、無論皮相な考へである。菊池君は、民政黨にでも加入して選擧に立つてゐたなら、當選の榮譽を得たであらうし、彼自身の志してゐる出版法の改正や著作者擁護の法案成立のためにも、都合がよかつたであらうのに、氏は易きを去つて難きに就いた。しかし、そこに、現代的良心の保持者たる氏の面目が見られるのである。

安部磯雄先生が社會民衆黨の巨頭であることも、私は今度はじめて知つた。安部先生と私とは、この世に於て多少の因緣がつながつてゐないことはない。私は、年少の頃（明治二十七八年の頃）備前岡山の郊外にあつた薇陽學院といふ宣教師經營の私塾に半年ばかり通學して、傍ら縣立の病院へ通つてゐた。（當時の印象は、「地獄」といふ短篇に書いたことがある）その學校の校長は、安部先生であつたが、神學研究の目的で米國に留學されてゐた。私の入學後何箇月かして歸朝されたので、私達は多くの期待をもつて先生を、岡山の停留場に迎へた。私は、學校では先生の教授を受けなかつたが、市内の教會堂に於てをり〳〵先生の說教や講演を聽いた。社會主義

らしい意見を、私はその時はじめて耳に入れた筈であつたが、特別に記憶に留まるほどの感激は受けなかつた。

間もなく私は年少の憂欝に困じて退學したが、一二年後にその學校も閉鎖されることになつたのであつた。校長たる安部先生が、在米中新神學にかぶれて、基督教の正統的信仰を失つたために、宣教師と意見が合はなくなつたのが、學校閉鎖の一つの原因であると云はれてゐた。

私が上京して早稲田の學堂に通學してゐた間に、安部先生も上京された。一團の同志とユニテリアンの教旨を宣傳されだしたが、當時の私は、宗教が鹽氣を失つてしまつたやうな神祕性を缺いた、淡々水の如き常識的なユニテリアンを蔑視してゐた。(今思ふに、無產黨中の社會民衆黨は、宗教のうちのユニテリアンのやうなものではあるまいか。)

先生は、私の在學中早稲田に教鞭を執られるやうになつて、私達のクラスでも英語の一課目を受持たれたのであつたが、まだ先生の人格や學識を知らなかつた學生は、どういふわけだつたか、先生を毛嫌ひして、最初の授業時間に、私など數名の外はその教室に入らなかつた。學生に嫌はれたことを知つた先生は、直ぐに教室を出て、それつきり受持教師は變更された。それで、後年安部先生が早稲田の學生間に旺盛なる人望を得られたことを知つて、私は意外に感じた。

爾來數十年、私は輕井澤避暑中に、彼方此方の途上で、幾度か行會つて、お辭儀をする外、先

生に面接したことはなかつた。先生がいかなる社會主義行動をしてゐられたか、さういふことに興味のなかつた私は殆んど知らなかつた。たゞ羽仁吉一氏ををり〳〵訪問した時世間ばなしのうちに、安部先生の家庭についても、多少耳にしたことがあつた。羽仁氏の令嬢が、安部さんの子女××さんは、神様は信じないけれど、お父さんを信じると云つてゐたと話したのが、私には奇異に感ぜられるとともに、先生の家庭ではさうだらうと思はれた。先生はかつて、ある雜誌に、「私は妻君を尊敬する」と云つてゐられた。夫が妻を尊敬し、子が父を神の如く信じることは、私が日常目睹してゐる周圍の家庭では多く見られない現象である。

かういふ有德の人物が國民の代表者として議政壇上に立つことは喜ぶべきことである。選擧前後の先生の人氣の盛んな所以である。しかし、飜つて考ふるに、議會は現實の國人の生活に直ちに影響を及ぼすやうな言論行動の舞臺であるとすると、溫良有德の人物といふことは、必ずしも代表者として最高の條件であるとは云へないのではあるまいか。私は、先生の政治上の主義主張については、詳しくは知らないのであるが、雜誌上でをり〳〵瞥見したところに依ると、產兒制限論者であるとともに、財產の制限論者であるらしい。土地國有主義を抱いてゐるらしい。土地の私有禁止を說いたり、個人の私有財產を幾千に止めようと說いてゐるのを、私は何處かで讀んだことがある。……ところで、他の無產黨候補者を選擧した人々は、どういふ人々であつたか知ら

ないが、安部先生の應援者及び投票者は、必ずしも無産者ばかりではなかつたらしい。財産を有し土地を有し、また出來ることなら、自己の財産を殖やし、所有土地をも殖やしたいと、人類共通の慾心から脫却してはゐさうでない人々も、安部先生を自分達の代表者として昇ぎ上げたやうである。私は、そこに現代を見るのである。現代的良心を見るのである。安価淺薄なる人間的良心を見るのである。若し、安部磯雄先生の屬する黨派が政友派や民政派のやうに有力であつて、議員の過半數を占める恐れがあつて、安部先生も當選の曉には、自から內閣を組織し總理大臣となつて、その抱懷せる土地私有禁止などを、直ちに實行し得られるやうであつたなら、どうだらう？さういふ右か左かに自己の運が左右される場合にでも、先生の投票者は擧つて先生を投票したであらうか。どうせ無產黨が議會に多數を占める恐れはないのだから、自分達は、新聞雜誌などで新しい進んだ思想らしく說かれて、現代の知識階級の流行となつてゐる主義の所有者たる先生に一票を投じて、現代的良心の滿足を得、先生の當選の報を新聞に讀んだ時、明日から土地私有禁止實行などの不安に襲はれる必要なく、普選第一回の進步せる選擧者であるといふ快感のみを味ひ得られるのではあるまいか。

全體無產者は有產者を打倒して自から有產者たる幸福を占領したいのが、人間性の至極である。人間は精神的にも物質的にも、他に優越してゐるといふことに於て自己の幸福を感じるので、婦

女子でも、萬人が萬人同じ衣服を着るやうだつたら、それがどんなに美服であつても幸福を感じないに違ひない。選擧でも、主義その者に卽しなくつても、勝敗といふことだけで、大勢が興味を覺えるではないか。

筆が横道に外れたが、ここらで、本題の菊池寛論に返ることにする。

改めて云ふ。菊池君は素直に現實を受入れる人である。現代的良心の所有者である。帝國議會の一員となつて實際の政治に參與したいといふ、在來の引込思案の文人氣質とは違つた勇猛心を起しても、民政黨へは加入しなかつた。そして、氏は、近き將來に於て、社會組織が急變して、生活が平等になつて、流行作家も贅澤が出來なくなるであらうと、素直に考へてゐるらしい。(私はさう考へてゐない。通俗的流行作家は、これからますく榮えて、浮世の榮華を極めるやうになるのではあるまいか)

封建制度が崩壞しようとも、資本主義が滅亡しようとも、生きかはり死にかはり、人間の所有慾や愛慾が、蛇の執念の如く、何等かの形に於て、人類が地上に存在する限り威を揮はないで置くものか。周圍の事情によつて文學そのものが衰頽すれば兎に角、さうでない限りは、文學者の生活はますく不平等になつて、時好に投じた作家は、ますく贅澤を味ひ得られるであらう。

菊池君は、文壇人の所有慾滿足のために相應に力を盡した人である。文藝家協會を設立された

のも、最も多く氏の力によるのであらう。戯曲の上演料が得られるやうになつたのも、何年か前から、急激に原稿料が騰貴するやうになつたのも菊池君などがその道を拓いたのではないかと思はれる。そして、氏に對して惡聲を放つ人々も、原稿料が値上されたり、上演料が取れたりすることには反對しさうでない。この頃圓本發行書店が、頻りに藝術家の作品を極度に商品扱ひしてゐるが、商品扱ひされて豫想外の利益を得る作家は大して澁面をつくつてゐないらしい。それは今日の作家が特に所有慾に目が眩みだしたのではなくつて、以前の作者は、環境が彼等をして強ひて清貧に安んぜさせるやうになつてゐたのである。

そして、菊池君は拘りなく現代に應じて行く。藝術的氣取りに捉はれないで、現代をありのままに享樂して行く。さういふ點では、育ちが育ちだけに說教者めいた安部先生よりも、現代の代表者として衆議院議員の最適任者であるかも知れない。

菊池君は、人として現代の代表者であるとともに、作家としても現文壇の代表者である。この頃盛んに宣傳されてゐる新潮社の「長篇小說集」でも、春陽堂の「戯曲全集」でも、先づその第一回配本に菊池寛集を撰んでゐるのによつても、氏が現代の代表的作家として世間から認められてゐることが察せられる。

私は、今度、氏の長篇通俗小說「新珠」を通讀した。それから、大正九年輕井澤に避暑してゐ

た頃、日々新聞で何回かを走り讀みした「眞珠夫人」と、先年「婦女界」で二三回だけ讀んだ「受難華」とを、飛び〳〵に讀み直した。そのうちで、「新珠」が作者得意の作ではないかと思はれる。

しかし、現代の文壇に跋扈してゐる所謂通俗小説なるものを、殆んど一つも讀んだことのなかつた私は、「新珠」一巻を讀むにも苦しい忍耐を要した。老いて、少女愛玩の小説に親しむことの如何に難きかを知つた。

それでは、拙劣な作品であるかと云ふと、決してさうではない。私などは無論かういふものは、書かうたつて書けないだらうし、他の知名な通俗作家達の作品の中にも、このくらゐなものは、さう手易く見つからないのではあるまいかと、私はまだ廣く讀まないさきから豫想してゐる。

通俗的見地から批判すると、「新珠」は、用意周到を極めた作品である。日本畫の大家の未亡人が、子女の不名譽な姙娠についても、さして心を勞しないで、相手の男を勝手に出入させたり、姉娘の行方不明を一年もほつちらかして平氣でゐたり、ことに、良家の三人の姉妹が、藝者か娼妓かの如く、日常の仕事のやうに、互ひに色戀の競爭をしたり、色つぽい話を、姉妹同志で臆面もなくし合つたりするなんか、私には不可解な世界として映ずるのであるが、ここらが頭腦未發達な婦女子の讀物たる所以であらうと、讓歩して見ると、全篇の構圖、人物の配置、會話の呼吸など、用意周到を極めてゐる　三人の姉妹はそれ〴〵に性格を異にして、中心の男性たる不良青

年に對する態度が順々に變つて行くところなんか、思ひつき妙を得て、年少の讀者を釣つて行くのであらう。モウパッサンなんかは、かういふ世相の描寫は手に入つたもので、短篇では、伊太利か何處かへ旅した蕩兒が、最初娘のうちの年上の女を手に入れ、その次の旅には次の女を誘惑し、まだ一人若いのが殘つてゐると、ひそかに樂んでゐる氣持がスッキリと書かれてあつたが「新珠」には、不良青年に配するに、ある殉情の男を以てしてゐる。婦女子の讀者はかうでなければ、滿足しないのであらう。

私は、讀みながら、數十年前に讀んだ「魔風戀風」や「青春」を思ひ出して、時代の相違を考へた。樂々と書きこなして、ギゴチないところのないのは、「新珠」の方が如上の二長篇に傑れてゐる。風葉の「青春」のうち「あなたは天才だわ」と、女に褒められて、「僕が天才？」と、男が目を見張るところなんか、私は若い頃に讀んでさへ、胸の惡くなるくらゐいや味に感じたのであつたが、「新珠」では、いや味になりさうなところが、割合にすつきりと書き流されてゐる。

現代兒菊池君は、現代の若い女性の喜びさうなことをよく知つてゐて、よくそれを書き現はしてゐる。しかし、空々しい筆や皮肉な筆を用ひないで、熱心に書いてゐる。「ぢや、つまりお姉さまのおつしやることは、女子教育家などが云つてゐることゝ同じね。つまり處女時代の貞操を尊重せよと云ふことね。ありがたう。お姉さまのお言葉を有難く聽いて置くわ。でも、妾の考へは少

し違つてよ。妾、本當に愛する人が出來て、またその人が妾を、本當に愛してゐて呉れるなら妾凡てを捧げるつもりよ。妾、お姉さまにそれだけは云つて置きたいわ」

「魔風戀風」や「青春」には見つからなかつた臺詞であつて、現代の一部の若い婦女子の拍手喝采を得るところである。

「恥しいなんて、生涯の大事だわ。羞恥のために生涯の大事をあやまるなんて、そりや舊式の日本婦人のことよ」

「女性全體から選ばれて、色魔的な男性を懲す選手になつたつもりでゐますの」

その他、さま〴〵な、現代の若い女性の拍手を促すやうな臺詞が散亂してゐる。

しからば、私のやうな現代女性について知るところの少ないものは、「新珠」を讀んで、大に啓發されたであらうかと考へるのに、「今の婦女子はかういふ小說を愛讀してゐる」といふ點で、現代の女性の心理が想像されるばかりで、女性そのものの本態や人生の眞相については、さして得るところがなかつた。こんなに長つたらしくなくつて、從つて時間を浪費しないで讀み得られた同じ作者の幾つかの短篇小說や戲曲ほどの感銘は得られなかつた。

「人間の業は、はてしなく巡轉するものである。人に負はせた苦しみは、いつの間にか自分の身に巡轉して來る」など、作者の人生に向つた觀察は、正しくつても、筆が皮相を撫で、深く抉つ

たところはなささうである。私をして倦怠を覚えさせるほどに長つたらしい癖に、姉妹の嫉妬煩悶が、少しも熱火を帯びて現はれてゐない。上すべりの綺麗事に過ぎぬ感じがある。これは、婦女子を喜ばせるためにわざとさういふ筆使ひをしたのではなくつて、作者自身の心境がさうなのではあるまいか。

しかし、現代の才人である菊池君の筆は、さすがに他の多くの作家の如く鈍昧でない。「新珠」のうちにも、清新な形容語や清新な警句がところ〴〵に目に觸れるのである。

「眞珠夫人」は熟讀しないから、充分な批評は出來ないが、この妖婦振りはひどく表面的のやうに感ぜられた。妖婦と云へば、有島君の「或女」は壓力の強い作品である。私は、去年輕井澤でこの長篇を讀耽つて感歎した。かくてこそ長篇の長篇たる價値があるのである。

昔、國木田獨歩が「破戒」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚で書く」と傲語した。これは例の空氣燄であつたが、小說でも何でも、短かくつて濟むものなら短いのに越したことはないのである。そこには議論の餘地のない譯である。……（私が「新珠」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚のうちに書き込んで見せる」と自惚れてゐるかの如く邪推する勿れ、私は、はじめから「新珠」のやうなものは書けないと降參してゐる）

何年か前、武林無想庵君が、最初の洋行から歸つて來て二の宮に假寓してゐた時分、一日私を訪ねて來て、歐洲の狀況を話して呉れたが、彼れは、フランスの現文壇の風潮は、性慾の極端な描寫とコンミニズムの主張であると云つてゐた。そして、彼れは自分でその異國の流行にかぶれて、眞似をする氣になつたのか、頻りに、〇〇付きでなければ誌上に掲載されないやうな小說を、得意になつて書きなぐり、かたはら、コンミニズムの信者氣取りの雜文を書き散らしてゐた。ところが、再度の洋行によつて、現實の刺戟を實感してからは、態度が一變して、西洋の眞似事でない自己の眞實を吐露しなければならなくなつた。人間は聞き噛りの思想や流行の主義から脫却した時に、自己の持つてゐる人間本來の姿が力づよくあらはれるのである。

今「婦女界」三月號を開けて見ると、菊池君は、その戀愛觀のうちに、「人生戀すれば憂患多し戀ひせざるも亦憂患多し」と、それを痛切に感じてゐるらしく書いてゐる。どちらに轉んだつて憂患の多い人生である。それならば、戀愛に向つてでも戰鬪に向つても、その渦中に投じて歡喜でも憂患でも、心にふりかゝつて來るものを味ふのが、男子の面目であるかも知れない。現日本の文學者のうちでは菊池君などに最も多くその意味がありさうである。可なりの戰鬪性を有し、享樂慾に富み、親分肌もあり、樂天的分子も可なりに持つてゐる。先日選擧の際、第一回の政見

發表演說の終つたあと、銀座のカフエー「エスキモー」で、私は菊池山本兩氏と座をまじへて紅茶を飲んだが、その時、山本有三君が傍からくよ〳〵氣をつかつて選擧の結果を悲觀してゐるのに引かへ、菊池君は悠然として安んじてゐた。これぽつちの度胸でも今の文壇人には珍らしい。

代議士には落選しても、これだけの世界的聲望を背負つてゐる菊池君には、何か目醒ましいことがやれさうである。またやるのは今のうちだ。世俗の聲望は朝夕を計られず……

菊池君は、京都で上田博士の指導を受けた人であるに關はらず、最初から純藝術の道を進むやうな素質は持つてゐなかつた。ショウの感化を受けたと、自から云つてゐるやうに俗界に關心しないでゐられないのである。それが、過去十年、菊池君が世に出て以來の時世に適應してゐた。かういふ世間的興味を多く持つた文人が勢ひを得るやうな時代になつてゐたのだ。も少し早かつたなら、菊池君なども、他の多くの赤門出身文士のやうに、數年にして文筆を投じて學校の先生になつたかも知れなかつた。も少し遲かつたから、菊池君は初めから社會運動でもやるかも知れない。氏は運よくこの十年の時代の調子に乘つたがために、自己の文學的天分を過分に燦かすことが出來た。

餘論

以上の雜感を書き終つたあとで、餘暇があつたので、新潮社發行の「現代小說全集」中の「菊池寬集」を取出して、ところ〴〵讀んだ。一度讀んだことのあるものばかりであるが、氏の作品は頭を疲らせないでスラ〳〵と讀める。現代に持囃された原因は、かういふ特徵があるためであらう。少なくも「新珠」や「受難華」を讀む時のやうな退屈を、私は感じないでゐられた。「無名作家の日記」「葬式に行かぬ譯」「友と友との間」など、文壇へ出るまでの苦心が如實に書かれてゐるので面白い。そして、かういふ初期の物には作者の人のよさがよく現はれてゐる。かういふ作品に有り勝ちないやみがない。

無論これ等の作品は、藝術としてさう傑れたものではないが、兎に角、事實の記錄であるから見飽がしないのである。「藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は、此要求を充たすに足りない」と、森鷗外が云つてゐる通り、單なる自己の日常生活の記錄たるに留まつてゐる小說は、我々の藝術慾を滿たすに足りないのであるが、しかし貧弱な空想で捏ち上げられた小說よりは、遙かに讀むに價してゐる。私は、この頃ある社の依賴により、懸賞募集小說の選拔をしてゐるが、實際の記錄らしい小說は、いかに小說が幼稚であつても、世の中にはかういふことがあるのかと、世相について一つ學んだ感じがされるのであるが、幼稚な頭で文章や趣向ばかり凝つたつもりの、所謂「創作」なるものは、讀むに堪へないのである。書く方も讀む

方も時間潰しで、かういふ創作は全く無用な存在のやうに思はれる。……私は投書を讀んで、今更のやうにさう感じてゐるが、菊池君の如き現代最大の流行作家の作品を讀んでさへ、さういふ感じのしないことはない。

故上田敏氏のことが、菊池君の初期の作品には屢々現はれてゐるが、「友と友との間」のある一節に、「あの人はほんたうに偉かつたでせうかね」との質問に對して、松木さん（夏目漱石氏）は暫らく考へてから、

「さうだね。博く知つてゐた事は、確に博く知つてゐたね。が、その博く渉つて居るある部分を押して行くと、それがどれ位深いかは、一寸問題だがね」と云つてゐる。

漱石氏の評語ほどあつて、上田氏を評して要を得てゐる。間口の廣い人が奥行の淺いのは當然である。上田氏は學問の深い人ではなかつたであらう。しかし今私は此一節を讀みながら、ふと考へた。……漱石氏は敏氏よりも、藝術についてどれほど深く入つてゐたのであらうか。ある特殊の人物や時代について一生を捧げるくらゐに深く研究することは專門的學者の態度であらうが自己の心で藝術を味得するのを最高の目的とするためには、一所に停滯し、部分的に拘泥する必要はないのである。上田氏だつて西歐の詩歌の鑑賞に於ては、夏目氏に負けなかつたであらう。

西洋の詩の味ひは、言語の關係から、日本人には分らないと、芥川君なども云つてゐるが、し

かし、分る分らないは程度問題である。私などは西洋の詩を愛讀してゐる。日本の和歌や俳句にも勝つた興味を感じることもある。私はそれでいいと思つてゐる。私は、教壇に立つて外國の詩を講じようとする自信はない。しかし、一知半解にしろ、自分だけで興味を感じ、自分の心の糧としてゐるのは差支えないと思つてゐる。はじめから分らないと極めて、強ひて外國の詩に目をつぶる必要はないと思つてゐる。

短かくて取つつき易きためでもあるが、私は、この頃は、外國のいろ〳〵な詩人のものをあれやこれやと讀みかじつて、寂寥たる心境の慰めとしてゐるので、かういふことに言及した。

（昭和三年三月）

永井荷風論

一

谷崎君が「中央公論」に連載してゐた「私の見た大阪及び大阪人」は、さすがに觀察が適切である。關東人と關西人との氣質の相違は、昔から世上周知の事で、谷崎君によつて新たに發見されたのではないが、年中行事や、日常の生活振りについて、東西の相違を說き來るところに、藝術家ならでは言ひ現はし得ない妙味がある。世路の經驗に老熟してゐるこの論者は、關東人が一概に關西氣質を侮蔑するやうな淺薄な態度を採つてゐない。それで、三月號所載の分をも、私は首尾を通じて面白く讀んだがそのうちで、「敗殘の江戸つ兒」に就て說かれてゐるところが、特に私の心に引つかゝつたので、そこだけは、再び讀返して考へた。「東京の下町には、所謂、敗殘の江戸つ兒と云ふ型に當てはまる老人がしばしばある。……正直で潔癖でおつくふがり屋で、名利に淡く、人みしりが强く、お世辭を云ふことが大嫌ひで、世渡りがまづく、だから商賣などをしても他國者の押しの强いのとはとても太刀打ちすることが出來ない。そんな工合で、親讓りの財産もすつてしまひ、老境に及んでは孫子や親類の厄介になるより外ないが、當人はそれをあながち悲觀しない。……ハタから見ると何を樂しみに生きてゐるのか分らないと云ひたいが、當人は天成の樂天家であるから、決して世を拗ねたり他人の幸福を嫉んだりしない。……さういふ老人が、東京の

古い家なら、一家一門の間に必ず一人ぐらゐはゐるもので、……惡くいへば生存競爭の落伍者であつて、彼等が落伍したのはぐうたらで、見やうによつては市井の仙人とでも云ふべき味があり彼等に接すると、大悟徹底した禪僧などに共通な光風霽月の感じを受けることがある」と、谷崎君は、さういふタイプの人間を說明し、大阪ではそんな老人に出遇はないし、人に聞いてみても、さういふ性格は關西には甚だ稀だと云つてゐると附言して、そこにも東西の氣風の際立つた相違を認めて、犀利な觀察と論評の筆を進めてゐる。だが、私はここに疑惑を起したのだ。私は、中國の田舍に生れ、明治十年代から二十年代の前半にかけて田舍で生長したのであるが、谷崎君の說いてゐる種類の老人は、甚だ稀れなどころか、ザラにあつたやうに思ひ出されるのである。維新の大變革によつて敗殘の境地へ追ひ詰められた者の多かつたのは、江戸も田舍も同じことであつたが、その「敗殘の田舍つぺー」のなかには、諦めよく呑氣に餘生を樂んだ者も少くなかつた。田舍つぺーだから、齒切れのいい都會語は使へず、身裝りも野暮つたかつたが、しかし、運命に諦めをつけてゐた心理は同じであつたと思はれる。外形は泥くさくつても胸裡に光風霽月を宿してゐたことは、江戸つ兒や禪僧と同じだつたと思はれる。今日はさういふ氣持の老人は東西を通じて少なくなつてゐるだらうが、昔は關西にもたしかにあつたのだ。

外國人のうちには、老境に達して落伍しても、天を怨まず人を嫉まず、與へられた境遇を樂しむ

者は甚だ稀なやうだが、日本では古來都會を通じて、さういふ氣持の老人が少なくなかつた。傳統的日本氣質の現はれであつて、この消極的に天命に安んじる態度には、我々は懷かしみを覺えさせられるのだ。バルザックなどの小說に、不幸な運命に安んじてゐる男女が屢々現はれてゐるが彼等は、神に手賴り、確實に來世の幸福を豫想してゐるので、彼等から宗教心を奪つたら、その心境は甚だ落寞たるものとなるのだ。谷崎氏の說いてゐる「敗殘兒」のやうな單純で、そして趣味のある樂天家とは異つてゐる。國木田獨歩の「二老人」のなかの石井翁の如きは、さういふ日本の樂天家型の一つの實例として擧げてもいゝ。森鷗外の「高瀨舟」の主人公の如きもその型の一人であつて、その光風霽月の心境には、著者の感心してゐるやうに我々も感心させられる。永井荷風氏の小說中には、ことにこの種類の人物が、作者の好意と同情に包まれて描かれてゐる。「腕くらべ」の吳山や「隅田川」の藤月は、その代表的人物である。東洋流のあきらめを心の底に有つてゐる人間は、明治以來の作品のうちにも、その類はなはだ多く、鷗外の他の歷史小說にも露伴の小說にも現はれてゐるし、漱石の小說にもその影を見せてゐる。だが、私は、荷風作中の落伍者的人物、「敗殘の江戶つ兒」的人物に、最も多くの興味を寄せてゐる。あまりにマンネリズムに墮してゐると思ひながら、そこにある種の愛着を私は覺えてゐる。

二

私は「歡樂」や「隅田川」を讀んで以來、荷風氏の筆に成つたものは、殆んど全部を讀み盡してゐる。二度三度繰返して讀んだものも少なくない。「西遊日記抄」「フランス物語」「アメリカ物語」などは、今でもをり〳〵拔讀みして、この作者に自分の心を托して、青春の境地を窺ふことを喜んでゐる。ファウストがメフィストに誘はれて、未知の社會を覗きに行くやうなものである。私は、荷風氏には偶然會つて、二三度他所行の話をしたことがあるだけで、深い交際をしたことはないが、そのために、却つて氏の作品を縱橫自在に翫味することが出來るやうに思はれる。作品を通しての荷風氏は、明治以來の作家中、私の頭腦に最も深く印象されてゐる作家の一人である。永井荷風近松秋江小山內薰の三人は、鷗外漱石藤村の文學に對する時とは違つた親しみをもつて私の心に浮ぶのである。彼等三人が非常に傑れた文學者であるかどうかは、別に研究を要するとして、彼等の感想や行動が私に取つては面白いのである。その風格が面白いのだ。私はこの三人から學ぶところが少なくなかつた。

さて、「フランス物語」の結末近いところ、「ボートセット」の條下に、沙漠の眞只中に淋しく勇ましく翻つてゐる土耳古の國旗を認めて、青年らしい感激に陶醉し、熱誠を籠めてその國旗に敬

禮し、自分は土耳古を尊敬してゐる。土耳古はすくなくとも僞善の國ではない。西洋諸國の仲間入がしたいといふ輕薄な虚榮心に驅られて僞文明の體面をつくろつてゐる僞善の國ではない」と云つてゐる。土耳古人は歐洲人に卑められてゐる國人であつて、陰險殘忍獰猛神祕の亞細亞人氣質を、歐洲人は先づ土耳古に於て認め、近年に及んで次第に東方の國々に於ても認めるやうになつたのだが、フランス物語の著者は、自分の藝術的空想を恣まゝにして、フランス、スペインなどの歐洲を極度に讃美するとともに、蒙昧を以つて至福とする回教の本國をも讃美してゐる。自國を咒咀し現代を蔑視し、過去を憧憬し、異鄉を地上天國視するのは、東西の文學者に有り勝ちのことなのだが、明治以來の文學者では、荷風氏ほどその感じに沒頭して、そこに自己の藝術境地を開拓してゐる作家はない。しかし、この作者は、社會に迫害され故國に容れられなくなつた人ではなく、文壇人としても甚だ幸運であつたのだ。だから、その咒咀の聲にしても人生絶望の述懷にしても、痛切を缺き、どうかすると洒落つ氣を帶びて來るのだが、そこに微溫な日本趣味と融合ふところがあつて、讀者に喜ばれたのである。泉鏡花氏の小說には强權に對する反抗、弱者に對する同情が基調になつてゐる點で、一部の讀者に喜ばれてゐるらしいが、私はさういふ鏡花氏程度の倫理觀に心が惹かれたことはなかつた。里見弴氏の謂ふところの「まごゝろ」にも心を打たれたことはなかつた。荷風氏の藝術には、正統的にも變態的にも、根底に倫理觀のないと

ころに、私は興味を有つてゐる。荷風集は、小説か感想錄か、紛らはしいやうな作品に富んでゐて、一種の道德觀見たいなことが頻りに說かれてゐるが、それは私の讀み方によると、一つの戲れである。詭辯である。氏の藝術の根底になつてゐるとは思はれない。氏自身でも「要するに厭世的なるかゝる詭辯的精神の傾向は、破壞的なるロマンチズムの主張から生じた一種の病弊であることはよく承知してゐる」と云つてゐるくらゐだ。岩野泡鳴はデカダン主義を捧持してゐたが、彼相應の强烈なる倫理觀がその作品を貫いてゐた。荷風氏にはそれがない。美辭麗句に富んでゐるため、やさしい情緒が述べられてゐるため、氏の文學を甘く思ふ勿れ。氏は冷嘲惡罵を絶えず試みてゐるのだ。高山樗牛は作家に向つて、文明の批評を要求したが、荷風氏ほど現代日本の文明を批評をしたものはなかつた。江戸の藝術や風俗を追慕しては現代を侮蔑し、西洋の生活や藝術に心醉しては現代を擯斥（ひんせき）するのが例となつてゐるので、その文明批評がどこまで當を得てゐるか疑はしいのだが、自己の存在してゐる今日に對して一圖に不平を抱いてゐる有樣が、執拗にさへ思はれる。そこに憎惡の藝術と云つたやうなところがあつて、私が荷風集を愛讀する所以もそこにあるのだ。「荷風は紅葉と同じことぢやないか」と、早くから泡鳴は云つてゐた。武林無想庵の巴里にての氣燄錄のなかに、辻潤氏との會話を叙して、荷風の江戸趣味なんか本物ぢやない、江戸つ兒はあんなキザないやみなものぢやないと哂つてゐた。これ等の批評も適中してゐないこ

とはないが、私は紅葉や綠雨や鏡花の小說や隨筆に現はれてゐる江戸趣味らしいものに、あまり興味を感じないのに關はらず、彼等三作者と同系統と見られる荷風氏の作品には特異の味はひを覺えてゐる。文明批評として綠雨のやうに瑣末な點に止つてゐないで、もつと核心に向つて進んでゐる。そして、以前荷風氏の輩みに倣つて、江戸趣味臭い享樂を試みてゐた年少文學者の淺薄さを思ひ出すのである。

古きを溫ねて新しきを知らんために、今、私は荷風氏の舊作から、自分の好みに適つた數篇を選擇して讀返した。「新歸朝者日記」と「監獄署の裏」。この二つは二十餘年前の作品であるが、私には、今日の雜誌小說よりも清新な感じがした。あの時分には左程に思はなかつたものだが、今度は共鳴されるところが、少くなかつた。老いて却つて靑春の書に共鳴するのだから妙だ。「監獄署の裏」の作者は、歸朝の汽船が神戸に着いた時、父の命によつて出迎へに來た弟の顏を一目見ると、「同じ血から生れて、自分とよく似てゐるその顏を見ると、何とも云へない殘酷な感激に迫られました」と云つてゐる。「あゝ、人間が血族の關係ほど重苦しく、不快極まるものは無い。親友にしろ、戀人にしろ、妻にしろ、その關係は、如何に餘儀なくとも、堅くとも、苦しくとも、それは自己が一度意識して結んだものです。然るに親兄弟の關係ばかりは先天的にどんな事をしても斷ち得ないものです。斷ち得たにしても堪へがたい良心の苦痛が殘ります。實に因果です」

と云つてゐる。私の云はんと欲することが云はれてゐるのだ。しかし、この作者自身は、爾來二十餘年の世路の辛慘を經た今日、なほかういふ考へを有つてゐるであらうか。

一語學の教師にならうか。いや、私は到底心に安んじて教鞭を把ることは出來ない。フランス語ならば、私よりもフランス人の方が更によくフランス語を知つてゐる」「雜誌記者にならうか。いや、私は自から立つて世に叫ばうとするほど、社會の發達人類の幸福のために夜の目も眠らず心配してゐるのではない」と云つてゐるなんかは、生活に餘裕のある人間にして初めて云ひ得ることで、そんなことを考へてゐた日には、誰れだつてこの辛い世に生きて行けないのであるが、その言葉は眞實である。私なども、さういふ消極的の責任感は絕えず有つて來たのである。生きるためには、知らざることも知つた顏して、今日となつたのだが、世上を見てゐると、誰れだつてさうなのだ。「知らざるを知らずとせよ」といふ孔子の教へは、固守しがたいのである。私は、フランス文學でもイギリス文學でも、自信のある態度で教壇に立つて教へてゐる人々も、時々は心に疚しい思ひをしてゐるのではないかと疑つてゐる。新聞雜誌の論文や記事が、その場その場の風次第であるばかりでなく、古來の哲人賢者の言說だつて、我々が心魂を打込んで信頼すべきものであらうかと、私は疑つてゐるが、荷風氏の作品からも、その氣持は汲み取れるのだ。氏の作品には、人間の進歩の希望を早くから否定してゐる。そして「家族の口はまるで飯を食ふのと、生

活難を方針なく喫き續ける爲めにしか出來てゐない」見窄らしい現代生活をあさましく思つてゐる。そのあさましい生活狀態を、何とかして改革して、萬人が萬人とも毎日面白可笑しく生活されるやうにしたいといふのが、「賢明なる維新の改革者」や、現今の社會運動家などの熱望したところであつたらしいが、青年期の荷風氏は、「サハラの沙漠に稻の田を作らうと企てる」のと同樣に思つてゐる。絶望感は更に歩を進めて、「永世自然の迫害と戰つてゐる人間に向つて、神に謝せよ、神の光榮を歌へなどゝ、西洋人は實に妙な宗教を信じたものだ」とも云つてゐる。「新歸朝者日記」に散見する現代咀咒の說には、今なほ同感者が少なくないだらう。

しかし、如何に絶望哲學を聽かされて同感しても、人間は絶望しないものである。個人は絶望しても人類は絶望しないで繁殖を續けてゐる。現世が不幸であるなら來世の幸福を夢見て慰めようと企てたりした。モウパッサンや荷風氏に卑まれた種類の生活者も、それ〴〵に生きることの樂しみを覺えてゐたにちがひない。私は、歸朝の途次、エヂプトの沙漠の一端を自動車で通過した時、雄大な眺めに感動するよりも、そこらの土人の生活の、生きるに甲斐なき悲慘さを想像した。暑さが烈しいためか、そこらにゐた跣足の少年少女は、顏が干涸らびて若いうちから木乃伊になつてゐるやうだつた。しかし、悲慘に思ふのは、局外者の妄想で、當人達はそれ相應に浮世を享樂してゐるのであらう。純理の上で人生に絶望してゐる筈の人間も、水の泡のやうな歡樂でも

見つけて、それに誤魔化されながら生きつゞけるものなので、厭世家のショウペンハウエルは、快樂主義のエピキュラスよりも長命を貪つた。「カイン」とともに「ドンヂャン」とともに、あるひはわが荷風氏とゝもに、「昔から人間の守るべきものと定められた教に服することが出來ず、遂に潔く天罰應報と相爭ひ、相對峙しようと思つた」バイロンは、社會に反抗し神に反抗し、つひにギリシャの獨立戰爭に加はつて病沒したのであつたが、狂的激情をもつてゐた彼れは、やうやくそこに死所を、求めたのであつた。地上の强權に反抗したつて、或は天上の全智全能全勇の神に反抗したつて、龍車に向ふ蟷螂の斧で、要するに甲斐ない仕業であり、自由獨立と云つたやうな人聞きのいゝ名目の下に働くのも野暮なことのやうに、我々の東洋趣味江戸つ兒趣味からは、考へられないことはないが、でも、バイロンの奴、ギリシャの文學美術には年少の頃から心醉してゐたのだから、その國のために死ぬるのなら、死ぬる張合ひがあつたのであらう。美人と道連れなら死んでもいゝと云ふ譯なのだ。

「新歸朝者の日記」が二十餘年前、中央公論に揭げられた時、海外留學の經驗を有つてゐた某大學教授が、「私達も歸朝當時にはこんな感じを持つてゐました」と云つてゐたが、今日の海外漫遊者も歸朝直後にはこの「日記」にあるやうな感じを起されるのである。明治初期の小說を見ると、「パリの花ロンドンの月」を享樂して新知識を蓄積して歸つた人物を羨望と敬意をもつて取扱つ

てゐて、今讀むと滑稽であるが、荷風氏の「日記」にも「彼等は洋行した人とさへ云へば、希臘の太古から幾千年たつた今日迄の何から何までを、僅か數年間に知り盡してしまつた人のやうに思ふ」と云つてゐる。だが、物質文明は、道路でも建築でも、服裝でも食物でも、兎に角歐米のものを取入れて、年とともに自國に適應させるやうになつたが、少なくも文學に於ては、歐洲の文學を理解し、その精粹を充分に味得することは、今日になつてもなほ困難なので、荷風氏のやうな鑑賞力の傑れた作家でさへ、その創作には、フランスの匂ひは乏しくして、江戸の文學の畑に育つたやうな感じが濃厚なのである。この頃ケーベル博士の感想錄を讀むと、博士は同僚の大學教授のうち、外國で修業した日本の教授連にあまり重きを置かず、却つて漢學者根本通明とか、國文學者某とかを尊敬して、本物の學者らしい骨法を備へてゐる。と云つてゐる。外人だからさう思ふのは當然だが、日本人が洋服を着てピッタリ身につかないやうに、外國の學問もまだ借り物らしいところがあつたのも事實だ。明治大正の文學史を回顧しても、我々は中途半ぱの文學境地に彷徨してゐたやうな感じがする。自然主義文學がその意氣込みほどに效果に富んだ文學を產出しないで讀者に飽かれてゐた時に、荷風氏の江戸趣味文學が、古臭を帶びてゐるにしろ、過分に歡迎されたのも、當然の順序が辿られたやうなものであつた。文學で名を成すのも時の廻り合せがいゝからである。作家の作風や態度が時代の感化を受けて動搖するのは當然であるが、作家自

身が周圍の見物を眼中に置いて、わざと奇矯な態度を裝ふこともあるのだ。不遇な綠雨にもさういふところがあつた。幸運な荷風にもさういふところがあつた。あの頃青年文學者の集會場所として有名だつた、「鴻の巢」といふレストーランへ、ある日獨りで食事に行つた時、そこの主人が私に寄せ書帳を見せたが、諸氏の落書のうち、私が今なほ記憶してゐるのは、荷風氏のそれである。「自然主義の徒、荷風を誅せんとす」（もつとうまい言葉であつたやうに思はれるが、正確に記憶してゐない）といふ意味であつた。自然派系統の批評家から同氏の作品は多少攻撃されてゐたにしても、私などは「歡樂」や「隅田川」などの新作を愛誦してゐた。漱石の「草枕」などより一層強く心を惹かれてゐた。內田魯庵氏の如きも、荷風の新作をドストエフスキーなど歐洲の大文豪の作品と同樣に取扱ひ、感激を籠めた文章で、新代の天才を讃美した評論を、花袋氏主宰の「文章世界」に寄稿したほどであつた。さういふ作家としての得意時代に、わざと「自然主義者どもが寄つてたかつて荷風を倒さんとしてゐる」などゝ云つて、脂下（やにさが）つてゐるのが、人間得意の一變相として、私には可笑しかつた。そして、荷風氏の作品は、作家のさういふ心理狀態の下にわざと書き曲げられた傾向がないでもなかつた。現實描寫よりも出鱈目な空想がいゝと云つたやうなことをわざと云つて見たりしたのである。

全體「フランス、アメリカの物語」「西遊日記抄」などには、青年らしい熱情が溢れてゐて潑剌

としてゐるのに、歸朝後の創作は隱居じみたところが多くなつたのは、日本現代の生活の蕪雜俗惡に絕望したためであらうか。さういふ見方を强調して、一人の文人の生涯を觀察するのは、文學史家や傳記學者の常套であるが、荷風氏の場合など、それ以外に、自分の特色として持囃された趣味に自分でかぶれ過ぎたところもあるのだ。トルストイがモウパッサンについて云つた批評は、ある種の流行作家の通弊に適中してゐるので、ある主義や作風によつて名聲を得ると、自分でそれに捉はれて强ひてその態度に拘泥するやうになり勝ちのものなのだ。多くの作家が、老いて自分の文學生涯を回顧すると、それに氣のつくことがあるにちがひない。

三

「歡樂」や「見果てぬ夢」や、長篇「冷笑」は、作者が三十を越して間もない述作であるのに、米佛の物語とはちがつて、作者が老境に達したやうな口吻に富んでゐる。そして、客觀的描寫に乏しくて、主感的感想に滿ちてゐるので、連讀すると、讀者は單調を覺えるのだ。漱石の才をもつてしても、はじめのうちの作品には、主觀的感想錄のきらひがあり、後年に及んで、世相人事の描寫に客觀性を帶びるやうになつた。荷風氏の作品も、「腕くらべ」「おかめ笹」に達して、渾然たる小說の體をなした。「榎物語」や「つゆのあとさき」のやうな最近の作品にも、筆に生彩を

缺いても客觀性は豐かになつてゐる。そして、ある種の女性描寫をこの作者が最も得意としてゐたことは小說讀者に周ねく知られてゐた。「實際今の世の中に、この珍々先生程藝者の好きな人、賤業婦の病的美に對して、賞讃の辭を惜しまない人はあるまい」と云てゐるほどあつて、荷風氏の作中の女性は、大抵藝者或ひは、藝者類似の者であるが、しかし、實際よく注意して見ると、それ等の女性の多くは、型の如くで、そんなに生氣がないのだ。日本の遊蕩文學としてはこの作家のが第一位を占めてゐる譯だが、遊蕩場の外面描寫は巧みであり、遊蕩哲學は委曲をつくして研究されてあり、さま〴〵な藝者觀も集大成されてゐるにかゝはらず、遊蕩その物が如實に描かれてゐるところが案外少ないのである。「道樂の面白味と云つちや少し變ですが、私は道樂をしない先から、その面白さ樂しさ果敢なさを、あまり誇張して考へ過ぎてゐたんですね。つまり實際が豫想ほどでないことを知つたのです」と、「新橋夜話」一のある人物の云つてゐるのは、必ずしも作者の實感であるとは言難いけれども、少なくも作品を通じて見たところでは、「面白さ樂しさ」に惑溺した實際の姿はあまり現はれてゐないのだ。泉鏡花氏の作品にもさういふものは出てゐない。小山內薰氏の「大川端」の如きは、藝者遊び入門と云つた程度である。近松秋江氏の過去の小說こそ、それが著るしく主觀的であり、偏見に富んでゐるにかゝはらず、遊蕩兒の心境を描破して堂に入つたものである。岩野泡鳴の小說にも、無雜な描寫のうちに、遊蕩の境地が底深く現はれ

てゐるところがある。遊蕩といふものも、人間性の一つの重要な現はれだとすると、江戸の通人の洒落な遊蕩觀なんかは、遊蕩の眞相を洞破してゐるのではないに違ひない。音樂について何の修養もない私などでも、尺八や三絃の音を聞くと、「われながら解らぬ神祕な感動を覺える」のは祖先以來の傳統的趣味が心に宿つてゐるためなので、「遊蕩」についても、日本流に藝術化した傳統的趣味があつて、自由奔放であるべき筈の蕩兒もそれに捉へられるのである。「冷笑」や「腕くらべ」を讀んでも、傳統に捉へられたる遊蕩振りの描寫によく接するのだ。

「夜明け前」には、上代追慕の熱情が現はれてゐて、そこに日本人としての傳統の力が見られるが、今日のファシズムの氣運にしても、日本人の心に潛んでゐたものが、表に現はれたので、そこに外來思想の模倣とはちがつた強みがあるのだ。「余常に伊勢物語を以て國文中の眞髓となし、芭蕉と蜀山人の吟咏を以て江戸文學の精粹なりとせり」と、荷風氏が云つてゐるのは、滑稽諧謔をもつて、傳統的日本の趣味と見做したためなので、氏は「南北朝以來戰亂永く相つぎ、人心諸行無常を觀ずること從つて深かりしが、厭世思想は、漸次時代の修養を經て、まづ洒脫となり、次いで滑稽諧謔に慰安を求めんとするに至れり」と、狂歌俳諧のたぐひが、日本人の生活と必然の關係を有つてゐた所以を說明してゐる。日本の精神や趣味に傳統的の意味を求めるのも、人によつてさまざまである。だが、日本在來の文學演劇などにファシズム鼓吹の傾向が濃厚であつた

のは事實なので、それに對立して、滑稽諧謔趣味が榮えてゐたのだ。これ等二つの文學傾向は、明治以來、文壇の表面には現はれなかつたが、民衆にはこの種類の文學は喜ばれてゐた。

ところで、荷風氏の滑稽諧謔趣味には、芭蕉や蜀山人、その他の江戸の通人のそれとは異つて意識的にも無意識的にも、人間憎惡の感じ——現代に生きることの不愉快さがいたる所に露出してゐる。世の中を詰らなさうに云つてゐながら、却つて世を享樂してゐる者もあり、のべつに歡樂を唄ひながら、歡樂の眞諦を解しない者もある。文學といふものは、森鷗外の戲曲「假面」に現はされてゐるやうに、作者自身の假面に過ぎないやうなことも多い。「達人の主義はその主義を發表せずにつまり自己を晦ましてゐる手段を指すんぢやないか」と、「冷笑」の中の、貴族的孤立主義の老人について云はれてゐるが、作者は、かういふ型の老人を、屢々作中に取入れて、蘿月や吳山のやうな、敗殘の江戸つ兒的人物に對すると同樣の敬意と同感を寄せてゐる。どちらも、マンネリズムに墮してゐないこともないが、人の世に——ことに日本の現代に——處する究極の態度をここに置いてゐるのを面白いと思つてゐる。作者自身はその心境に達してゐるのではなく、またその心境に達してゐないからこそ、いろ〳〵な通俗味豐かな小說が書いてゐられるのだが、「歡樂」の作者も、野暮つたい堅苦しい人生鑑賞の境地を保持してゐることに、私は心を惹かれるのである。「日本のやうな道德的思想と社會的制度の下には是非ともあゝ云ふ人格が出來なけ

ればならぬ」「全體自己の信念とか主義とか云ふものは、他の人に發表して說くのぢやない、自分を守る城壁にして置けばいゝ」といふ處世觀は、東洋では昔から哲人保身の術として云傳へられたもので、明治時代にも、思慮深きものゝ取つてゐた態度であり、今日の時世に於ても取るべき態度であるらしい。鷗外の「假面」によつて見ると、西洋に於ても、哲人保身の術は假面をかぶることにありと信じてゐる人生の達人もあるのである。

四

私は、夏目漱石の簡單な斷片的の日記集や、材料の豐富な書翰集を讀んで、明治以來最も多數に讀者に喜ばれた名聲の高かつた作者も、その實生活は平凡無味であつたらしいと想像した。それは氏が物質的に貧乏であつたためばかりではなく、生活態度が學究的であつたためだが、氏などよりも自由な、非學究的な態度を取つてゐた作家でも、その生活が、興味ある傳記の題材となるものは少かつた。それは、日本の文學者が非社會的であり隱遁的であり、或ひは强烈なる個人性を缺いてゐたためであらう。荷風氏の如きも例外ではないので、「矢筈草」や「雪かでもの記」の如き隨筆體の自敍傳を見ても、自然主義作家の平凡な自傳小說に現はれてゐる生活と、さして異なる所はないのであるが、しかし、凡庸な生活を趣味ありげに書綴る手腕は、この作者獨得の

ものである。以上三篇の如き、或ひは「日和下駄」などを讀むと、明治以來の隨筆家としても氏に及ぶものなしと思はれるが、これ等の隨筆に於ても、この作者はこの作者らしい假面を被つてゐるやうな氣がする。この假面が氏の隨筆に妙味を加へてゐるのかも知れない。厨川白村氏の隨筆も面白いが、あれは、假面を被らない剝出しの叙述であるとともに、その心境の淺薄さが感ぜられる。

「書かでもの記」は文飾されてはゐるが、この作者の文壇生活記錄であつて、明治文學史の史料となるものであるが、漱石の書翰集は一層史料價値に富んでゐる。私は、この頃この二つを合せ讀んで、史料としての新知識を得た以外に、自分だけの個人的興味を覺えた。自然主義盛んなりし頃、あるひは衰運きざしてゐた頃、この系統の作家と作品に反感を抱いてゐた作家は、漱石を中心とした一團と、鷗外、敏、荷風などの一むれであつた。あの時、漱石は、露骨には所感を發表しなかつたが、書翰集を讀むと、當時の文壇に關心をもつてゐたことがよく分る。そのをりをりの批判にはなか〳〵要を得てゐるところもある。文壇を蔑視してゐた荷風氏だつて、はじめ文壇に出るためには、可成り心を勞してゐたのである。過去の小さな文壇社會にも生存競爭はあつたのだ。そして、これ等の種類の異つてゐた筈の文學も、今日となつては、一樣にブルヂョア文學として取扱はれるのだから不思議だ。現代の日本ほど、時間の早く經過する國が世界中にあ

らうか。今過ぎ去つたばかりの昨日の事をも、全く異つた時代のやうに回想しなければならぬ事が澤山ある」と、二十年前に荷風も感歎してゐるが、その變遷の早さは、今日も以前に劣らないのである。しかし、變遷は必ずしも前進盲進だけではなくつて、前へ行つたり後へ歸つたりするものらしい。「夜明け前」に描かれてあるやうに、維新の改革は復古思想の現はれであつたが、最近の文壇にも、一時の盲進から逆戻りして、不思議なほど復古的氣分が現はれてゐるらしい。復古にもいろ〳〵あるが、古事記萬葉の精神への復古なんかとはまるでちがつた變態的な調子が、文學の評論文學の創作の上に現はれて、勢ひを得てゐるらしいのは不思議である。孤につまゝれてゐるやうな感じがする。ファシズム系統の文學は日本にも以前榮えてゐた。外國にもキップリングとかダンヌンチオとかは、さういふ男性的戰闘的作品を出して讀者を感激させた。しかし、荷風氏も云つてゐる如く、ダンヌンチオの著作を讀むと、紙面に横溢する作家の意氣甚だ豪壯なるを感じ……恰も炎天の太陽を望むが如き」ものが感じられるが、現今の日本文壇のは、さういふものとは似もつかないのである。

新聞雜誌にはその時々の世相が反射してゐる譯であり、新聞の文藝欄には、その時々の日本の代表的文學觀が掲げられて居る譯であるが、さう思つてゐると、今日の各新聞の文藝欄を讀んで我々は孤につまゝれたやうな思ひをしてばかりゐないで、そこに深遠なる意義を認めるやうに努

力しなければならぬのかも知れない。左へ向はうと右へ向はうと、今は民衆の世であると云はれてゐる。文學も民衆のための文學であると云はれてゐる。政友會が多數を得たのは、民衆が政友會の主義政策に共鳴したのださうである。夏目漱石でも「彼岸過迄」の序文に於て、狹隘なる文壇に迎へられるよりも、東西の朝日新聞の讀者に喜ばれることが、作家として遙かに快心事であるといふ意味のことを述べてゐたが、さういふ快心事を經驗しない私にでも、その氣持は想像されないことはない。時代の反逆者となるも、その反逆者が世に喝采される程度に於て反逆するのが賢者の心掛けである。

明治文學中では私の愛讀書の一つとなつてゐる荷風集を、新に讀返して、そこに現はれてゐる反抗氣分や、あり餘るほどの享樂の描寫に接しながら、嚴肅な藤村鷗外などの作品を讀んだあとの感じよりも、人生の淋しさを感じた。秋江氏の小說よりも却つて荷風氏の小說に於て、秋風蕭條たる感じが傳へられることがある。そして、生涯の經歷も作風も全然ちがつてゐる筈の私自身の心境が、荷風氏の作品に於て屢々見出されるのを、自分では不思議に思つてゐる。「フランス物語」のなかの「雲」の如きは、二十年前に讀んで、あの氣持に共鳴したと同樣に、今日なほ共鳴されるのだ。青年バイロンが劇詩「カイン」に於いて洩らした惱みが、今日なほ生き〳〵と私の心に觸れるのによつても、青年の文學老年の文學の區別を、形式的につけることは間違つてゐる

のぢやないかとも思はれる。

荷風氏の文學を思出すにつれて私の記憶に浮ぶ小山内氏は、日本の新時代の生んだ代表的文人の一人である。明治大正に渡つての日本の新文明の所産として、代表的の味ひを有つてゐると云つていゝ。外國渡來の新思想新文學新演劇によつて敏感に心を動かし、氣ぜはしく日本にそれを移植しようと試みたので、詩でも小說でも演劇でも、評論でも氏のものは、傍目にいかにも新しいと思はれさうな新しさを有つてゐた。しかし、どの方面に於ても、何となく稀薄なところがあつた。稀薄なところはあつたが藝術に「第一義的」の夢を見、世俗趣味を有しながら、人生永遠の姿に心を注いだりするところに、あの頃に育つた明治の文學青年氣質があるので、私など生れた時代が同じいために、氏の心持が理解されさうに思はれる。年齡の似寄つてゐること、文壇に出た時期の同じことは、文學鑑賞の上には微妙な關係があるもので、私は、藤村、花袋、秋聲諸氏の作品に對し、或ひは、谷崎志賀武者小路諸氏の作品に對する時とは、ちがつた感じを、荷風青果秋江小山内の諸氏の作品から受けるのである。作品の巧拙如何は別として、好惡の感じが、時代のちがつた人のよりも、もつと密接に心に迫るやうに思はれる。

二三月前偶然大阪朝日を讀むと、松居松翁氏が、例の如く歌舞伎を讃美して、「小山内氏などは早くから歌舞伎の滅亡を豫想してゐたが、歌舞伎は今なほ榮えてゐて、却つて小山内氏のやつて

るた築地の新劇なんかは駄目になつたぢやないか」と哂つてゐた。かういふ概括的批評は無論淺薄であるが、新劇に限らず、あの頃の我々文學青年が、自分のため、あるひは日本の新文明新藝術のために、あんな態度で心を勞してゐたことは、幼稚であり愚かであつたかも知れないが、だがあゝいふ時代に、文學志望の青年のうちから、小山内氏のやうな經路を取つた文人のあつたことを回顧すると茫漠たる時代の流れを具體的に見せられてゐるやうに、私には感ぜられる。努力した事業が效果を收めなかつたにしろ、功利的立場からのみ他を判斷することを、私は好ましからず思ふのである。（昭和七年三月）

◎

私はこの頃は瀬戸内海沿岸の、祖先の家に歸つてゐる。私は十四五の頃既に消化不良で苦しんでゐたので、運動のために山登りをはじめたのだが、それ以來、鄉里に居る間はつねに、一日に一度は、村を圍んでゐる後の平凡な小山へ散步を試むることにしてゐる。

今度も、風が吹く日にも氷が張つてゐる日にも、草履穿きで懷手して、フラリ〳〵出掛けてゐる。昔小學校の教室に當てられてゐた寺院、一村の飲用水に使はれてゐる藪蔭の泉、二百年來の

死骸の埋まつてゐる墓地などが、毎日私の目に觸れてゐる。十幾歳までの幼少の間、この平凡な村落から私の受けた感化は、私がどんなに努めて都會人としての修養を積んでも拭ひきれないであらう。昔ながらに小山の裾に枯れつ葉を落してゐる櫟の林や、碧空に舞つてゐる鳶の群や、いろ〳〵な小鳥の聲や、落葉掻きの女同士の話聲は、私をして幼少の頃の夢を思ひ出させるのであつた。

私は「五月幟」以來、少年時代の見聞を基礎として、いくつかの鄉土小說を書いてゐる。そのうちのある者は、瀨戸內海沿岸の地方色がよく出てゐると評判された。その土地に生れた者がその土地の事を書いたのだから、地方色が出てゐるに極つてゐる譯だが、しかし、私の描いた鄉土藝術なんか、甚だ淺いものだと自分では思つてゐる。私は老境に入つたこの頃、何處かの田舍でコツソリ住んだらいゝと思ふことはあるが、自分の故鄉に隱退したいなどゝ思つたことはない。今度だつて老父の病氣の報知に接して據なく歸つて來たのである。以前から、私は自分の生れ故鄉を愛してゐない。こちらの魚類は相模灣の產物よりは遙かに味がよくつて、老母手製の料理が東京の一流のうまい物屋の料理よりも却つてうまく食べられるし、氣候も私の健康には適してゐるらしいのだが、それでも私は故鄉に對して何の愛着をも持つてゐない。幼少の頃にも、山海に親むよりは、二階の薄汚い部屋で草双紙を讀んだり東京の雜誌を讀んだりして時を過した。百姓

業をするのでもなければ、釣りを一度したことさへなかつた。土地の人々とは殆ど無關係で過した。私が鄉土を描いても、深くそこの自然や人生の眞相に徹することの出來よう筈はなかつた。たゞ耳目に觸れる者を材料として、自分の空想を擅まゝにして一篇の文章を草したのに過ぎなかつた。初期の作物である「二家族」の如きも、事實の忠實なる描寫をしたのではなかつた。會話にところ〴〵田舍訛が入つて、東京語と岡山語とが無器用にあやつられてゐると同樣に、作中の人物も、私の幼稚な空想によつて藝術化されたのであつた。……他の作家の鄉土文學だつて、多くはさうぢやないかと、今の私は斷言し得るのである。

この狹い村の日々の風物の變化だつて、他鄉から來た者が、五日や十日滯在しただけで斷定し得られるほどに單純ではないのだ。純粹の農民や漁夫の生活の眞相は、時々歸鄉して接したくらゐで、私などに洞察することは出來さうでないのだ。加能作次郎君が能登の漁夫を材料とし、中村星湖君が甲州の農民を材料にして、可成りその眞面目を活躍させたものであつたが、それとても斷片的で私が內海地方の住民を描いたものと左程の相違はなかつた。そして、多くの作家は、材料の缺乏を歎じながら、相かはらず文學者たる自分の日常生活を書いて倦むことを知らない。

私は、毎日の山登りに農夫の野良仕事を傍觀しながら、そんなことを考へてゐたが、ふと思出して長塚節の農民小說「土」を東京から取寄せて讀むことにした。これは初版が出た時、ザット

目を通したのだが、さして興味を感じなかつたので記憶に殘つてゐないのであつた。

しかし、今度は落着いて讀んだ。田舍にゐて、田舍の事を書いたものを讀むのだから、關東と關西との差はあつても、目前の光景が描かれてあるやうな氣がして、左程、讀みづらくはなかつた。そして、讀終つて、これは明治以後の文學史に跡を留むべき重要な小說であると思つた。日本の農民生活もこれほど精細に丹念に描いたものは外にはなささうに思はれる。鄉土藝術も「土」くらゐの出來榮えを現はしてこそ存在を誇つていゝのである。取扱ふ材料についてこれほど細く知ることは容易なことではあるまい。

「土」はその村の年中行事を網羅し、四季の自然の變遷を洩らすところなく寫して、自然のうちに蟲の如く獸の如く蠢動してゐる村民を、むしろ從位に置いてあるやうに描いてゐる。そのために自然の描寫が隨分くどい。知つてゐることをこんなにまで書き盡さなくつてもよからうと思はれるやうにくどい。そして理窟つぽい。ちよつと例を擧げると、

「この時すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いてゐたすべての雜草が爪立して、たゞ空へ〳〵と暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをぢつと曳きとめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が、磁石に吸はれる如く土に直立して各自に手に農具を執る……」と云つたやうに、作者が積

重ね〳〵した自然の描寫は、一讀してその光景が目に浮ぶのではなくつて、讀者は讀んだあとで考へ直してやうやく納得するのである。作者は歌人としても傑れた人だと聞いてゐるが、彼れの自然描寫は、力を盡してゐるに關はらず、詩趣横溢と評すべきものではない。島崎藤村氏が信州の田舍を材料とした小説のあるもののやうに、懐つこい情味が文字の間に漂つてはゐない。しかし感傷的な詩味などのないところが、かういふ農民小説に相當してゐるのかも知れない。作者は田園美を唄つてゐるのでなくつて、農民の生存苦を、理想家らしい甘味は寸毫も持たないで、如實に描いてゐるに過ぎないから。

この小説は明治の末期に著はされたもので、歐洲大戰後の經濟界の好景氣と勞働問題の勃興などによつて、多少の變化の起つた今日の農村を描いたのではないから、今讀むと、何となく舊い時代の農村と云つた感じがする。多くの農民の慘苦は今も變らないにしても、時代の思潮に突つかれていゝか悪いか、一種の自覺をしかけたところが今ならある筈なのだが、この作品にはそれは少しも出てゐない。作中の人物は運命の壓迫の下に默々として生きてゐる。

勘次とお品と、娘のおつぎと、爺さんの卯平と、此等四人だけがこの長篇中の重なる人物で、その他は附屬物に過ぎないのだが、この四人は實によく書かれてゐる。彼等相互間の交渉や心理は單に貧しい農夫であるためにさうであるばかりではない。どこの社會でもさうなのだ。私は戰

國時代にも人間はそれ〴〵に瞬間の樂しみを樂んでゐた如く、いくら貧苦に虐げられてゐる農夫だつて、それ相當に生を樂んでゐるに違ひないと思つてゐて、勘次などが無自覺ならば尚更、時として盲目的歡喜を感じることがある譯だと思つてゐるので、その歡喜がもつと潑剌と書かれてゐたなら、全篇に流れてゐる陰慘沈鬱の感じがもつと引立つだらうと思はれるが、さうでないところに作者の人生觀をも藝術的天分をも窺ふことが出來る。十幾年の努力でやうやく光明に向ひかけた勘次の家が子供の火遊びから雜作なく燒けてしまつたところまで讀むと、勘次の顏を見るに忍びない氣持がした。しかし、それが動機となつて却つて、不斷反目してゐた卯平と和解することになつたのは、陰鬱な物語を讀まされた讀者を救ふて、一篇の結末をいくらか快く讀了らせるためなのだらうが、それも主人公に天人のやうな人類愛が崩したためでもなかつたのだ。世に謂ふ卑少陋劣の影がそこにも添つてゐたのだ。露西亞や佛蘭西の農民小說では、作中の無智な人物が、心底に動かしがたい宗教心を宿してゐるのを見ることが多いが、「土」のなかの人物は、巫女の口寄せなどを妄信してゐても、不安な生存に手賴りとなるやうな信仰心は少しも有つてゐないのである。鬼怒川沿岸の鳥や蛙や草や木が、寒風や烈日や雨や雪に育てられたり惱まされたりしてゐるやうに、作中の人物も人間といふ特種の生物らしい意味もなく、雨雪風霜に惱まされたり育てられたりしてゐるのである。「彼等は沼邊の葦のやうに集れば互ひにざわ〴〵と騷ぐ」と作

者が云つてゐるやうに、彼等農民同志の寄つて話してゐるのは、意味もなく、たゞ葦の葉が擦合つて騒いでゐるやうなものなのだ。

農民を主題とした郷土小説も、今後は異つた色彩をもつて現はれるであらう。新時代らしい農村の種々相が描かれることもあるであらう。しかし、「土」ぐらゐに一地方の自然と農民との眞相を深く研究したものが、たやすく世に現はれようとは思はれない。少くも、都會で文壇人として生活してゐるやうな作家からは望まれない。

「土」を讀んだあとで、私は數卷の荷風全集をところ〴〵讀んだ。「散柳窓夕榮」や「戀衣花笠森」は今度はじめて讀んだ。「土」が田舍文學の逸品である如く、荷風氏の作品は都會文學の代表的のものである。私は前者をば多少の耐忍力を起して讀み、後者をば氣樂に讀んだ。小說といふ者は面倒な理窟は兎に角一般的に云へば、都會の人生を寫したものが面白いので、「土」にあるやうな泥くさい地方語をそのまゝ寫したものは面白くないのである。私なども、田舍生れで、自分の小說はいつになつても田舍の臭みを脫し得ないのに關はらず、概して田舍小說に對しては嫌惡を感じてゐるのだ。しかし、「土」だけは例外で、荷風氏の多くの作品よりも感銘が深かつた。

「土」の作者が鬼怒川べりの郷土の自然と人間に熟通してゐる如く、荷風氏は遊蕩の社會に熟通

してゐる。前者が何處となく一時代前の農村を寫してゐるらしく思はれるやうに、後者も何となく一時代前の都會文學らしいにほひがする。

谷崎潤一郎氏の「痴人の愛」などには、いかにも現代の青年男女の喜びさうな都會情調が漲つてゐるが、荷風氏の作品は、最近のものを集めた「麻布襍記」を讀んでも何となく古めかしい。これにつけても、現代の日本の思潮と好尚の移り變りの慌たゞしいことが察せられる。しかし私はその點で荷風氏を非難するのではない。氏の如く洗練された眞純の藝術家に向つて、蕪雜な現代の趣味に迎合せよと勸められやう筈がない。

荷風氏は、今の雜誌文學には、田舍訛りが入つてゐるから、それに感染して自分の藝術が汚れる恐れがあるので、雜誌を讀まないことにしてゐると、何かに書いてゐた。キザな言草だが、これが氏の口から出たとすると、左程いやみには聞えない。「西遊日誌鈔」などを讀んで見ても、氏が早くから自分を藝術家として育て上げるために細心の注意を拂つてゐたことが察せられる。

氏が歸朝後間もなく「新潮」へ寄せた「祭の夜語り」を讀んで感歎した私は、「歡樂」「祝盃」「隅田川」などゝ續けざまに發表される名文章に驚いて、私自身の筆の無味乾燥なのに恥ぢたことさへあつた。その時、岩野泡鳴は「君は永井を褒めるが、永井は紅葉なんかと同じことぢやないか」と云つて、氏の作品を無內容な遊戲文字であると非難した。しかし、私には、內容に於ても、紅

葉や鏡花とは違つた感じを氏の作品から受けてゐたのであつた。

現代の作家の全集を買ふとすると、まづ荷風全集を買ふと云つてゐたこともあつた。

ところが近年鷗外の傳記物に倣つて德川時代の學者文人の研究をして「女性」誌上に連載したものを續けて見てゐると、豐艶の才華も色が褪せ香ひの薄れたことを認めないではゐられなかつた。藝術的神經の硬化したことが感ぜられた。若い頃の美人が俄かに歳を取つたのを見るやうな痛ましさを覺えた。鷗外氏は老いるにつれて藝がかれて、考證的傳記を編むに相應はしいのであつたが、荷風氏の近作は昔の美人が皺の目立つた顏に白粉を塗つてゐるやうな感じがしだした。太田南畝の研究でも、その時代を知るための研究ならいゝがあんなくだらない狂歌なんかつくつてゐた蜀山人に眞に感服してゐたとすると、阿呆らしく思はれる。成島柳北のやうな江戸末期のいやみだけを持つてゐた低級な文人を眞顏をして推讃するなんか私には滑稽至極に思はれる。荷風氏には蜀山人や柳北と一味相通じるところがあるにしても、それは氏の眞價と多くの關係を有つてゐないのだ。

「雪解」や「二人妻」や「春雨の夜」など、相變らずうまいにはうまいが、それには昔の情熱も力も見えないで、型ばかり演じてゐるやうである。歌右衞門の芝居を見てゐるやうだ。岩野泡鳴の評した無內容と云ふ言葉がこの頃になつて當つて來たやうである。無內容とは社會主義とか階

級意識とか云ふやうな思想の有無を云ふのではない。氏の藝術に迫る力、人を醉はす力の脫けて來たことを云ふのである。

今度全集を讀み返すと、「あめりか物語」や「歡樂」などは未熟で、荷風的情調を鼻にぶらさげて乙に濟ましてゐるところがあるが、「春のおとづれ」「花より雨に」などを集めた小品集は、江戸文學傳來の磨かれた文字と情味を豐かに胸に蓄えてゐる作家が新しい目をもつて自然と人生とを描いた類稀れなる名文である。也有の「鶉衣」などの比ではない。「土」の自然描寫は田舍者のそれであり「小品集」の自然描寫は都會の文人のそれである。

小說では「腕くらべ」が最も傑出してゐる。人間をよく寫したものは、荷風氏の小說中ではこれ一つと、私は云ひたいくらゐである。遊蕩の巷を描いてこれほど妙を極めたものは明治以來他に一もないと私は思つてゐる。「おかめ笹」や「冷笑」などゝは比較にならない。

私は「土」と「腕くらべ」とを比べて見た。二つの世界は極端に違つてゐる。一方には、冷たい麥飯を鵜呑みにして、饑ゑを凌ぎさへすればいゝと云つたやうな人々が現はれてゐる。他方には毎日色戀や手管や口說に心を勞してゐる人々が現はれてゐる。母の記念の紺絣の單衣と、新しいメリンスの帶とをこの上もなく喜んでゐる娘と、男のくせにえり圓で見立てた長襦袢だの、古風に幅狹く仕立てた獨鈷の唐繻子の帶だのと、贅をつくしてゐる人氣役者とが違つてゐる如く、

二つの小說は作風が異つてゐる。しかし、人間をよく書いてゐる點ではどちらも同じなのだ。長塚氏はあゝ云つた土地をよく知つてゐて、あんな農民に同情をもつてゐるために、「土」をつくり、永井氏は劇場や待合をよく知つてゐて、あゝ云つた役者や藝者に興味をもつてゐるために、「腕くらべ」をつくつたのだ。

勘次父子のやうな人間も現世に存在し、駒代や一糸のやうな男女も現世に存在してゐるのだが私はそのさまざまな社會と人生を心に浮べてから「曇天」「新歸朝者の日記」をはじめ、「冷笑」その他の短篇、隨筆「紅茶の後」などに煩いまでに出てゐる荷風式の現代罵倒語を甚だ詰らなく思つた。氏の多くの小說は隨筆的小說で、氏の趣味に合はない社會の風俗を觀察して、揶揄し冷笑してゐるところが特色で、洗錬された文章が甚だ面白いのであるが、しかし、氏の意見その物は甚だつまらない。薩長の田舍者に江戸文明が踏躙られたことを、眞面目になつて憤つてゐるのを見ると、本氣でさう云つてゐるのかと怪まれる。德川時代の壓制政治の下に呻吟することが何で幸福であらうぞ、今日の衣食住の方法が無雜であらうとも、それは誰れの行爲でもあるまい。永井氏の現代の趣味の墮落を憤つてゐるのは、內村氏などの宗教家が、現代の道義の廢頽を憤つてゐるのと同じ感じがする。人間はすべて勘次父子の如く、かういふ身心をもつて、かういふ時世にかういふ運命の下に蠢動してゐるので、反抗するのなら人間をつくつた神にでも反抗する外

ないのである。永井氏の感想を讀むと、姑が自分の趣味を標準として若い女のアラさがしをしてゐるやうで、いくら言ひ廻しのうまい名文章であつても飽き〳〵した。それに永井氏の趣味に適したやうな人間が頻りに出來たなら、世の中は鼻持ちのならないことになるであらう。

永井氏は純眞の藝術家である。感想的都會小說も結構であるが、これを眞似たものはたまらない。都會の世相を輕妙に描寫したり、あるひは諷刺したりしたもの。個々の都會生活を深刻に觀察し解剖したりしたもの。私は文壇人の瑣末な生活記錄以外に、いくらでも文學の領域があることを信じてゐる。都會の勞働者を取扱ふにしても、「土」が農村の自然と人とを描いた如くに描くものが出てこないのであらうか。

「新潮」の二月號所載の田山花袋氏の「永遠の寄托」に現れてゐる氏の心境には心が惹かれた。蘇東坡の解釋も、芭蕉と西鶴の比較も面白かつた。しかし、私は一身を永遠の寄托の中に置くやうな心境に達してはゐないし、將來も達せられさうに思はれない。さういふ境涯を想像して筆に現はすことは出來るかも知れないが自分の心がその域に徹することは六ヶ敷さうである。自分一人で山の中にゐても、爪を尖らせて永遠といふものを掻きむしりつゞけるかも知れない。その掻きむしつてゐる氣持から「人を殺したが一が生れたのである。

花袋氏の所謂「無中有を生じたもの」廣津和郎氏の所謂「客觀的な形で云ふところのものが眞實性を帶びてゐないもの」。その他の評家の言に依つて見ても、十目の見るところ十指の差すところ、あの小說に現實味のないことは的確に斷定されてゐるのである。殺人の經驗のない者が殺人者を書かうとするなんて、愚かなる思付であつたかも知れない。しかし、私はあゝいふものを書きたかつたのだし、これからも書きたいと思つてゐる。

昔早稻田の教場で坪內博士が何かの講義の次手に、「人情に富んだ者でなければ文學者にはなれない。」と云はれたのを、私は記憶してゐる。「それでは、自分などは文學者にはなれないだらう」と、その時ひそかに考へたことも記憶してゐる。それが、今日まで文學業を續けて來られたのは自分ながら不思議に思はれる。

私は二十年近くも書き續けてゐながら、自分の作物についてまだ優劣の批判を下したことはなかつた。他人の顏は分つても自分の顏がよく分らないやうなものである。私の作物の價値はすべてあなたまかせである。自信のない藝術家は不幸だとすると、私はその點では最も不幸なる藝術家である。しかし、近年の私は、よくも惡くも自分の全心を傾けて書いたのだから、それでいゝ、爲方がないと思ふやうな氣持になつてゐる。

私の「土」私の「腕くらべ」を書けるものなら書いて見たいが、それはとても書けさうでない。

私は自分の、「人を殺したが……」を二たび三たび書續けて、永遠を爪で掻きむしらう。古來の文學の繩墨はどうであらうと、それは私の顧慮するところではない。（大正十五年二月六日夜故郷にて）

◎

私は、三月號の時評欄で、私が多年愛讀してゐる永井荷風氏の文學を批評した。僻陬の地にゐて原稿締切期日に迫まられて、概括的の意見しか述べられず、私の所論の根據となるべき章句を氏の文章のうちから抄錄することの出來なかつたのは遺憾であつた。しかし、私が荷風氏に對して抱いてゐる感想の要點だけは列擧した譯で、それは概して荷風讃美に傾いてゐた。

ところが、四月號の「女性」を見ると、荷風氏は私の所論について、憤怒を發したらしく、久振りに辯護攻撃の筆を採つてゐられる。答を促されてゐるのだから答へなければなるまい。

一、氏は、私の文體が日常氏の目にする所のものとは、全く類を殊にせるを以て、その意を解するに苦しむもの鮮しとなさずと云つてゐるが、私の文章は典雅でも艶麗でもないかはり、平明で、晦澁の跟はないと自信してゐる　三月號の荷風論の如き、論旨の當否は別として、私の文章の意味は極めて分り易いと思つてゐる。荷風氏にあれが解し難かつたのは不思議だ。普讀者の讀

み方が悪かつたのではあるまいか。あるひは、蜀山人や柳北など、前代の文士が現代に生れ變つて、我々の文章を見たなら、異樣に感じ、文章を解するに苦むだらうと同樣に、荷風氏も今日の雜誌文學を卑んで舊文學ばかり耽讀してゐるために、今日の平明な文章さへ分らなくなつたのではあるまいか。

一、私が、普通「九死一生」と云ふべきところに、「十死一生」と用ひてゐるのを見て、氏は奇異の思ひをなしたと云つてゐるが、私は數十年來執筆を續けて來た間に、「十死一生」の奇語を用ひたのは「安土の春」の信長の臺詞のうち一個所だけである。して見ると、私の作物を一度も讀んだことのないと云つてゐる荷風氏も、あの戲曲だけは、雜誌の上で讀まないまでも、少くも演舞場で見たに違ひない。それとも、左團次を圍繞せる劇通諸氏から間接に聞いたのであらうか。……それは兎に角、信長記その他私の見た舊記には、今なら「九死一生」といふべきところに、つねに「十死一生」といふ文字を用ひてゐる。「百死一生」と書いてあつたのも一度目についた。私も奇異な思ひをしたのだつたが、あの時代には一般にさう云つたのであらうと思つて、わざと、その奇異な語を用ひた。それで、舞臺で左團次が忠實にさう云つてゐるのに、私は耳を留めたのであつた。

一、「老女の扮粧に肖たり」といふ評語の意味が解らないと云つて、古來慣用せられたる類語の例を擧げよと迫つてゐる。また「形容の意に用ゐる成語には典據なかるべからず……」と云つて

ゐる。私は和漢の故事に基くやうな曖昧な成語を用ひた覺えはないので、三月號の中央公論を捜出して披いて見ると、そこには、「豐艶の華も色が褪せ香ひの薄れたことを認めた」「昔の美人が皺の目立つた顔に白粉を塗つてゐるやうな感じ」と、平明に云つてゐるだけである。荷風氏がこれを勝手に荷風好みの漢文調に飜譯して、「老女の扮粧に肖たり」などと、古來の成語であるらしく見せかけて、その典據を迫るのは無理である。「皺の目立つた顔に白粉を塗つた」といふ言葉の語源を明かにせよ。古來の類語を擧げよといふ荷風氏の量見が私には分らない。且つまた、「出典の證すべきものなき形容」を用ひてはいけないと云ふならば、日本人のつくつた漢詩の如く、生氣のない形容語ばかり用ひなければならない。荷風氏自身の自然描寫などに我々が感服するのは在來の常套を脫した清新な形容語などが用ひられてあるためではあるまいか。

察するところ、荷風氏が私の評語の出所を明かにせよと云つたのは、修辭の問題ではないので「なぜおれの近作が、色が褪せ香ひが薄れてゐるか……皺の目立つた顔に白粉を塗つた感じがするか」といふ點にあるのであらう。……荷風氏の氣に入らないあの批評は、氏がかつて「女性」誌上に連載した考證的文人傳に對して下されたもので、あの頃の雜誌を座右に備へてゐない私は例證を引いて來ることが出來ないが、あれを一讀した際に私の腦裡に印象された感じは、私が批評のうちで形容したやうなものであつた。しかし、あの文人傳とても、それに多少の興味を寄せ

たればこそ讀んだのである。讀みながら、何となく昔の才華の衰へたやうな感じがしたのだ。さう感じるのは間違ひだと云ふならば、意見の別れるところでいくら論じたつて爲方がない。……すでに文章を草して世に發表した上は、さま〴〵な批評を下されるのは、止むを得ないことで、甘言のみを耳にしようと思ふのは蟲がよすぎるのである。

私は、先ごろ森鷗外の「北條霞亭」を讀んで、この文豪が老いてます〳〵面白い方向へ向つてゐることに感歎した。考證的傳記を私は一概に嫌つてゐるのではない。鷗外は小說よりも「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」など老後の傳記物に於て、自家特異の文學を創造してゐたのであつたが、「北條霞亭」は殊に面白かつた。數百通の手紙を根據として、年代的にその一生を、ありのまゝに考察して描出した手際は、他の企て及ばざるところであつた。霞亭は凡庸な一儒者であつたが、鷗外の述作を讀むと、當時の儒者の生活狀態がよくわかる上に、ある人間の一生が髣髴として眼前に浮んで來るのである。作者自身は說盡してゐないに關はらず、讀後、人生について感慨を起されるところがある。……荷風氏は、花柳小說その他に於ては、鷗外とはちがつた傑れた文才を發揮してゐるのであるが、考證的傳記に於ては、まだ故人に及ばないことを私は見たのであつた。

私は荷風氏が南畝の傳記を編むことそのことを非難したのではなかつた。南畝の門弟、あるひは無名の狂歌師を題材として研究的傳記を製作しようとも、それは作者の自由であるのだ、英雄

や文豪を傳記の材料にすることを、私が特に好む譯がない。私の批評の言葉が足らなかつたために、このところ、荷風氏をして不可解な思ひをさせたのであらうが、氏が平生私の作物を讀んでゐないために何んでもないことも解りにくゝ感ぜられたのだ。私は今駁論の筆を執つてゐても、そのために書きづらく思つてゐる。……餘計なおせつかいのやうだが、荷風氏も私の書いたものを少しは讀んだらよからう。私の所論に對して反駁を加へるに當つて、私の著作を少しでも讀んでゐたら、お互ひにトンチンカンなことを言ひ合はないで、都合がよかつたのだつた。

私が人に賴んで取寄せた荷風氏の著作は、全集の第二卷から第五卷までと「麻布襍記」とである。夫等の書冊のうちには「江戸藝術論」は收められてゐなかつた。從つて、氏の「狂歌論」はまだ一讀の機を得ないのであるが、私とても、狂歌や川柳や落首などが江戸時代研究には、重要な資料であることはよく知つてゐる。そのうちには、世相を巧みに諷刺したり人情の機微を穿つたりしたものの少なくないことをよく知つてゐる。私の曾祖父は狂歌に凝つて六樹園の門に入り、江戸へも遊學したことのあるくらゐで、私は幼時から、鄕家に藏してゐる幾多の蜀山人の短冊や扇面を見馴れてゐる。しかし、私は蜀山人などは、古今東西の文學者の中に置いて、甚だ詰らない文人の一人であると思つてゐる。官命を帶びて長崎へ赴任した紀行文をかつて讀んだことがあつたが、決して傑れた紀行文ではなかつた。先日は伊原青々園氏の「近世日本演劇史」を讀んだと

き、蜀山人が梅玉歌右衞門を揶揄したりした狂歌を幾首か讀んで、下らんことを云つてゐると思つた。諧謔としても低級で駄洒落以上の何物でもなかつた。それ等の駄洒落に一樣の江戸の味ひがあるのであるが、しかし、彼等一派の製作を、どうして傑れた文學として認めることが出來ようぞ。さう云つても、私は、シエークスピアとか近松とか云ふやうな大文學を研究することを特別に尊ぶのではない。小文學の研究も甚だ面白いと思つてゐる。しかし、私が文集に現はれたる荷風氏についてつねに不快を感じるのは、氏が南畝や柳北に對して過分な敬意を拂ひ、現今の日本の新文學に對して侮蔑したらしい語氣を洩すことである。今日の文學だつて、南畝柳北輩に劣つてゐるものか。荷風氏が雜誌などを排斥し、現代文學について多く知るところのないらしいのに、漫然侮蔑の語を下すのはどういふものだらう。荷風氏が氏だけの特異の藝術を默つて作つてゐるのは勝手だが、自分だけの趣味で他の文學を律するのは偏狹である。「一人の僻見を以て妄りに他の廣汎なる趣味を難ずる」ことを、氏は難じてゐるが、氏自身の鑑賞の分野は果して廣汎であらうか。

一、「足下の如く江戸軟派について殆んど顧みるところなかりき」と、氏は云つてゐるが、私は江戸軟派については可成り深く親しんでゐるのである。幼少にして、枕屏風の張りまぜの扇面などで蜀山人や六樹園や眞顏の狂歌を覺えて以來、馬琴でも種彦でも春水でも、手當り次第に讀ん

で育つた私である。江戸文學は詰らないと確信して、その臭氣に染まないやうにと心掛けてゐる今でも幼な馴染を懷かしがると同樣に、時々はそれ等の舊い物に目を觸れることがある。尾崎氏の「軟派雜考」だの、高野氏の研究物などにも興味を感じてゐる。「詰らないなあ」といふその「詰らなさ」の奥を知るためにも、我々は一生を費しても足りないくらゐである。

三月號に於てもすでに云つてある如く、荷風氏は柳北南畝以上の作家なのである。高所に立つて彼等の詩文を評し彼等の生活を叙していゝのである。

一、氏が列擧した幕臣の文人のうちでは、栗本鋤雲と成島柳北の詩文は私も多少讀んでゐる。私塾にゐた時志賀重昂氏の「日本風景論」に揭げられた鋤雲の「題淵明先生燈下讀書圖」の「門巷肅條夜色悲……白髮遺臣讀楚辭」を讀んでロマンチツクの空想を刺戟されたことがあつて、今でもその詩は暗記してゐるほどである。幕府の末路に興味を有つてゐる荷風氏が、彼等の不遇の生涯や詩文によりて、そのロマンチツクの空想を刺戟されるのに不思議はない。氏の傑れた述作の幾つかは、その刺戟によつて產れ出たのであらう。それで、私はさういふ氏の作物を稱讃してゐるのである。荷風氏の今度の論文の出てゐる「女性」四月號に一しよに出てゐる私の小品文「鳶の聲」のなかにも、維新後時代の波に惱まされた田舍の小地主階級の運命を叙したところに、「永井荷風氏の傑れた筆によつて趣味ありげに現はされてゐる江戸ッ子の老人と、運命に於ても氣持

ちに於ても同じことなのだ」と書添へてあるのによつても知られるであらう。しかし、同情に價ひするからと云つて、その時分の不運な小地主を傑れた人とする譯に行かないと同様に、柳北などの詩文を傑れたものとは、私には思へないのである。私は彼れが江戸から私の故郷近くまで行つた時の紀行文や、京妓のことを書いたものや「柳橋新誌」などを讀んで、當時の世相の一端を寫したものとして、興味を覺えたが、それ等は低級な座興的文學に過ぎないと思はれた。時代の諷刺としても膚淺に過ぎないではないか。この頃明治初期の文學が飜刻されて一部の興味を惹いてゐるさうだが、それ等は決して文學史上に光を放つものではないのだ。

一、最後に、氏は「小山内薫君予が足下の批評文を讀みたりしことを足下に語りしに、足下これに答へて、荷風は平生月刊雜誌を見ざる由を聞きたるを以て、かの批評を中央公論に公表したりと言はれたり」と、この點を力說して、「怯懦卑屈の甚しきもの」などと、頻りに罵聲を放つてゐるが、これは奇怪である。私は荷風氏の愛讀者であつてもその門下生ではない。氏自身私とは「遂に交りを訂するの榮を得ず」と云つてゐる如く、私と氏とは交友の間柄でもない。何の故に氏の怒りに觸れることを恐れて逡巡する必要があらうぞ。ましてあの批評は氏が獨り極めに極めてゐるやうな漫罵ではない。ところ〴〵語句に謹しみを缺いたところがあるにしても、推讃の辭句に富んだ眞面目な批評である。

とに角、中央公論ほどの雜誌に署名して、寄稿したものを、相手の目を忍んで蔭口を利いてゐるやうに思はれるのは奇怪である。荷風氏が讀むか讀まぬかは私の知つたことではない。月刊雜誌を手にしない作家は、批評圈外に置かなければならぬといふ理由はあるまい。

氏が小山內氏から聞いたやうな話があるにはあつた。

演舞場で小山內氏と雜談をしてゐた時、氏が「中央公論の批評は是非永井君に讀ませてやらうと思つて、ある人に雜誌を持つて行かせて、勸めさせたのだが、なか〳〵讀まなかつたさうだ：：あとで讀んだか知ら」と云つたので「永井君は雜誌を讀まんさうだからいゝ。あんなものは讀まれん方がいゝ」と云つて、私は笑つた。

舞臺裏での一場の笑話である。日常の戲談口を捉へて、表立つた問題として、瞋恚のほむらを燃やすとは、蜀山人に傾倒してゐる荷風氏にも似合はないことである。

假りに「あれはあなたのお目に掛けるやうなものぢやないから、どうかお讀みにならないやうにして下さい」と云つたに對して、相手の男が威丈高になつて「人に讀まれぬやうな者をなぜ發表した？　汝は藝術に不忠實だ。不眞面目だ」と罵倒したら可笑なものである。

人間は朝から晚まで、講堂や演壇に立つたやうな氣持で、一語一句いやしくもしないで口を利く譯には行かない。荷風氏のやうな人が多くなると、うつかり座興も云はれない。

以上、永井荷風氏の反問に對して、殘る隈なく答へたつもりである。文體は例の如く蕪雜であつても、思つてゐることは略々云つたつもりである。

現代の傑れた藝術家の一人として氏に心服してゐることは、昨日も今日も變はりない。今後も氏の新作が現はれたなら、必ず讀むつもりだ。訪問を好きない私も、偏奇館へは一度刺を通じて人事や藝術に關する主人の感想をユックリ拜聽したいと、今でも思つてゐる。（大正十五年三月十七日、大磯にて）

昭和七年七月廿日印刷
昭和七年七月廿五日發行

文壇人物評論

定價一圓五拾錢

著者　正宗白鳥

發行者　木田開
東京市麹町區丸ノ内二丁目二ノ一

印刷者　堀修造
東京市牛込區榎町七番地

發行所　中央公論社
東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルデイング五八八區
振替口座東京三四番
電話丸ノ内五三五―五三七番

日清印刷株式會社

常に新しき古典

盲目物語
谷崎潤一郎著
四六倍判三百頁
定價一圓七十錢
（送料十四錢）

つゆのあとさき
永井荷風著
四六判四五六頁
定價一圓五十錢
（送料十四錢）

安城家の兄弟
里見弴著
四六判千百頁
定價一圓八十錢
（送料十四錢）

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03002 1364